

一般県道 180 号線道路改良工事に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

鳥取県米子市

# 古市遺跡群 3

古市宮ノ谷山遺跡  
古市古墳群

2002

財団法人 鳥取県教育文化財団

一般県道 180 号線道路改良工事に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

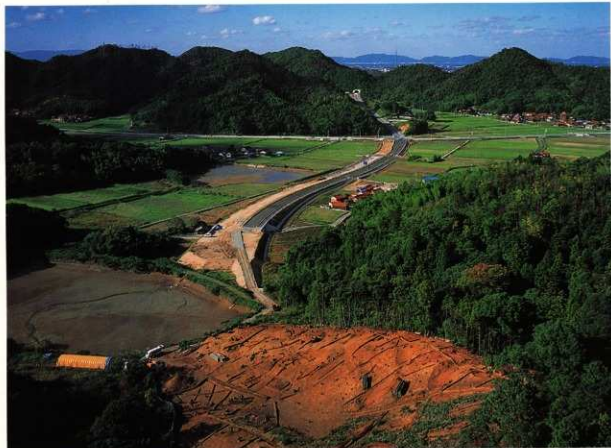
鳥取県米子市

# 古市遺跡群 3

古市宮ノ谷山遺跡  
古市古墳群

2002

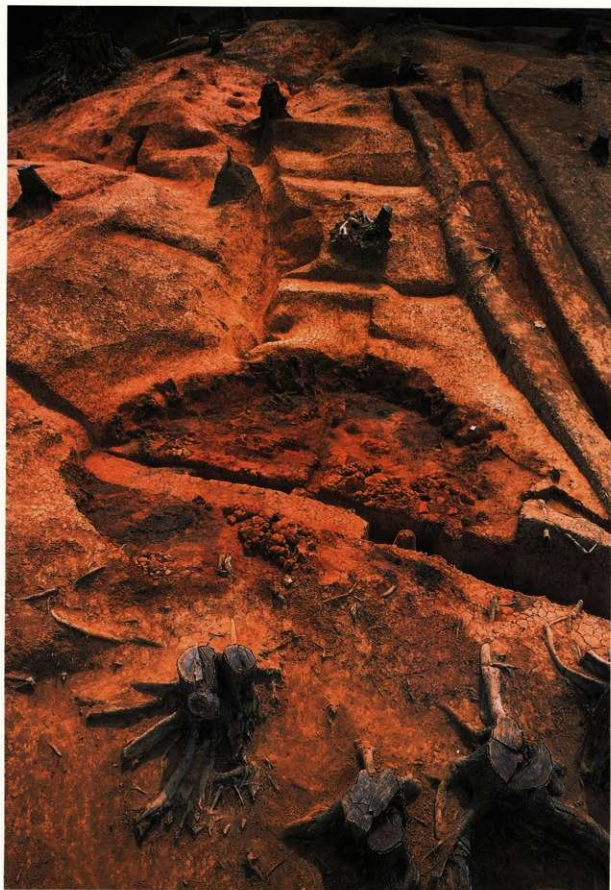
財団法人 鳥取県教育文化財団



1. 遠く日本海を望む (南東から)



2. 調査地全景 (西から)



竪穴住居跡 7 炭化材等検出状況（西から）





1. 竪穴住居跡7被熱粘土塊検出状況（西から）



2. 竪穴住居跡7土層断面（南から）

カラー図版 4



1. 被熱硬化面 2 検出状況 (東から)



2. 被熱硬化面 1 検出状況 (南から)



3. 竪穴住居跡 1 被熱硬化面検出状況 (東から)



4. 古市15号墳周溝内遺物出土状況 (北から)



1. XV層出土分銅形土製品



2. 古市17号墳埋葬施設1出土玉類



3. 古市15号墳岡溝内出土遺物



土器溜検出状況（西から）





土器溜出土遺物





土坑16出土遺物

## 序

近年、鳥取県では弥生時代において“最大級”といわれる妻木晩田遺跡、“弥生の博物館”と評される青谷上寺地遺跡などで相次いで貴重な発見がありました。本調査地古市宮ノ谷山遺跡はその弥生時代から古墳、奈良、平安、鎌倉、そして室町時代にわたる複合遺跡であることがわかりました。

連綿と続く歴史の時間軸の中で、前者がある部分を横に切ったものであるのに対し、後者は縦に切ったものといえると思います。これら縦軸と横軸を織り合わせることによって歴史というものは形成されていることを私たちは知ることができます。

鳥取県も他地域と変わらず、非常に多くの情報をもつ遺跡が地中に包含されているところです。そして今までにも多くの調査を行ってきましたが、その大半が開発工事に伴うものであることはいうまでもないことでしょう。とくに先の二遺跡のような例をはじめ、さまざまな成果は広大な面積を一度に調査したために得られた結果ともいえます。今回も道路建設という、地域にとっては必要とされる事業によって調査は行われました。

こうした調査が行われていくこと、そしてそこから導き出される成果をいかに地域に還元し、また歴史研究に反映、貢献するかということは、大きな課題であると思います。正しい歴史認識をもつためにも正確な調査およびその評価、そして情報発信をすることが必要であると考えます。今回の古市宮ノ谷山遺跡の報告がそうした歴史復元の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行までには大変多くの方々にお世話になりました。御協力、御指導賜った関係機関各位に対し心から感謝いたします。

平成14年3月

財団法人 鳥取県教育文化財団

理事長 有田博充



## 例 言

1. 本報告書は、「一般国道180号改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査」として実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本報告書に記載した遺跡の所在地は、以下のとおりである。  
古市宮ノ谷山遺跡：米子市古市字宮ノ谷山554番10、555～562、字立石山586番、587-1番
3. 本報告書における方位、座標値は、国土地院第V系の座標値である。また、レベルは海拔標高を表す。
4. 本報告書に掲載した地図は、国土地院発行の1/50,000地形図「米子」、1/25,000地形図「母里」を使用した。
5. 本発掘調査にあたり、現地指導を鳥取県立大学浅川滋男氏に、熱残留磁気測定を鳥根大学時枝克安氏にお願いした。また出土した製鉄関連遺物の分類をたたら研究会委員大澤義功氏に、炭化材などの樹種同定を鳥取大学古川都火氏に、人骨鑑定を鳥取大学井上貴央氏に、種実同定を名古屋大学渡辺誠氏に、陶磁器類の産地同定などを広島県立美術館村上勇氏に、石材鑑定を遠藤勝壽氏にそれぞれお願いした。また時枝、古川、井上および白石純（岡山理科大学）の各氏には玉稿を賜った。記して深謝いたします。
6. 本報告にあたり、花粉分析、年代測定、遺跡の航空写真撮影、遺物の保存処理をそれぞれ専門業者に、現地における基準点測量および地形測量を測量コンサルタントに委託した。
7. 遺物の実測・浄書は調査員および室内整理作業員が行った。
8. 掲載図面は、調査員が作成したものを調査員および室内整理作業員が浄書を行った。
9. 現場の写真撮影は調査員が行い、遺物の写真撮影は独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所中嶋茂氏、杉本和樹氏にお願いした。
10. 発掘調査によって作成された図面、写真などの記録類、および出土遺物などは鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。
11. 本報告書の作成は調査員の協議に基づき執筆し、中森が編集した。文責は目次および文末に記した。
12. 現地調査および報告書の作成にあたっては上記の方々のほかに、多くの方々からご指導、ご助言およびご支援いただいた。明記して深謝いたします。（敬称略、順不同）  
吾郷信一（吾郷文化財研究所）、新井宏則（会見町教育委員会）、安間拓巳、石丸恵理子、河瀬正利、三浦正幸（以上広島大学）、池澤俊幸（高知県文化財団埋蔵文化財センター）、泉潤哉（西伯町教育委員会）、五十川伸矢（京都橘女子大学）、岩田文章（淀江町教育委員会）、岡村道雄（文化庁記念物課）、小野正敏（国立歴史民俗博物館）、角田徳幸、澤田正明、中川 寧、西尾克己、東森 晋、廣江耕史、間野大丞（以上鳥根県埋蔵文化財調査センター）、加藤つむぎ（京都造形芸術大学）、小林義孝（大阪府文化財調査研究センター）、小原貴樹、下高瑞哉、杉谷愛豪（以上米子市教育委員会）、齊藤義弘（福島市教育委員会）、佐伯純也、高橋浩樹（以上米子市教育文化事業団）、柳原博英（浜田市教育委員会）、重金 誠（能勢町教育委員会）、杉谷美恵子、谷口恭子、前田 均、山田真宏（以上鳥取市埋蔵文化財調査センター）、武田恭彰（総社市教育委員会）、辻 信広（名和町教育委員会）、長田康平（溝口町教育委員会）、中村唯史（三瓶自然館）、丹羽野 裕（鳥根県古代文化センター）、東森市良（前鳥根考古学研究会会長）、平石 充（鳥根県立博物館）、藤井裕之（京都大学大学院）、細田美樹（益田市教育委員会）、南 博史（京都文化博物館）、百瀬正恒（京都市埋蔵文化財研究所）、守岡正司（鳥根県教育庁文化財課）、山内英樹（愛媛県埋蔵文化財センター）、渡辺輝紀（日南町教育委員会）、渡辺 昇（兵庫県教育委員会）、鳥根県埋蔵文化財調査研究センター、米子市教育委員会

## 凡 例

1. 発掘調査時における遺構名、番号は報告書作成時に大幅に変更している。新旧の対照はP. xiiに示した。なお、遺構の呼称は、例えば土坑状遺構については土坑とし、他の遺構についても「状遺構」を省略した。

2. 遺跡の略称はFMとした。

3. 本報告書における遺物番号は次のように記す。

番号のみ：土器・土製品、被熱粘土塊、焼成粘土塊 W：木製品 S：石器・石製品 F：鉄製品、製鉄関連遺物 J：玉製品











4. 挿図、遺構・遺物にはそれぞれ通し番号をつけた。

5. 本文中、挿図中および写真図版の遺物番号は一致する。

6. 遺物実測図のうち須恵器は断面を黒塗りにし、それ以外は白抜きであらわした。また奈良～平安時代初頭の須恵器杯の底面にある糸切り痕のうち◎は回転、⊙は静止糸切りであることを示す。さらに平安～鎌倉時代の土師器杯類については反転復元したものには●、部分復元のものにはその範囲を示した。

7. 遺物には遺跡名略称、グリッド名、遺構名、取上げ番号、取上げ年月日を基本的に注記した。

8. 遺構、遺物に用いたスクリーントーンはそれぞれ以下のものを表す。

地山  炭化物  焼土  被熱硬化面  貼り床  粘土目貼り   
赤色染彩  黒色処理  黒斑  磨面 

9. 製鉄関連遺物に関しては、強力磁石(TUJIMA PUP-M)と特殊金属探知機による鉄塊の抽出と、肉眼観察による考古学的な遺物の分類を行った。資料の分類、抽出、ならびに資料観察表の作成には穴澤義功氏に依頼し、ご指導賜った。

10. 遺物観察表は時期ごとに各章末に掲載し、製鉄関連遺物・鉄製品はまとめて第6章末に載せた。表については以下のとおりとする。

(1)土器についての法量は基本的に口径、器高を記載した。すべての遺物に対して、復元したものは\*印、残存値は△印を数値の前に付している。単位はcmである。

(2)製鉄関連遺物についての法量は最大長、最大幅、最大厚、重量を計測した。

磁着度は鉄滓分類用の「標準磁石」を用いて資料との反応を1～8までの数字で表現したもので、数値が大きいくほど磁着度が高い。メタル度は小型金属探知機によって判定された金属鉄の残留度を示すもので、基準感度は次のとおりである。

H (○)：Hは最高感度でごく小さな金属鉄が残留することを示す。

M (◎)：Mは基準感度で一般的な大きさや金属鉄が残留することを示す。

L (●)：Lは低感度でやや大きな金属鉄が残留することを示す。

特L (☆)：特Lは低感度でL以上の大きな金属鉄が残留することを示す。

11. 遺構・遺物の時期決定には下記の文献を参照した。

清水真一 1992「因幡・伯耆地域」正岡陸夫・松本岩雄編「弥生土器の様式と編年—山陽—山陰編—」  
木耳社

青木遺跡発掘調査団編 1978「青木遺跡発掘調査報告書」Ⅲ 鳥取県教育委員会

八峠 興 1998「山陰における中世土器の変遷について—供膳具・煮炊具を中心として—」【中近世土器の基礎研究】XⅢ

同 2000「山陰における平安時代の土器・陶磁器について」【中近世土器の基礎研究】XⅤ



# 目次

序  
例言  
凡例  
目次

第1章 調査の経緯 .....	(中森)	1
第1節 調査に至る経緯 .....		1
第2節 調査の経過 .....		1
第3節 調査体制 .....		2
第2章 位置と環境 .....	(浜田)	4
第3章 遺跡の概要 .....	(中森)	8
第1節 調査の方法 .....		8
第2節 概要 .....		8
第3節 調査地内の堆積 .....		9
第4章 弥生時代の調査 .....	(中森・大川)	19
第1節 概要 .....	(中森)	19
第2節 中期後葉の遺構と遺物 .....	(中森)	21
第3節 後期の遺構と遺物 .....	(中森・大川)	27
第5章 古墳時代の調査 .....	(中森・下江)	60
第1節 概要 .....	(中森)	60
第2節 検出した遺構と遺物 .....	(中森・下江)	63
第6章 奈良時代後期～平安時代初頭の調査 .....	(中森)	94
第1節 概要 .....		94
第2節 VI層下面検出の遺構と遺物 .....		94
第3節 IV層下面検出の遺構と遺物 .....		100
第7章 平安時代の調査 .....	(中森)	122
第1節 概要 .....		122
第2節 谷1区検出の遺構と遺物 .....		129
第3節 谷2区検出の遺構と遺物 .....		143

第8章 鎌倉時代～室町時代の調査	(中森)	159
第1節 概要		159
第2節 検出した遺構と遺物		159
第3節 出土した五輪塔について		174
第9章 時期不明の遺構	(中森)	179
第1節 概要		179
第2節 検出した遺構		179
第10章 特論		
特論1 古市宮ノ谷山遺跡焼失住居跡(竪穴住居跡7)出土炭化材の樹種	古川郁夫	185
特論2 弥生時代焼失住居の諸問題—鳥取県における焼失住居の比較検討—	大川泰広	189
特論3 古市宮ノ谷山遺跡の焼土跡の残留磁気測定による焼成年代推定	時枝克安	195
特論4 古市宮ノ谷山遺跡における放射性炭素年代測定	古環境研究所	200
特論5 米子平野における古墳時代の小古墳群の検討	下江健太	202
討論6 古市宮ノ谷山遺跡出土土器の胎土分析	白石 純	209
特論7 奈良時代後期～平安時代の土器様相 —古市宮ノ谷山遺跡出土資料を中心に—	中森 祥	218
特論8 古市宮ノ谷山遺跡における花粉分析	古環境研究所	224
特論9 古市宮ノ谷山遺跡集石7から検出された火葬人骨について	井上貴央	228
第11章 まとめ	(中森・濱・浜田・下江・大川・川下)	230

## 挿図目次

図1 調査地位置	3	図36 土坑9	48
図2 周辺遺跡分布	5	図37 XⅠ層およびその他の層出土遺物	49
図3 調査地周辺遺跡分布	7	図38 竪穴住居跡8および出土遺物(1)	50
図4 グリッド配置	8	図39 竪穴住居跡8出土遺物(2)	51
図5 調査前地形測量	10	竪穴住居跡9および出土遺物	51
図6 調査後地形測量	11	図40 竪穴住居跡10	52
図7 調査地内遺構分布	12	図41 竪穴住居跡10出土遺物	53
図8 トレンチ配置	13	図42 古墳時代遺構分布	60
図9 調査地内土層断面(1)	14	図43 古市14号墳および出土遺物	61
図10 調査地内土層断面(2)	15～16	図44 古市15号墳調査前地形測量	
図11 調査地内土層断面(3)	17～18	および土層断面	61
図12 弥生時代遺構分布	19	図45 古市15号墳遺物出土状況	62
図13 竪穴住居跡1、土坑1	20	図46 古市15号墳出土遺物	63
図14 竪穴住居跡1出土遺物	21	図47 古市16号墳調査前地形測量	64
図15 土坑2～6および出土遺物	23	図48 古市16号墳墳丘検出状況	64
図16 テラス1および出土遺物	24	図49 古市16号墳遺物出土状況	
図17 XⅠ層下層・XⅤ層出土遺物	25	および出土遺物	65
図18 竪穴住居跡2および出土遺物	26	図50 古市16号墳埋葬施設1	66
図19 竪穴住居跡3および出土遺物	27	図51 古市17号墳調査前地形測量	67
図20 竪穴住居跡4	28	図52 古市17号墳埋葬施設2	67
図21 竪穴住居跡4出土遺物	29	図53 古市17号墳墳丘検出状況	
図22 竪穴住居跡5・6および出土遺物	30	および埋葬施設1	68
図23 竪穴住居跡7焼土検出状況		図54 古市17号墳出土遺物	69
および土層断面	32	図55 古市18号墳調査前地形測量	69
図24 竪穴住居跡7検出状況(1)	33～34	図56 古市18号墳墳丘検出状況、埋葬施設1	
図25 竪穴住居跡7被熱粘土塊検出状況	36	および出土遺物	70
図26 竪穴住居跡7出土遺物(1)	37	図57 古市19号墳調査前地形測量	72
図27 竪穴住居跡7検出状況(2)		図58 古市19号墳墳丘検出状況	72
および出土遺物(2)	39	図59 古市19号墳埋葬施設検出状況	73
図28 竪穴住居跡7土器出土状況		図60 古市19号墳埋葬施設1	
および遺物(3)	40	および出土遺物	74
図29 竪穴住居跡7土器出土状況		図61 古市19号墳埋葬施設2	75
および遺物(4)	41	図62 古市19号墳埋葬施設完掘	76
図30 竪穴住居跡7出土遺物(5)		図63 古市20号墳調査前地形測量	78
および完掘	42	図64 古市20号墳墳丘検出状況	79
図31 テラス2・3および出土遺物	43	図65 古市20号墳埋葬施設1検出状況	80
図32 テラス5～7	44	図66 古市20号墳埋葬施設1	81
図33 テラス5・7出土遺物	45	図67 古市20号墳埋葬施設2検出状況	82
図34 テラス4および出土遺物	46	図68 古市20号墳埋葬施設2	
図35 土坑8および出土遺物	47	および出土遺物	83

図 69	古市 20 号墳埋葬施設 3 および出土遺物	84	図 103	土器溜検出状況	130
図 70	古市 21 号墳および出土遺物	85	図 104	土器溜出土遺物(1)	131
図 71	古市 22 号墳墳丘および埋葬施設 1 検出状況	86	図 105	土器溜出土遺物(2)	132
図 72	古市 22 号墳埋葬施設 1 および出土遺物	87	図 106	土器溜出土遺物(3)	133
図 73	古市 22 号墳調査前地形測量	87	図 107	土器溜出土遺物(4)	134
図 74	古市 23 号墳調査前地形測量	88	図 108	土器溜出土遺物(5)	135
図 75	古市 23 号墳墳丘、埋葬施設 1 検出状況 および出土遺物	89	図 109	土器溜出土遺物(6)	136
図 76	古市古墳群発掘状況(1)	90	図 110	土器溜出土遺物(7)	137
図 77	古市古墳群発掘状況(2)	91	図 111	土器溜出土遺物(8)	138
図 78	奈良時代後期～平安時代初頭遺構分布	94	図 112	土器溜出土遺物(9)	139
図 79	VI 層下面遺構群および出土遺物	95	図 113	土器溜出土遺物 (10)	140
図 80	テラス 10	96	図 114	土器溜および 周辺出土製鉄関連遺物ほか	141
図 81	テラス 10～14、土坑 10	97～98	図 115	テラス 21～23	142
図 82	テラス 10～14 および IV 層出土遺物(1)	99	図 116	テラス 21～23 出土遺物	143
図 83	IV 層出土遺物(2)	100	図 117	池状遺構⑦層出土遺物	144
図 84	IV 層出土製鉄関連遺物	101	図 118	池状遺構⑥層遺物分布 および土層断面	144
図 85	テラス 15、集石 1	102	図 119	池状遺構⑥層出土遺物	145
図 86	テラス 15 出土遺物(1)	103	図 120	土坑 15	146
図 87	テラス 15 出土遺物(2)	104	図 121	土坑 15 出土遺物	147
図 88	テラス 15 および集石 1 出土遺物	105	図 122	池状遺構④層遺物分布 および出土遺物	148
図 89	テラス 15 出土製鉄関連遺物	106	図 123	鎌倉時代～室町時代遺構分布	159
図 90	テラス 16 および出土遺物	107	図 124	土坑 16	160
図 91	テラス 17 および出土遺物	108	図 125	土坑 16 出土遺物(1)	161
図 92	III 層出土遺物	109	図 126	土坑 16 出土遺物(2)	162
図 93	V 層およびその他の層出土遺物	110	図 127	テラス 24 および出土遺物	163
図 94	製鉄関連遺物構成図(1)	112	図 128	尾根 1 区先端部遺構群	164
図 95	製鉄関連遺物構成図(2)	113	図 129	尾根 1 区先端部土層断面 および出土遺物	165
図 96	平安時代遺構分布	122	図 130	集石群検出状況および集石 7	166
図 97	テラス 18 周辺遺構群 およびテラス 18 出土遺物	123	図 131	集石 7 出土遺物	167
図 98	テラス 19 および出土遺物(1)	124	図 132	集石 5・6・8・9 および出土遺物(1)	168
図 99	テラス 19 出土遺物(2)	125	図 133	集石群出土遺物(2)	169
図 100	土器溜周辺遺構群 および土坑 12・13 出土遺物	126	図 134	集石 3・4 および I 層出土遺物	170
図 101	土坑 14 および出土遺物	127	図 135	谷 1 区出土遺物	170
図 102	テラス 18・19 および土坑 14 ほか 出土焼成粘土塊	128	図 136	尾根 2 区土壌群および出土遺物	171
			図 137	溝 16 および出土遺物	172
			図 138	遺構外出土遺物	173
			図 139	時期不明遺構分布	179

図 140	15号墳下層土坑群	180
図 141	17号墳上層土坑群	181
図 142	20・22・23号墳下層土坑群	182
図 143	土坑 29・36	183
図 144	鳥取県内の焼失住居分布(弥生時代)	190
図 145	焼失住居検出例①	192
図 146	焼失住居検出例②	193
図 147-1	自然残留磁気の方角	198
図 147-2	自然残留磁気強度分布	198
図 148	交流消磁後の残留磁気の方角	198
図 149	被熱硬化面 1・2 の試料位置	198
図 150	被熱硬化面 1・2 の残留磁気の平均方角 (+印) と誤差の範囲(点線の楕円)	199
図 151	米子平野における前期古墳の分布	202
図 152	各古墳群の配置	203
図 153	各古墳群における埋葬頭位	205
図 154	組み合わせ式石棺の各属性	206

図 155	弥生時代時期別による胎土の比較	213
図 156	遺跡出土焼成粘土と周辺で採取した 粘土との比較	213
図 157	弥生土器と焼成粘土塊他との比較	214
図 158	古代、中世の杯類の比較	214
図 159	古代、中世の杯類と焼成粘土塊 他との比較	215
図 160	古代、中世の甕と焼成粘土塊 他との比較	215
図 161	10世紀代土器(杯甕)の 時期別の比較	216
図 162	奈良時代後期～平安時代 土層堆積概念	218
図 163	奈良時代後期～平安時代 土器変遷	220・221
図 164-1	集石 7 検出状況	228
図 164-2	集石 7 人骨出土状況	228

## 写真目次

Fig. 1	竪穴住居跡 1 遺物出土状況(西から)	21
Fig. 2	被熱粘土塊 A 群検出状況(西から)	36
Fig. 3	古市 15号墳周溝土層断面(南から)	61
Fig. 4	坏と脚の接続部分(167)	63
Fig. 5	古市 16号墳埋葬施設 1 検出状況(東から)	64
Fig. 6	古市 19号墳墓域内土層断面(南から)	72
Fig. 7	溝 4・5 完掘(南東から)	100
Fig. 8	溝 8 土層断面(東から)	123
Fig. 9	土器溜土器出土状況	132
Fig. 10	土器溜土器出土状況(西から)	139
Fig. 11	テラス 25 完掘(北東から)	165
Fig. 12	溝 16 遺物出土状況(東から)	172

## 挿表目次

表 1	竪穴住居跡 7 出土種子一覧	41
表 2	弥生時代ビット一覧	54
表 3	第 4 章遺物観察表	54～58
表 4	被熱粘土塊観察表	58
表 5	弥生時代土器・石製品観察表	58～59
表 6	古市古墳群	92
表 7	玉類観察表	92
表 8	第 5 章土器観察表	93
表 9	奈良時代後期～平安時代初頭ビット一覧	110～111
表 10	製鉄関連遺物・鉄製品観察表	114～117
表 11	第 6 章土器観察表	118～121
表 12	第 6 章石製品観察表	121
表 13	平安時代ビット一覧	149
表 14	第 7 章土器観察表	150～156
表 15	焼成粘土塊観察表	156～158
表 16	被熱粘土塊観察表	158
表 17	第 7 章石製品観察表	158
表 18	五輪塔法量比較	175
表 19	鎌倉時代～室町時代ビット一覧	175
表 20	第 8 章土器観察表	176～178
表 21	第 8 章陶磁器観察表	178
表 22	第 8 章石製品観察表	178
表 23	竪穴住居跡 7 炭化材サンプル一覧	188
表 24	鳥取県内の焼失住居(弥生時代)	190
表 25	組み合わせ式石棺の属性	207
表 26	胎土分析結果一覧	211
表 27	古市宮ノ谷山遺跡における花粉分析結果	226



## 写真図版

### <カラー図版>

- 1-1 遠く日本海を望む(南東から)  
 -2 調査地全景(西から)  
 2 竪穴住居跡7炭化材等検出状況(西から)  
 3-1 竪穴住居跡7被熱粘土塊検出状況(西から)  
 -2 竪穴住居跡7土層断面(南から)  
 4-1 被熱硬化面1検出状況(東から)  
 -2 被熱硬化面2検出状況(南から)  
 -3 被熱硬化面検出状況(東から)  
 -4 古市15号墳周溝内遺物出土状況(北から)  
 5-1 X V層出土分銅形土製品  
 -2 古市17号墳埋葬施設1出土玉類  
 -3 古市15号墳周溝内出土遺物  
 6 土器溜検出状況(西から)  
 7 土器溜出土遺物  
 8 土坑16出土遺物

### <図版>

- 1-1 調査前全景(西から)  
 -2 調査地遠景(北から)  
 2-1 土坑6遺物出土状況(東から)  
 -2 竪穴住居跡1完掘状況(北西から)  
 -3 テラス1完掘状況(西から)  
 3-1 竪穴住居跡1土器1出土状況(西から)  
 -2 竪穴住居跡1出土遺物  
 -3 X I層下層およびX V層出土遺物  
 -4 テラス1出土遺物  
 4 テラス1出土遺物  
 5-1 竪穴住居跡4完掘状況(北西から)  
 -2 竪穴住居跡4側溝(南西から)  
 6-1 遺構内出土土製品  
 -2 竪穴住居跡6出土遺物  
 -3 竪穴住居跡4出土土玉  
 -4 竪穴住居跡4出土遺物  
 7-1 竪穴住居跡6完掘状況(南から)  
 -2 竪穴住居跡5完掘状況(南から)  
 -3 竪穴住居跡6、P 9炭化物検出状況(西から)  
 -4 竪穴住居跡6、P 10粘土塊?出土状況(西から)  
 8-1 竪穴住居跡2、P 6土層断面(南から)  
 -2 竪穴住居跡2完掘状況(西から)  
 -3 竪穴住居跡2土層断面(東から)  
 -4 竪穴住居跡3完掘状況(北西から)  
 9-1 竪穴住居跡2およびX I層出土鉄製品  
 -2 竪穴住居跡2出土遺物  
 -3 竪穴住居跡2・3出土遺物  
 10-1 竪穴住居跡7炭化材検出状況(南西から)  
 -2 竪穴住居跡7被熱粘土塊検出状況(西から)  
 11-1 竪穴住居跡7焼土検出状況(西から)  
 -2 竪穴住居跡7完掘状況(北西から)  
 -3 竪穴住居跡7完掘状況(南西から)  
 12-1 北東壁面炭化材検出状況(南西から)  
 -2 壁面炭化材(W 1)検出状況(西から)  
 -3 舟形?炭化材検出状況(南から)  
 -4 炭化材検出状況(南から)  
 -5 炭化部材検出状況(西から)  
 13-1 P 1検出状況(西から)

- 2 網状炭化材(W 2、西から)  
 -3 溝検出状況(南から)  
 -4 W 3出土状況(西から)  
 -5 竪穴住居跡7出土遺物  
 14-1 被熱粘土塊(68)部分  
 -2 竪穴住居跡7出土被熱粘土塊  
 15-1 竪穴住居跡7出土遺物  
 -2 竪穴住居跡7出土炭化種子(原寸大)  
 16-1 土器出土状況  
 -2 炭化種子出土状況  
 -3 土器(72・73)出土状況(東から)  
 -4 土器(69)出土状況(西から)  
 17 竪穴住居跡7出土遺物  
 18-1 尾根1区遺構群(西から)  
 -2 尾根2区テラス群(西から)  
 19-1 テラス4完掘状況(南西から)  
 -2 焼土塊集中域検出状況(東から)  
 -3 土坑8完掘状況(南西から)  
 20-1 テラス3出土遺物  
 -2 テラス5出土遺物  
 -3 テラス7出土焼土塊  
 -4 テラス4・5・7、土坑8出土遺物  
 21 X I層およびその他の層出土遺物  
 22-1 竪穴住居跡8完掘状況(西から)  
 -2 竪穴住居跡10完掘状況(南から)  
 -3 竪穴住居跡9完掘状況(南東から)  
 23-1 尾根1区先端部竪穴住居跡群(南西から)  
 -2 尾根1区遺構群完掘状況(西から)  
 24-1 竪穴住居跡8出土遺物  
 -2 竪穴住居跡10出土不明土製品  
 -3 竪穴住居跡8遺物出土状況(北から)  
 -4 竪穴住居跡8・9、テラス8出土遺物  
 25 テラス10出土遺物  
 26-1 遺構外出土土器・石製品  
 -2 遺構外出土突帯文土器  
 -3 遺構外出土土器・石製品  
 27-1 遺構外出土水晶片  
 -2 X I層出土石包丁  
 -3 遺構外出土土製品  
 28-1 14号墳周溝検出状況(南東から)  
 -2 14号墳周溝完掘状況(東から)  
 -3 竪穴住居跡9完掘状況(東から)  
 29-1 15号墳検出状況(南東から)  
 -2 16号墳検出状況(東から)  
 30-1 16号墳周溝内遺物出土状況(北から)  
 -2 16号墳出土遺物  
 31-1 16号墳埋葬施設1検出状況(西から)  
 -2 16号墳埋葬施設1完掘状況(西から)  
 -3 17号墳埋葬施設1検出状況(東から)  
 -4 17号墳埋葬施設1完掘状況(東から)  
 -5 17号墳埋葬施設2蓋石検出状況(東から)  
 -6 17号墳埋葬施設2完掘状況(東から)  
 32-1 17号墳検出状況(東から)  
 -2 18号墳検出状況(東から)  
 -3 18号墳埋葬施設1検出状況(東から)

- 4 18号墳周溝内出土遺物
- 33-1 21号墳検出状況(西から)
- 2 21号墳埋葬施設1 集石部(北東から)
- 3 21号墳埋葬施設1 検出状況(東から)
- 4 21号墳周溝内出土遺物
- 5 21号墳埋葬施設1 完掘状況(東から)
- 34-1 19号墳検出状況(東から)
- 2 19号墳埋葬施設1 検出状況(南西から)
- 35-1 19号墳埋葬施設1 墓石検出状況(南西から)
- 2 埋葬施設1 墓石上粘土検出状況(南から)
- 3 埋葬施設1 墓石上粘土除去状況(南から)
- 4 埋葬施設2 墓石検出状況(南西から)
- 5 埋葬施設2 墓石上粘土検出状況(南から)
- 6 埋葬施設内土層断面(北から)
- 36 19号墳埋葬施設検出状況(南西から)
- 37 19号墳埋葬施設完掘状況(南西から)
- 38-1 19号墳埋葬施設1 遺物出土状況(南西から)
- 2 埋葬施設1 遺物出土状況(北から)
- 3 埋葬施設1 出土遺物
- 4 19号墳埋葬施設完掘状況(西から)
- 39-1 20号墳検出状況(東から)
- 2 20号墳埋葬施設2 検出状況(東から)
- 40-1 20号墳埋葬施設1 墓石検出状況(東から)
- 2 埋葬施設1 検出状況(南西から)
- 3 埋葬施設1 完掘状況(南西から)
- 4 埋葬施設3 検出状況(東から)
- 41-1 19号墳埋葬施設1 墓石裏面
- 2 20号墳埋葬施設2 墓石検出状況(南から)
- 3 20号墳埋葬施設1・2(西から)
- 42-1 20号墳埋葬施設2 遺物出土状況(南から)
- 2 埋葬施設2 出土遺物
- 3 埋葬施設2 検出状況(北から)
- 43-1 埋葬施設2 側石内面
- 2 埋葬施設2 側石内面
- 3 埋葬施設2 粘土目張り断面(西から)
- 4 埋葬施設2 完掘状況(北から)
- 5 埋葬施設2 検出状況(北西から)
- 44-1 22号墳検出状況(東から)
- 2 埋葬施設墓石検出状況(東から)
- 3 埋葬施設墓石除去状況(東から)
- 4 埋葬施設粘土目張り検出状況(西から)
- 45-1 22号墳埋葬施設検出状況(東から)
- 2 22号墳埋葬施設完掘状況(東から)
- 3 23号墳埋葬施設検出状況(西から)
- 4 23号墳埋葬施設完掘状況(西から)
- 5 23号墳埋葬施設出土遺物
- 46-1 テラス17 遺物出土状況(西から)
- 2 テラス15 遺物出土状況(北から)
- 3 集石1 検出状況(南から)
- 47-1 テラス15 完掘状況(北から)
- 2 テラス11～13 完掘状況(北から)
- 48-1 谷1区土層断面(南東から)
- 2 テラス10 完掘状況(南から)
- 49 IV層出土遺物
- 50-1 テラス15 出土土鏝
- 2 遺構内出土土製品
- 3 テラス15 出土遺物
- 51-1 テラス15 出土遺物
- 2 テラス15 ほかに出土遺物
- 52 調査地内出土製鉄関連遺物
- 53 調査地内出土鉄製品
- 54 鉄製品X線写真(1)
- 55 鉄製品X線写真(2)
- 56 鉄製品X線写真(3)
- 57 鉄製品X線写真(4)
- 58 鉄製品X線写真(5)
- 59 鉄製品X線写真(6)
- 60-1 テラス19 完掘状況(南東から)
- 2 テラス19 遺物出土状況(東から)
- 3 テラス18 出土遺物
- 4 テラス19 出土遺物
- 61-1 土坑14 遺物出土状況(西から)
- 2 土坑14 出土遺物
- 3 土坑14 遺物出土状況(南から、近景)
- 4 土坑14 出土被熱粘土塊(伊壁?)
- 62-1 土器溜東側遺構群(西から)
- 2 土坑14 完掘状況(北から)
- 3 土坑12 完掘状況(南から)
- 4 溝9・10 完掘状況(南から)
- 63 土坑14 および土器溜(東から)
- 64-1 土器溜検出状況(西から)
- 2 土器溜検出状況(北から)
- 65 土器溜上器出土状況
- 66-1 土器溜出土遺物1(内黒土器器皿、杯)
- 2 土器溜出土遺物2(高台不良品)
- 3 土器溜出土遺物3(土師器高台付杯)
- 67-1 土器溜出土遺物4(土師器杯)
- 2 土器溜出土遺物5(土師器杯底面)
- 68 土器溜出土遺物6(焼成粘土塊)
- 69-1 土坑14 出土焼成粘土塊
- 2 テラス18・19 およびその他の層出土焼成粘土塊
- 3 土器溜出土遺物7(焼成粘土塊)
- 70-1 土器溜出土遺物8(土師器甕内外面調整痕)
- 2 土器溜出土遺物9(土師器甕)
- 71-1 土器溜出土遺物10(須恵器甕)
- 2 土器溜検出状況(西から)
- 72-1 谷2区完掘状況(西から)
- 2 谷2区完掘状況(東から)
- 73-1 池状遺構完掘状況(西から)
- 2 土坑15 完掘状況(西から)
- 3 溝11～13 完掘状況(東から)
- 74-1 土坑15 遺物出土状況(西から)
- 2 土坑15 出土遺物1
- 75-1 土坑15 出土遺物2(土師器内黒甕)
- 2 土坑15 出土遺物3(土師器内黒杯)
- 3 土坑15 出土遺物4(土師器高台付杯)
- 4 土坑15 出土遺物5(土師器杯)
- 76 池状遺構⑥層出土遺物
- 77-1 池状遺構⑥層出土遺物
- 2 池状遺構および溝出土遺物
- 3 池状遺構⑥層出土遺物
- 78-1 平安時代遺構および包含層出土土製品
- 2 池状遺構⑥層遺物出土状況(南から)
- 3 土坑15 遺物出土状況(西から)
- 79-1 テラス24 遺物出土状況1(南から)
- 2 テラス24 遺物出土状況2(南西から)

- 3 テラス 24 出土遺物
- 80-1 土坑 16 遺物出土状況
- 2 土坑 16 出土遺物 1 (土師器杯底面)
- 81-1 土坑 16 出土遺物 2 (灯明皿)
- 2 土坑 16 土層断面 (西から)
- 3 土坑 16 遺物出土状況 (東から)
- 4 土坑 16 完掘状況 (西から)
- 82-1 集石 7 検出状況 (南から)
- 2 集石 7 検出状況 (北東から)
- 3 集石 7 人骨出土状況 (南から)
- 4 集石 7 人骨出土状況 (北から、近景)
- 集石 7 人骨出土状況 (北から、近景)
- 83-1 集石 8 (北東から)
- 2 集石 3 (北東から)
- 3 集石 2 (南から)
- 4 集石 4 (東から)
- 5 テラス 28・29 完掘状況 (東から)
- 84-1 集石出土空函輪
- 2 集石出土火輪
- 3 出土貿易陶磁器、国産陶器
- 4 土坑 2 出土火輪
- 5 遺構外出土小型火輪
- 85-1 土坑 2 遺物出土状況 (東から)
- 2 土坑 2 土層断面 (西から)
- 3 土坑 2 完掘状況 (東から)
- 4 土坑 4 検出状況 (南東から)
- 5 土坑 4 完掘状況 (南東から)
- 86-1 土坑 22・23 完掘状況 (北西から)
- 2 土坑 28 検出状況 (南から)
- 3 土坑 29 完掘状況 (北から)
- 4 土坑 31・32 完掘状況 (南東から)
- 87-1 池状遺構出土円筒埴輪
- 2 遺構外出土瓦石および管瓦
- 3 調査地完掘状況 (東から)
- 88 出土木材顕微鏡写真 1
- 89 出土木材顕微鏡写真 2
- 90 出土木材顕微鏡写真 3
- 91 出土木材顕微鏡写真 4
- 92 出土木材顕微鏡写真 5
- 93 実体顕微鏡による砂粒観察写真 (12 倍) 1
- 94 実体顕微鏡による砂粒観察写真 (12 倍) 2
- 95 花粉・胞子顕微鏡写真

新遺構名	旧№	新遺構名	旧№	新遺構名	旧№	新遺構名	旧№	新遺構名	旧№
竪穴住居跡 1	SI08	テラス 1	SS29	テラス 25	SS14	土坑 20	SK09	集石 3	SX05
竪穴住居跡 2	SI05	テラス 2	SS30	テラス 26	SS13	土坑 21	SK09	集石 4	SX14
竪穴住居跡 3	SI09	テラス 3	SS31	テラス 27	SS10	土坑 22	SK30	集石 5	SX10
竪穴住居跡 4	SI07	テラス 4	SS25	テラス 28	SS06	土坑 23	SK31	集石 6	SX11
竪穴住居跡 5	SI10	テラス 5	SS27	テラス 29	SS07	土坑 24	SK23	集石 7	SX04
竪穴住居跡 6	SI11	テラス 6	—	土坑 1	SK14	土坑 25	SK24	集石 8	SX13
竪穴住居跡 7	SI06	テラス 7	SS26	土坑 2	SK06	土坑 26	SK32	集石 9	SX12
竪穴住居跡 8	SI01	テラス 8	SS12	土坑 3	SK10	土坑 27	SX08・28	溝 1	SD14
竪穴住居跡 9	SI03	テラス 9	SS20	土坑 4	SK12	土坑 28	SX21	溝 2	SD17
竪穴住居跡 10	SI02	テラス 10	SS19	土坑 5	SK13	土坑 29	SK33	溝 3	SD18
16 号墳埋葬施設 1	SX06	テラス 11	SS17	土坑 6	SK04	土坑 30	SK27	溝 4	SD15
17 号墳埋葬施設 1	SX29	テラス 12	SS18	土坑 7	SK17	土坑 31	SK28	溝 5	SD16
17 号墳埋葬施設 2	SX32	テラス 13	SS24	土坑 8	SS28	土坑 32	SK29	溝 6	SD19
18 号墳埋葬施設 1	SX38	テラス 14	SS23	土坑 9	SK18	土坑 33	SK25	溝 7	SD12
19 号墳埋葬施設 1	SX36	テラス 15	SS22	土坑 10	SK16	土坑 34	SK22	溝 8	SD22
19 号墳埋葬施設 2	SX37	テラス 16	SS16	土坑 11	SK19	土坑 35	SK27	溝 9	SD23
20 号墳埋葬施設 1	SX33	テラス 17	SS11	土坑 12	SK20	土坑 36	SK15	溝 10	SD24
20 号墳埋葬施設 2	SX35	テラス 18	SS08	土坑 13	SK02	土坑 1	SX25	溝 11	SD03
20 号墳埋葬施設 3	SX34	テラス 19	SS04	土坑 14	SK01	土坑 2	SX24	溝 12	SD02
21 号墳埋葬施設 1	SX07	テラス 20	SS21	土坑 15	SK03	土坑 3	SX20	溝 13	SD05
22 号墳埋葬施設 1	SX30	テラス 21	SS01	土坑 16	SK15	土坑 4	SX22	溝 14	SD04
23 号墳埋葬施設 1	SX21	テラス 22	SS02	土坑 17	SK08	土坑 5	SX26	溝 15	SD21
橋土塊集墳中域	SX27	テラス 23	SS03	土坑 18	SK11	集石 1	SX16	溝 16	SD01
被熱遺構群	SX17	テラス 24	SS05	土坑 19	SK05	集石 2	SX08	溝 17	SD09

新旧遺構名対照

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、鳥取県が進める一般国道180号道路改良事業を原因とし、米子市古市地内の工事予定地内に存在する埋蔵文化財の記録保存を目的としたものである。米子市陰田町の山陰道陰田ランプを基点とするこのバイパスは、同市新山から古市、吉谷を経て西伯町へとつながる。この改良工事における埋蔵文化財の保護と事業計画の調整については、事業計画策定に沿って関係機関で協議され、米子市教育委員会による試掘調査が実施されてきた。そして本事業に伴う陰田、新山間の発掘調査が国道180号バイパス関係埋蔵文化財調査団、財団法人米子市教育文化事業団によって実施されている<sup>(注1)</sup>。また古市地内の道路予定地については、すでに鳥取県教育文化財団により平成10、11年度に古市カハラケ田遺跡、古市河原田遺跡、古市コガノ木遺跡、古市流田遺跡が調査され、調査報告書を刊行している<sup>(注2)</sup>。

今回の調査地については平成11年度に米子市教育委員会により試掘調査が行われ、弥生時代から中世にかけての遺構、遺物が確認された。これを受けて鳥取県土木部道路課および鳥取県米子土木事務所は鳥取県教育委員会事務局文化課と協議を行い、文化財保護法第57条の3に基づく発掘通知を文化庁に提出した。その上で、記録保存のための事前発掘調査の指示を得た鳥取県土木部道路課は、発掘調査を財団法人鳥取県教育文化財団に委託した。これにより、平成12年度から西部埋蔵文化財米子調査事務所が調査を担当することとなり、財団法人鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター所長から文化庁長官に文化財保護法第57条第1項に基づく発掘届を提出した。(中森)

(注1) 杉谷愛象ほか編 1994『葦原・奥陰田』I 財団法人米子市教育文化事業団

小原貴樹ほか編 1998『葦原・奥陰田』II 財団法人米子市教育文化事業団

(注2) 中森 祥、濱田竜彦ほか編 1999『古市遺跡群』1 財団法人鳥取県教育文化財団

濱田竜彦、内田浩文編 2000『古市遺跡群』2 財団法人鳥取県教育文化財団

## 第2節 調査の経過

平成12年度は、調査前に伐採された立木の撤去、および調査地南西部境の土留柵の設置が遅れたため、4月24日に漸く重機による表土剥ぎを開始した。調査地はその地形から尾根1・2区、谷1・2区に分け(図4)、両谷部の調査から着手した。谷2区では平安時代のテラスや土師器などが多量に出土した土坑、同期の遺物を多量に包含する池状の落ち込みなどを検出し、6月20日に調査を終えた。谷1区には平安時代の土器溜がすでに米子市の試掘において検出されており、その周辺の精査を行った結果、それは約14㎡の拡がりをもつことが確認された。出土した遺物量はコンテナで20箱ほどを数える。またこの面の下層には奈良時代後期から平安時代初頭に位置付けられるテラス群、さらに弥生後期、中期の遺物包含層、遺構面が重層的にあった。それぞれ遺物量が多く、調査は工程どおりに進まなかった。

6月末より尾根1区先端部の表土剥ぎを開始し、併せて尾根に並行する米子市教育委員会が本調査前に入れた試掘トレンチの精査、ならびに新規にトレンチを入れた結果、そこに当初想定されていない古墳群のあることが確認された。これらは尾根先端部(西側)から順に、古市14～21号墳として新たに登録された。また谷1区側の斜面には弥生時代の遺構群があることも確認し、谷1区と合わせて当初予定を大きく上回る調査量があることがわかってきた。

10月6日、調査地内で立ってられないほどの大きな揺れを感じた。日野郡日野町を震源とする「鳥取県西部地震」だった。幸い犠牲者を出すことはなかったものの、家屋や道路など多くの被害があった。調査地内においてもトレンチが崩れたり、調査地に続く仮設道にヒビが入るなど少なからず被害を受けた。また当該地域から参

加している発掘作業員の大半が被災し、その後の調査においても大きな影響があった。

尾根2区は11月7日からその上方(東側)を重機により表土剥ぎ開始。その下に奈良時代から平安時代初頭にかけての遺構、弥生時代後期のテラス群があった。また先端部には中世土壌群を検出した。

鳥取県土木事務所と協議した結果、尾根1区古墳群ならびにその裾部、下層にある弥生時代遺構群は次年度調査となり、谷1区、尾根2区および尾根1区に展開する古墳群の検出作業を終了した12月20日、12年度の調査を終えた。そして検出した古墳群には全面にシートを被せるなど保護をした。

平成13年度は4月2日より調査を開始した。古墳は10基あり、それらに伴う埋葬施設は12基を数えた。さらに古墳盛土下や裾部に弥生時代後期の竪穴住居跡やテラスなど遺構があり、とくに竪穴住居跡7は炭化材や焼土などが良好に遺存する焼失住居であった。当初1ヶ月で調査終了という工程であったが、鳥取県土木事務所と協議の上調査期間を延長した。そのような厳しい工程の中5月12日には現地説明会を開き、約140名の参加者があった。5月25日にすべての調査を終了した。

(中森)

#### <調査日誌>

平成12年度	10/25 角所徳幸氏来訪。
4/18 調査前地形測量開始(業者委託)	10/30 谷部、ラジコンヘリによる空撮。
4/20 ラジコンヘリによる調査前空撮	11/6 尾根2区上方直機による表土剥ぎ。
4/24 重機による表土剥ぎ開始	11/15 時茂安氏熱気留気測定作業。
4/27 谷1・2区精舎開始。	12/14 尾根1区検出、ラジコンヘリによる空撮。
5/1 調査基礎坑設置。	12/20 12年度作業終了。
6/4 谷1区、七器層上方で土坑14検出。土師器焼成土坑か。	1/12 村上勇氏中世土師・陶磁器分析指導。
6/8 谷2区、平安時代土師器土坑15検出。	平成13年度
尾根1区先端部にトレンチ入れる。	4/2 作業開始。
6/19 穴澤森功氏来訪。	4/18 19号墳、同時埋葬された2基の埋葬施設検出。
6/20 谷2区完了。	4/20 20号墳、さらに埋葬施設を検出。
6/23 尾根1区、火葬骨を伴う薬石検出。 正法寺住職によるお慰み。	5/7 竪穴住居跡7焼土面検出。 20号墳下層から竪穴住居跡検出。
7/13 百瀬正信氏、西尾克己氏来訪。	5/12 好天の中、現地説明会開催。
7/19 尾根1区先端部、弥生竪穴住居跡群検出。	5/15 ラジコンヘリによる空撮。
9/2 中村唯史氏来訪。	5/16 河瀬正利氏来訪。
9/5 五十川伸次氏来訪。	5/17 浅川巖男氏現地指導。
10/2 井上貴央氏現地指導。	5/18 岡村道雄氏来訪。
10/6 23号墳埋葬施設をトレンチで確認、鉄剣出土。直後に鳥取県西部地蔵。	5/19 加藤つむぎ氏来訪。竪穴住居跡7、 被熱粘土塊サンプリング
10/10 現場作業再開。多くの作業員参加に安心。	5/25 完了。
10/12 白石純氏来訪。粘土分析用サンプル採取。	7/27 渡辺謙氏竪穴住居跡7出土鑑定実定。
10/13 15号墳埋土内土器検出。	9/3~6 穴澤義功氏製鉄関連遺物分類、分析指導
10/17 谷1区、弥生土群(竪穴住居跡1)検出。	

### 第3節 調査体制

調査主体 財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 有田 博光(鳥取県教育委員会教育長)  
常務理事 関 敏之(鳥取県教育委員会事務局次長)  
事務局長 岡山 宏徳

鳥取県埋蔵文化財センター

所 長 古井 喜紀(平成12年度)、中村 登(平成13年度)(埋蔵文化財センター所長)  
次 長 八木谷 昇(平成12年度)、小林 勉(平成13年6月末退職)  
加藤 隆昭(平成13年度、調整係長兼務)  
調整係長 山橋 雅美(平成12年度)  
文化財主事 高垣 陽子  
庶務係主任事務職員 矢部 美恵

事務職員 嶋村 八重子(平成12年度)、中島 いづみ(平成13年度)

調査担当 西部埋蔵文化財米子調査事務所



所長	国田 俊雄
主任調査員	中森 祥 濱 隆造 (平成13年度)
調査員	浜田 真人 川下 忍 (平成12年度) 下江 健太 (平成13年度) 大川 泰広 (平成13年度)
整理員	塚田 文子

調査指導 鳥取県教育委員会事務局文化課 鳥取県埋蔵文化財センター

下記の方々に発掘調査・整理作業に従事していただいた。

安部好江、秋里登志子、板 英臣、遠藤綾子、勝部 恵、川成寿々子、片岡登志枝、倉敷 精、笹谷加寿夫、塔畑友雄、角田輝彰、高塚早智子、高田 茂、新田幾子、野口洋一、長谷川節子、轟 延子、伴藤 栄、干村澄子、福本蓉子、細田恒夫、益井季里子、松浦万喜男、前田文子、吉原和行、渡 貞夫、伊藤景子、稲田三枝子、池野 毅、板持 章、宇田川東功子、遠藤清子、小林等子、田宮 繁、富永武子、西村美知枝、野津松夫、藤江利夫、都田三郎、吉村京子、頼田つゆ子、頼田美佐子、渡辺静江、植田雅子、内藤祐介、宮野祐介、堤 恵子、吉沢純子、山縣富男、山縣定子、飛田 治、三嶋柏子、雑賀佐那枝、小原晴教、遠藤輝満、遠藤万須美、中橋智明、秦 美香、小原 円、清水房子、野島尚子、塚本寿美江、井上通子、山桥美奈、近藤由美子、松山節子、安部美登里

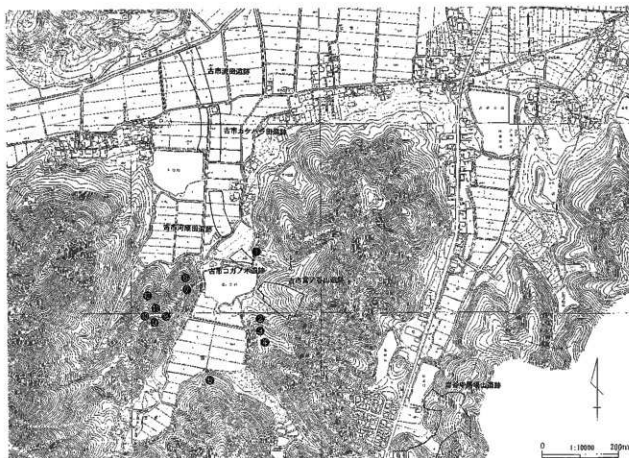


図1 調査地位置

## 第2章 位置と環境

### 第1節 古市宮ノ谷山遺跡の位置と地理・地質環境 (図2・3)

米子平野は鳥取県西部に位置し、日野川の沖積作用により形成されたものである。東は日野川東岸の箕紋屋平野、南は日野川支流の法勝寺川流域に広がる法勝寺平野へと連続性をみせ、平地面積の少ない山陰では例外的に広い平野部である。北は、入り海的性格をもつ美保湾、鳥根半島とマヶ浜半島に抱かれた汽水湖中海に面する海産物の豊かな地でもある。

米子平野外縁部はおおむね標高100mまでの丘陵地帯である。米子平野をU字状に囲む丘陵の地質は、日野川東岸では大山の火山噴出物の堆積、および段丘礫層からなる。西岸の丘陵は第三紀中新世の流紋岩質凝灰岩および角礫凝灰岩よりなる。風化・浸食が進み流紋岩質凝灰岩は粘土化している部分が多い。角礫凝灰岩の山体で、浸食残丘として標高200m程度のピークがいくつかみられ、新山要害山や手間要害のように中世以降の戦略的拠点となっているものもある。

古市遺跡群は米子市の南西部の丘陵に位置している。新山に発し、米子市街地へと流れる加茂川水系によって形成された東西に長い小平野および、その南側の丘陵から丘陵腰に遺跡群が展開している。(浜田)

### 第2節 古市宮ノ谷山遺跡の歴史的環境 (図2・3)

#### 1 旧石器時代～縄文時代

中海、宍道湖を中心として縄文時代早期末・前期には居住が確認されている。鳥根半島部では海蝕洞窟に立地の特色をもつ遺跡が分布し、中海南岸城・宍道湖東岸城は目久美遺跡、タテチョウ遺跡、西川津遺跡など低湿地の立地を特徴としている。

古市、新山周辺でも、陰田宮の谷遺跡、奈喜良遺跡で茅葺尖頭器が出土している。新山山田遺跡では早期高山寺式に相当する押型土器が、古市遺跡群では古市河原田遺跡で中期～晩期、古市カハラケ田遺跡で後期～晩期の遺物や遺構、後期中葉段階には古市河原田遺跡で土坑や溝、古市カハラケ田遺跡で土坑が検出されているが、集落の縁辺部と思われ中心部には調査が及んでいない。

#### 2 弥生時代

弥生時代に入り沖積が進み汀線が後退すると、臨海低湿地に稲作が開始される。前期から中期の水田跡が目久美遺跡、長砂第1・2遺跡で検出されている。この時代の遺跡は、米子城跡の各調査地や錦町第1遺跡のように低湿地や微高地上に位置する。また前期に集落は丘陵谷底部にまで達し、語木遺跡、天王原遺跡、宮尾遺跡、清水谷遺跡など環濠をもつ遺跡が形成されている。中期には丘陵上にも集落が拡大し、青木遺跡、福市遺跡、越敷山遺跡群、妻木晩田遺跡などの集落が形成される。これらの遺跡は地域の拠点集落と目され、中期から後期にかけて住居数の著しい増加がみられる。また、妻木晩田遺跡では環濠と四隅突出型墳丘墓が、尾高浅山遺跡および日下寺山遺跡では、ともに環濠に囲まれた集落跡と四隅突出型墳丘墓が確認されている。中海を囲む丘陵部には陰田第1・2遺跡、陽徳遺跡などがある。

古市遺跡群では、弥生時代前期にも人々の生活の痕跡が残されている。古市河原田遺跡、新山山田遺跡から前期中葉～後葉の土器が出土し、古市流田遺跡の調査では、前期中葉の土器が自然流路などからまとまって出土している。また後期になると、古市カハラケ田遺跡、古市流田遺跡では竪穴住居跡、竪立柱建物跡が検出されている。古市宮ノ谷山遺跡では丘陵尾根部に中期～後期の10棟の竪穴住居跡を検出している。弥生時代を通じての集落規模は不明であるが、いずれの時代も加茂川水系の小平野を水田として利用していたものと考えられる。

#### 3 古墳時代

古市遺跡群の南東約2kmには前期の古墳、菅段寺1号墳・2号墳があり、いずれからも三角縁神獣鏡が出土し

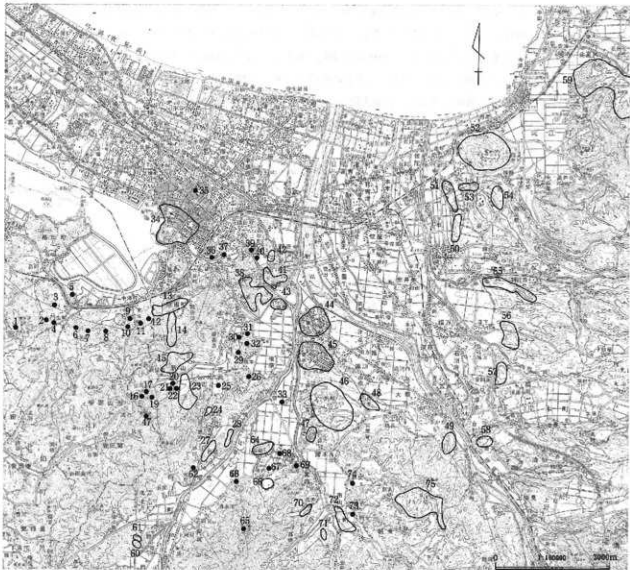


図2 周辺遺跡分布

図2

- 1 清水寺 2 山根古窯跡 3 高畑古窯跡 4 五反田古墳群 5 山根古墳 6 陽徳遺跡
- 7 五反田遺跡 8 徳津見遺跡 9 平橋穴墓群 10 穴神1号横穴墓 11 石田遺跡
- 12 カンボウ遺跡 13 陰田遺跡群 14 奥除田遺跡群 15 新山遺跡群
- 16 新山大谷原遺跡 17 新山神田遺跡 18 新山要害 19 新山22号墳
- 20 新山岡横穴 21 新山23号墳 22 新山24号墳 23 古市遺跡群
- 24 吉谷中馬場山遺跡 25 吉谷トコ遺跡 26 榎原第1遺跡 27 福成古墳群
- 28 福成早里遺跡 29 橋本遺跡 30 奈喜良1、2号墳 31 奈喜良遺跡
- 32 橋本要害 33 大袋丸山遺跡 34 米子城跡 35 鶴町第1遺跡 36 目久美遺跡
- 37 池ノ内遺跡 38 奈像古墳群 39 長砂第1遺跡 40 長砂第2遺跡 41 東奈像古墳群
- 42 長砂古墳群 43 日原古墳群 44 福市遺跡 45 青木遺跡 46 諏訪遺跡群 47 諸木遺跡
- 48 長者原古墳群 49 越敷山古墳群 50 尾高古墳群 51 中間古墳群 52 壺瓶山古墳群
- 53 小波古墳群 54 百塚古墳群 55 尾高渡山遺跡 56 日下古墳群 57 石州府古墳群
- 58 吉定古墳群 59 藁木院田遺跡 60 北福王寺遺跡 61 マケン堀古墳群 62 清水谷遺跡
- 63 枇杷埜遺跡 64 三崎殿山古墳 65 手間要害 66 普段寺古墳群 67 天萬土井前遺跡
- 68 宮尾遺跡 69 天万遺跡 70 高畑古墳群 71 井上古墳群 72 天王原遺跡 73 口朝金遺跡
- 74 田住橋川遺跡 75 越敷山遺跡群

ている。この地には、中期と推定される前方後円墳、三崎殿山古墳もあり、勢力をもった集団の存在が窺える。米子平野周辺の丘陵部には多くの古墳群が存在し、青木遺跡では前～後期の方墳・円墳合わせて31基が確認されている。また、日野川東岸の丘陵部には、壺瓶山古墳群（後期）、百塚古墳群（～後期）、小波古墳群（後期）、中間古墳群（中期）、尾高古墳群（前期～後期）、口下古墳群（前期～後期）、石州府古墳群（前期～後期）などが、西岸丘陵部には福成早里古墳群（後期）、宗像古墳群（後期）、東宗像古墳群（後期）などがある。陰田・新山遺跡群（前期～後期）では約60基の古墳がある。古市遺跡群周辺の集落跡としては、青木遺跡、福市遺跡、陰田・奥陰田遺跡群、新山研石山遺跡などがある。

古市遺跡群では丘陵尾根部に古墳が築かれている（古市1～23号墳）。古市河原田遺跡、古市カハラケ田遺跡で古墳時代を通じて遺物が出土している。また、古市カハラケ田遺跡では古墳時代中期の竪穴住居跡が検出されており、新山地内の新山山田遺跡、新山研石山遺跡では古墳および集落の存在が確認されている。

#### 4 奈良～平安時代

7世紀後半以降、古市・新山周辺の遺跡は官衙的な性格が認められる。陰田遺跡群の口陰田遺跡からは「館」「多知」「田知」と記された墨書土器が出土し、陰田第6遺跡では8世紀に比定される石敷道路が検出されている。古市遺跡群に隣接する、古谷鏡神遺跡で墨書土器が、吉谷中馬場山遺跡では墨書土器および赤色塗彩土器器が出土した<sup>10)</sup>。福成早里遺跡からは製塩土器や赤色塗彩土器器が出土している。また、陰田・新山地内の各遺跡で鉄滓が出土し、奥陰田遺跡群の陰田広畑遺跡では鍛冶炉が検出されている。

平安時代の遺跡としては、青木遺跡は56棟の掘立柱建物跡、32棟の竪穴住居跡をもつ大規模集落跡である。諏訪遺跡群の樋の口遺跡、日野川東岸の上福万遺跡でも掘立柱建物跡などが検出され、後者の土坑からは「奈」の墨書土器と赤色塗彩土器器出土している。平野部には米子城跡21遺跡があり、後期を主とした遺構群が検出され、多数の土器器が出土している。古市周辺の陰田第6遺跡、陰田隠れが谷遺跡、陰田ヒチリザコ遺跡、陰田荒神谷遺跡、奥谷期越谷遺跡などは、いずれも丘陵斜面部に立地する小集落跡である。

古市宮ノ谷山遺跡では、奈良～平安時代のテラス状遺構などを検出するとともに、精錬炉や鍛冶炉、鉄製品が出土した。古市・新山の谷筋は、古代山陰道の通過推定地の一つとされている。この地を山陰道が通過したと仮定すると、島根県伯太町へ抜ける峠が手開関ということになる。だが、山陰道の存在は古市流田遺跡などの調査ではまだ未確認であり、この周辺の遺跡の性格の解明とともに、今後の課題である。

#### 5 鎌倉～室町時代

錦町第1遺跡では平安～鎌倉時代の畠跡が検出され、米子城跡21遺跡では熙寧元宝（北宋元年=1068、初鑄）や土器器、陶磁器など16世紀までの遺物が出土している。そのほか日下古墳群の積石基壇をもつ中世墓と中近世の土壇群、福成早里遺跡の中世以降の土葬墓・火葬墓群、金田堂ノ脇遺跡の中世～近世以降の土坑群および15世紀中頃～後半の土坑墓などがある。古市新山は古代から近世にいたるまで交通の要衝として重要な地であり、戦国時代には新山要害山に築かれた新山城（長台寺城）は毛利、尼子の攻防の地となった。（浜田）

（註）吉谷中馬場山遺跡については、2002年度報告予定である。

#### 参考文献

- 地質調査所編 1962『5万分の1地質図 米子』工業技術院地質調査所  
 米子市教育委員会編 1994『米子市埋蔵文化財地図』米子市教育委員会  
 北浦弘人ほか編 1996『陰田遺跡群』（財）鳥取県教育文化財団  
 湯村 功ほか編 1996『米子城跡6遺跡』（財）鳥取県教育文化財団  
 濱田竜彦ほか編 2000『古市遺跡群』2（財）鳥取県教育文化財団  
 鳥取県教育委員会編 2000『妻木晩田遺跡発掘調査研究 年報 2000』鳥取県教育委員会  
 大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会編 2000『妻木晩田遺跡発掘調査報告Ⅰ～Ⅳ』同調査団・同教育委員会

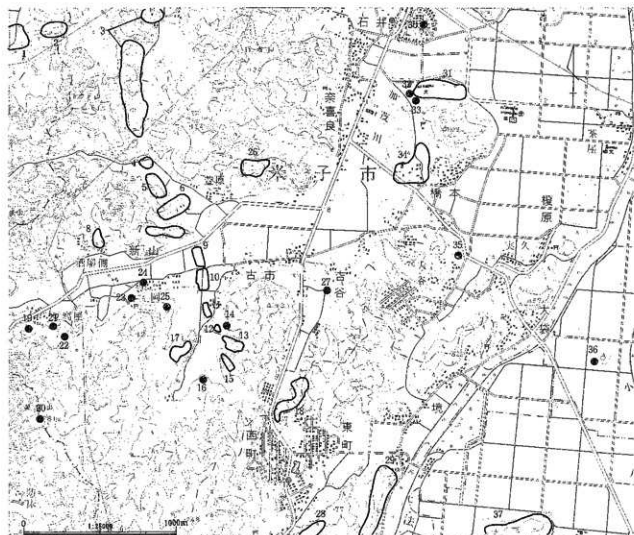


図3 調査地周辺遺跡分布

図3

- 1 石田遺跡 2 カンボウ遺跡 3 奥陰田遺跡群 4 下山遺跡 5 研石山遺跡 6 山田遺跡
- 7 新山古墳群 2～9・13・14号墳 8 新山古墳群 15～18号墳 9 古市流田遺跡 10 古市カハラケ田遺跡
- 11 古市河原田遺跡 12 古市コガノ木遺跡 13 古市宮ノ谷山遺跡 14 古市横穴墓
- 15 古市1・12・13号墳 16 古市11号墳 17 古市4～10号墳 18 古谷中馬場山遺跡
- 19 新山大谷原遺跡 20 新山要害山 21 新山神田遺跡 22 新山22号墳 23 新山23号墳
- 24 新山岡横穴 25 新山24号墳 26 新山10・11・12号墳 27 吉谷トコ遺跡 28 福成古墳群
- 29 福成早里遺跡 30 石井要害跡 31 奈喜良遺跡 32 奈喜良1号墳 33 奈喜良2号墳
- 34 橋本遺跡 35 榎原第1遺跡 36 大袋丸山遺跡

長岡充展ほか編 1985『上福万遺跡・日下遺跡・石州府第1遺跡・石州府古墳群』(財)鳥取県教育文化財団

小原貴樹・北浦弘人ほか編 1986『目久美遺跡』米子市教育委員会

杉谷愛象ほか編 1994『萱原・奥陰田』I (財)米子市教育文化事業団

北浦弘人ほか編 1998『福成早里遺跡』(財)鳥取県教育文化財団

湯村 功ほか編 1998『米子城跡21遺跡』(財)鳥取県教育文化財団

小原貴樹ほか編 1998『萱原・奥陰田』II (財)米子市教育文化事業団

中森 祥ほか編 1999『古市遺跡群』I (財)鳥取県教育文化財団

米子市史編纂室編 1999『新修 米子市史第7巻』米子市

岩田文章ほか編 2000『麦木晩田遺跡』淀江町教育委員会

### 第3章 遺跡の概要

#### 第1節 調査の方法 (図4～8)

調査地は東西方向に伸びる尾根二筋と、それに並行する谷部からなる。それぞれ調査の工程上から尾根1・2区、谷1・2区として調査を行った(図4)。表土剥ぎは米子市教育委員会による事前の試掘調査結果を受けて、尾根部においては表土が薄いことから人力による掘り下けを行い、谷部の重機を用いた。表土剥ぎ後10m画の方眼測量を行い、方眼は南北軸に沿うように設定した。南北軸を北からアルファベットで、東西軸は西から数字で示し、1区画(グリッド)の北西隅の交点をとってそのグリッド名とした。検出した遺構・遺物の記録にあたっては平板、トータル・ステーションを用いた。また現場の写真撮影においては、35mm、6×7版を基本とし、土層溜および竪穴住居跡7(焼失住居跡)の検出状況については4×5版を用いた。(中森)

#### 第2節 概要 (図4～8)

調査は調査地が広範囲であるため谷部から着手し、米子市教育委員会の試掘トレンチ(YT1～YT22)を利用しながら、適宜トレンチをいれて土層堆積、遺構面の確認に努めた(図8)。その結果尾根1区では当初確認されていなかった10基の古墳を検出。さらにその下層および裾部には弥生時代後期の遺構群、古墳上や周溝埋土上面などで中世後期のテラスや土坑、集石群などを検出した。また谷1区では、弥生時代中期後葉から平安時代にかけての各遺構面および遺物包含層があった。各層とも遺物が多く含まれていたが、奈良時代後期～平安時代初期には製鉄関連の遺物が目立った。またその上に堆積する層からは平安時代の土師器が大量に出土した。尾根2

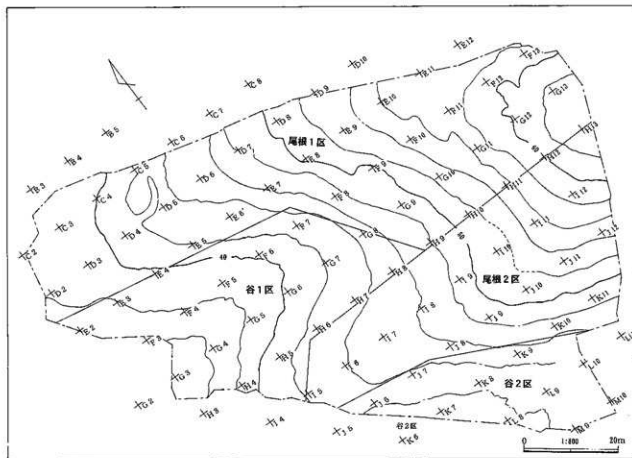


図4 グリッド配置

区においては弥生時代後期のテラス群、奈良時代後期～平安時代初頭の遺物包含層、中世の墓と考えられる土壌を検出した。さらに谷2区では平安時代のテラス群と池状の堆積があった。その堆積層には同期の遺物が良好にあったほか、それを掘り込む上坑内にも多くの完形資料が出土するなど、谷1区の土器溜りと合わせ当該期の良好な資料が得られた。

なお遺構名の新旧対照は目次の末尾に掲載している。

(中森)

### 第3節 調査地内の堆積 (図9～11)

調査地内の土は尾根部から谷部にかけて緩やかに堆積しており、谷1区において互層状に厚かったほかは、比較的薄いものであった。

尾根1区では、地山を削り盛土する古墳群を検出した。18号墳より上では、各古墳盛土の流出土と考えられるものを表土除去後に検出した。一方17号墳より下側では、この上に中世後期段階のI層が広範囲にみられた。

谷1区においては表土から約1.5m掘り下げたXV層(弥生時代中期後葉相当)下で無遺物の黄灰色粘質土を確認し、この上面を最終遺構面とした。これより上に弥生時代後期(XI層)、奈良時代後期～平安時代初頭(Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ層)、平安時代(Ⅱ・Ⅱa層)相当の各層が、地山の傾斜に対しほぼ平行に堆積している。

尾根2区はほぼ全域にV層が広がる。この下面には一部弥生時代後期の包含層(XIV層)があるが、奈良時代後期～平安時代初頭の遺構および遺物はほとんどなかった。またこの層を掘り込んで中世の土壌がつくられる。

谷2区では表土下に平安時代の遺物包含層があったが、堆積は薄かった。また南東隅で検出した池状遺構において同期の包含層が互層状に堆積し、最下層にはおそらく斜面上方から転落してきた巨大な角礫凝灰岩があった。主要な堆積層の概要は以下のとおりである。なお( )内は調査段階での旧層位名を示す。

#### 谷1区 (図10)

- Ⅱ層 (YT22-2・3層) : 暗褐色土。きめ細かくしまりわるい。平安時代の大量の土器を包含する。F5～7グリッドとあまり広い範囲には拡がらない。土器溜部分は堆積も約0.5mと厚いが、そのほかは0.1～0.2mほどである。下面においてはピットを検出したのみである。
- Ⅱa層 (YT18-1層) : 暗黄褐色粘質土。炭、焼土を若干含む。平安時代相当。遺物少ない。
- Ⅲ層 (YT18-2層) : 黄色粘質土。部分的に拡がる層で、一見貼床のようにみえる。
- Ⅳ層 (YT18-3層) : 黒褐色粘質土。標高42.5m付近から下方と、谷部においてかなり広範囲に堆積する。奈良時代後期～平安時代初頭のテラス群を覆い、当該期の遺物を多く含む。
- Ⅵ層 (YT18-4層) : 黒色粘質土。谷部の低いところのみにあり、標高38.5mほどから下に拡がる。0.1～0.25mの厚さで、谷部に堆積する層の中では比較的薄い。テラス9や溝1～5、ピットを下面で検出した。遺物は多くなく、奈良時代後期～平安時代初頭に相当する。
- XI層 (YT18-5層) : 暗黄褐色土(やや粘質)。標高39.5mあたりから下方に向けて、0.1～0.3mの厚さで堆積する。弥生時代後期後半の遺物包含層。遺物が多いが、大半が磨滅している。下面で検出した遺構は土坑9のみである。
- XII層 (T5-b層) : 黒褐色土。G・H10グリッドの狭い平坦面上に拡がる。尾根2区上部にもみられるが、堆積は薄い。V層下層にある。弥生時代後期包含層。
- XIII層 (T5-1層) : 若干炭を含む黄灰色粘質土。尾根1区南斜面に位置する竪穴住居跡4から竪穴住居跡7西側あたりを上限とし、谷1区へかけての斜面部に堆積する。その厚さは0.3～0.4mほどを測る。尾根1区南斜面部の土坑8埋土。炭小片を多く含むXV層に類似するが、G7・8グリッドでⅣ層に切られ下方には続かないため、その関係については不明確である。遺物はほとんど出土していない。弥生時代後期包含層。
- XV層 (YT18-6層) : 黄褐色土(やや粘質)。土色はXIII層に似るが、しまりわるく、炭化物を多く含む点

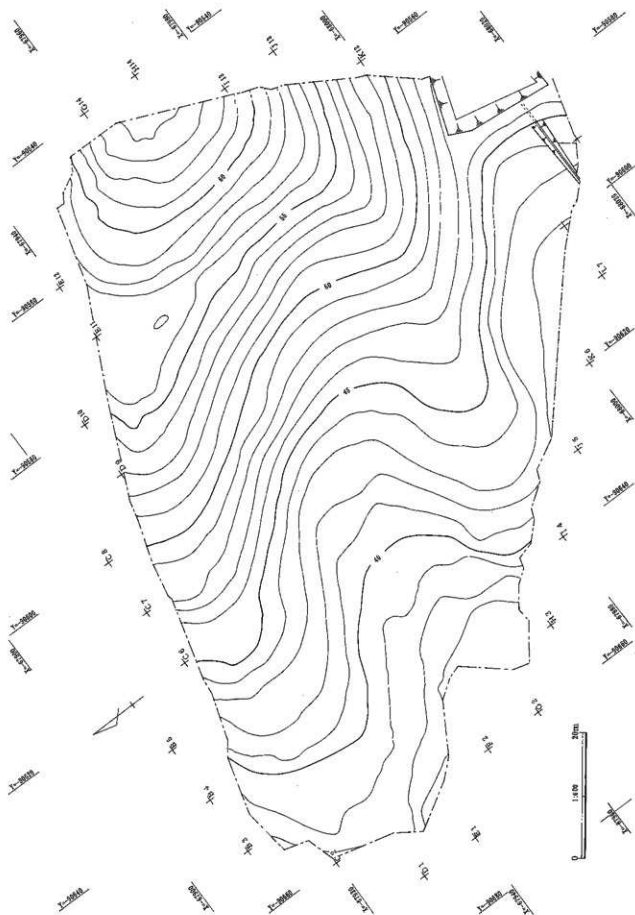


図5 調査前地形測量



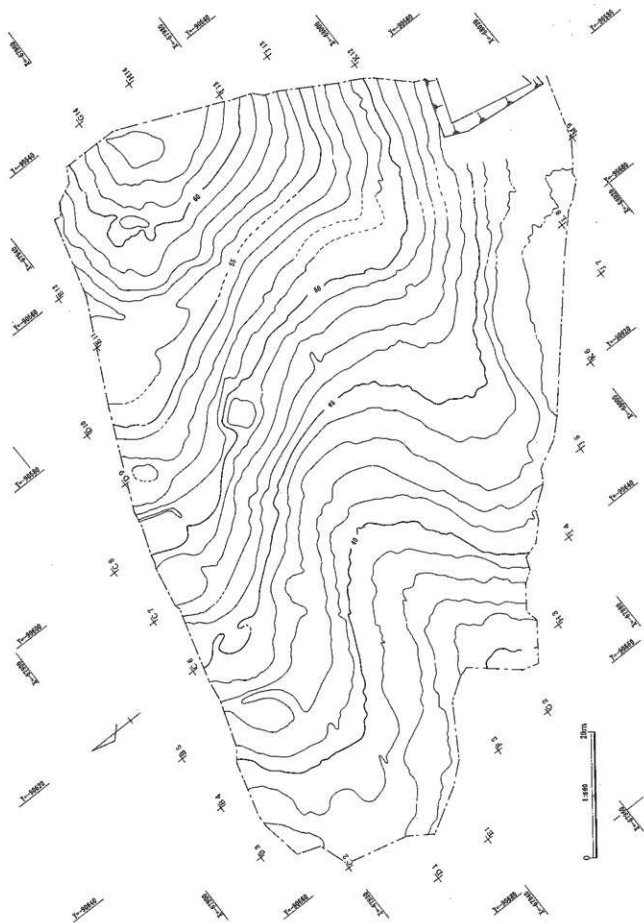


図6 調査後地形測量

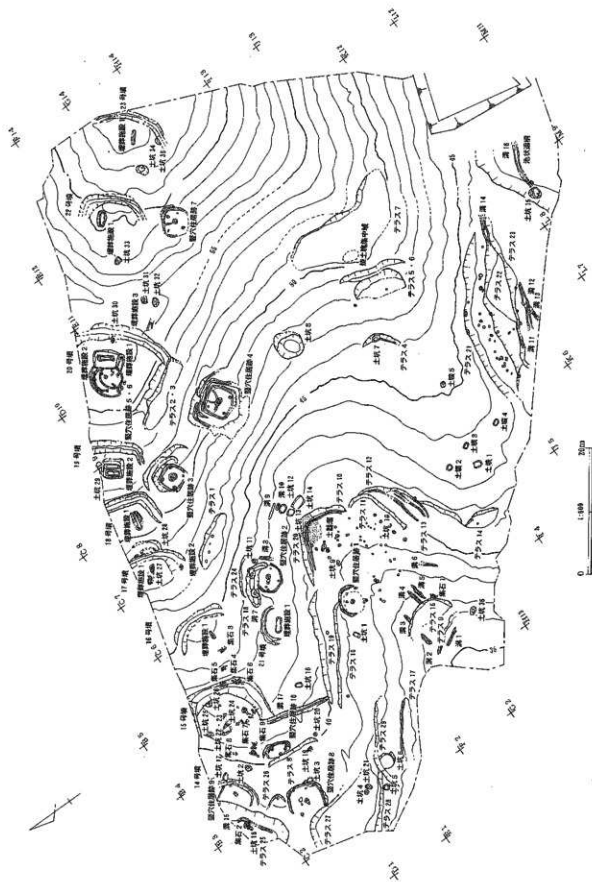


図7 調査地内遺構分布

が大きく異なる。標高40.0m付近から下方に拡がっており、堆積は0.2～0.5mと比較的厚い。遺物はまばらであったが、完形に近い土器なども出土し、遺存状態もよかった。弥生時代中期後葉に相当する。下面では竪穴住居跡1、土坑1を検出した。

#### 尾根1区(図11)

I層(T11-1層) : 黄褐色および灰褐色砂質土。17号墳より西側の広範囲に拡がる層である。砂質でまりはわるい。尾根1区先端部においては、中世後期のテラス群や五輪塔を含む集石群を覆う。

#### 尾根2区(図9)

V層(T26-1層) : 暗灰褐色粘質土。奈良時代後期～平安時代初頭に相当する。尾根部のほぼ全域に拡がるが、下面で当該期の遺構はほとんどみられない。遺物も少ない。IV層に続くものと考えられる。

XIV層(T26-7層) : 暗黄灰色粘質土(炭を若干含む)。赤褐色土系の部分もある。テラス4～7の埋土。尾根2区西部にはなく、尾根1区に向けて拡がっている。

なお上記ローマ数字で表した層位名を、第4章以下各章でも用いていく。

(中森)

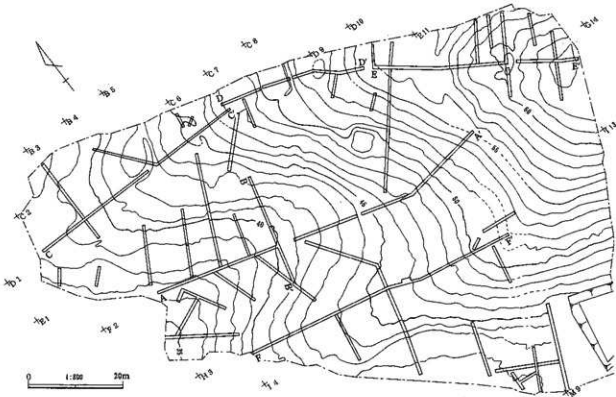


図8 トレンチ配置

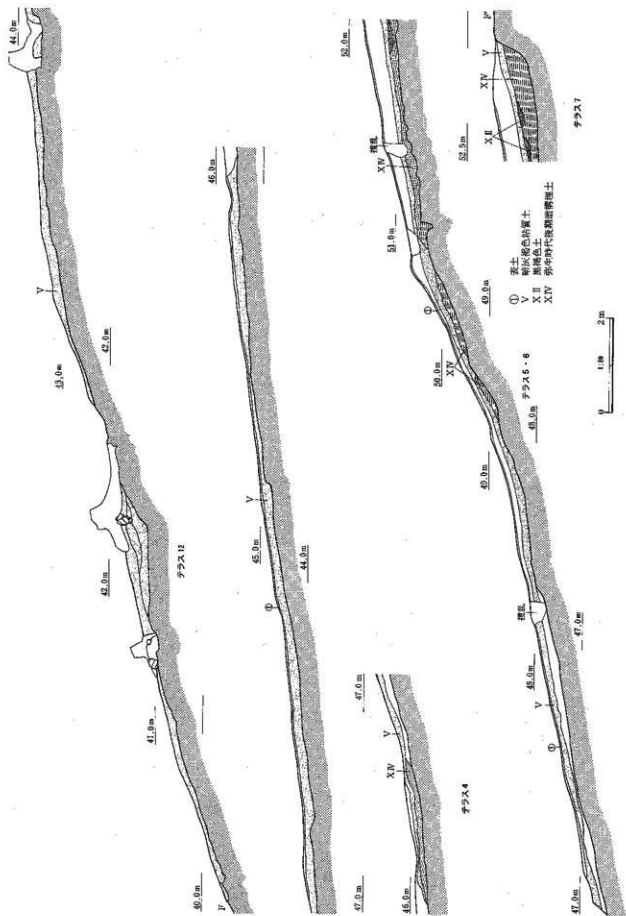


図9 調査地内土層断面(1)

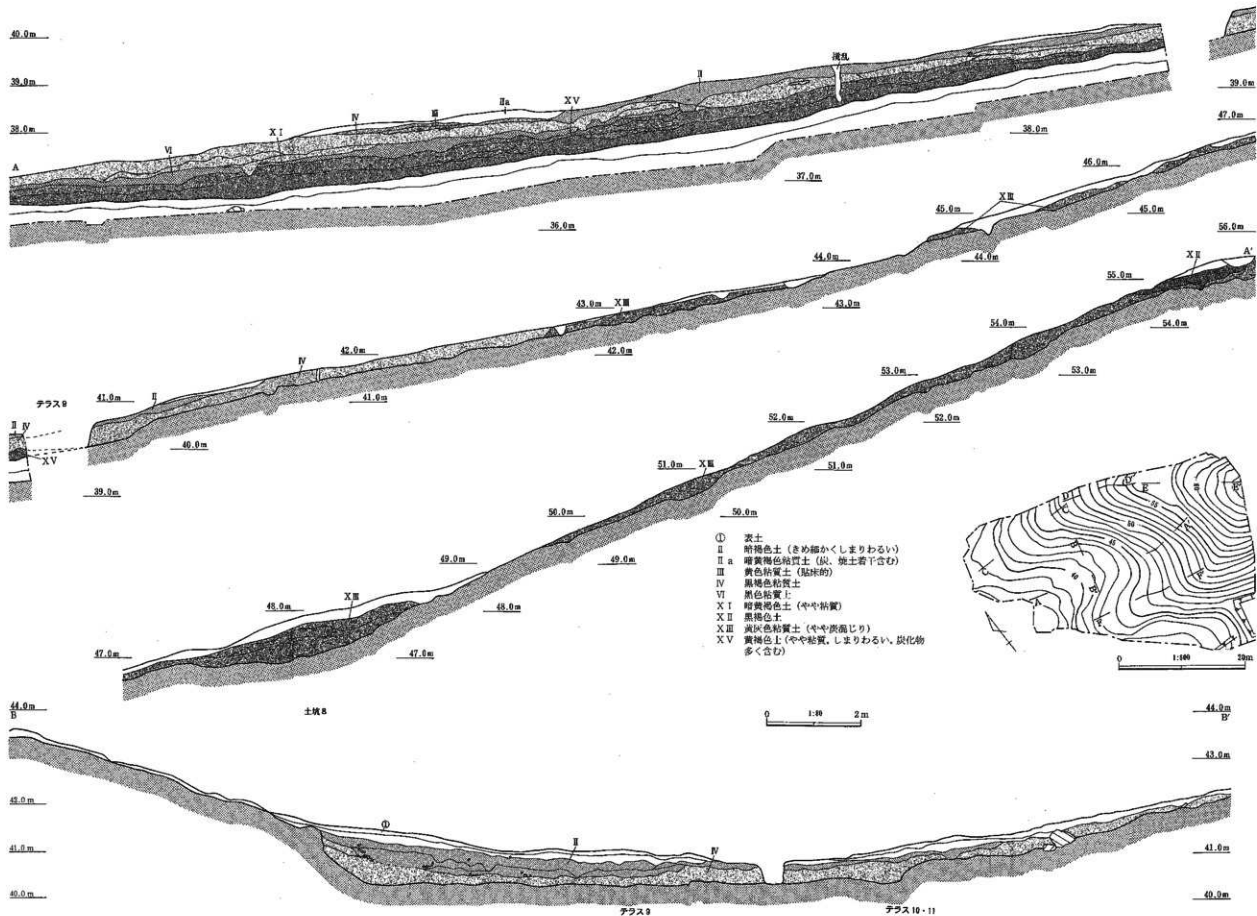


図10 調査地内土層断面(2)

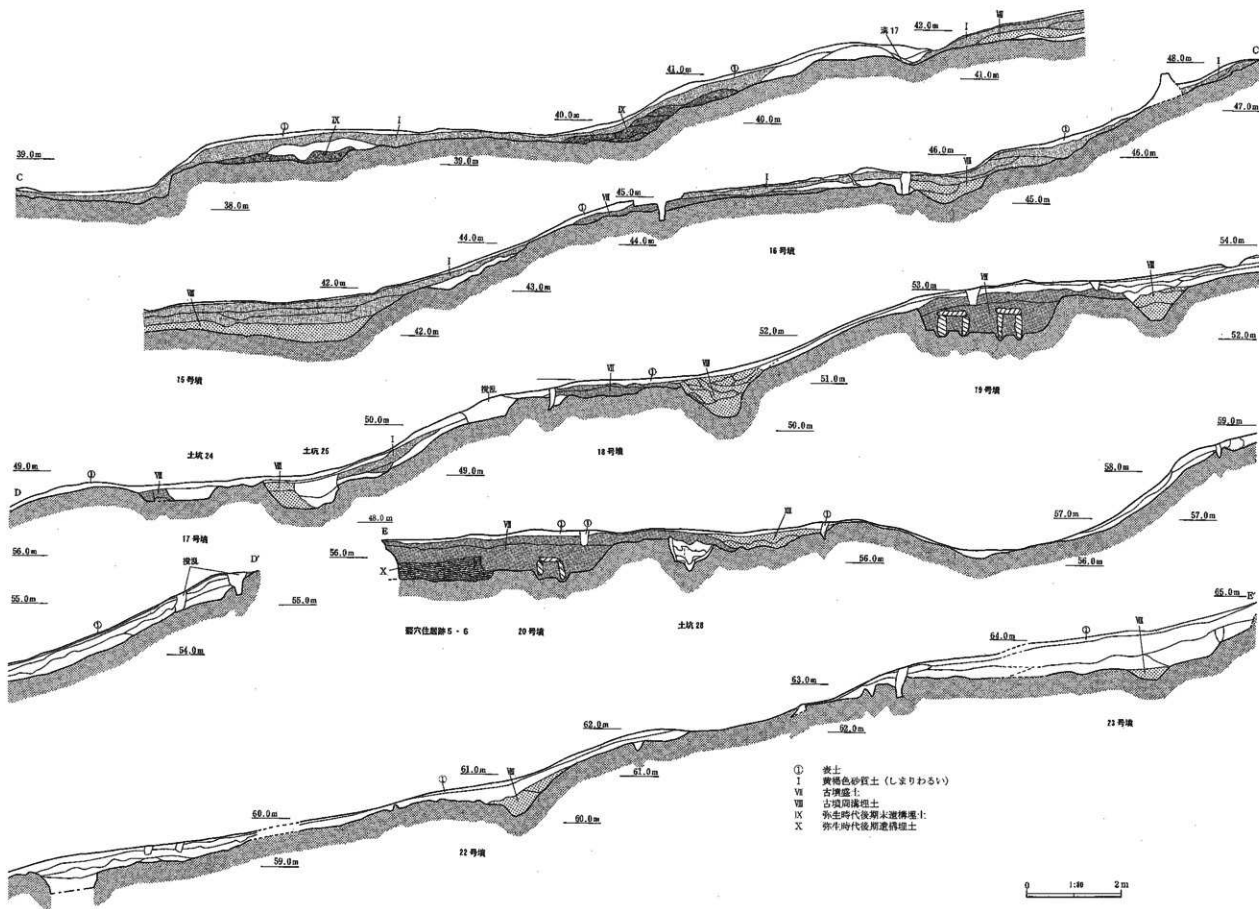


図11 調査地内土層断面 (3)

## 第4章 弥生時代の調査

### 第1節 概要(図12)

弥生時代の遺構を尾根1区から尾根2区、およびそれらに挟まれる谷1区において検出した。その時期は中期後葉から後期末にかけてのものである。

中期後葉の遺構群は尾根1区および谷1区に展開する。尾根1区先端部には埋土が赤褐色系の土坑が5基(土坑2～6)あった。これらは後期末の竪穴住居跡8やテラス8、あるいは中世後期に属するテラス群に切られる。またテラス1は中程に位置し、上層は後期後葉の遺物包含層に覆われる。谷1区では竪穴住居跡1棟(竪穴住居跡1)、土坑1基(土坑1)を検出した。これらは同期の遺物包含層である(XV層)に覆われていた。竪穴住居跡1は多量の焼土、炭化物を含む層が厚く堆積し、また床面などで被熱し硬化したところを5ヶ所検出した。その状況から焼失住居と考えられる。なおここで地磁気年代測定および放射性炭素年代測定を行った(第10章特論3・4)。

後期後葉の遺構群が本調査地において検出した弥生時代の主体的な時期である。尾根1区ではその中程から上方(標高43～60m)にかけて竪穴住居跡6棟(竪穴住居跡2～7)、テラス2基(テラス2・3)を検出した。竪穴住居跡3・4は南西向き斜面のほぼ同標高に位置し、斜面上方をカットし2段のテラスをつくる隅丸方形のものである。これらの上部にはつくり変えられるテラス2・3があり、さらに上の尾根先端部には建て替えが行われた大型の円形住居(竪穴住居跡5・6)を検出した。この住居は古市20号墳の墳丘に覆われる。また竪穴住居跡7は焼失住居であり、当該期の遺構としてはもっとも高所に位置している。炭化材が良好に遺存していたほか、焼土や被熱粘土塊(註1)、完形に近い土器や炭化したモモなどの種子類が出土した。

竪穴住居跡4から南に続く斜面および尾根2区ではテラスを4基(テラス4～7)検出した。最上部のテラス7は中でももっとも広い平坦面をもつ。テラス5・6に近いところには被熱粘土塊が集中する部分があり、あるいは竪穴住居跡7と関連する可能性も考えられる。これらについては胎土分析を行い比較・検討している(第10

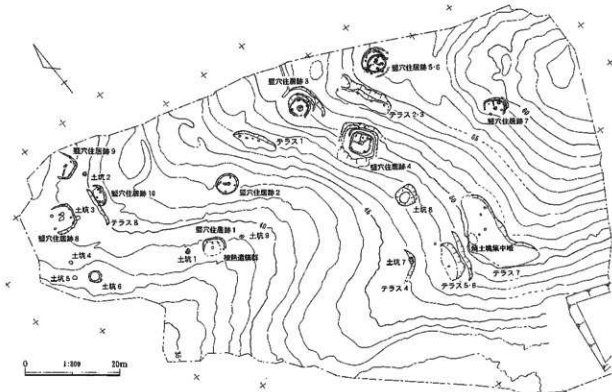


図12 弥生時代遺構分布

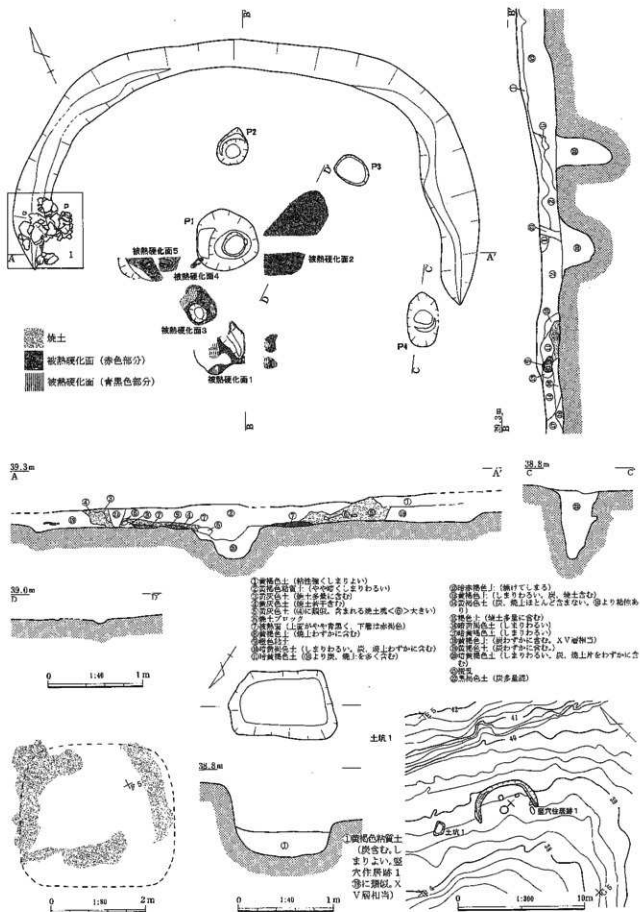


図13 竪穴住居跡1・土坑1



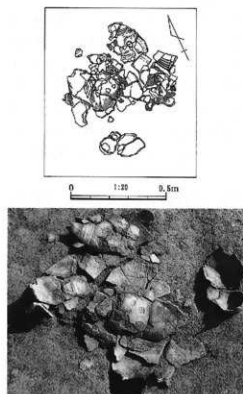


Fig. 1 土器出土状況(西から)

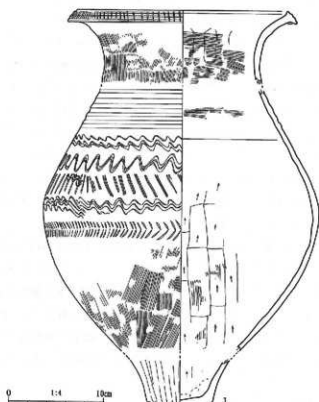


図14 竪穴住居跡1出土遺物

章特論6)。また大型の土坑8が尾根1区と2区の間位置する。

谷1区ではピットのほかには土坑1基(土坑9)をXI層下で検出したのみである。同層は良好な遺物包含層ではあるが、XV層と同様その下面における遺構は少ない。また谷2区においてはこの時期の遺構は確認していない。しかし尾根2区から下がる部分にはわずかながら同区から広がる遺物包含層があった。そのため平安時代のテラス群に削平されてしまった可能性も考えられる。

後期末の遺構群は尾根1区の先端部にもみあり、竪穴住居跡3棟(竪穴住居跡8～10)とテラス1基(テラス8)であった。これらはいずれも中世後期のテラス群に切られるほか、竪穴住居跡9は古市14号墳にも切られている。なお弥生時代よりも遡るものとして、谷1区より縄文時代晩期に比定される刻目突帯文土器が3点出土している(図版26-2)。(中森)

## 第2節 中期後葉の遺構と遺物(図13～17)

### 竪穴住居跡1 (図13・14、図版2-2、3-1・2、カラー図版4)

谷1区において検出し、ほぼ中央にF5杭が位置する。南側は流出してしまっているが、おそらく径約5.0mの隅丸方形を呈する。また埋土に焼土や炭化物を多く含むことから、焼失した住居跡と考えられる。

上面は奈良時代後期～平安時代初頭のテラス16、およびそれに続く平坦面によって削平される。その面で3.0×3.3mほどの範囲に広がる焼土混じりの層を検出した。中心部にはあまり焼土を含まない②層が堆積し、それを焼土を密に含む層が囲う。東西方向の断面(A-A')でみると②層が皿状に堆積し、その外側に焼土層(③・④層および⑤層)があることがみてとれる。これらは床面直上に堆積し0.25mの厚さがあるが、その外側には細かい炭を含んだ⑩層がある。この層は南北断面(B-B')北側にもみられ、さらに北側上方から流れ込んだような状況を示している。土質はXV層に類似する。住居内ほぼ中央にあるP1およびその北側のP2は炭・焼土を含む

⑨層が堆積し、その上を⑩・⑪層が覆う。またP4には炭が多量に含まれた黒褐色土があった。

住居床面および焼土層上面で赤ないし青黒く硬化した面を5ヶ所(被熱硬化面1~5)検出した。被熱硬化面1のみ床面より0.2mほど上に位置するが、他の4基は同一レベルであった。被熱硬化面1は赤褐色部と青黒色部がややまばらにある。被熱面(⑨層)は厚さ2cmほどを測るが、その下には硬く焼けしまったブロック状のもの(⑩層)があった。被熱硬化面2は長径1.05m、短径0.45mほどを測り、全面橙褐色で硬化していた(カラー図版4-1)。中央にある径約0.1mのピット内も同様であった。被熱硬化面3は長径0.4m、短径0.3mほどで赤褐色部と青黒色部とがある。被熱硬化面4は北側をトレンチで切られ規模は不明確である。被熱硬化面5の一部であるかもしれない。その5は攪乱により確認できなかったが、上面からピット状に掘り込まれた可能性をもつ。そう仮定すれば掘り込み面は被熱硬化面1と同じになる。被熱硬化面5底面の長径は0.6mであった。

また住居西隅、周壁溝上面で完形の壺(1)が出土した。器表面が弾けたように剥離した部分のみみられ、火を受けた可能性がある(図版3-1)。

なおこの遺構を検出した当初その検出面、および周辺から鉄滓などが出土していたため、奈良時代後期~平安時代初頭の製鉄関連遺構であると想定していた。しかし明確に時期を示す遺物がなく、検出した被熱硬化面から時期をある程度判断したいと考えた。さらに焼土層下層から完形の弥生土器が出土したが、層位的な関係が不明瞭であったためその周辺から出土した炭化物を採取し<sup>14</sup>C年代測定を行った。最終的には層位的に焼土層と被熱硬化面、竪穴住居跡は一連のものであることが確認できたが、年代測定の各結果も地磁気年代測定では2000年以前(第10章特論3)、<sup>14</sup>C年代測定が2100 ± 40B.P.、および2000 ± 40B.P.(第10章特論4)と矛盾はない。

(中森)

**土坑1** (図13)

E4グリッドXV層下面、竪穴住居跡1の西側で検出した。長径1.05m、短径0.7m、深さ0.75mを測る長方形の土坑である。南側は削平されている。遺物は出土していない。

(中森)

**土坑2** (図15)

C3グリッド北側に位置するほぼ楕円形をした土坑で、長径1.0m、短径0.85mほどを測る。西側は中世のテラスにより削平されている。

(中森)

**土坑3** (図15)

C2・3グリッドにまたがる土坑で竪穴住居跡8に切られる。長径1.45m、短径0.85mほどを測る長方形を呈する。底面は上場よりもやや外側に広がる。

(中森)

**土坑4** (図15)

D2グリッドの中央付近にある円形土坑である。径は0.65mを測り、中世のテラス26による削平のため深さは約0.15mしかない。

(中森)

**土坑5** (図15)

D2グリッドにおいて検出した。径約1mを測る円形の土坑である。土坑南側にはその肩にかかるように人頭大の礎が、2層上面に置いたかのような状況で検出した。中世のテラス27により削平された可能性が高いため、ここが遺構上場であったかどうかはわからない。

(中森)

**土坑6** (図15、図版2-1)

D2グリッド南側に位置する、径約2.1mの大型円形土坑である。テラス28により削平されたためか、深さは約0.3mと浅い。北東部分は攪乱されているが、2層がほぼ水平に堆積している。米子市教育委員会による試掘(YT21)がほぼ中央部に入っており、遺物はそこから比較的まとまって出土しているほか、北側部分に僅かにみられた。2・3は壺、4は壺。3・4は試掘出土遺物である。

以上のように尾根1区先端部において検出した土坑2~6は、その埋土が赤褐色土系で類似すること、そして土坑6出土の遺物から中期後葉と判断した。それぞれ平面形および規模が異なるため、各々の相関関係については不明であるが、一連の所産である可能性は考えられよう。

(中森)

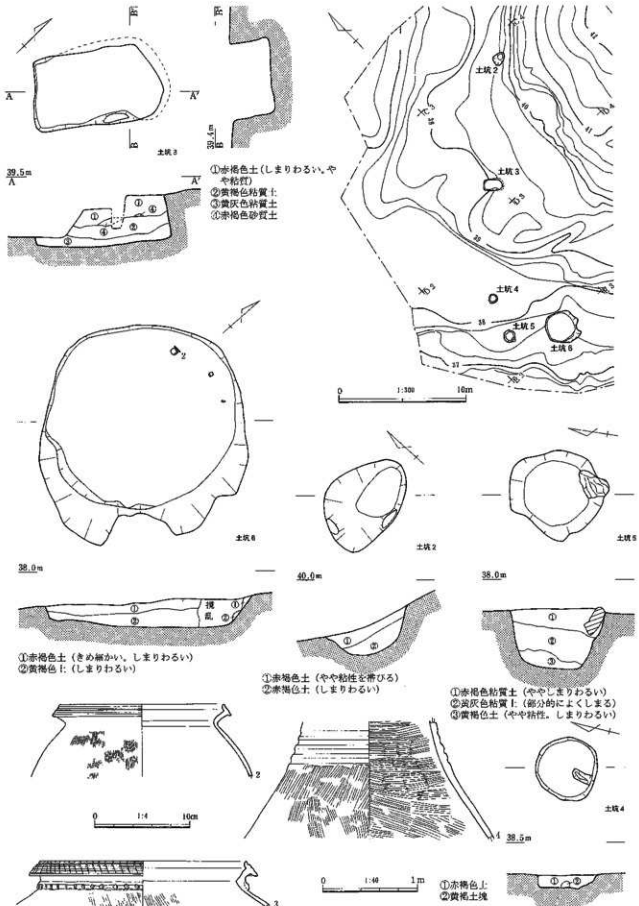


図15 土坑2～6および出土遺物

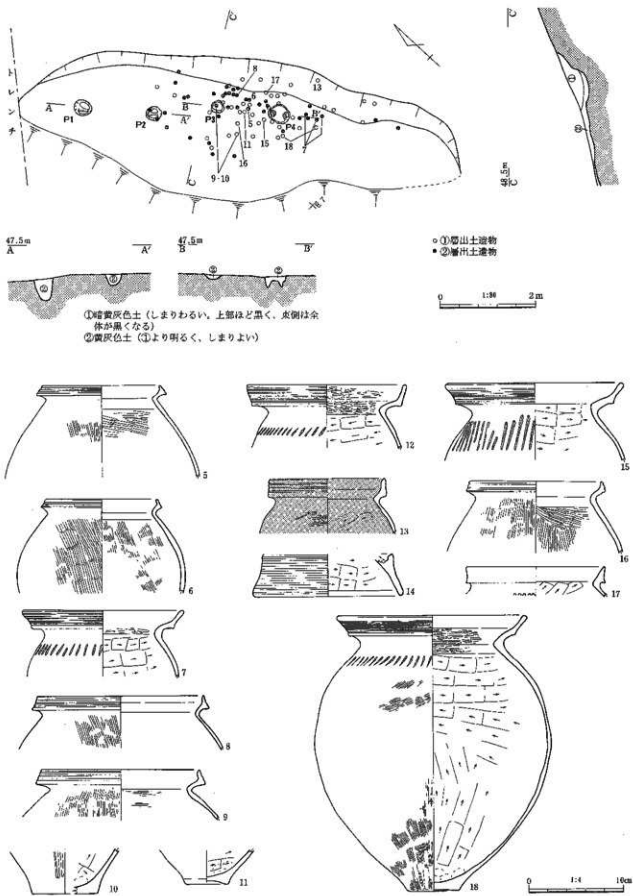


図 16 テラス 1 および出土遺物

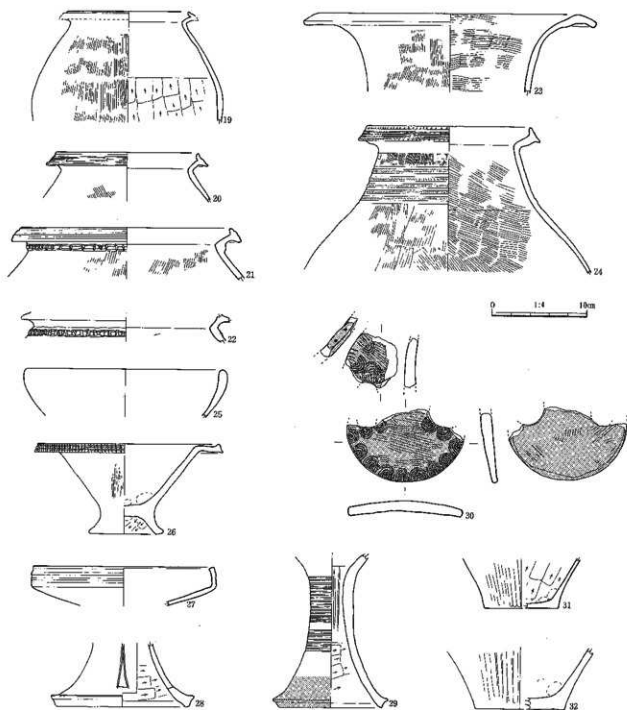


図17 XI層下層・XV層出土遺物

## テラス1 (図16、図版2・3・4)

E6グリッドに位置する幅約9.4mのテラスである。奥行きは最大で約1.5m。西向きの斜面をカットし平坦面をつくり出しており、その高さは0.3mほどであった。堆積は2層に分かれ、下層は中期後葉の遺物のみが包含されていた。ただ上層の①層には後期の遺物が多く見られることから、あるいは2時期にわたって利用された可能性も考えられよう。5～9・12・13・15～18は甕、14は器台、10・11は底部である。5～11は①層、12～18は②層より出土している。(中森)

## XV層出土遺物 (図17、図版3・3)

谷1区最下層にあたるこの層は、F3～5グリッドにかけて拡がっていた。またF5グリッド東側における同層と上層であるXI層との境は不明確であったが、XI層掘り下げ過程で中期後葉の土器がまとも出土した

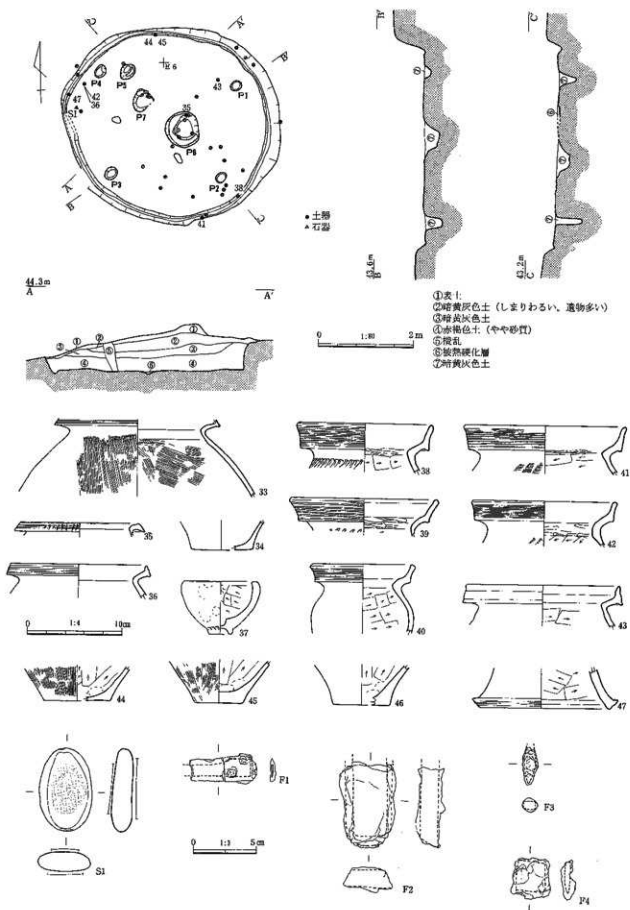


図18 竪穴住居跡2および出土遺物







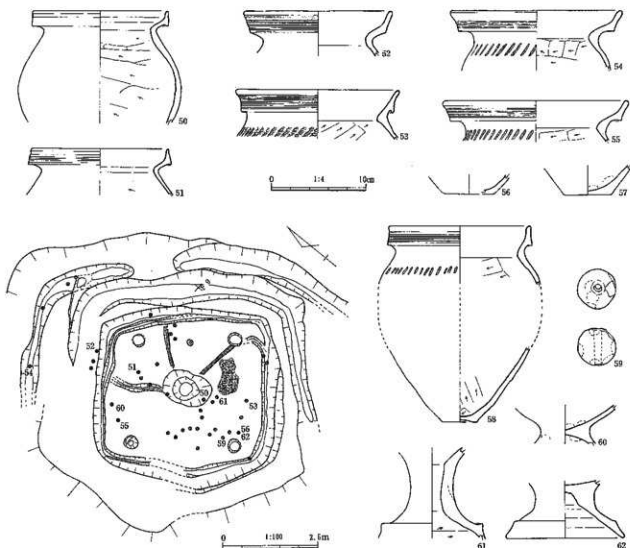


図21 竪穴住居跡4出土遺物

ことより、これらをXI層下層として取り上げ、ここに含めた。

19～22は甕、23・24は蓋である。25は鉢か、26はその内面がケズられていたため、低い高台の付くものと判断した。あるいは蓋である可能性も考えられる。27～29は高坏、31・32は底部である。30は分銅形土製品で、内外面とも赤色塗彩される。内外面にハケメがあり、下半部はやや反っている。なおこの下半部はG3グリッドIV層（奈良時代後期～平安時代初頭遺物包含層）から出土しているが、同一個体と判断した。



(中森)

### 第3節 後期の遺構と遺物 (図18～41)

#### 竪穴住居跡2 (図18、図版8-1～3・9)

E5・6グリッドにおいて検出した。長径4.8m、短径4.2mほどを測るやや楕円形を呈したものである。上面は平安時代のテラス18などに削平されている(①層)可能性が高く、深さ0.55m以上あったかもしれない。

遺物は一部に中期の土器(33～35)を含む。37は小型の杯か、高台状のものの外面には、胴部と接する部分に爪痕状の連続する刻みが巡る。内面は見込み部分がくぼむため、蓋である可能性も考えられよう。床面上から出土。38～43は甕である。二重口縁外面に凹線を施すものと無文があり、前者には凹線上半部をナゲ酒すものもみられる。また鉄製品がまとめて出土している(F1～F4)。F1は鐘鉤、F2は鋳造鉄斧の先端部、F4は鎌



か、これら3点は床面より浮いて出土。F3は鉄鏡か。P6内から出土した。

(中森)

#### 竪穴住居跡3 (図19、図版8・4・9・3)

D・E・8グリッド、19号墳の南西に位置する。東側は斜面をカットし、2段のテラスがつくられる。住居は一边4mほどの隅丸方形で、深さは東側で約0.6mを測る。住居内は地山がやわらかい真砂土であるためか、床が貼られている。中央ピット(P1)は長径0.8m、短径0.6mほどの楕円形を呈し、その上場周囲に幅0.3m、高さ0.05mほどの非常に低い周堤が巡る。遺物は少ないが、いずれも床面直上から出土している。48は甕。口縁部は無文で、端部はやや外半する。49は底部である。また石鏡が1点(S2)ある。

(中森)

#### 竪穴住居跡4 (図20・21、図版5・6)

尾根1区F8・9グリッドの南西向き斜面に位置する。斜面北側を大幅にカットし、そこに幅約1.2mのコ字状テラスを2段つくる。さらに上方の1段目においては北から北西にかけて幅0.6mほどの溝が住居に沿って掘られ、深いところで約1.2mに達する(G-G'、図版5・2)。この溝は住居北西側で収束しており、排水溝と考えられよう。住居南西側(斜面下方側)には広範囲に黄灰色系の粘質土(⑦~⑨層)を検出したが、これらは地山上にのる貼床状のものと考えられる。

住居の規模は径約5.0mの隅丸方形を呈す。床面には中央ピット(P6)から幅0.1~0.2m、深さ0.1mほどの溝が3条あった。なお住居内にはかなり厚く上方から流れ込んできた土が堆積していた。遺物は床面およびやや浮いた④層内に多く、さらに排水溝内からも出土した。50~58は甕、59は土玉である。60~62は高坏、S3は水鳥の石核である。

(中森)

#### 竪穴住居跡5・6 (図22、図版6・2・7)

20号墳盛土下から検出した円形の竪穴住居跡である。ちょうど尾根頂部に位置し、ここは尾根1区の中でもっとも広い平坦面が広がる地区である。竪穴住居跡は一度拡張を行っており、拡張前を竪穴住居跡5、拡張後を竪穴住居跡6とした。前者は長径4.0m、短径3.6mのやや楕円形を呈し、竪穴住居跡6床面からわずか0.05mほどしか深さがない。柱穴の配列は不規則である。中央ピットは明確な切り合いなどが確認されなかったため、竪穴住居跡6と共通するのかもしれない。また床面にはほぼ全面に貼床がされていた。

竪穴住居跡6は竪穴住居跡5の部分に貼床し床面のレベルを揃える。東側は20号墳埋葬施設2、南側は埋葬施設1により削平される。径6.5mほどの円形を呈すると思われ、本調査地内検出の竪穴住居跡の中でもっとも規模が大きい。周壁溝の内側には北から東にかけて弧状に溝があるが周壁溝とは並行しないため、竪穴住居跡5から6への拡張前にもう一段階あったとも考えられる。

中央ピット(P9)底面には炭化物が堆積していた。壁など周囲には火を焚いた痕跡はなく、意図的に置いた可能性もあろう。遺物は壺(63)が出土したのみである。

(中森)

#### 竪穴住居跡7 (図23~30、図版10~17、カラー図版2・3)

調査地北側に伸びる尾根の頂部から、南西方向に傾斜する斜面部、標高約58.10mに立地する。約4.8×4.1mの隅丸方形を呈する。住居の中心付近で焼土、被熱粘土塊<sup>(註2)</sup>、縁辺部で炭化材などが認められ、ほとんどの遺物は床面直上から検出された。良好な遺存状態を示す焼失住居である。住居西側は傾斜が著しく、端部が流出しているが、斜面部をL字状にカットし、住居を構築したものと推定できる。ピットは住居のほぼ中央に位置する中央ピット1(P1)、柱穴と想定される主柱穴4(P2~4)、補助柱と想定される柱穴1(P6)を検出した。そのほか、長さ約1.5m、幅約0.18m、深さ約0.07mの床溝が中央ピットの東に伸び、壁面と床面の境にめぐる幅約0.15mの周壁溝に連続する(図30)。

住居検出時に住居中央部で焼土(⑩・⑪・⑫・⑬層)を確認した(図23)。複数層に分かれるが一連の堆積によるものと考えられる。被熱粘土塊は人頭大から拳大の大きさで多様な形態をなし、焼土中に包含される。炭化材は検出レベルおよび焼土層をキー層として、上下に分離できる可能性がある。炭化材には木質、草本類のものが認められ、木製品と想定される個体も含まれる。

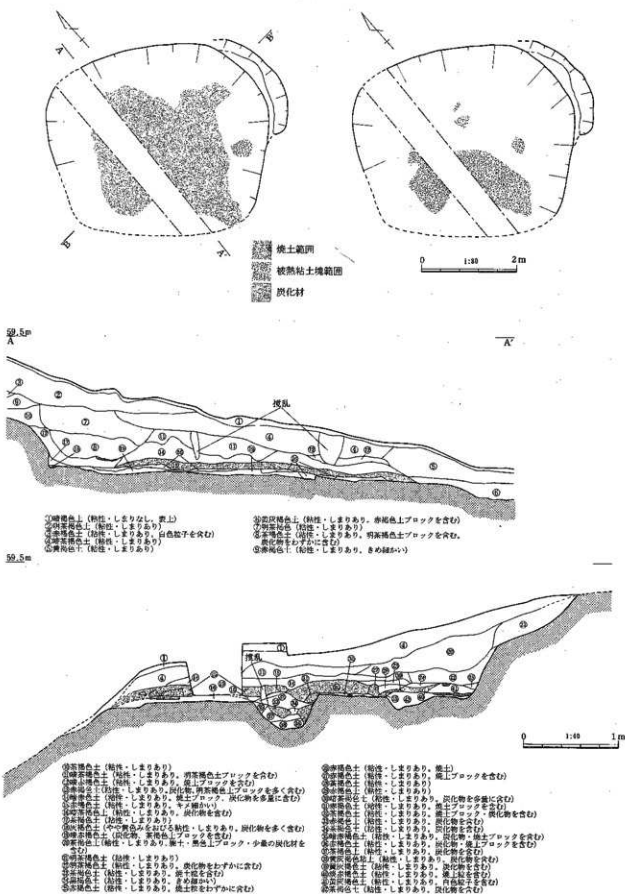


図 23 竪穴住居跡 7 焼土検出状況および土層断面



## 1) 焼土 (図 23)

住居中心付近で確認でき、東西約 1.8 m、南北約 2.1 m の範囲に約 0.1 m の厚さで拡がり、縁辺部では確認されない。住居縁辺部では北側で赤褐色土 (⑬層)、南東側で黄灰褐色土 (⑭層) が確認でき、焼土層の上面は⑬層、⑭層上面とほぼ同一レベルに揃う。B-B' では焼土層が比較的縁辺部にまで拡がり、⑭層の上部に堆積するのにに対し、A-A' では⑬層が壁面の立ち上がりに沿い、⑭層を介して焼土層の上部に堆積する。また炭化材は焼土層の直下、⑬・⑭層の上面およびその直下に認められたが、焼土層上面では大きな炭化部材を確認していない。これらの観察結果から縁辺部に堆積した土層と焼土層および炭化材の関係は、住居が焼け落ちる時の堆積過程の違いによって生じる差を示している可能性がある。

また橙褐色、淡赤褐色を呈する被熱粘土塊は焼土上面より検出され、分布範囲はやや南に偏るが、人頭大から拳大の大きさの個体があり、ほぼ焼土層中に包含される。

## 2) 炭化材 (上部炭化材および下部炭化材)

平面的には住居内の全般にわたり検出されているが、分布には粗密があり特に縁辺部に炭化材が集中し、焼土、被熱粘土塊の直下ではまばらである。縁辺部では⑬・⑭層の直上、直下で約 0.1 m のレベル差をもって炭化材を上下に分けられる。このことから主として縁辺部において上、下の炭化材を分離して検出することに努めた。検出段階をもとに第 1 検出段階の炭化材を上部炭化材、第 2 検出段階の炭化材を下部炭化材 (床面直上検出炭化材) として報告する。

## 3) 上部炭化材 (図 24、図版 10・12)

上部炭化材は斜面に面した西側を除いて住居の北西縁辺部を中心に分布し、先述した縁辺部に堆積した土層 (⑬・⑭層) の直上、直下および壁の立ち上がり付近に集中する (図版 12)。炭化材には木質、草本類のものが確認される。木質の炭化材の遺存状態は良好ではないものの住居の中心を向き、壁にもたれかかった状況が確認できた。いずれも、板、丸太状を呈する。検出状況から垂木と考えられよう。木質の炭化材の間隙には草本類の炭化材が集中し、これらの繊維方向は木質炭化材のそれに対してほぼ直交する。

床面縁辺部の⑬層上面、直下で検出した炭化材は部分的に約 0.1 m の高低差をもち、土層の厚層に近似する (図版 12-5)。よって高い位置にある炭化材は焼土検出面とほぼ同一レベルとなり、低い位置で検出した炭化材は後述する床面直上検出炭化材の直上ないしはやや高い位置にある。⑬層直上で検出した炭化材は少量ではあるが、草本類を主体とする。

上部炭化材の中でも北西部は遺存状態が良い (図版 12-1 ~ 4)。壁面において検出した W1 は木質の炭化材の直上に直交するようにして草本類の炭化材が数条かかる (図 24、図版 12-2)。これらは屋根材を構成するものと考えられ、草本類の炭化材は垂木上に葺いたカヤ材の可能性が高く、上屋構造の一端を示しているものであろう。

壁面と床面の境界付近では草本類の炭化材を、⑭層中に約 0.05 m の上下差をもって確認した (図版 12-4)。上下とも繊維方向は一定しないものの、網状状を呈する可能性がある。下側の炭化材直上には後述する「舟形」の炭化材が位置するため、それらは床面直上に位置する炭化材である可能性も否定できない。「舟形」を呈する炭化材は中をくり抜くなどの加工が認められ、そのほかに検出した炭化材と形態が異なる。住居の構造に関わる部材あるいは木製品と推定される (図版 12-3)。

木質の炭化材にはスダジイが、草本類の炭化材にはススキが用いられていることが樹種同定より確認された (第 10 章特論 1 参照)。この結果は下部検出炭化材も同様である。

## 4) 被熱粘土塊 (図 24 ~ 26、図版 10・14・15)

焼土層の上面で検出された被熱粘土塊は、住居の中央部からやや南西よりに集中する (図 23 ~ 25、図版 10)。先述したように焼土層中に包含されており、その直下に下部検出炭化材、土器片などが出土することから、本来床面よりも上部に位置していたと考えられる。大きく二つのまとまりが確認され (図 25)、人頭大の個体が集中する A 群、A 群から北に約 0.9 m 離れた地点に拳大よりやや小さい個体が集中する B 群がある。検出段階では明らかではなかったものの二群の間には中央ピット (P 1) が存在し、中央ピットの周辺を巡るような状況で被熱粘

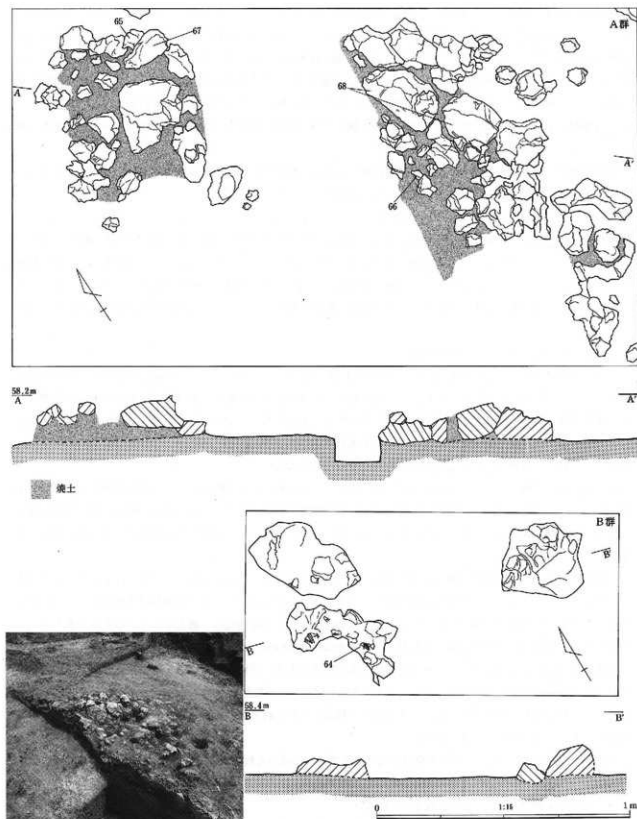


Fig. 2 被熱粘土塊A群検出状況（西から）

図 25 竪穴住居跡7 焼土検出状況

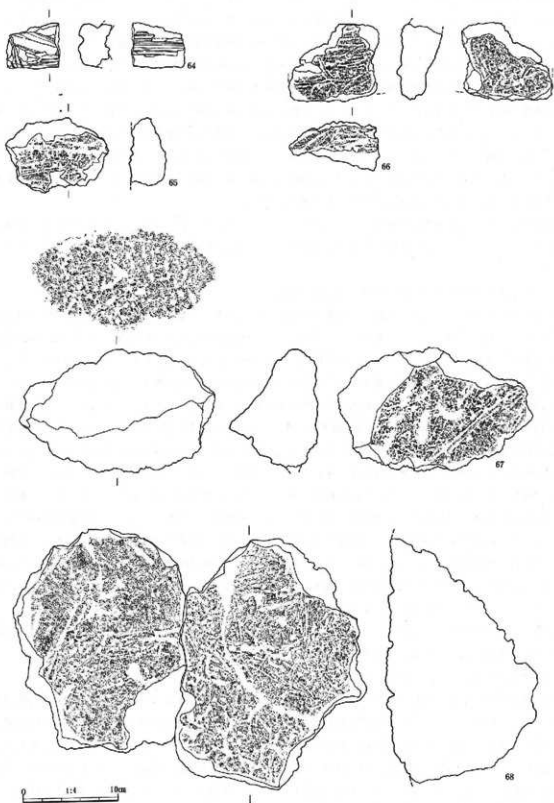


図26 竪穴住居跡7出土遺物(1)



土塊を検出したことになる。取り上げた個体の総重量は約62.03kgを測る。

被熱粘土塊は多様な形態をなし、幾つかの共通点をもち、個体によっては住居の上層構造に関わるものも認められるが、多くの個体は破損している。A群を構成する個体の多くは堅く焼け締まった平坦面を1面あるいは複数面もつ。平坦面にはまばらに草本類の圧痕が残る(67・68)。検出段階で平坦面を確認できた個体は平坦面を上方向に向けていた。また同方向で密に並ぶ草本類の圧痕をとどめる個体(図版15-1, 739)もあり、この圧痕は上部炭化材、W1でみられた草本類の模様と類似する。屎根材の可能性があろう。また平坦面を表面として対をなす裏面は被熱の影響をあまり受けなかったせいか、非常にもろい(65・68)。65・66はA群のなかでは小型の個体であり、表面あるいは裏面が平坦面構成される。平坦面には数本の草本類の圧痕が認められ、圧痕の走向はほぼ一致する。B群はA群とは異なり小型の個体を主体とし、破損しているものの草本類の圧痕を顕著にとどめるものが多い(64)。大型の被熱粘土塊の厚さは約11cmあり、焼土層の層厚と近似する。検出状況からみても焼土層または被熱粘土塊は住居の上層構造に関連すると考えられる。

被熱粘土塊のなかには被熱の影響をあまり受けていないもので、種子および草本類の炭化物を含む個体もある(図版15-1, 740)。焼土および被熱粘土塊は胎土分析より、周辺の土を用いたことが明らかとなっている(第10章特論6参照)。

#### 5) 下部炭化材(床面直上検出炭化材)(図27、図版13)

下部炭化材は上部検出炭化材と比較して木質の炭化材は小片が多く少量のに対し、草本類の炭化材は顕著である。検出した炭化材相互のレベル差は小さく、ほとんどが床面に貼り付いた状態を呈す。住居の床面縁辺部では薄い炭化物の堆積が確認できた。これらの炭化材は⑬・⑭層の直下より検出したものが大半を占める。

木質の炭化材は中央ピット周辺に集中する。中央ピットの直上で検出した数本の炭化材は丸太材であり、その繊維方向は中央ピットを中心として放射状を呈する(図版13-1)。また中央ピットから北東にのびる床溝直上に板状炭化材が確認でき、方向、幅は薄とほぼ一致する。溝上にあった板が落ち込んだ状況を示している(図版13-3)。

W2は住居北東部で検出された網代状の炭化材である(図版13-2)。二つの編み方が想定でき、2本または1本の草本を単位として罫籠などを編む時に用いられる「六目編み」の手法か、目の粗い「四ツ目編み」で格子の対角線に補強材として草本類を通す手法で編まれたと考えられる。また明瞭に網代状とならないまでも類似した模様の炭化材が、住居縁辺部を巡る。検出状況から住居の床面を覆っていたもの、あるいは住居の壁材であった可能性もあろう。前者の場合は敷物として機能していた可能性があり、後者では壁材に用いられたものが崩落し、床面に貼り付いたものをネガティブに検出したことになる<sup>(R3)</sup>。W3は床面東側の炭化材集中部直上から検出された(図版13-4・5)。用途は不明であるが、数本の草本類を束ね、輪のようにしたものである。取り上げ後の清掃中にクスノキの種子が2点出土している<sup>(R4)</sup>。

周壁溝の上部では断片的ではあるが、周壁溝に並行する木質、草本質の炭化材を検出した。草本質のものは屎根のカヤ材、木質のものは木舞に相当する可能性がある。

#### 6) 遺物出土状況および出土遺物(図28・29、図版13・16・17)

完形に復元可能な土器、石器が出土した。土器の多くは焼土検出時に確認できたが、検出した土器片の直下はほぼ床面直上に位置することから床面直上出土遺物として取り扱った。遺物の中でも土器は住居の縁辺部に間隔をあげ散在する様相を示す。土器、石器の出土位置は住居が機能していた時の様相をよく残しているものと思われる。個体によって出土状況が異なり、69は本来の形をとどめたまま北方向に横転し、その東側で出土した70は、東方向に横転している。70と類似した出土状況は71・74・75にも認められ、74は倒れた方向は不明だが、71は南に、75は北西に横転した状態を示す。72・73は先述の土器とは異なり、上方からつぶされた状態で出土した。また74の東側で、砂岩製<sup>(R5)</sup>の剥片(S4・S5)、石核(S6・S7)が出土しており、それらは接合する。石器および74の出土位置は住居の入り口付近と想定され、入り口付近で石器製作作業が行われた可能性もあろう。

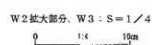
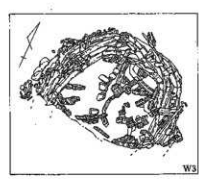
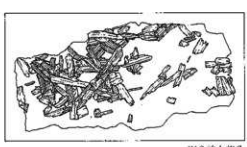
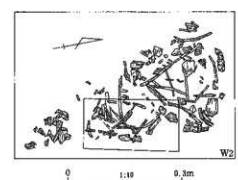
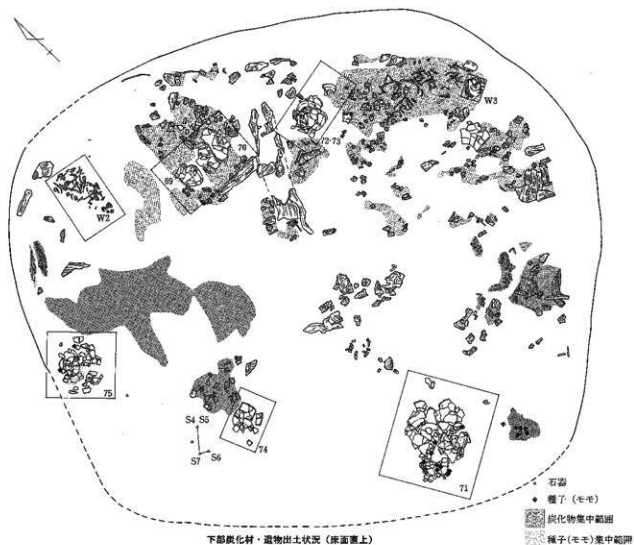


図 27 竪穴住居跡 7 検出状況（2）および出土遺物（2）

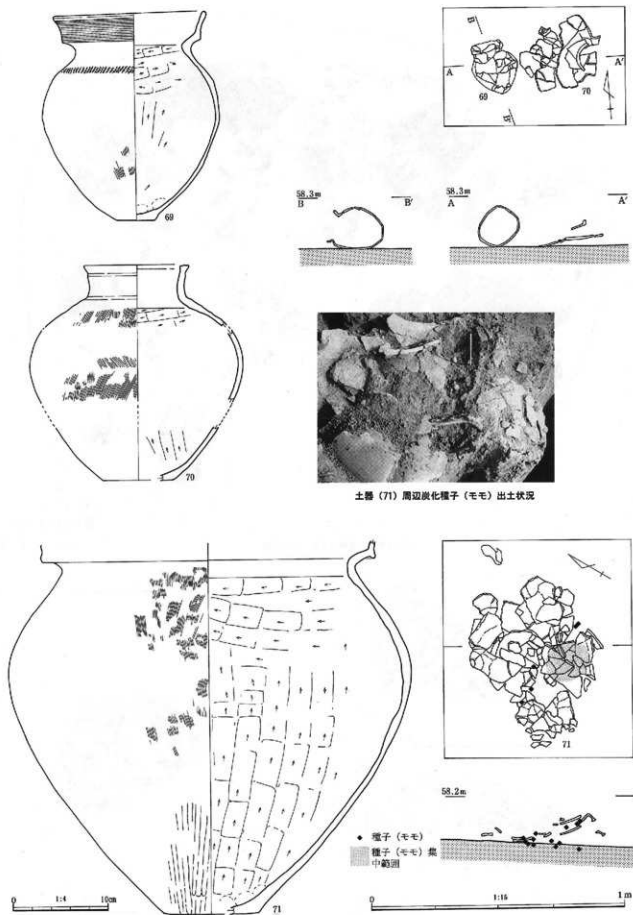


図28 竪穴住居跡7土器出土状況および遺物(3)

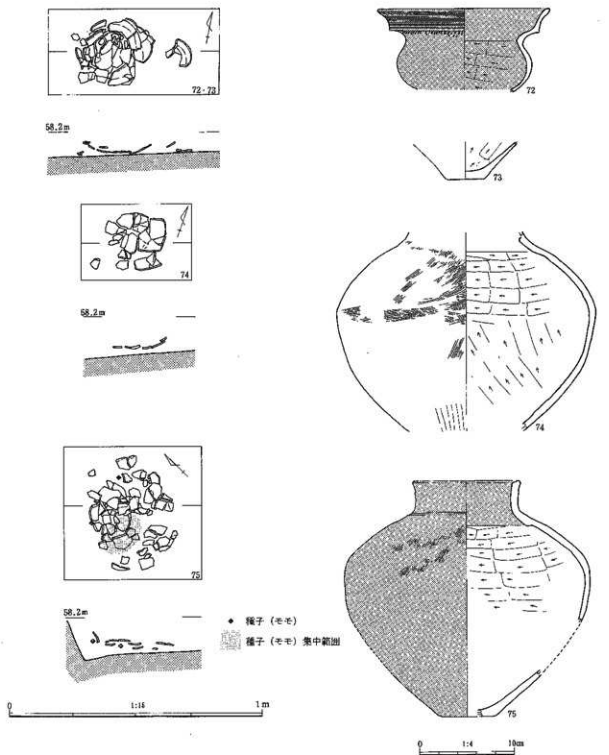


図29 堅穴住居跡7土器出土状況および遺物(4)

表1 堅穴住居跡7出土種子一覧表(図版15-2)

△は残存部分の計測値 ○は種内を含めた計測値 ◎は果肉が残存したモノ

No.	種別	遺跡出土土器	長さ(mm)	幅(mm)	高さ(mm)	重さ(g)	備考	No.	種別	遺跡出土土器	長さ(mm)	幅(mm)	高さ(mm)	重さ(g)	備考		
1	粟	78	1.67	△1.52	1.28	△1.4	8	粟	71	1.84	1.70	1.62	1.6	18	◎		
2	粟	71	1.86	1.56	1.16	1.2	9	粟	71	2.02	1.78	1.57	1.6	18	◎		
3	粟	71	1.88	1.67	1.35	1.4	10	粟	71	2.14	1.77	1.46	△1.8	17	◎		
4	粟	71	△1.72	1.65	1.30	△1.4	11	粟	71	2.09	1.75	1.47	2.0	18	◎		
5	粟	71	1.78	1.61	1.16	1.4	12	粟	71	2.11	1.87	1.49	1.7	18	◎		
6	粟	75	1.53	1.56	1.27	1.5	13	粟	71	2.07	1.74	1.34	1.8	20	◎		
7	粟	71	2.04	1.82	1.44	2.0	14	粟	71	2.08	1.82	1.18	1.5	21	◎		
											22	2.2	2.3	0.75	0.61	0.81	0.9

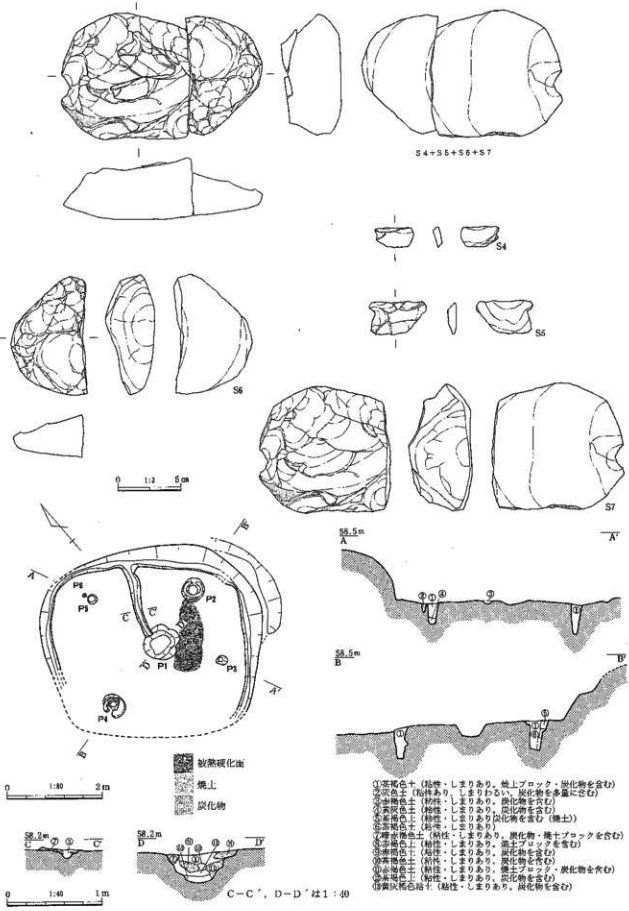


図30 竪穴住居跡7出土遺物(5)および完掘

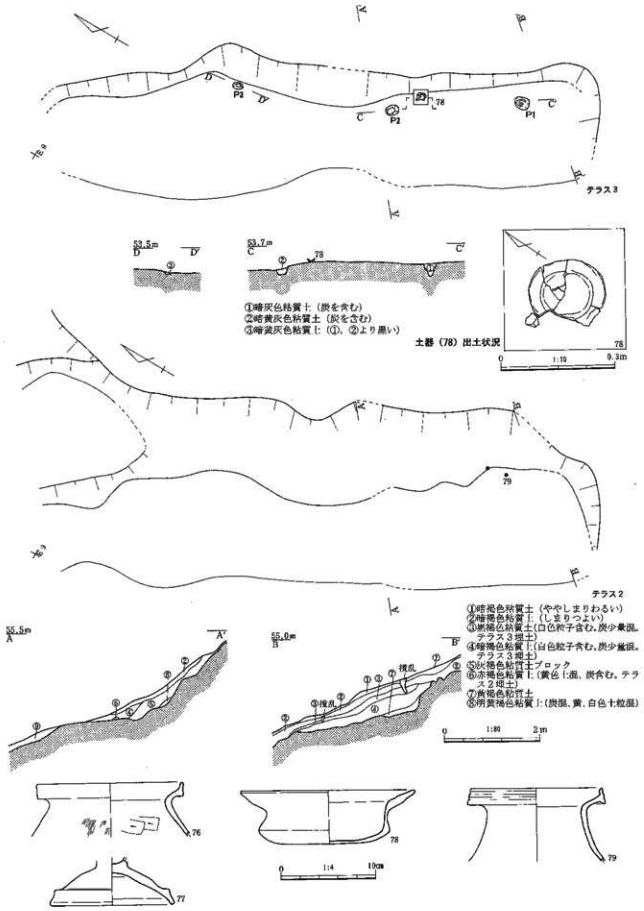


図31 テラス2・3および出土遺物

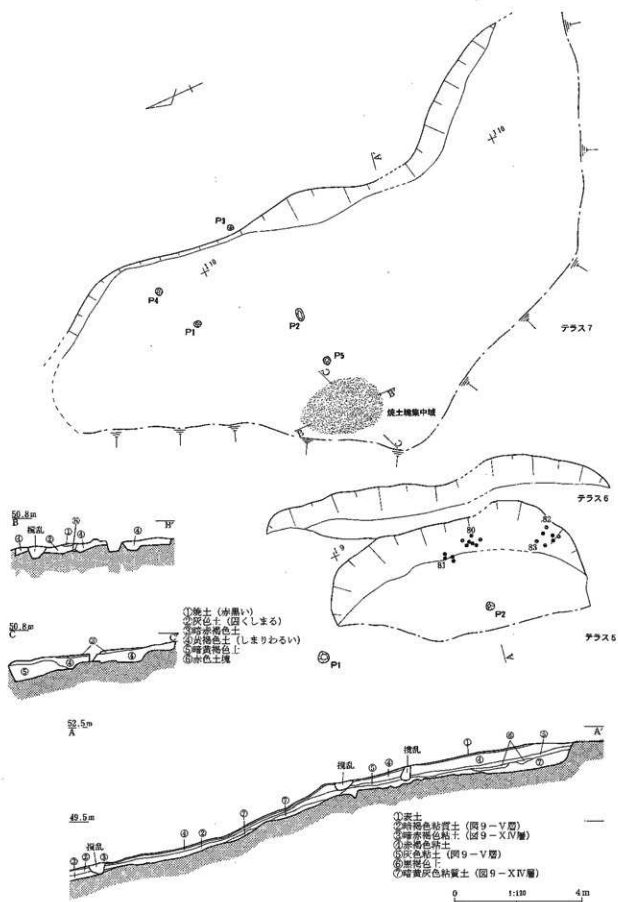


図32 テラス5～7

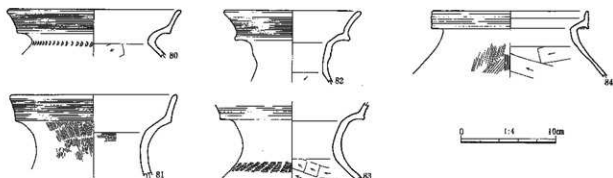


図33 テラス5・7出土遺物

71, 75の土器片の直下あるいは土器片付近の土から約41個体のモモの種子が出土した(図版15-2)。破片を含め、71では約24点、75では約17点が出土している。モモの種子は出土状況より、本来それぞれの土器内に入っていたものと考えて大過あるまい。また71より出土した1点、75より出土した3点の種子は果肉が残存している(図版15-2最下段)。

焼上層は検出状況より、住居の上層構造の一部を構成している可能性がある。被熟粘土塊は本来屋根などの土層構造の一部になっていたものと思われ、火元に近い部分が焼け落ちたものであろう。本住居跡より出土した炭化材は検出段階より上部、下部として報告を行ったが、上部炭化材をもって住居の上部構造に関わる炭化材と限定できず、下部炭化材の中にも住居の上部構造と想定される部材も検出されており、一様ではない。出土遺物については当時の住居内の様相がそのまま遺存した状況を示していると考えられる(第10章特論2)。(大川)

#### テラス2・3 (図31、図版18-1、20-1)

20号墳南西墳端部の下にあり、竪穴住居跡6の北東部に位置する。最初につくられたものをテラス2、後のものをテラス3とする。まずテラス2は斜面を緩やかにカットし広めの平坦面をつくりだしている。平坦面にはピットなどは確認できず、土器片がわずかにあったのみである。図示し得たのは壺(79)である。テラス2の埋土は東側壁面近くに⑤~⑧層が残っており、それを削るようにしてテラス3はつくられている。検出したピットはわずかに3基で、2.8~3.2mの間隔をもって掘られている。P2の南東側で完形の鉢(78)が出土した。口縁が大きく直線的に外反し、胴部は非常に扁平、底部は平底で底径は大きい。(中森)

#### テラス5~7、焼土塊集中域(図32・33、図版18-2・19-2・20)

尾根2区東上方に位置する段状のテラス群である。下段のテラス5は幅が約8.0m、奥行は3.2mほどを測る。斜面のカットは緩やかで、傾斜する壁面に遺物が密に出土した。その中に後述する焼土塊が含まれることから、これらはテラス7から落ち込んできた可能性がある。テラス6はほぼ斜面のカットした部分のみで、平坦面はほとんどみられなかった。独立したものというよりは、テラス5の後背テラスといった様相を呈する。

テラス7は南北20.0m、東西9mほどを測る。ややL字状の広い平坦面をもつ。ピットは5基しか検出できず、構造物が立っていた可能性は低い。また平坦面西側に、拳大ほどの焼土塊が集中する部分があった。その掘り方は不明瞭であったが、2.7m×1.7mほどの範囲に広がっていた。竪穴住居跡7で検出したような被熟粘土塊とは異なり、やや軟質なものである(図版20-3)。なおこれについて胎土分析を行ない、被熟粘土塊や弥生土器などとは異なるという結果が出ている(第10章特論6参照)。

遺物は80~83がテラス5から、84はテラス7から出土した。

(中森)

#### テラス4、土坑7(図34、図版19-1・20-4)

テラス5の北西約6mのところの位置する。幅約6mを検出したが南西部分は直線的であり、さらに南西へ傾いていた可能性が考えられる。テラスがやや屈曲する部分には長径1.2m、短径0.9mほどの土坑7がある。テラス平坦面からの深さは約0.1mと浅い。この土坑を中心に④層から遺物がまがまがと出土した。85~90は甕、91は高坏である。ほかに石斧(S8)、磨石(S9)が出土した。

(中森)



土坑8 (図35、図版19-3)

谷1区上方、H8・9グリッドに位置する長径4.6m、短径4.3mほどの大型土坑である。明瞭な掘り込みはなく、窪んだような状態であった。斜面地につくられているため深さを計測しにくいのが、もっとも深い位置で0.6mほどを測る。埋土中から高環脚部片(92)が出土している。(中森)

土坑9 (図36)

谷1区、被熱硬化面群の約5m東で検出した。長径0.85m、短径0.55mほどの隅丸長方形を呈する土坑である。深さは約0.25mで、②層は椀状に堆積している。遺物は出土していない。(中森)

XI層出土遺物 (図37、図版21)

谷1区に堆積するXI層から出土した遺物群である。93~99はIV様式に位置付けられ、下層のXV層相当のものである。101~105・116は甕、107は高坏、108は坏か、109・110は壺である。115は壺ないし甕の把手。F5・F6は不明の鉄器である。S10は緑色片岩製の石包丁。(中森)

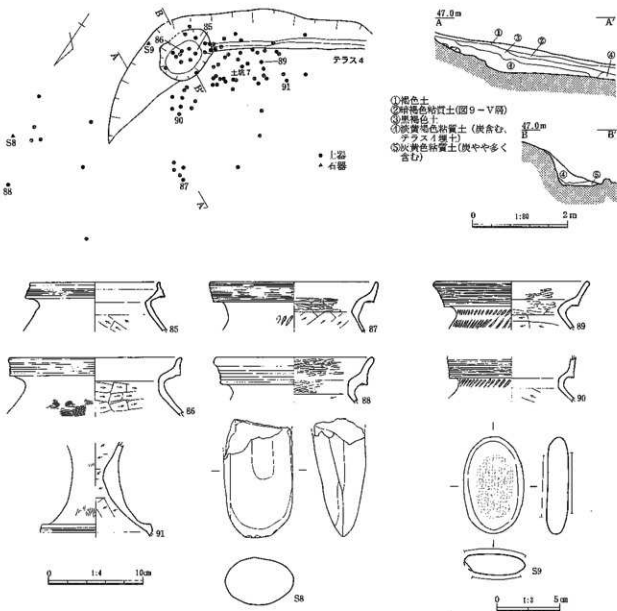


図34 テラス4および出土遺物

## その他の層出土遺物 (図37)

X I層以外では尾根2区X II層などから、わずかに当該期の遺物が出土している。117は壺で口縁部にボタン状のものを貼り付ける。118も壺。口縁外面はタテ方向のハケメか。119は高坏脚部で、竪穴住居跡7南側斜面から出土した。(中森)

## 尾根1区先端部の竪穴住居跡群

尾根1区先端部において、近接した竪穴住居跡3棟を検出した。また竪穴住居跡10の下段にはテラス8があり、これが竪穴住居跡8の掘り込み面と同一面になる。竪穴住居跡9は古市14号墳周溝に切れられ、さらに中世後期の削平を受ける。竪穴住居跡8および10からはまとまって土器が出土し、それらからVI-1様式に位置付けられよう。(中森)

## 竪穴住居跡8 (図38・39、図版22-1・24)

尾根1区の先端部に位置する。西側は削平されているが、径6.0mを測る隅丸方形を呈すると考えられる。深さは東側で約0.4mを測る。床面に貼床はなかったが、被熱硬化面を4ヶ所確認した。またそのうちの3ヶ所に囲まれるように完形に近い甕(120)があった。土器(121~125)のほか磨石(S11)、砥石(S12)も出土している。(中森)

## 竪穴住居跡9 (図39、図版22-3・24)

中世後期のI層除去後検出した。14号墳周溝に切れられ、さらに中世後期段階の削平を受ける。残存している径は約5.0mで隅丸方形を呈する。床面に被熱硬化面および中央ピット(P1)南側に炭化材の拡がりを検出した。遺物は少なく、甕(126~130)、器台(131)があった。(中森)

## 竪穴住居跡10 (図40・41、図版22-2・24・25)

西側半分を大きく中世後期段階で削平されているが、径3.8mほどの隅丸方形であったと考えられる。深さは約0.5mで遺物が多量に出土した。これらはやや浮いた状態で検出したものが多く、またP1埋土上層にも分布することから、住居放棄後柱がない段階で堆積した土器であることは明らかである。土器は破片が多く、大きな個体に復元しうるものはなかった。156は不明土製品であるが、数ヶ所を穿孔する。S13は砥石で端部に赤色顔料がつく。(中森)

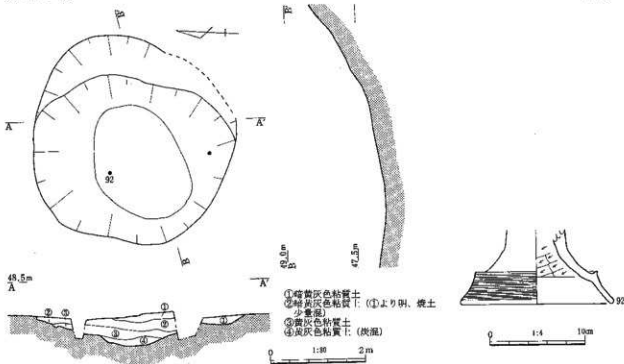


図35 土坑8および出土遺物

テラス8 (図40・41、図版24-1)

竪穴住居跡10の西側一段下であり、層位的にそれよりも古い段階のものである。南北の長さは9.6mにわたって斜面をカットしている。遺物は少なく壺(157～159)が出土した。(中森)

(注)

1. 被熱の影響が著しく、硬化した焼土塊を「被熱粘土塊」と呼称する。
2. 注1に同じ。
3. 大阪府亀川遺跡では亀甲(カゴメ)状の編物と想定される炭化物が検出されており、土壁の内装材と考えられている(〔財〕大阪府文化財調査研究センター 2000『亀川遺跡の発掘調査』〔財〕大阪府文化財調査研究センター)。竪穴住居跡7より出土した網代状の炭化材(W2)と類似する。
4. 遺構内から出土した種実(名古屋大学文学部渡辺 誠教授に同定していただいた)。
5. 遠藤勝壽先生に砂岩と鑑定していただいたが、風化または被熱による影響が著しく外見上安山岩の可能性もあると考えている。

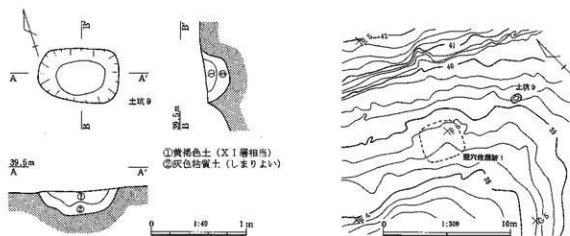


図36 土坑9

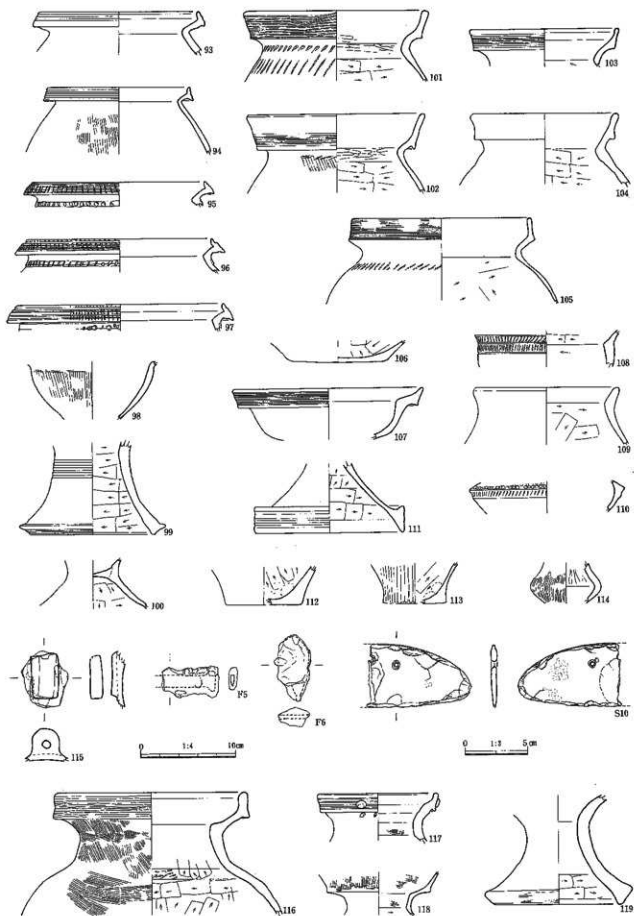


図37 X I層およびその他の層出土遺物

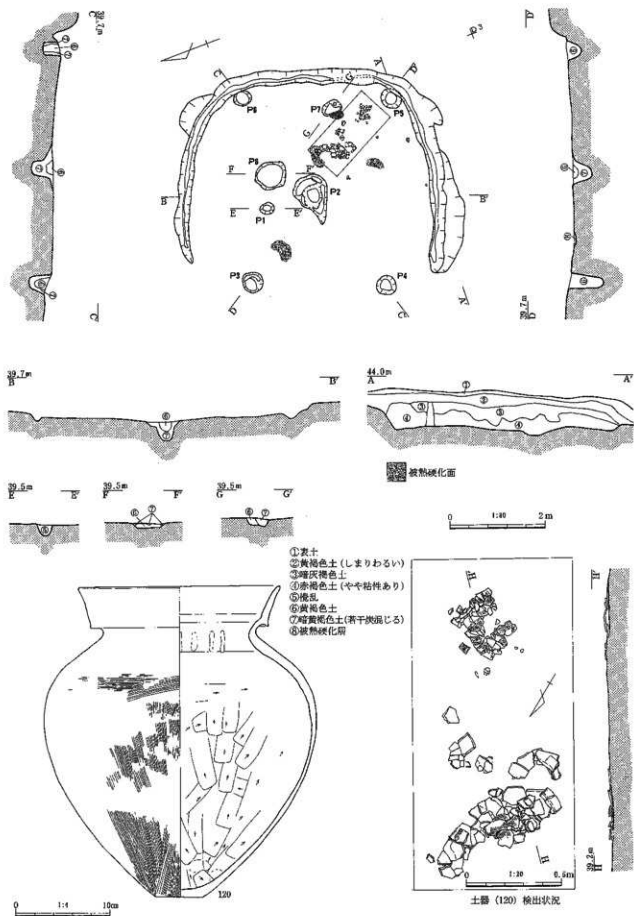
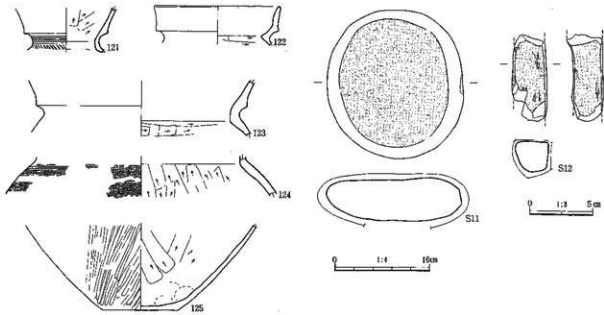


図38 竪穴住居跡8および出土遺物(1)



竪穴住居跡8出土遺物(2)

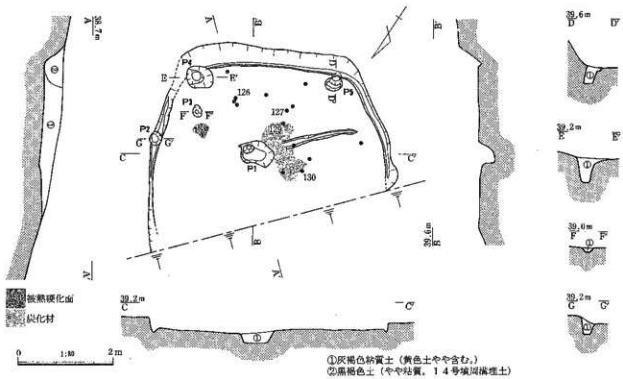
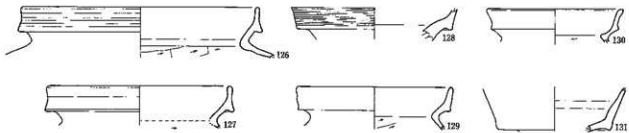


図39 竪穴住居跡9および出土遺物



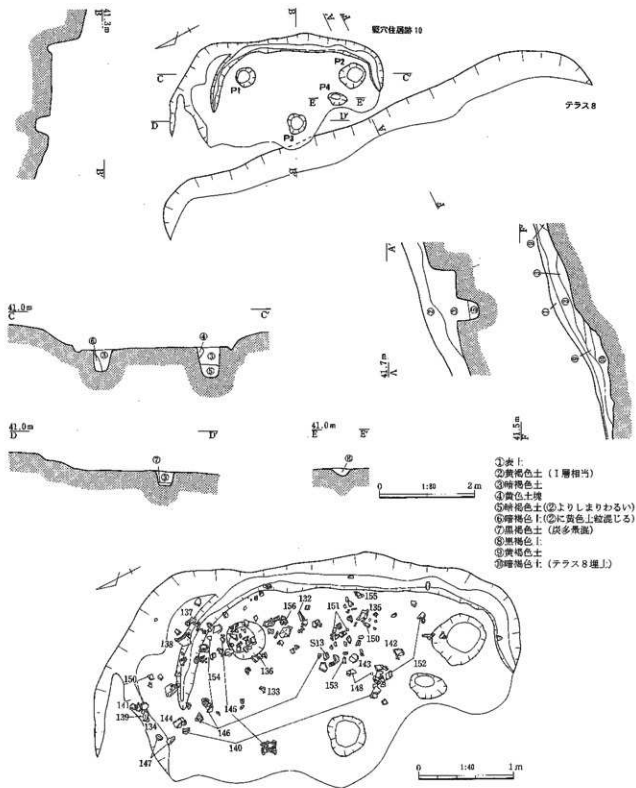


図40 整穴住居跡10

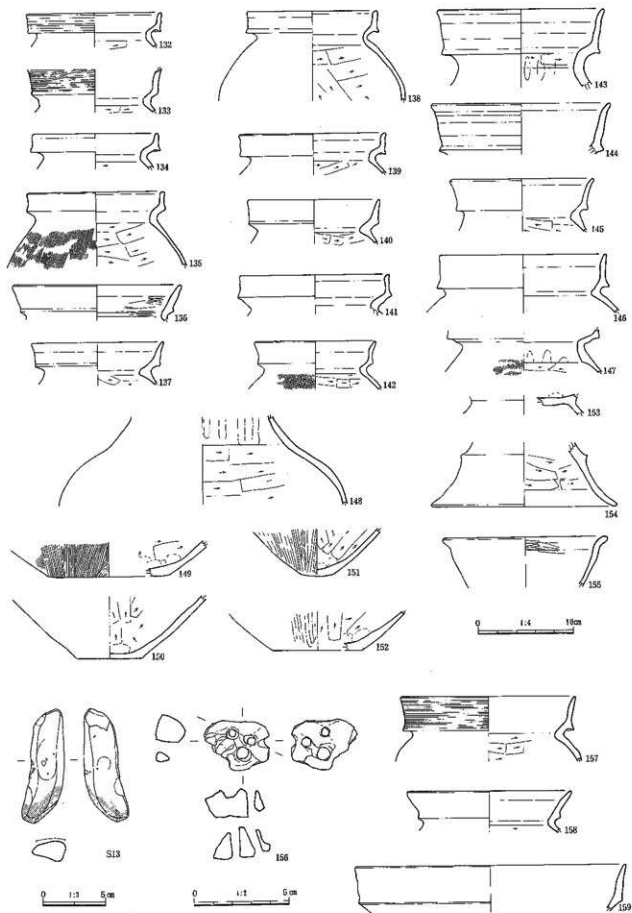


図41 竪穴住居跡10出土遺物



表2 弥生時代ピット一覧

No	地区	長さ (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	埋土	備考	No	地区	長さ (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	埋土	備考
206	E6	26	-	22	X I		297	H9	36	36	11	X II	
207	E5	35	31	56	X I		298	H9	40	24	25	X II	
237	F4	34	-	9	X I		299	F5	45	45	3	X I	黒褐色土少泥 被熱遺構群下
238	G4	40	27	20	X I	灰黒、石	307	H9	82	45	20	X II	
239	F3	37	30	13	X I		309	F5	44	40	22	X I	灰泥 被熱遺構群下
240	F3	22	24	23	X I		310	I10	22	20	18	X IV	埴土集中域中央レンチ中
241	F3	21	19	10	X I		テラスP1	35	33	19	X IV		
242	F3	22	20	31	X I		テラスP2	26	25	10	X IV	外縁部は黒褐色土	
243	G5	36	30	29	X I	炭塵	テラスP1	27	25	15	X IV		
244	G5	25	22	18	X I		テラスP2	25	25	22	X IV		
263	F5	19	16	4	X I	埴土少泥	テラスP3	20	20	19	X IV		
264	E3	37	35	13	X I	しまりない	テラスP4	45	24	9	X IV		
265	F3	29	19	27	X I	黄褐色土泥	テラスP6	28	25	30	X IV		
267	F3	30	27	14	X I		テラスP7	37	33	50	X IV		
264	F4	36	35	33	X I	暗褐色土とX I増当土	テラスP	36	32	21	X IV		
265	F4	27	25	31	X I	暗褐色土 炭、埴土少泥	テラスP	29	27	10	X IV		
266	E6	45	43	10	X I		テラスP	45	37	27	X IV		
291	E5	46	40	18	X I		テラスP	28	21	19	X IV		
292						次壁	テラスP1	34	25	28	X IV	煮倉心	
293	F5	59	53	29	X I	しまりよい、黄褐色土泥	テラスP2	28	23	24	X IV		
294	F6	24	19	13	IV		テラスP3	20	14	8	X IV		
295	H9	33	25	19	X II								
296	H9	26	23	24	X II								

表3 第4章 遺物観察表

遺物 番号	排 順	地区遺構	種類	器種	口径	器高	特徴	胎土 構成	色調	備考
1	13	壁内住居層 ①	弥生土器	壺	*42.2	42.0	長頸で頸部があまりすぼまらないもの。口縁部は3条の凹線後刻み。頸部凹線下には波状文帯、縦書文等。口縁ナデ。以下外黒、内面ケズリ。底部はヘラミガキ。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	胎土分析 資料110
2	15	土坑6	弥生土器	壺	*17.4	△7.7	全体に磨滅。口縁ナデ、頸部ナデハケ。内面は不明。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	
3	15	土坑6	弥生土器	壺	*21.6	△4.9	口縁部刻み、その下に口縁ナデ。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	
4	15	土坑6	弥生土器	壺	—	△12.5	頸部4条凹線、内外面ハケメ。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	
5	16	テラス1 ②腐	弥生土器	壺	*12.4	△9.8	口縁ナデ、頸部ハケメ。二次焼成による赤変、黒斑あり。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	胎土分析 資料93
6	16	テラス1 ②腐	弥生土器	壺	*11.6	△9.9	口縁ナデ、内面ハケメ後上位ナデ。外黒ハケメ。外面に黒斑。頸部中位は二次焼成による赤変、劣化、スス付着。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	胎土分析 資料89
7	16	テラス1 ②腐	弥生土器	壺	*13.8	△7.5	口縁ナデ、頸部下ハケメ。	やや粗 やや軟	暗黄褐色	
8	16	テラス1 ②腐	弥生土器	壺	*17.6	△5.8	口縁内面ナデ、外面ハケメ。口縁下黒炭斑。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	胎土分析 資料92
9	16	テラス1 ②腐	弥生土器	壺	*16.6	△5.4	口縁ナデ、頸部内外ハケメ。口縁下埋土。頸部にスス付着。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	胎土分析 資料90
10	16	テラス1 ②腐	弥生土器	底部	—	△4.8	外面ヘラミガキ、内面ケズリ。底面二次焼成による赤変。9と同一器種。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	
11	16	テラス1 ①腐	弥生土器	底部	—	△3.6	外面ナデ?内面ケズリ。凹線を呈する。底面赤変。外面にスス付着。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	
12	16	テラス1 ①腐	弥生土器	壺	*16.6	△6.7	内面口頸部ミガキ、以下ケズリ。外面ナデ。口縁凹線は上半ナデ消しか。頸部に連続刻突。外黒スス付着。	やや粗 やや軟	暗褐色	胎土分析 資料104
13	16	テラス1 ①腐	弥生土器	壺	*12.2	△5.9	口縁ナデ、内面頸部下までナデ以下ケズリ。外黒頸部付近ミガキ。内外面赤変。口縁外面に黒斑、頸部にスス。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	胎土分析 資料91
14	16	テラス1 ①腐	弥生土器	高坏	—	△4.5	内面ケズリ。内外赤彩か?	粗 やや軟	赤褐色	
15	16	テラス1 ①腐	弥生土器	壺	*19.4	△8.3	口縁ナデ、内面頸部以下ケズリ。外面ナデ。口縁外面にスス付着。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	
16	16	テラス1 ①腐	弥生土器	壺	*16.8	△7.1	口縁ナデ、頸部内面ミガキ。以下ケズリ。外面ナデ。外面にスス付着。	やや粗 やや軟	淡褐色	
17	16	テラス1 ①腐	弥生土器	壺	*14.6	△3.2	口縁ナデ、内面頸部以下ケズリ。口縁外面スス付着。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	
18	16	テラス1 ①腐	弥生土器	壺	19.6	△28.3	口縁ナデ。内面頸部ミガキ。以下ケズリ。外面ナデ。口縁凹線上部を一部ナデ消す。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	胎土分析 資料94
19	17	F5 X I下層	弥生土器	壺	*12.6	△11.7	内外ハケメ。内面口縁~頸部中位ナデ。以下ケズリ。外面中位以下スス付着。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	
20	17	F3 X V層	弥生土器	壺	*15.0	△5.2	口縁ナデ、外面ハケメ。全体にやや磨滅。	やや粗 やや軟	淡黄灰色	
21	17	F3 X V層	弥生土器	壺	*22.0	△5.4	全体に磨滅。口縁ナデ、内外面ハケメ。	やや粗 やや軟	淡黄灰色	
22	17	F5 X V層	弥生土器	壺	—		全体に磨滅。ナデか。頸部に刻み突帯が透る。	やや粗 やや軟	黄褐色	
23	17	F6 X V層	弥生土器	壺	*31.0	△8.4	全体に磨滅。内外ハケメ。口縁大きく外反し。頸部は壁下。	やや粗 やや軟	黄褐色	胎土分析 資料82
24	17	F5 X I下層	弥生土器	壺	*17.2	△15.3	口縁ナデ。内外ハケメ。口縁部斜方刻み後4条の凹線。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	胎土分析 資料85

遺物番号	持取	地区遺構	種別	器種	口径	器高	特徴		胎土 構成	色調	備考
							口縁	器底			
25	17	F3 X V層	弥生土器	坏	≒20.6	△5.1	全体に磨滅。内外ナデか。外面黒斑。	やや粗 やや軟	黄褐色		
26	17	F5 X I下層	弥生土器	高坏	≒20.0	9.5	外面ヨコナデ後へラミガキ。脚部内面ケズリ。外面黒斑。	やや粗 やや軟	淡黄褐色		
27	17	F5 X I下層	弥生土器	高坏	≒19.0	△4.2	全体に磨滅し調整不明。口縁3条凹縁。口縁部は内側にやや変色。	やや粗 やや軟	淡赤褐色		
28	17	F3 X V層	弥生土器	高坏	—	△6.7	外面ナデ。内面ケズリ。外面に黒斑。透かしは4方向か。	やや粗 やや軟	灰色	胎土分析 資料83	
29	17	F5 X I下層	弥生土器	高坏	—	△16.5	外面ナデ。内面上部シボリ。下部ケズリ。	やや粗 やや軟	褐色	胎土分析 資料84	
30	17	F5 X I下層	弥生土器	分銅形土器	—	△13.5	内外赤彩。内外ハケ後ナデ。	やや粗 やや軟	暗褐色		
31	17	F5 X V層	弥生土器	底部	—	△5.2	外面へラミガキ。内面はケズリ。底部から外面にかけスス付着。	やや粗 やや軟	暗褐色		
32	17	F5 X I下層	弥生土器	底部	—	△6.5	外面へラミガキ。内面はケズリ。底部外面黒斑。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	胎土分析 資料103	
33	18	竪穴住居跡2	弥生土器	壺	—	△8.2	口縁ナデ。胴部ハケム。口縁端部欠損。34と同一個体。	やや粗 やや軟	淡黄褐色		
34	18	竪穴住居跡2	弥生土器	底部	—	△3.1	内外ナデか。やや丸底状を呈す。底面凹縁ナデ。黒斑が付く。	やや粗 やや軟	淡黄褐色		
35	18	竪穴住居跡2	弥生土器	壺	≒12.2	△1.4	全体に磨滅。口縁ナデ。口縁部は外方に垂下。	やや粗 やや軟	淡黄褐色		
36	18	竪穴住居跡2	弥生土器	壺	≒14.4	△3.5	外面ナデ。内面ナデ? 外面スス付着。	やや粗 やや軟	淡黄褐色		
37	18	竪穴住居跡2	弥生土器	坏	≒7.6	5.8	外面ナデと指オサエ。内面ケズリ。輪状高台が付き。接合部は爪型状の跡みが遺る。内面は窪む。	やや粗 やや軟	淡灰色		
38	18	竪穴住居跡2	弥生土器	壺	≒14.0	△5.1	口縁ナデ。内面頸部ミガキ。以下ケズリ。外面ナデ。	やや粗 やや軟	黄褐色		
39	18	竪穴住居跡2	弥生土器	壺	≒15.2	△3.9	口縁ナデ。内面頸部ミガキ。以下ケズリ。口縁幅広い6条の凹縁。	やや粗 やや軟	橙褐色		
40	18	竪穴住居跡2	弥生土器	壺	≒10.5	△7.3	口縁ナデ。外面ナデ。内面ケズリ。外置全体にスス付着。全体に磨滅。	やや粗 やや軟	淡黄褐色		
41	18	竪穴住居跡2	弥生土器	壺	≒16.8	△5.1	口縁ナデ。内面頸部ミガキ以下ケズリ。口縁凹縁の上部はナデ消され気味。外置スス付着。	やや粗 やや軟	淡黄褐色		
42	18	竪穴住居跡2	弥生土器	壺	≒15.0	△4.7	口縁ナデ。内面頸部ミガキ。以下ケズリ。外面にスス。口縁下部部はやや変色。	やや粗 やや軟	淡黄褐色		
43	18	竪穴住居跡2	弥生土器	壺	≒16.2	△4.4	口縁ナデ。内面ケズリ。口縁下部部にスス付着。	やや粗 やや軟	淡黄褐色		
44	18	竪穴住居跡2	弥生土器	底部	—	△3.6	外面ハケム。内面ケズリ。外面黒斑。	やや粗 やや軟	淡黄褐色		
45	18	竪穴住居跡2	弥生土器	底部	—	△4.6	外面ハケム。内面ケズリ。外面スス付着。	やや粗 やや軟	暗赤褐色		
46	18	竪穴住居跡2	弥生土器	底部	—	△4.3	外面ナデ。内面ケズリ。底面に黒斑。	やや粗 やや軟	淡黄褐色		
47	18	竪穴住居跡3	弥生土器	高坏	—	△4.2	外面ナデ。内面ケズリ。脚部窪凹縁をナデ消し。外面黒斑。	やや粗 やや軟	淡黄褐色		
48	19	竪穴住居跡3	弥生土器	壺	≒12.2	△9.8	口縁ナデ。内面ケズリ。外置はヨコナデか。外面全体にスス付着。	やや粗 やや軟	黄褐色		
49	19	竪穴住居跡3	弥生土器	底部	—	△4.3	外面ハケムは意圖まで及ぶ。内面ケズリ。	やや粗 やや軟	赤褐色		
50	21	竪穴住居跡4	弥生土器	壺	≒14.4	△11.9	全体磨滅。口縁ナデ。内面ケズリ。口縁凹縁ナデ消し。外面にスス付着。	やや粗 やや軟	淡褐色		
51	21	竪穴住居跡4	弥生土器	壺	≒14.4	△4.8	外面ナデ。内面ケズリ。口縁は凹縁をナデ消し。口縁下部にスス付着。	やや粗 やや軟	赤褐色		
52	21	竪穴住居跡4	弥生土器	壺	≒14.8	≒21.0	外面ナデ。内面ケズリ。胴部中位欠損。外面は全体的にスス付着。口縁の凹縁は上半ナデ消され気味。	やや粗 やや軟	暗黄褐色		
53	21	竪穴住居跡4	弥生土器	壺	≒15.2	△4.8	外面ナデ。内面頸部以下ケズリか。外面にスス付着。	やや粗 やや軟	淡黄褐色		
54	21	竪穴住居跡4	弥生土器	壺	≒17.0	△5.2	外面ナデ。内面ケズリ。口縁の凹縁はナデ消されず。外面黒斑。	やや粗 やや軟	黄褐色		
55	21	竪穴住居跡4	弥生土器	壺	≒17.9	△6.3	全体に磨滅し調整不明。内面ケズリ。口縁凹縁上半はナデ消し。	やや粗 やや軟	暗褐色		
56	21	竪穴住居跡4	弥生土器	壺	≒19.2	△4.4	全体磨滅し調整不明。内面ケズリ。口縁凹縁。上半ナデ消し。57と同一個体。	やや粗 やや軟	黄褐色		
57	21	竪穴住居跡4	弥生土器	底部	—	△2.1	全体磨滅し調整不明。外面黒斑?	やや粗 やや軟	黄褐色		
58	21	竪穴住居跡4	弥生土器	底部	—	△3.1	全体に磨滅。二次焼成により部分的に赤変。外面上部にスス付着。	やや粗 やや軟	黄褐色		
59	21	竪穴住居跡4	弥生土器	土玉	3.9	4.0	ナデ。部分的に指オサエ痕僅かに残る。	やや粗 やや軟	暗灰褐色		
60	21	竪穴住居跡4	弥生土器	低脚坏	—	△4.1	全体に磨滅し調整不明。内外ナデか。	やや粗 やや軟	黄褐色		
61	21	竪穴住居跡4	弥生土器	唇台	—	△10.6	全体に磨滅し調整不明。	やや粗 やや軟	淡黄褐色		
62	21	竪穴住居跡4	弥生土器	高坏	—	△6.1	全体に磨滅。外面ナデ。内面ケズリか。外面に黒斑。	やや粗 やや軟	暗黄褐色		
63	22	竪穴住居跡5	弥生土器	壺	≒16.8	△8.9	磨滅し調整不明。頸部内面に指痕付着。	粗 やや軟	淡褐色		
69	28	竪穴住居跡6	弥生土器	壺	15.8	≒22.3	口縁ヨコナデ。胴部内面ケズリ。外面はハケムか。口縁外面の粗おびぎとの胴部下部にスス付着。黒斑。	やや粗 やや軟	黄褐色	胎土分析 資料96	

遺物番号	採取地区	遺構	種別	器種	口径	器高	特徴	胎土構成	色調	備考
70	26	竪穴住居跡6	赤生土器	甕	10.6	*22.9	口縁内外ナデ。胴部外面ハケム。内面ケズリ。底部外面黒染。全体的に磨滅。変化。	やや粗 やや軟	黄褐色	胎土分析資料85
71	26	竪穴住居跡6	赤生土器	甕	—	△39.5	全体二次焼成によって劣化。口縁ナデか。胴部外面ハケ。内面ケズリ。	やや粗 やや軟	赤褐色	胎土分析資料87
72	29	竪穴住居跡6	赤生土器	鉢	17.8	△8.8	口縁内面ナデ。腹部以下ケズリ。全体的に磨滅。二次焼成受ける。底部欠損。内外赤影。胴部外面下半スス付着。	やや粗 やや軟	淡赤褐色	
73	29	竪穴住居跡6	赤生土器	底鉢	—	△3.9	全体にスス多量に付着。二次焼成。内面ケズリ。	やや粗 やや軟	赤褐色	
74	29	竪穴住居跡6	赤生土器	甕	—	△21.2	胴部外面はヘラミガキか。胴部外面ハケム。内面ケズリ。底部外面ナデ方向ヘラミガキ。外面にススが多く付着。	やや粗 やや軟	褐色	
75	29	竪穴住居跡6	赤生土器	甕	11.1	*25.0	口縁内外とも丁寧ナデナ。胴部上半ハケ後ナデか。内面ケズリ。外面および内面口縁～胴部赤影。	やや粗 やや軟	淡褐色	
76	31	テラス3	赤生土器	甕	*15.3	△5.9	口縁～胴部ナデ。内面以下ケズリ。外面はタテハケ。口縁外面無文。スス付着。	粗 やや軟	褐色	
77	31	テラス3	赤生土器	高坏	—	△5.0	全体磨滅し調整不明。外面はナデか。	粗 やや軟	褐色	
78	31	テラス3	赤生土器	鉢	18.2	5.7	全体磨滅し調整不明。外面には胴部以下、および底面半分に黒染。	やや粗 やや軟	淡褐色	
79	31	テラス2	赤生土器	甕	*13.8	△7.8	全体磨滅し調整不明。	やや粗 やや軟	褐色	
80	33	テラス5	赤生土器	甕	*18.2	△5.0	内外ナデ。内面胴部以下ケズリ。外面全体にスス付着。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	
81	33	テラス5	赤生土器	甕	17.4	△8.7	口縁ナデ。胴部内面ヨコハケ後ナデか。外面タテハケ。全体に磨滅。	やや粗 やや軟	黄褐色	胎土分析資料109
82	33	テラス5	赤生土器	甕	*14.2	△7.6	全体磨滅で調整不明。内面胴部以下ケズリ。口縁下部部にスス付着。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	
83	33	テラス5	赤生土器	甕	—	△8.2	全体磨滅で調整不明。内面胴部以下ケズリ。口縁下部部～胴部にかけスス付着。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	胎土分析資料105
84	33	テラス7	赤生土器	甕	*16.2	△7.9	口～胴部ナデ。胴部外面ハケ。内面ケズリ。	やや粗 やや軟	褐色	
85	34	テラス4	赤生土器	甕	*13.6	△5.3	口縁ナデ。内面胴部以下ケズリ。口縁部凹縁をナデ消し。外、外面にべつりスス付着。	やや粗 やや軟	褐色	
86	34	テラス4	赤生土器	甕	*10.0	△6.2	口縁ナデ。内面胴部以下ケズリ。口縁部凹縁をナデ消し。胎土やや軟質。	やや粗 やや軟	褐色	胎土分析資料107
87	34	テラス4	赤生土器	甕	*17.6	△5.3	口縁ナデ。内面胴部ミガキ。以下ケズリ。口縁部凹縁をナデ消し。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	胎土分析資料106
88	34	テラス4	赤生土器	甕	*16.5	△4.8	口縁部凹縁をナデ消し。内面は粗いミガキ。胴部以下内面ケズリ。外、胴部にスス。	やや粗 やや軟	黄褐色	
89	34	テラス4	赤生土器	甕	*16.2	△5.1	口縁ナデ。内面胴部ミガキ。以下ケズリ。外面ナデ。口縁～胴部にスス付着。	やや粗 やや軟	褐色	
90	34	テラス4	赤生土器	甕	—	△4.9	口縁ナデ。内面胴部以下ケズリ。口縁部欠損。外面にスス。	粗 やや軟	黄褐色	
91	34	テラス4	赤生土器	高坏	—	△10.0	外面胴部ハケ。器端部ナデ。内面ケズリ。	粗 やや軟	褐色	
92	35	土坑8	赤生土器	高坏	—	△7.9	外面ナデ。内面ケズリ。	やや粗 やや軟	褐色	
93	37	F4 X I層	赤生土器	甕	*16.6	△4.6	内外ナデ。	やや粗 やや軟	淡灰褐色	
94	37	F4 X I層	赤生土器	甕	*15.0	△7.1	口縁ナデ。胴部外面ハケ。内面胴部ナデ。以下ハケ後ナデか。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	
95	37	F4 X I層	赤生土器	甕	*18.2	△2.6	全体に磨滅。口縁ナデ。口縁部には3条の凹縁後刻み。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	
96	37	F4 X I層	赤生土器	甕	*19.8	△3.5	口縁ナデ。口縁部には3条の凹縁後刻み。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	
97	37	F4 X I層	赤生土器	甕	*21.8	△2.8	内外ナデ。口縁部のみ後4条の凹縁。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	
98	37	F4 X I層	赤生土器	高坏	—	△6.0	外面ハケ。内面ナデ。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	
99	37	F4 X I層	赤生土器	高坏	—	△9.8	外面ナデ。内面ケズリ。胴部に2条凹縁。	やや粗 やや軟	灰色	胎土分析資料86
100	37	F4 X I層	赤生土器	甕?	—	△5.1	内面ケズリ。外面不明。全体磨滅。	やや粗 やや軟	黄灰色	
101	37	F4 X I層	赤生土器	甕	*18.6	△7.4	口縁ナデ。内面胴部ミガキ。以下ケズリ。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	
102	37	F4 X I層	赤生土器	甕	*18.4	△8.3	口縁ナデ。胴部内面ケズリ。外面ナデ。口縁部凹縁上半ナデ消し。	やや粗 やや軟	淡褐色	胎土分析資料87
103	37	F4 X I層	赤生土器	甕	*15.4	△4.0	全体に磨滅。口縁ナデ。胴部内面ケズリ。外面ナデ。	粗 やや軟	淡褐色	
104	37	F4 X I層	赤生土器	甕	*15.0	△7.5	口縁ナデ。胴部内面ケズリ。外面ナデ。口縁部無文。胴部以下にスス付着。磨滅深い。	やや粗 やや軟	淡褐色	
105	37	F4 X I層	赤生土器	甕	18.6	△9.1	全体磨滅し調整不明。内面ケズリ。口縁部凹縁上半ナデ消し。外面にスス付着。106と同一体。	やや粗 やや軟	黄褐色	胎土分析資料88
106	37	F4 X I層	赤生土器	底鉢	—	△2.3	内面ケズリ。	やや粗 やや軟	黄褐色	
107	37	F3 X I層	赤生土器	高坏	*20.0	△5.5	全体磨滅。全体にナデ。	やや粗 やや軟	淡褐色	
108	37	G5 X I層	赤生土器	坏?	—	△3.8	内面ケズリ。外面ナデ。器曲部に上下2段の沈線に区画された貝殻遺構付着。	やや粗 やや軟	淡褐色	
109	37	F4 X I層	赤生土器	甕	*15.0	△6.1	口縁ナデ。胴部内面ケズリ。外面ナデ。	粗 やや軟	黄褐色	

遺物 番号	採 掘 図	地区名稱	種別	器種	口径	器高	特徴	胎土 構成	色調	備考
110	37	F4 X I層	弥生土器	壺	—	△16.4	全体磨滅で観形不明。胴部中に突起が2条走り、その中に爪形連続文。安等上側に円文が連続。	やや粗 やや軟	淡褐色	
111	37	E6 X I層	弥生土器	高坏	—	△7.3	外面ナデ、内面ケズリ。胴部に4条凹線、上半部ナデ消し。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	
112	37	F4 X I層	弥生土器	底部	—	△4.1	全体に磨滅。外面へらミガキ?内面ケズリ。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	
113	37	E5 X I層	弥生土器	底部	—	△4.3	外面へらミガキ。内面ケズリ。外面黒灰。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	
114	37	E5 X I層	弥生土器	小型壺	—	△4.3	外面ハケメ、内面シボリ。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	
115	37	F4 X I層	弥生土器	把手	—	△6.0	外面ナデ、内面ケズリ。	粗 やや軟	淡褐色	
116	37	F5 X I層	弥生土器	壺	+20.0	△13.0	口縁ナデ。胴部外面ハケメ、内面ケズリ。	やや粗 やや軟	黄褐色	
117	37	D9	弥生土器	壺	+12.4	△5.0	口縁ナデ。内面頸部一部にハケメ。口縁部5本の凹線、内形浮文。	やや粗 やや軟	赤褐色	
118	37	C6	弥生土器	壺	—	△4.5	口縁タテハケ?内面口縁~頸部ナデ、以下ケズリ。	やや粗 やや軟	黄褐色	
119	37	F9 X II層	弥生土器	鉢台	—	△11.6	全体に磨滅し赤化。器壁厚い。外面ナデ。胴内面下部はケズリ。	やや粗 やや軟	赤褐色	
120	38	竪穴住居跡8	弥生土器	壺	+21.0	33.1	内外口縁~重部ナデ。外面頸部下にヨコハケ帯。中位以下タテハケ。内面は頸部に指環状ナデ、以下ケズリ。底縁は小さく僅かに平直。重部内面および外面胴部数大窪以下	粗 やや軟	淡褐色	胎土分析資料102
121	39	竪穴住居跡9	弥生土器	壺?	—	△4.6	外面ナデ、内面はケズリ。あるいは鉢台か。	やや粗 やや軟	橙褐色	
122	39	竪穴住居跡9	弥生土器	壺	+13.0	△4.1	口縁ナデ。内面頸部以下ケズリ。	やや粗 やや軟	淡橙褐色	
123	39	竪穴住居跡9	弥生土器	壺	—	△5.9	口縁ナデ。内面頸部以下ケズリ。口縁頸部欠損。	粗 やや軟	淡黄褐色	
124	39	竪穴住居跡8	弥生土器	壺	—	△4.1	外面ハケメ。内面ケズリ。	やや粗 やや軟	淡橙褐色	
125	39	竪穴住居跡8	弥生土器	底部	—	△8.1	外面へらミガキ。内面ケズリ。	やや粗 やや軟	淡橙褐色	
126	39	竪穴住居跡9	弥生土器	壺	+24.8	△5.3	口縁ナデ。外面凹線はナデ消し。内面頸部以下ケズリ。	やや粗 やや軟	橙褐色	
127	39	竪穴住居跡9	弥生土器	壺	+19.0	△4.4	口縁ナデ。内面頸部以下ケズリ。口縁端部はやや配厚する。	やや粗 やや軟	淡褐色	
128	39	竪穴住居跡9	弥生土器	壺	—	△3.3	口縁ナデ。頸部欠損。外面に凹線。	やや粗 やや軟	淡褐色	
129	39	竪穴住居跡9	弥生土器	壺	+16.2	△4.5	口縁ナデ。内面頸部以下ケズリ。口縁外面にス付着。	粗 やや軟	淡褐色	
130	39	竪穴住居跡9	弥生土器	壺	+14.0	△3.4	口縁ナデ。内面頸部以下ケズリ。口縁外面にス付着。	やや粗 やや軟	褐色	
131	39	竪穴住居跡9	弥生土器	高坏	—	△4.5	全体に磨滅。口縁ナデ。	粗 やや軟	淡黄色	
132	41	竪穴住居跡10	弥生土器	壺	+14.2	△3.6	口縁ナデ、内面ケズリ。口縁部凹線をナデ消し。	やや粗 やや軟	橙褐色	
133	41	竪穴住居跡10	弥生土器	壺	—	△4.6	全体磨滅。内面ケズリ。外面ス付着。	やや粗 やや軟	淡褐色	
134	41	竪穴住居跡10	弥生土器	壺	+13.0	△3.7	全体に磨滅。口縁ナデ。内面ケズリ。口縁部凹線をナデ消し。口縁下頸部にス付着。	やや粗 やや軟	黄褐色	
135	41	竪穴住居跡10	弥生土器	壺	+14.2	△7.8	口縁ナデ。内面頸部以下ケズリ。外面ナデ。外面に若干ス付着。	やや粗 やや軟	黄褐色	胎土分析資料101
136	41	竪穴住居跡10	弥生土器	壺	+17.8	△3.8	口縁ナデ。胴部はミガキか。外面黒灰。	やや粗 やや軟	橙褐色	
137	41	竪穴住居跡10	弥生土器	壺	+13.8	△4.5	口縁ナデ。内面ケズリ。口縁部凹線をナデ消し?口縁下頸部にス付着。	やや粗 やや軟	黄褐色	
138	41	竪穴住居跡10	弥生土器	壺	+13.4	△8.5	全体に磨滅。口縁ナデ。内面ケズリ。外面ナデ。	やや粗 やや軟	淡橙褐色	胎土分析資料99
139	41	竪穴住居跡10	弥生土器	壺	+15.2	△4.3	口縁ナデ。内面頸部以下ケズリ。口縁下頸部にス付着。	やや粗 やや軟	淡橙褐色	
140	41	竪穴住居跡10	弥生土器	壺	+13.8	△4.6	口縁ナデ。内面頸部以下ケズリ。外面ナデ。外面にス付着。	やや粗 やや軟	黄褐色	
141	41	竪穴住居跡10	弥生土器	壺	+15.8	△4.2	口縁ナデ。外面は無文。	やや粗 やや軟	橙褐色	
142	41	竪穴住居跡10	弥生土器	壺	+12.6	△5.2	口縁ナデ。外面ハケメ。内面ケズリ。	やや粗 やや軟	淡橙褐色	胎土分析資料98
143	41	竪穴住居跡10	弥生土器	壺	+17.4	△8.3	口縁ナデ。頸部内面シボリ。	やや粗 良好	橙褐色	
144	41	竪穴住居跡10	弥生土器	壺	+18.6	△5.4	内外面ナデ。	やや粗 やや軟	橙褐色	
145	41	竪穴住居跡10	弥生土器	壺	+14.9	△5.6	全体に磨滅。口縁ナデ。内面ケズリ。	やや粗 やや軟	黄褐色	
146	41	竪穴住居跡10	弥生土器	壺	+17.6	△6.2	口縁ナデ。内面頸部以下ケズリ。	やや粗 やや軟	橙褐色	
147	41	竪穴住居跡10	弥生土器	壺	—	△4.6	外面ハケメ後ナデ。内面ケズリ。口縁ナデ。	やや粗 やや軟	赤褐色	
148	41	竪穴住居跡10	弥生土器	壺	—	△9.4	外面ナデか。胴部内面タテナデ。以下ケズリ。外面胴部中にス付着。全体に二次焼成により赤変。	やや粗 やや軟	黄褐色	

遺物番号	検出	地区遺構	種別	器種	口径	器高	特徴	胎土 焼成	色調	備考
149	41	竪穴住居跡10	弥生土器	底部	—	△3.7	内面ケズリ、外面ハケム。外面黒斑。底面は磨いたようにつるつる。	やや粗 やや軟	橙褐色	
150	41	竪穴住居跡10	弥生土器	底部	—	△6.7	全体磨滅。内面ケズリ。外面底部黒斑。	やや粗 やや軟	黄褐色	
151	41	竪穴住居跡10	弥生土器	底部	—	△5.1	内面ケズリ、外面ハケム。底径小さく、やや丸底を呈す。外面黒斑。	やや粗 やや軟	橙褐色	胎土分析資料100
152	41	竪穴住居跡10	弥生土器	底部	—	△4.1	外面ヘラミガキ。内面ケズリ。全体に二次焼成により赤染。	やや粗 やや軟	黄褐色	
153	41	竪穴住居跡10	弥生土器	高台弁	—	△1.6	高台内外ナデ。弁部内面ケズリ。外面ナデ。底面に黒斑。	やや粗 やや軟	黄褐色	
154	41	竪穴住居跡10	弥生土器	器台	—	△6.8	外面ナデ。内面磨滅部ナデ。柱状部ケズリ。外面に黒斑。	やや粗 やや軟	橙褐色	
155	41	竪穴住居跡10	弥生土器	鉢	*17.0	△5.3	内面ミガキ。外面にもあるか。外面スス付着し形状不明。赤染あるか。	やや粗 やや軟	淡橙褐色	
156	41	竪穴住居跡10	弥生土器	土製品	3.5	1.5	輪郭は不定形。4ヶ所穿孔され、うち3ヶ所は垂直、ひとつは斜方向。また途中でとまる穴もある。穴径は大小あり、5mm前後と、7mm前後に分けられる。	やや粗 やや軟	橙褐色	
157	41	テラス8	弥生土器	甕	*18.2	△6.9	口縁外面は凹線をナデ消し。内面ナデ。頸部以下内面ケズリ。外面ナデ。	やや粗 やや軟	黄褐色	
158	41	テラス8	弥生土器	甕	*17.2	△4.5	口縁ナデ。内面頸部以下ケズリ。	やや粗 やや軟	黄褐色	
159	41	テラス8	弥生土器	甕	*28.5	△4.8	口縁ナデ。	やや粗 やや軟	橙褐色	

表4 第4章 被熱粘土塊観察表

遺物番号	検出	地区遺構	特徴	焼成	胎土	色調	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
64	25	15	左右両端部を欠損している。他の面は平坦面あるいは草本類(カヤ?)の圧痕を残す。圧痕は幾重層とも同方向に表面を面をなし草本類(カヤ?)の圧痕を数条残す。	良	密	橙褐色・淡橙褐色	△4.52	△4.53	3.87	△96	
65	25	14	両面に草本類(カヤ?)の圧痕が残る。表面は同方向に圧痕が密集するが、裏面は不整方向に圧痕が残る。表裏面に草本類(カヤ?)の圧痕が残る。圧痕は表面では不鮮明であるが、裏面は他の痕跡と比較して太く不整方向に伸びる。	良	粗	橙褐色・淡橙褐色	△7.16	△10.78	△4.38	△300	
66	25	15	表面は平坦面をなし、まばらかつ不整方向に草本類(カヤ?)の圧痕を残す。表面は磨けらまっているが、裏面はあまりに多量に付着しているか、あるいは、裏面に草本類の圧痕が不整方向に伸びる。	良	密	橙褐色・淡橙褐色	△7.96	△10.48	4.32	△230	
67	25	14	表面は平坦面をなし、まばらかつ不整方向に草本類(カヤ?)の圧痕を残す。表面は磨けらまっているが、裏面はあまりに多量に付着しているか、あるいは、裏面に草本類の圧痕が不整方向に伸びる。	良	密	橙褐色・淡橙褐色	△11.5	△20.2	△6.74	△1560	
68	25	14	表面は平坦面をなし、まばらかつ不整方向に草本類(カヤ?)の圧痕を残す。表面は磨けらまっているが、裏面はあまりに多量に付着しているか、あるいは、裏面に草本類の圧痕が不整方向に伸びる。	良	表面は密・裏面は粗	橙褐色・淡橙褐色	△26.6	△36.0	△18.1	△10360	
738	14		表面は良・裏面は不良	良	粗	橙褐色	△10.61	△14.37	△7.71	△1020	
738	15		表面は面をなし草本類(カヤ?)の圧痕が同一方向に重なり、密集する。	良	粗	橙褐色	△11.06	△10.02	△6.67	△400	
740	15		草本類(カヤ?)、炭化種子が残存する。もうい。	不良	粗	淡赤褐色・淡茶褐色	△7.84	△5.84	△4.35	△138	

表5 第4章 弥生時代石器・石製品観察表

遺物番号	検出	図版	地区遺構	器種	石材	長さ・高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
S1	18	8	竪穴住居跡2	敲石	安山岩	8.55	4.18	1.58	63.5	
S2	19	—	竪穴住居跡3	石錘	無斑黒安山岩	2.57	△1.87	0.42	△2	扉縁部欠損
S3	21	8	竪穴住居跡4	石核	水島	3.16	3.34	2.89	31	
S4	30	15	竪穴住居跡4	刮片	砂岩	1.53	3.21	0.69	4	接合資料
S5	30	15	竪穴住居跡7	刮片	砂岩	4.65	2.73	0.89	10	接合資料
S6	30	15	竪穴住居跡7	石核	砂岩	6.01	9.6	3.71	210	接合資料
S7	30	15	竪穴住居跡7	石核	砂岩	10.68	10.31	4.93	750	接合資料
S8	34	8	テラス6	磨製石斧	安山岩	△9.1	△5.4	△3.8	△278	上部欠損
S9	34	8	テラス6	磨石	安山岩	7.58	4.74	1.69	94.5	
S10	37	27	F5-X1房	石包丁	白雲母片岩	△5.02	△8.34	△0.55	△36.4	左半部欠損
S11	39	8	竪穴住居跡8	磨石	細粒花崗岩	11.7	10.61	3.36	660	
S12	39	8	竪穴住居跡8	敲石	流紋岩	6.55	2.74	2.48	73.5	
S13	41	8	竪穴住居跡10	すり鉢	細粒花崗岩	9.19	2.89	1.74	53.5	片縁部に赤色顔料が付

遺物番号	押戻	図版	地区遺構	器種	石材	長さ・高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
S21	118	6	テラス21	磨製石斧	安山岩	△7.1	△5.35	△0.95	△170	上半部欠損
S46	—	6	竪穴住居跡4	河原石?	緑色片岩	7.65	4	3.25	170	
S47	—	6	竪穴住居跡19	砥石	安山岩	8.24	3.77	2.53	110	
S48	—	6	F5・X I層	砥石	流紋岩	4.6	2.6	△0.95	△20.8	下半部欠損

遺物番号	押戻	図版	地区遺構	器種	石材	長さ・高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
S49	—	26	G9	石鏃	黒曜石	△1.95	△0.77	0.41	△1.4	脚端部欠損
S50	—	26	F6・II層	石鏃	黒曜石	2.48	1.96	0.4	1.3	
S51	—	26	G6	石鏃	黒曜石	2.13	1.57	0.37	0.8	
S52	—	26	F5・X I層	石鏃	黒曜石	2.43	1.61	0.41	0.9	
S53	—	26	狭土権墓中 層崩切	石鏃	黒曜石	△2.24	△1.3	0.27	△0.5	脚端部欠損
S54	—	26	F4・IV層	石鏃	黒曜石	1.68	1.29	0.28	0.4	
S55	—	26	F4・IV層	石鏃	黒曜石	1.99	1.53	0.37	0.7	
S56	—	26	F3・X I層	石鏃	無珉晶安山岩	2.59	1.88	0.36	1.1	
S57	—	26	F4・X I層	石鏃	無珉晶安山岩	2.78	1.91	0.34	1.3	
S58	—	26	C6・15号墳 周溝	石鏃	無珉晶安山岩	△2.22	△1.44	0.41	△0.8	脚端部欠損
S59	—	26	F4・X I層	石鏃	無珉晶安山岩	△1.91	△1.19	0.29	△1.4	脚端部欠損
S60	—	26	G6	石鏃	無珉晶安山岩	2.25	1.54	0.52	1.7	
S61	—	26	F4・X V層	石鏃	無珉晶安山岩	2.3	2.01	0.4	1	
S62	—	26	F6・X I層	石鏃	無珉晶安山岩	2.16	1.34	0.28	0.8	
S63	—	26	F3・IV層	石鏃	無珉晶安山岩	1.25	1.38	0.36	0.9	
S64	—	26	F5	石鏃	無珉晶安山岩	△1.81	△1.32	0.29	△0.5	脚端部欠損
S65	—	26	F3・IV層	石鏃	無珉晶安山岩	△1.94	△1.45	0.31	△0.4	先端部欠損
S66	—	26	F4・X I層	石鏃	無珉晶安山岩	2.29	1.48	0.3	0.8	
S67	—	26	F4・X V層	石鏃	無珉晶安山岩	2.53	1.61	0.41	1.6	
S68	—	26	G5・X I層	石鏃	無珉晶安山岩	2.22	1.62	0.18	0.7	
S69	—	26	F5・IV層	石鏃	無珉晶安山岩	2.36	1.36	0.3	0.9	
S70	—	26	F5・II層	石鏃	無珉晶安山岩	△1.99	△1.89	0.28	△1.3	先端部欠損
S71	—	26	H9	未製品	青瑪瑙(碧玉)	△2.64	△1.5	1.53	△8.9	玉製作関連

遺物番号	押戻	図版	地区遺構	器種	石材	長さ・高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
S72	—	27	F3	磨製石斧	安山岩	△7.18	△6.01	△2.88	△180	刃部のみ
S73	—	27	表彰	磨製石斧	安山岩	△8.42	△4.56	△4.19	△245	刃部のみ
S74	—	27	G6・IV層	磨製石斧	閃緑岩	△12.38	△7.16	△5.24	△260	刃部欠損
S75	—	27	H・G7	磨製石斧	緑色片岩	△16.8	△5.39	△1.97	△760	欠損
S76	—	27	E6	打製石斧	黒色片岩	11.47	5.18	2.72	260	
S77	—	27	E4	磨製石斧	閃緑岩	△11.78	△4.75	△1.93	△120	欠損
S78	—	27	F6・X I層	砥石?	花崗斑岩	△6.46	△5.07	△4.06	△230	欠損
S79	—	27	F5・X I層	砥石	細粒花崗岩	△5.43	△3.48	△2.42	△64	欠損
S80	—	27	F4・X I層	砥石	細粒花崗岩	△9.26	△2.98	△2.85	△104	端部欠損
S81	—	27	F3・X I層	砥石	頁岩	△5.75	△2.92	△0.99	△21.4	欠損

## 第5章 古墳時代の調査

### 第1節 概要 (図42)

東方向にのびる標高39～63mの緩やかな斜面である尾根1区に10基の古墳が展開する。

調査前の状況は小さな平坦面が連続していたが、これらは米子市教育委員会による分布調査に基づく『米子市埋蔵文化財地図』においては曲輪としてあった<sup>(註1)</sup>。また事前の試掘調査においても古墳であると認識されており、本調査によって新発見の古墳群となった。すでに周辺では古市古墳群として13基の古墳が確認されており、今回14号墳より新たに番号を付けた。

いずれの古墳も地山削り出しをした上で、わずかな盛土をするものであった。全掘りえたのが16・21～23号墳のみで他の6基は調査地外へと続いているため、その規模や墳丘形状など不明瞭な部分が多い。また尾根先端部に位置する14～17号墳は中世以降の削平、擾乱を受け埋葬施設がないが、石材が抜き取られていた。各古墳とも斜面上方のみを削り周溝を掘っており、「コ」ないしは逆C字状を呈している。このことから墳丘形状は円墳と方墳があると判断した。

埋葬施設には箱式石棺を用いるものと木棺と考えられるものと2種類がある。それぞれの向きは尾根に直交するものと並行するものがあり、前者は3基(19・20号墳)、後者は9基ある。時期を判定できる資料が少ないが、切り合い関係などから、概ね前者が古く、後者が新しい。

副葬品など出土した遺物は少ない。15・16号墳では周溝内からまとめて須恵器、土師器が出土したほか、20号墳埋葬施設2では土師器壺を枕に転用したものがある。この他各周溝内から弥生土器片がわずかに出土した。17号墳埋葬施設からはガラス製や碧玉、青瑪瑙製の玉があった。鉄製品は19号墳埋葬施設1から鏃、23号墳埋葬施設から剣がそれぞれ出土している。

これら遺物などから、本古墳群は前期中葉から中期に位置付けられると考えている。

(中森)

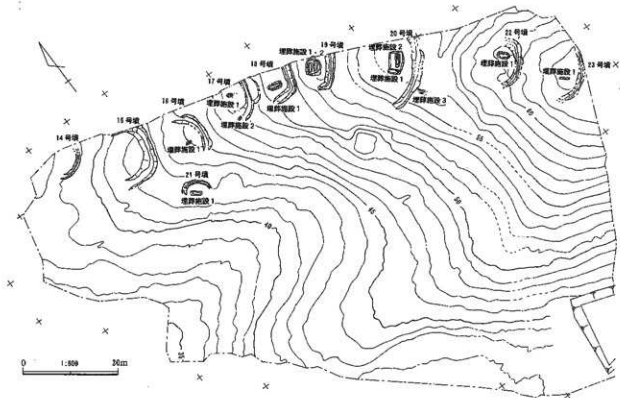


図42 古墳時代遺構分布

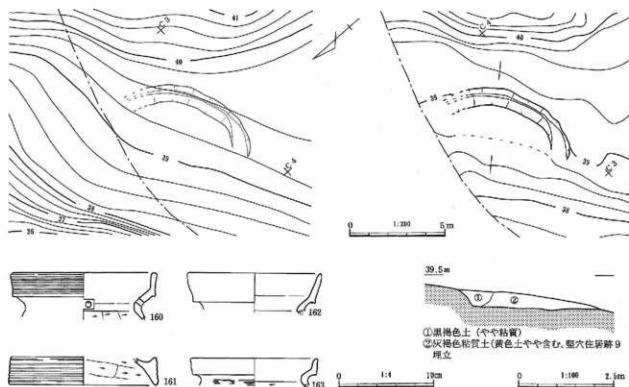


図43 古市14号墳および出土遺物

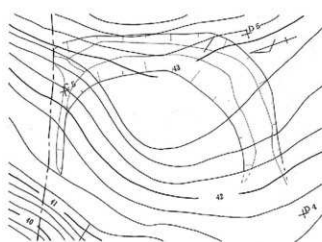
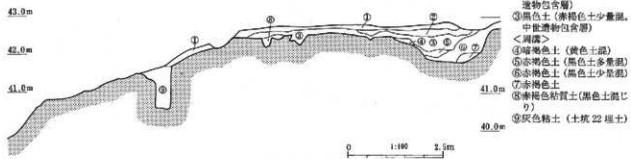


Fig. 3 古市15号墳周溝土層断面(南から)



- ① 流土
- ② 黒色土(暗褐色土混、中世遺物包含層)
- ③ 黒色土(赤褐色土少量混、中世遺物包含層)
- < 周溝 >
- ④ 暗褐色土(黄色土混)
- ⑤ 赤褐色土(黒色土少量混)
- ⑥ 赤褐色土(黒色土少量混)
- ⑦ 赤褐色土
- ⑧ 赤褐色粘質土(黒色土混じり)
- ⑨ 灰色粘土(土坑22埋土)

図44 古市15号墳調査前地形測量および土層断面



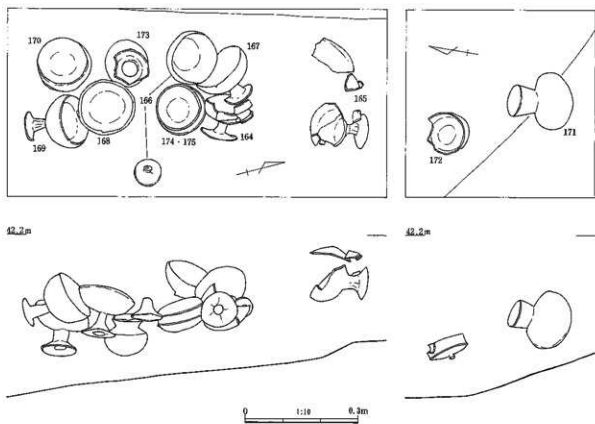
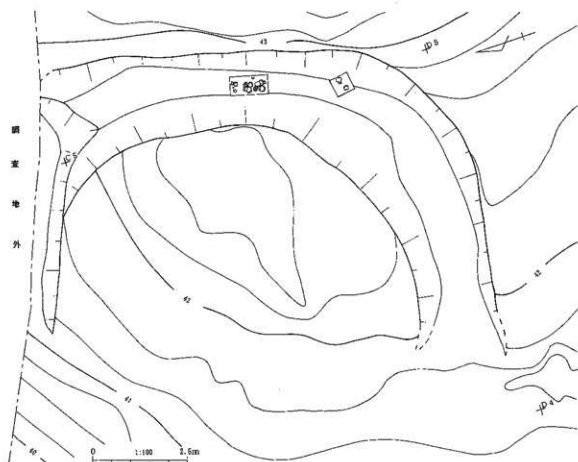


图 45 古市 15 号墳遺物出土状況

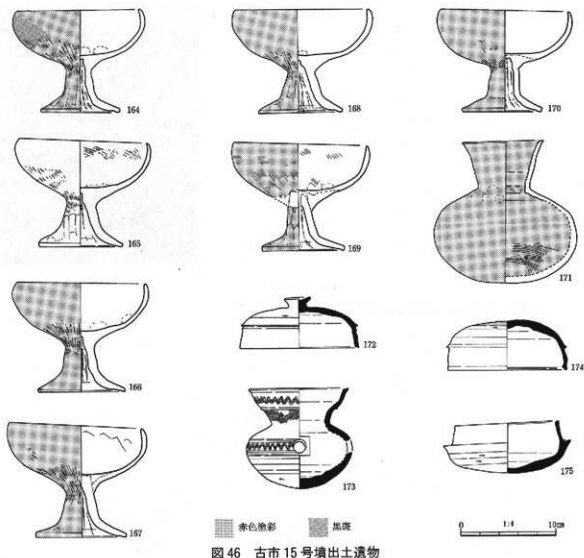


図 46 古市 15 号墳出土遺物

## 第 2 節 検出した遺構と遺物

### 古市 14 号墳 (図 43、図版 28)

本古墳群の中でもっとも低いところに位置する。弥生時代後期末の竪穴住居跡 9 を切り、中世後期のテラスにより切られる。そのため盛土、埋葬施設は確認できず、斜面上方側(南側)に掘られた周溝のみを検出した。周溝は幅が 0.9~1 m、深さ 0.4~0.5 m を測る。径約 8.0 m の円墳にならう。その埋土内から出土した遺物はいずれも弥生土器で、160・162・163 は甕、161 は高坏の脚部である。160 は口縁に擬凹線を施し、頸部を穿孔する。

周溝内の遺物はおそらく竪穴住居跡 9 に関連する遺物であり、本古墳の時期を示すものは出土していない。しかし後述の 15 号墳との位置関係などから古墳時代中期のものと考えられる。(中森)



Fig. 4 坏と脚の接続部分(167)

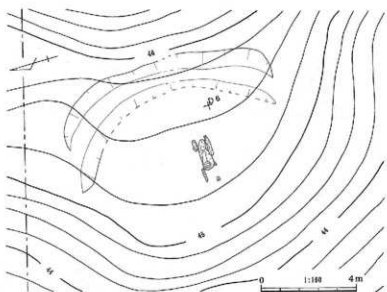
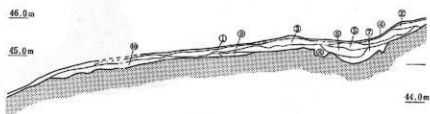
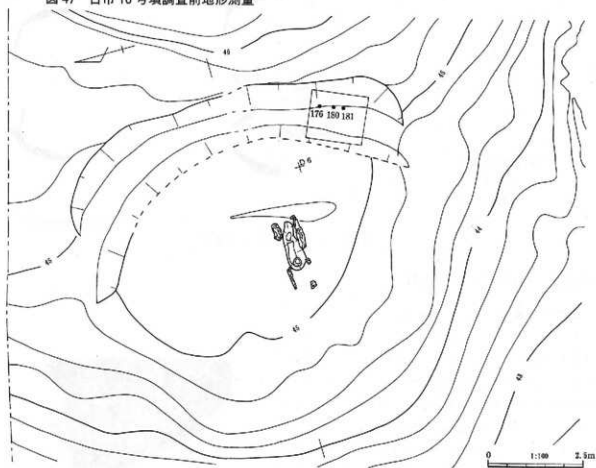


Fig. 5 埋葬施設1検出状況(東から)

図47 古市16号墳調査前地形測量



- ①表土
- ②黄褐色砂質土
- ③黄褐色砂質土(②層よりし  
まりよい)
- ④暗灰色砂質土
- ⑤暗灰色砂質土
- ⑥黒褐色土(やや砂質)
- ⑦暗黄褐色砂質土
- ⑧黄灰色砂質土
- ⑨暗褐色砂質土(墳丘盛土)
- ⑩暗褐色粘質土(墳丘盛土)

図48 古市16号墳墳丘検出状況

## 古市15号墳 (図44～46、図版29-1)

C4グリッドに位置し、14号墳より一段高いところにある。地山を削り出し、斜面上方に、幅2.0～3.0m、深さ0.8mほどを測る「コ」字状の周溝が掘られる。埋葬施設を確認できなかったが、墳丘上部には中世後期の火葬骨、五輪塔を伴う集石7があり、おそらくこの段階で破壊された可能性がある。また墳丘盛土も削平されてしまったと考えられ、さらに北側は周溝外周が調査地外にあるためその規模は不明瞭であるが、およそ南北14.0m、東西12.0mほどの方墳と思われる。

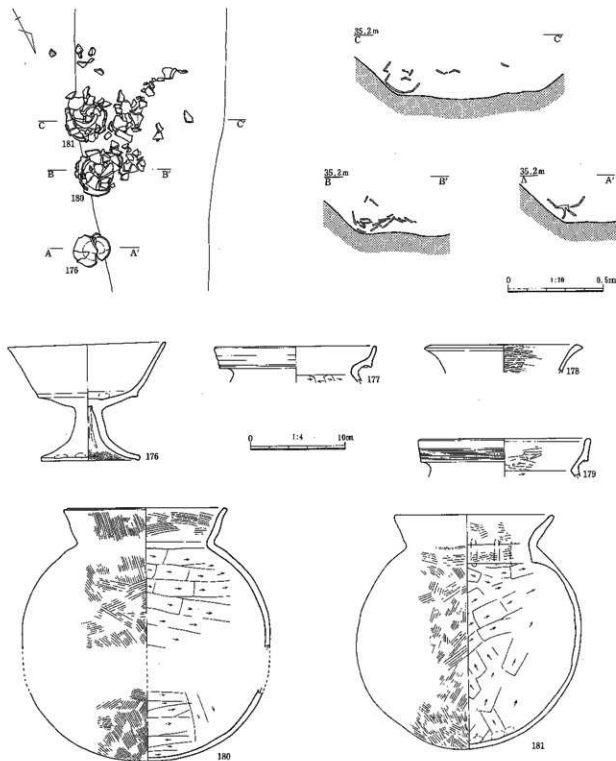


図49 古市16号墳遺物出土状況および出土遺物

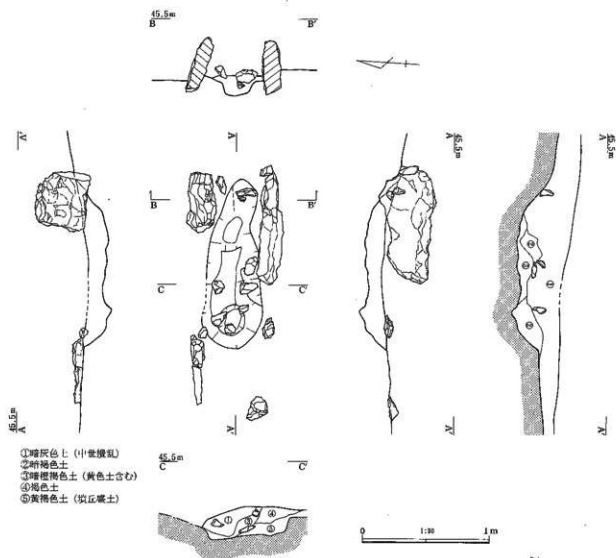


図50 古市16号墳埋葬施設1

遺物出土状況および出土遺物 (図45・46、カラー図版4.4・5.3)

須恵器、土師器が周溝内東側で2ヶ所にまとめて出土した。ほぼ中央部では土師器高坏7点 (164~170)、須恵器鉢、蓋、坏身 (173~175)、さらにこの群から2mほど南の地点に土師器壺 (171)、須恵器蓋 (172) が出土した。いずれも底面より0.1m前後浮いたところで出土している。そのためこれらの土器がただちに古墳築造時期を示すものとはいえない。須恵器は田辺昭三編年でTK 208期<sup>(註2)</sup>、土師器は青木遺跡編年でIX期に相当し、当該期の良好な基準資料といえよう。(中森)

古市16号墳 (図47~50、図版29~31)

15号墳の東側、一段上に位置する。周溝は東側斜面上方部を平坦に削った後に掘られる。その規模は幅1.4~2.0m、深さ0.4mほどを測り、1/4ほどの弧状を呈す。墳丘は上面を中世後期以降に削平されており、わずかに0.2mほど盛土が残る。周溝の形状などから円墳と考えられ、南北約11.0m、東西約10.0mを測る。

**埋葬施設 1** (図 50、図版 31・1・2)

墳頂部からやや東によった位置で検出した組み合わせ式の石棺である。長軸は尾根筋に沿っており、 $W 1.0^{\circ} S$  を向く。棺の石材はおそらく中世後期段階で大半が抜かれ、周辺にある集石 4・5 に利用されたと考えられる。一部側石が立った状態で残っていたほか、掘り方内に下部のみ残るものもあった。これらの石材は角礫凝灰岩である。

掘り方の規模は不明瞭であるが、残存長 2.5 m、幅 0.8 m、深さ 0.55 m ほどを測る。

**遺物出土状況および出土遺物** (図 49、図版 30)

周溝内から土師器がまとめて出土した。ほぼ底面に接して出土しており、古墳築造時期とそう離れてはいない段階で置かれたものと考えられる。もっとも北側に高坏 (176) があり、その南に甕が 2 点並んでいた (180・181)。高坏は体部下位で屈曲し、直線的に伸びる口縁部をもつ。甕は球状の体部で、口縁は短く直線的に外反する。青木遺跡編年のⅡないしⅢ期に相当するか。なお弥生時代後期の土器も若干周溝内および周溝東側のテラス面から出土している (177～179)。(中森)

**古市 17 号墳** (図 51～54、図版 31・32)

丘陵尾根上に立地し、16 号墳の北東、18 号墳の西に位置する。18 号墳とは隣接するが、16 号墳との間隔はあいている。周溝の向きは 18 号墳と同じで、東へ向いている。墳頂部の標高は約 48.75 m である。

墳丘は地山削り出しで、後背部を周溝で区切り、埋葬施設を構築している。周溝は調査地外にまで伸びており全廻できていないが、土層断面、周溝の形状、等高線図等から東西 7.5 m、南北 10.5 m の不整形な円墳と推定される。

盛土は検出されていない。しかし、図 53 を見ると 48.0 m 付近から傾斜が変化し、47.75 m まで墳丘のラインを示しているようである。古墳西側の墳端はそのあたりであると言える。

周溝は幅 1.5～2.0 m、深さ約 0.6 m を測り、墳丘東部を弧状にめぐっている。周溝の南端部から調査地境までは約 8.5 m ある。周溝内埋土は周溝西側に黒色系の埋土 (⑥・⑦層) が認められる。この堆積の後かそれ以前か判然としないが、周溝の後背にテラス状の掘り込みが見られる。この掘り込みの最下層からも黒色系の埋土 (⑤層) が見られ、⑥・⑦層と関連する土層の可能性もある。この後、18 号墳側から盛土や地山が崩れ堆積し (③・④層)、その上面から土坑 28 が掘り込まれている。

**埋葬施設**

埋葬施設は墳頂部から 1 基、墳丘南端の周溝付近から 1 基検出しており、墳頂部の方を埋葬施設 1、墳丘南端の方を埋葬施設 2 と呼称する。

**埋葬施設 1** (図 53、図版 31・3・4)

埋葬施設 1 は墳頂部のほぼ中心に位置する組み合わせ式の石棺である。長軸は尾根筋に沿っているが、やや北にずれており、 $W 37.0^{\circ} N$  の方向を向く。棺は大半の石材が抜き取られ、一部側石が残存しているに過ぎない。側石は長さ 0.45 m、

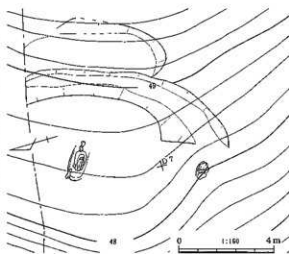
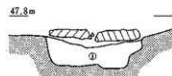
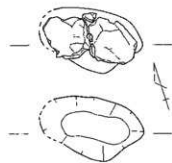


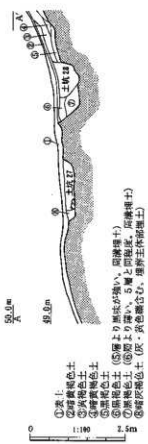
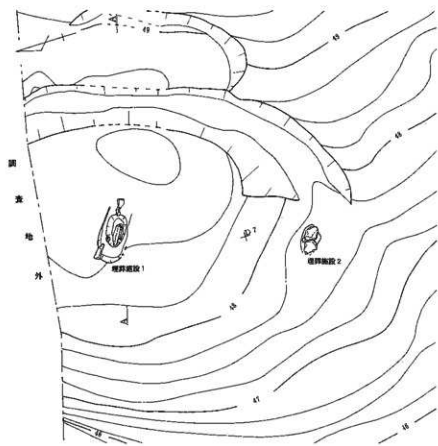
図 51 古市 17 号墳調査前地形測量



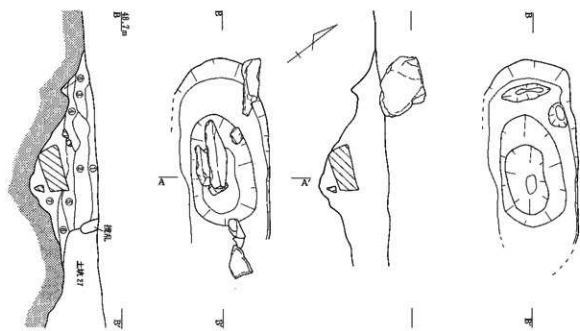
① 凝灰岩埋土 (地山よりしりとり強く、ボヤボヤ、壁をほとんど含まず、褐色がかる)



図 52 古市 17 号墳埋葬施設 2



- ①黄褐色土
- ②黄褐色土
- ③暗褐色土
- ④暗褐色土
- ⑤暗褐色土
- ⑥暗褐色土
- ⑦暗褐色土
- ⑧暗褐色土
- ⑨暗褐色土
- ⑩暗褐色土
- ⑪暗褐色土
- ⑫暗褐色土
- ⑬暗褐色土
- ⑭暗褐色土
- ⑮暗褐色土
- ⑯暗褐色土
- ⑰暗褐色土
- ⑱暗褐色土
- ⑲暗褐色土
- ⑳暗褐色土
- ㉑暗褐色土
- ㉒暗褐色土
- ㉓暗褐色土
- ㉔暗褐色土
- ㉕暗褐色土
- ㉖暗褐色土
- ㉗暗褐色土
- ㉘暗褐色土
- ㉙暗褐色土
- ㉚暗褐色土
- ㉛暗褐色土
- ㉜暗褐色土
- ㉝暗褐色土
- ㉞暗褐色土
- ㉟暗褐色土
- ㊱暗褐色土
- ㊲暗褐色土
- ㊳暗褐色土
- ㊴暗褐色土
- ㊵暗褐色土
- ㊶暗褐色土
- ㊷暗褐色土
- ㊸暗褐色土
- ㊹暗褐色土
- ㊺暗褐色土
- ㊻暗褐色土
- ㊼暗褐色土
- ㊽暗褐色土
- ㊾暗褐色土
- ㊿暗褐色土



- ①精灰褐色土
- ②炭灰褐色土
- ③暗褐色土 (④層に黒色土混じる)
- ④暗褐色土
- ⑤黄灰色土 (②層とよく似るが、やや暗い)
- ⑥黄褐色土
- ⑦暗黄灰色土
- ⑧暗黄灰色土
- ⑨黄褐色土
- ⑩黄褐色土
- ⑪黄褐色土
- ⑫黄褐色土
- ⑬黄褐色土
- ⑭黄褐色土
- ⑮黄褐色土
- ⑯黄褐色土
- ⑰黄褐色土
- ⑱黄褐色土
- ⑲黄褐色土
- ⑳黄褐色土
- ㉑黄褐色土
- ㉒黄褐色土
- ㉓黄褐色土
- ㉔黄褐色土
- ㉕黄褐色土
- ㉖黄褐色土
- ㉗黄褐色土
- ㉘黄褐色土
- ㉙黄褐色土
- ㉚黄褐色土
- ㉛黄褐色土
- ㉜黄褐色土
- ㉝黄褐色土
- ㉞黄褐色土
- ㉟黄褐色土
- ㊱黄褐色土
- ㊲黄褐色土
- ㊳黄褐色土
- ㊴黄褐色土
- ㊵黄褐色土
- ㊶黄褐色土
- ㊷黄褐色土
- ㊸黄褐色土
- ㊹黄褐色土
- ㊺黄褐色土
- ㊻黄褐色土
- ㊼黄褐色土
- ㊽黄褐色土
- ㊾黄褐色土
- ㊿黄褐色土

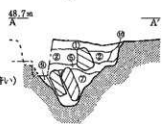


图53 古市17号墳墳丘検出状況および埋葬施設1

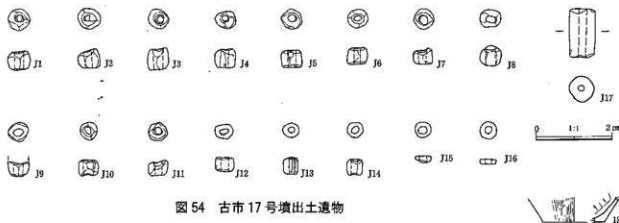


図54 古市17号墳出土遺物

高さ0.35 m、厚さ0.15 mの横長の板石1枚で、立った状態で検出された。北側側石の最西端に位置していたものと考えられる。

掘り方も土坑27によって切られており、正確な規模は不明であるが、残存長1.4 m、幅0.75 m、深さ0.2～0.5 mを測る。深さが0.5 mに達する掘り方中央の掘り込みからは、石棺に用いたと思われる0.2～0.5 m大の板石を数点検出した。これは、盗掘等の際にさらに深く掘られた結果と考えられる。大半が破壊されていたが、西側小口で石の抜け跡が確認された。側石と掘り込み内から検出した石棺石材は全て角礫凝灰岩である。

遺物出土状況および出土遺物（図54、カラー図版5-2）

埋葬施設1の埋土内からガラス玉を14点（J1～J14）、碧玉、青瑠璃製玉各1点（J15、J16）、管玉（J17）を検出した。多くは埋土の洗いによって検出したものだが、確実に出土位置をおさえているものもある。182は底部片である。周溝内から出土した。

埋葬施設2（図52、図版31-5・6）

埋葬施設2は墳丘南側の周溝南端付近に位置する石蓋土墳墓である。長軸は尾根筋に沿っており、W 17.5° Nの方向を向く。蓋石は長さ、幅0.7 m、厚さ0.08 mの板石2枚で構成され、蓋石同士の継ぎ目には0.1～0.2 m大の板石、割石が3個置かれている。蓋石の石材は角礫凝灰岩である。

蓋石の下からは長さ1.5 m、幅1 m、深さ約0.4 mの土壇が検出された。長軸の方向は石蓋のそれとほぼ同じである。

築造時期

17号墳の築造時期は、年代を示す資料が検出できなかったため不明である。（下江）

古市18号墳（図55・56、図版32）

丘陵尾根上に立地し、17号墳の東、19号墳の西に位置している。17・18・19号墳の各間隔は他の古墳と比較して狭く、ほぼ等間隔である。尾根筋の方向が18号墳周辺でやや南へ変化しており、周溝の向きもそれにあわせて変化する。墳頂部の標高は約50.75 mである。

墳丘は地山を削り、後背部を周溝で区切り、埋葬施設を構築した後、墳丘上面に盛土を施す構造である。周溝

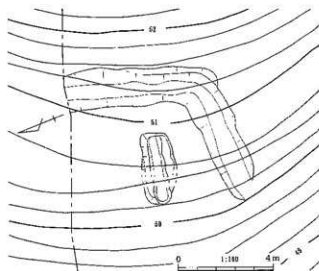


図55 古市18号墳調査前地形測量



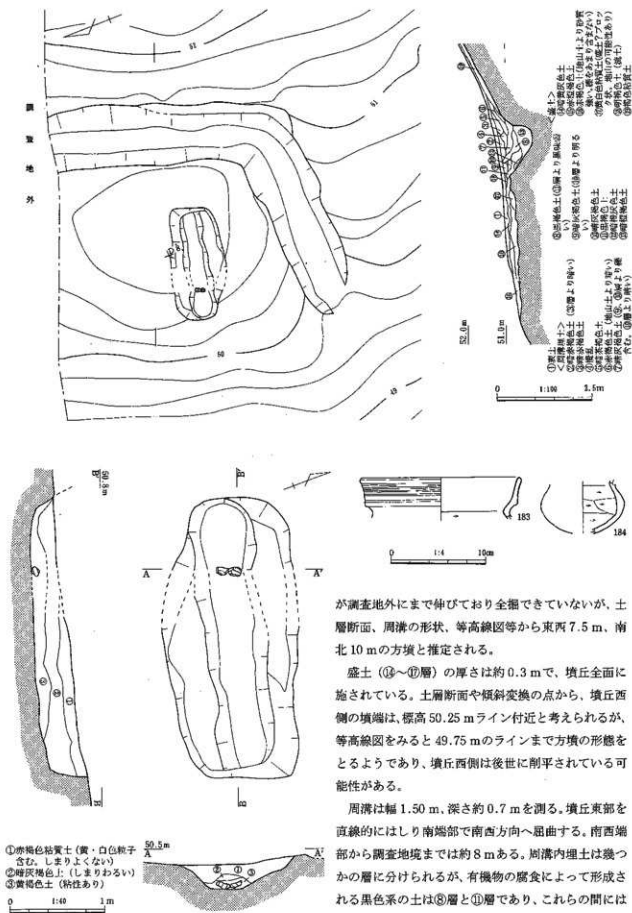


図56 古市18号墳壇丘検出状況、埋葬施設1および出土遺物

が調査地外にまで伸びており全掘できていないが、土層断面、周溝の形状、等高線図等から東西7.5m、南北10mの方墳と推定される。

盛土(⑭~⑦層)の厚さは約0.3mで、墳丘全面に施されている。土層断面や傾斜変換の点から、墳丘西側の墳端は、標高50.25mライン付近と考えられるが、等高線図をみると49.75mのラインまで方墳の形態をとるようであり、墳丘西側は後世に削平されている可能性がある。

周溝は幅1.50m、深さ約0.7mを測る。墳丘東部を直線的にはしり南端部で南西方向へ屈曲する。南西端部から調査地境までは約8mある。周溝内埋土は幾つかの層に分けられるが、有機物の腐食によって形成される黒色系の土は⑧層と⑩層であり、これらには時期差が考えられる。まず、⑩・⑧層の堆積の後に有機物の沈殿と腐食があり(⑪層)、その後⑨・⑬層の堆

積があり、新たに有機物を含む⑧層が形成される。さらにこの後、19号墳側から土が流れてきて、一気に周溝を埋めているようである。この土は赤褐色系の土であるので、19号墳の盛土や地山の土と思われる。

#### 埋葬施設1 (図56、図版32-3)

墳頂部から埋葬施設を1基検出している。墳頂部の中央よりも南側に位置する木棺墓であり、長軸の方向は尾根筋に沿っており、W21.0°Nである。掘り方は地山削り出しで、長さは3.0m、東端幅0.8m、西端幅1.0m、最大幅1.4m、深さ約0.2mの隅丸長方形を呈する。木棺はそこからさらに幅0.5～0.6m、深さ約0.15mの掘り込みの中に設置されていたと思われる。木棺痕跡は残存しておらず、木棺の詳しい型式等は不明である。床面は地山上面であり、東側の方が約0.2m高い。掘り方西側で床面に接する形で0.1m大の板石2個が検出された。出土状況から枕石と考えられる。

#### 遺物出土状況および出土遺物 (図56、図版32-4)

棺内からは枕石が認められただけで、他に遺物は何も検出されなかった。周溝内埋土から土器2点が検出された。183は弥生土器の甕の口縁部である。二重口縁で、やや外側に直線的に開きながら上方につまみ上げて拡張している。外面には5条の凹線が認められる。184は弥生土器の小型壺の胴部である。内面に横方向のヘラケズリが見られる。

#### 築造時期

周溝内埋土から出土した土器はいずれも弥生土器で、その形態的特徴から青木遺跡編年Ⅲ期に比定される。出土状況などから見て、これらの遺物が18号墳の築造時期に伴うものとは考えられないので、正確な築造時期は不明である。  
(下江)

#### 古市19号墳 (図57～62、図版34～38)

丘陵稜線上に立地し、18号墳の東、20号墳の北西に位置する。18号墳とは隣接しているが、20号墳とはかなりの間隔があいている。墳頂部の標高は約53.0mである。

墳丘は、地山を削り後背部を周溝で区切り、埋葬施設を構築した後、墳丘上面に盛土を施す構造である。周溝が調査地外まで伸びており、全掘できていないが、土層断面、周溝の形状、等高線図等から東西7.5m、南北10mの方墳と推定される。

盛土(④層)の厚さは約0.2mほどで、墳丘全面に施されているが、掘り方より西側には伸びておらず、傾斜変換線である標高52.75m付近が墳丘西側の墳端と考えられる。しかし、等高線図では標高52.25mまで、方墳の形態をとるようであり、墳丘西側は後世に削平されている可能性がある。

周溝は幅0.7～2.0m、深さ約0.5mを測る。墳丘南東部を直線的にはしり、南端部で北西方向へ短く屈曲する。北端部は調査地外で検出できなかったが、南西端部から調査地境までは約7.5mである。周溝内埋土(⑩・⑪層)はそれぞれ赤褐色粘質土、明黄褐色上で、地山や盛土が崩れて一気に堆積した土であろう。その後、黒褐色粘質土(⑨層)のような、有機物が腐食してできる黒色系の土が堆積している。

#### 埋葬施設

埋葬施設を墳頂部のほぼ中央から2基検出した。同一の掘り方内に並置した状態で構築されており、ここでは西側の方を埋葬施設1、東側の方を埋葬施設2と呼称する。

#### 墓壇 (図62、図版35-6)

掘り方はいわゆる二段墓壇で、2基の埋葬施設を設置している。1段目の掘り方は長さ3.45m、幅3.05m、深さ0.3～0.4mの隅丸方形を呈し、長軸は各埋葬施設の主軸とほぼ平行である。土層断面からみて、2つの埋

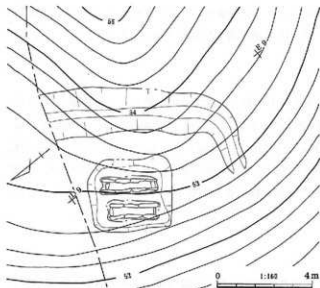


図57 古市19号墳調査前測量

- |                             |                        |
|-----------------------------|------------------------|
| ①表土                         | ⑤赤褐色粘質土 (白色粒子多く含む)     |
| ②暗褐色粘質土 (しまりよい、④よりやや硬)      | ⑥黒褐色粘質土                |
| ③暗黄褐色粘質土                    | ⑦赤褐色粘質土 (しまりよい、白色粒子多い) |
| ④粘質土 (しまりよい)                | ⑧明黄褐色土 (やや砂質、しまりややわるい) |
| ⑤暗黄褐色粘質土 (白色粒子④より多く含む、粘性あり) | ⑨穴                     |
| ⑥暗褐色土                       |                        |
| ⑦赤褐色粘質土 (烏塚埋土)              |                        |



Fig. 6 墓壇内土層断面 (南から)

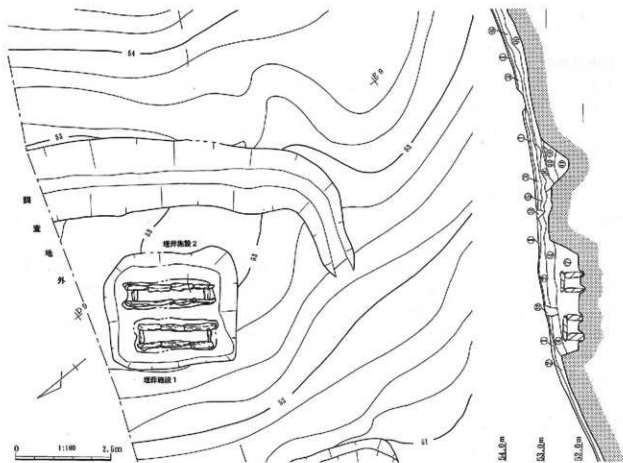


図58 古市19号墳墳丘検出状況

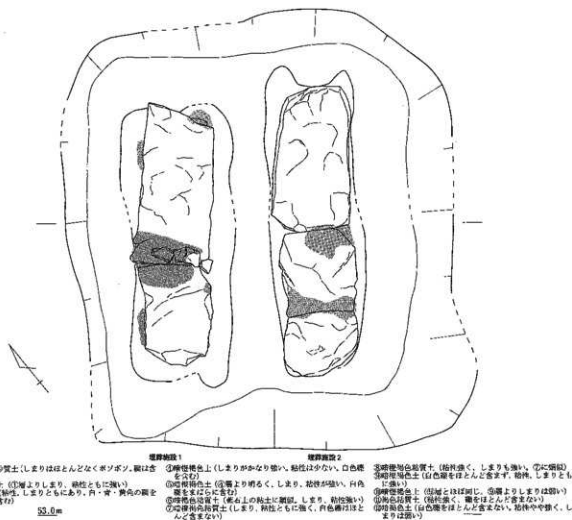


図59 古市19号墳埋葬施設検出状況

葬施設には明確な時期差は認められず、後述するように、棺のつくりも大きくは違っていないことから、2つの埋葬施設はほぼ同時につくられたものと考えられる。

#### 埋葬施設1 (図59・60、図版35～38)

組み合わせ式の石棺である。棺の長軸はN 40.5° E方向を向いており、尾根筋に対してほぼ直交する。棺の長さは内法で1.7m、北端幅0.3m、南端幅0.3m、深さ約0.2mを測る。

棺の構造は両小口に幅、高さ0.35m、厚さ0.1m前後の板石をそれぞれ1枚ずつ用いる。両側の側石は長さ0.75m、高さ0.4m、厚さ0.15m前後の板石2枚と長さ0.6m、高さ0.35m、厚さ0.2m前後の横長の板石1枚の計3枚を検出した。しかし、北側の2枚の石は接合する。もともと2枚に分割して設置したのか、それとも土圧等で割れてしまったのか断定できないが、互いに密着し、間に土があまりかまない点から、西側の側石は2枚で構成される可能性が高い。また、東側の側石でも長さ0.6m、高さ0.5m、厚さ0.15m前後の横長の板石2枚と

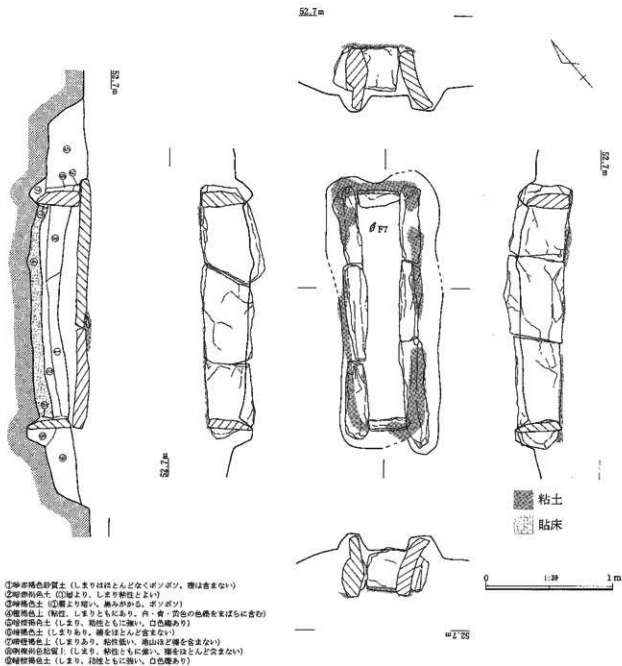
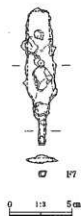


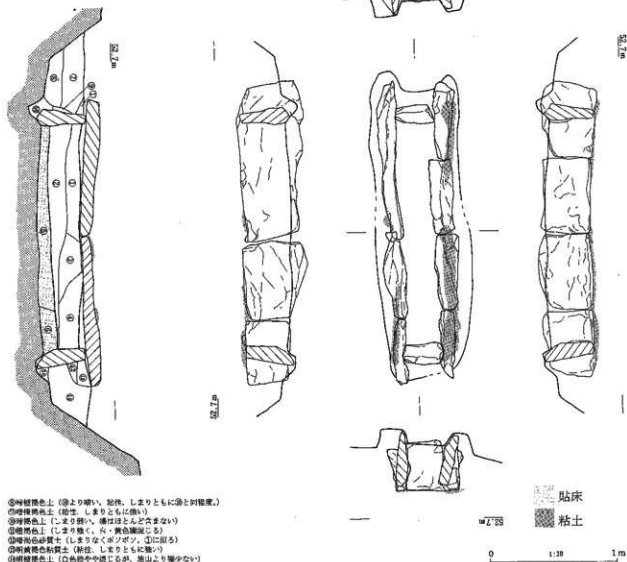
図60 古市19号墳埋葬施設1および出土遺物

長さ0.85m、高さ0.35m、厚さ0.15m前後の縦長の板石1枚の計3枚を検出した。しかし、これら3枚の側石は全て接合し、1枚の板石となる。これも、もともと3枚の側石として設置したのか、土圧等で割れたのか断定できないが、西側の側石と同様に、互いに密着し、間に土があまりかまさない点から、東側の側石は1枚であった可能性が高い。これらの側石が両小口石を挟み込むようにして組み合っており、側石同士の組み合わせは両側石共に平継ぎである。幅にばらつきが少なく、石そのものも大型で平滑なものであり、全体的に整美な印象を受ける。

蓋石は長さ1.2m、幅0.6m、厚さ0.1m前後の縦長の板石1枚と、長さ0.8m、幅0.5



- ①輝石褐色砂質土（しまりはほとんどなくボソボソ。硬は少ない）  
 ②暗輝褐色土（①よりしまり、粘性ともに強い）  
 ③暗褐色土（しまりはほとんどない。①と同程度）  
 ④暗褐色土（③よりしまりあり。②ほどはない）  
 ⑤黒褐色土（粘性、しまりともにあり。白・青・紫色の層をまじらに含む）  
 ⑥黄褐色土（しまりあり。粘性弱い。灰・黄色層を含む）  
 ⑦紅褐色土（粘性、しまりともに③より強い。白色層を含む）



- ⑧暗褐色土（③より強い。粘性、しまりともに③と同程度）  
 ⑨暗褐色土（粘性、しまりともに強い）  
 ⑩暗褐色土（しまり強い。硬はほとんどない）  
 ⑪暗褐色土（しまり強く、白・黄色層を含む）  
 ⑫暗褐色土質土（しまりなくボソボソ。①に近しい）  
 ⑬暗褐色粘質土（粘性、しまりともに強い）  
 ⑭暗褐色土（白色層や中硬土が、地山より少ない）

図61 古市19号墳埋葬施設2

m、厚さ0.1m前後の板石1枚の計2枚で構成されている。蓋石上面では粘土が検出されている。特に良好な状況であるのが、蓋石同士の継ぎ目付近で、継ぎ目を覆うように幅約0.4m、厚さ約0.05mの粘土が帯状に検出されている。また、この粘土の中から、蓋石の継ぎ目に沿うように0.1m大の割石2個が検出された。粘土は蓋石と小口石、側石の間でも検出されており、その範囲は棺を囲むように両小口石、両側石上で検出され、丁寧なつくりであったことが窺える。床面は地山を削り、厚さ0.1mほどの橙褐色土(④層)で貼床としている。床面の高さは南側の方が約0.05m高い。なお、蓋石、側石、小口石等、石棺に使用された石材は全て角礫凝灰岩である。埋葬施設1の石棺石材を直接埋め込む2段目の掘り方は長さ2.1m、幅0.5～0.6mの範囲で隅丸長方形を呈し、小口、側石の設置場所に幅0.25m、深さ0.15mほどの溝を掘り込んでおり、床面部分を残している。

遺物出土状況および出土遺物（図60、図版38）

石棺北側の貼床上面から鉄鏝（F7）を、刃部の先端を南西の方角に向けている状況で検出した。鉄鏝はいわ

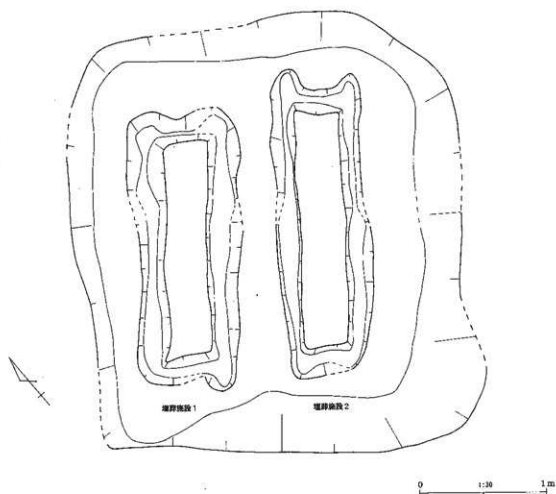


図 62 古市 19 号墳埋葬施設完掘

ゆる長鋒柳葉式で、関はなく刃部下端から内湾し、茎に至る。先端部はやや欠損しているようであるが、全長 10.8cm、刃部長 6.3cm、最大幅 2.3cm、重量は 25.6 g を測る。

#### 埋葬施設 2 (図 59・61、図版 35～37)

組み合わせ式の石棺である。棺の長軸は  $N 39.0^{\circ} E$  を向き、尾根筋とほぼ直交し、埋葬施設 1 の長軸方向とほぼ平行である。棺の長さは内法で 1.75 m、北端幅 0.31 m、南端幅 0.27 m、深さ約 0.2 m を測る。

棺の構造は、小口石に幅 0.3 m、高さ 0.4 m、幅 0.1 m 前後の縦長の板石をそれぞれ 1 枚ずつ使い、側石は西側で、長さ 1.25 m、高さ 0.45 m、厚さ 0.1 m 前後の横長の板石 1 枚と長さ 0.6 m、高さ 0.45 m、厚さ 0.15 m 前後の横長の板石 1 枚と長さ 0.5 m、高さ 0.35 m、厚さ 0.1 m 前後の横長の板石 1 枚の計 3 枚、東側で長さ 0.6 m、高さ 0.4 m、厚さ 0.1 m 前後の横長の板石 4 枚で小口石を挟み込むようにして組み合わせている。特に小口北側では側石が 0.2 m ほど突き出ている。側石同士の組み合わせは平継ぎである。

蓋石は長さ 1.15 m、幅 0.6 m、厚さ 0.1 m の縦長の板石 1 枚と、長さ 0.65 m、幅 0.6 m、厚さ 0.1 m の正方形に近い板石 1 枚と、長さ 0.5 m、幅 0.6 m、厚さ 0.1 m の横長の板石 3 枚で構成されている。蓋石上面では粘土が検出されており、蓋石同士の継ぎ目に帯状に施されている。粘土は蓋石と小口石、側石の間でも見られ、北側の小口石と側石以外の上面で検出できた。床面は地山を削り、黄褐色土 (⑥層) と橙褐色土 (⑤層) で厚さ 0.1 m ほどの貼床としている。床面は約 0.05 m ほど南側が高い。なお、蓋石、側石、小口石等、石棺に使用された石材は全て角礫凝灰岩であり埋葬施設 1 と同じであるが、規模、両側石の大きさの不統一さや側石の突き出し方など、棺の構造において埋葬施設 1 と若干異なる点がいくらかある。

埋葬施設2の石を直接埋め込む2段目の掘り方は長さ2.25m、幅0.6～0.75mの隅丸方形の範囲に、幅深さ約0.1mほどの溝を掘り込んでいる。長軸の向きは石棺とほぼ同じである。

#### 築造時期

19号墳の築造時期を示す資料としては、埋葬施設1の棺内で検出した鉄鏝のみである。鉄鏝では細かい時期を決めることはできないが、長鋒柳葉式の中でも形態的に古墳時代前期後半以降のものであろう。(下江)

#### 古市20号墳 (図63～69、図版39～43)

丘陵尾根上に立地しているが、他の古墳と比較して平坦な場所に墳丘を築いている。19号墳の南東、22号墳の北西に位置し、19号墳、22号墳それぞれの古墳との間隔は他の古墳間と比較して広い。墳頂部の標高は約56.50mである。

墳丘は地山を削り、後背部を周溝で区切り、埋葬施設を構築した後盛土を施す構造である。さらにその後、もう1基の埋葬施設を盛土上面から掘り込んで構築している。土層断面、周溝の形状、等高線図等から東西12m、南北15mの不整形な円墳と考えられる。これは今回調査した古墳群の中で最も規模の大きなものである。

最初の埋葬施設は、地山と弥生時代の住居である竪穴住居跡6の埋土(⑤層)を削って構築され、盛土(②・③層)を墳丘全面に施す。この盛土は厚さ約0.4～0.5mあり、他の古墳と比較しても厚い。その後、周溝を掘削し、⑥層が周溝埋土として堆積する。また、先に周溝を削り、盛土によって、周溝の墳丘側の斜面を形成していたことも考えられる。しかし、土層断面で見ると、明確なカットの跡や斜面をつくり出すのに必要と思われる細かい盛土の単位などは認められないので、どちらの工法で築造されたかは不明である。

周溝は、先述したように、墳丘側の斜面に盛土が施されており、幅1.2～2.1m、深さ約0.25mを測る。墳丘南東部から北東部にかけて弧状にめぐり、北東端は調査地外で検出できなかったが、南東端から調査地境までは約15.0mほどである。周溝内埋土は暗褐色粘質土(②層)と暗灰褐色土(③層)で、有機物の腐食によって形成される黒色系の土とは異なり、盛土や地山などが流出し一気に堆積したものと考えられ、古墳築造当初はさらに厚い盛土が施されていた可能性がある。

#### 埋葬施設

埋葬施設は墳頂部より2基、墳丘外で周溝南側より1基検出されている。墳頂部の埋葬施設は先述したように時期差が認められ、新しくつくられた方を埋葬施設1、最初につくられた方を埋葬施設2、墳丘外のを埋葬施設3と呼称する。

#### 埋葬施設1 (図65・66、図版40-1～3)

墳丘の中央よりやや南側に位置している組み合わせ式の石棺である。棺の長軸はN43.0°W方向を向いており、尾根筋に対してほぼ平行である。棺の長さは内法で1.7m、西端幅0.3m、東端幅0.41m、深さ約0.2mを測る。

棺の構造は、両小口にそれぞれ高さ0.4m、幅0.35m、厚さ0.1m前後、高さ0.5m、幅0.4m、厚さ0.2m前後の縦長の板石を1枚ずつ用い、側石は北側で長さ0.85m、高さ0.4m、厚さ0.15m前後、長さ0.7m、高さ0.35m、厚さ0.1m前後の大型の横長の板石と、長さ0.5m、高さ0.45m、厚さ0.1m前後の板石の計3枚、南側で長さ0.6m、高さ0.3m、厚さ0.05m前後の板石4枚で小口石を挟み込むようにして組み合わせている。なお、南側の側石で0.3m程度の小さなものがあるが、これは隣接する側石と接合し、もともとは1つの板石であったと考えられる。意図的に割った可能性もあるが、石材があまりに小型である点や、互いに密着して、間にあまり土をかんでいない点からも、土圧等で割れたものと考えられ、数には入れていない。側石同士の組み合わせは、北側では平継ぎであるが、南側では小口東側から2石目と3石目、3石目と4石目がそれぞれ重なり合う、いわゆる重ね継ぎである。

蓋石は長さ0.6m、幅0.5m、厚さ0.08m前後の横長の板石4枚と長さ0.3m、幅0.4m、厚さ0.05m前後



の横長の板石1枚の計5枚で構成され、さらに東側第1石の東端上面で0.1m大の割石が数個置かれている。蓋石全体として、検出時で長軸の長さ2.25m、幅約0.7mを測る。充填用の粘土は検出していない。床面は地山を削って形成し、0.15mほど東端の方が高い。なお、蓋石、側石、小口石等、石棺に使用された石材は全て角礫凝灰岩である。

掘り方は長さ2.73m、幅0.75~1.02m、深さ約0.2mの隅丸長方形を呈し、長軸は棺のそれとほぼ同じである。盛土上面から掘り込まれており、埋葬施設2の一部を掘削している。掘り方底面では小口石、側石各1石ごとにあわせた掘り込みを検出した。溝状に連続するのではなく、石ごとに大きさや深さが違う点は他の埋葬施設とは異なる。

#### 埋葬施設2 (図67・68、図版41~43)

20号墳墳頂部において最初に築造された埋葬施設であり、墳丘のほぼ中央に位置している組み合わせ式の石棺である。棺の長軸はN41.5°E方向を向いており、尾根筋と埋葬施設1の長軸とにほぼ直交する。棺の長さは内法で1.68m、北端幅0.35m、南端幅0.24m、深さ約0.3mを測る。

棺の構造は両小口にそれぞれ高さ0.4m、幅0.3m、厚さ0.1m前後、高さ、幅0.4m、厚さ0.1m前後の板石を1枚ずつついで、側石は東側で長さ0.6m、幅0.3m、厚さ0.1m前後の横長の板石4枚、西側で長さ1.05m、幅0.3m、厚さ0.15m前後、長さ0.9m、幅0.25m、厚さ0.1m前後の大型の横長の板石2枚と、長さ、幅0.4m、厚さ0.1m前後の板石1枚の計3枚で小口石を挟み込むようにして組み合わせ、両小口より側石が大きく突出している。また、側石の石材には0.1mほどの高さのズレが見られ、そのズレを調整するため両側石の下に0.1~0.3m大の板石や割石が数個置かれ、粘土も検出された。側石同士の組み合わせは両側石とも平継ぎである。

蓋石は長さ0.85m、幅0.6m、厚さ0.09m前後、長さ0.14m、幅0.6m、厚さ0.9m前後の縦長の板石2枚を用いており、検出時で長さ2.2m、幅0.45~0.6mを測る。2枚の蓋石の間には隙間を埋めるための粘土が帯状に検出された。この粘土は蓋石と小口石、側石の間でも認められる。また、蓋石の裏面では側石と接する部分で内側よりも数cm低く加工しており、この加工痕は両蓋石の長軸方向の両縁辺で見られ、小口側では見られない。床面は地山を削り、厚さ0.1mほどの暗赤褐色土(⑦層)で貼床としている。床面の高さの差はほとんどない。石棺の北側床面上で土師器転用枕を検出した。なお、蓋石、側石、小口石等、石棺に使用された石材は全て角礫凝灰岩である。

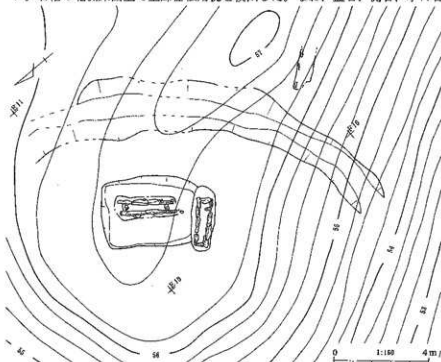
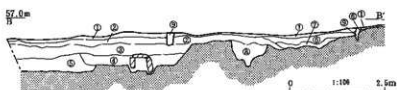
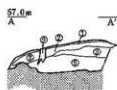
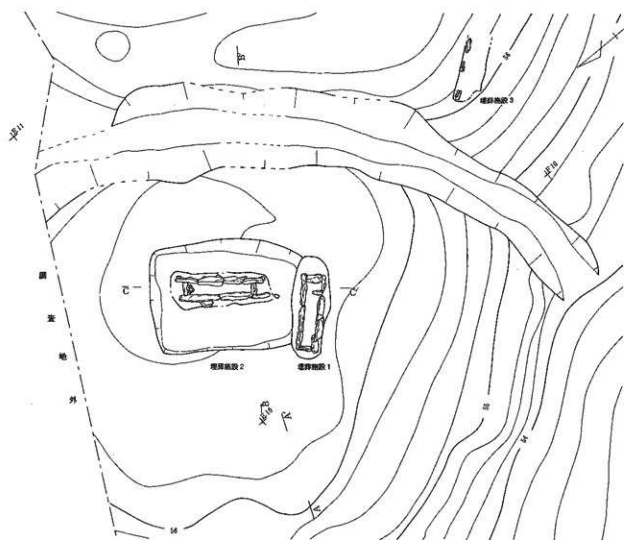


図63 古市20号墳調査前測量

掘り方は、南西部を埋葬施設1によって切られているが、推定で長さ4.2m、幅2.4~3.0m、深さ0.2~0.6mを測る大型の隅丸長方形を呈し、先述した2つの石棺をおさめている19号墳の掘り方よりも大きい。石棺の長軸は掘り方の長軸線よりも東側に寄っており、この掘り方でも2基の埋葬施設を並置させようとした可能性がある。また、石棺の構築に直接的に関わる掘り方がさらに掘り込まれており、いわゆる二段墓壇の形態をとる。2段目の掘り方は、長さ2.65m、幅0.75~1.0m、深さ約0.15mの隅丸長方形を呈し、



- ①表土  
 ②暗褐色粘質土（しまり強い、白色粒子多く含む）  
 ③赤褐色粘質土（やや暗い、しまりややわるい、白色粒子多く含む）  
 ④赤褐色粘質土（しまりわるい、白色粒子多く含む）  
 ⑤壙穴住居跡5棟土  
 ⑥暗褐色粘質土  
 ⑦暗灰褐色土（やや粘質、白色粒子含む）  
 ⑧土坑3.0m埋土  
 ⑨覆土

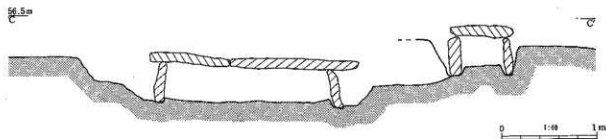


図64 古市20号墳填丘検出状況

長軸は棺のそれとほぼ同じである。床面の部分を数cm高く残し、小口石と側石の設置場所を溝状に深く掘り込んでいる。2段目の掘り方からは埋土に混じって粘土も検出されている。

遺物川土状況および出土遺物 (図68、図版42)

棺内では北側の小口付近から貼床面に接して土師器壺の口縁部から頸部にかけての部分が検出された(185)。口縁部を下にして土器を立たせており、さらに頸部から胴部にかけての一部分を打ち欠いて、被葬者の頭部を据えやすい様にしている。出土状況から土師器壺を枕として転用したものと考えられる。口縁部は二重口縁で、やや外反する。凹線は認められず、頸部に細い突帯を貼り付けている。内面は横方向のヘラケズリが認められる。

埋葬施設3 (図69、図版40-4)

丘陵尾根上平坦部の南端に立地し、20号墳南側の周溝の外に位置する。0.4m大の石材が露頭しており、周囲を精査すると石材を取り囲むように掘り方が検出されたので埋葬施設と考えた。先述したように22号墳と20号墳との間隔が広く、周溝の外側であることから、もう1つ占墳が存在する可能性も考えトレンチを入れるなどしたが、新たな古墳は確認できなかった。よってここでは、20号墳の周辺埋葬施設として考えておきたい。

検出時では棺の形態をとどめておらず、掘り方内から幾つかの板石や割石が検出されただけだが、組み合わせ式の石棺であると思われる。長軸は、掘り方や残存していた側石の配置からN 37.0°Wの方向を向いていたと考えられ、尾根筋に沿っている。側石は南西側の一部が残存していた。最も西側の石が大きく、長さ0.4m、高さ0.3m、厚さ0.1m前後の横長の板石で、立った状態で検出した。最も東側の石は床面付近のみが残存しており、形状から、もともとはより大きな板石であったのが、挿削された際に割れて、残存したと思われる。この他にも床面付近で0.1~0.2m大の板石、割石が検出されている。これらは、埋葬施設2と同様に、高さの調整のために大型の側石の下に置かれたものと思われる。なお、蓋石、側石、小口石等、石棺に使用された石材は全て角礫凝灰岩である。

掘り方はトレンチや後世の掘削等によって切られ、正確な規模はわからないが、残存長1.46m、幅0.45~0.65m、深さ約0.18mを測る。床面は地山を削って形成されたと考えられるが、空堀等によって削られている可能性もある。南側では側石を据えるための幅0.1m程度の溝を検出した。

遺物出土状況および出土遺物 (図69)

掘り方内①層から、土師器壺の口縁部を検出した(186)。残存部分が多くないが、口縁部は直線的に外側へ開き、凹線は認められない。内面でわずかに横方向のヘラケズリが見られる。

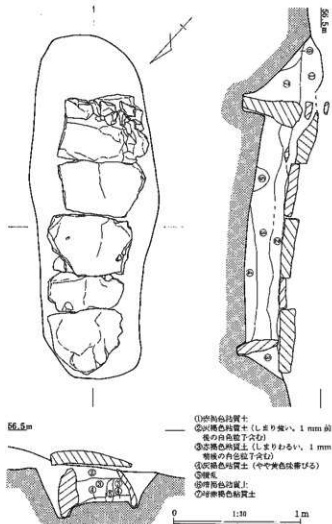


図65 古市20号墳埋葬施設1検出状況

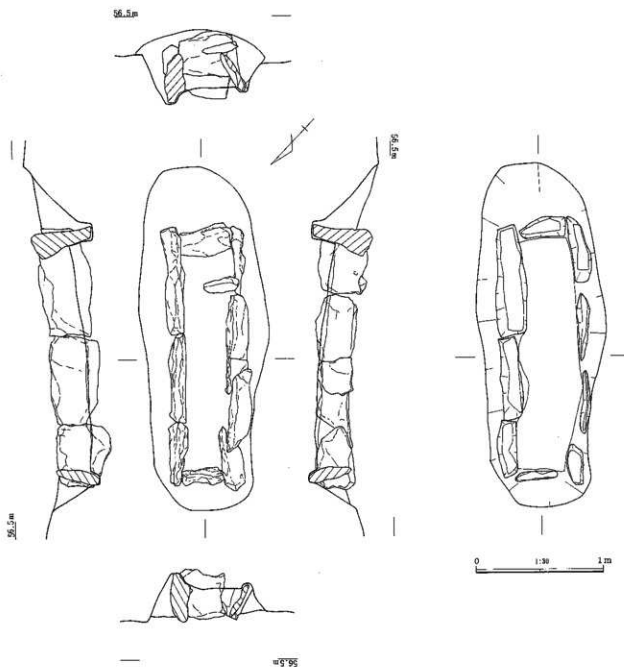


図66 古市20号墳埋葬施設1

#### 築造時期

埋葬施設1の構築時期、つまり20号墳の築造時期は棺内で検出した、枕に転用された土師器壺から知ることができる。壺の形態的特徴から、青木遺跡編年のⅦ期古段階に比定される。埋葬施設3の掘り方内出土の土師器甕は口縁部の特徴から青木遺跡編年のⅦ期のもと考えられるが、小片のため詳細は分からない。(下江)

#### 古市21号墳(図70、図版33)

古墳が連続して築かれている丘陵尾根上からややはずれた尾根南側の斜面部に立地し、15号墳の南東、16号墳の南西に位置する。中世後期の包含層である黄褐色土層(①層)の下面で周溝および埋葬施設を検出した。墳頂部の標高は約42.75mである。

墳丘は、後背部を周溝で区切るだけの単純な構造で、土層断面、周溝の形状や等高線図等から径3mの円墳と考えられる。盛土は確認できなかったが、中世後期の包含層が覆っており、周溝の深さが浅いことからこの段

階に削平された可能性が考えられる。

周溝は幅 0.2～0.5 m、深さ約 0.2 m を測る。墳丘北東部を弧状にめぐり、両端部の距離は約 3.0 m ほどである。周溝埋土 (②層) は有機物の腐食によって形成される黒色系の埋土である。

埋葬施設 1 (図 70、図版 33-2・3・5)

墳丘上より埋葬施設を 1 基検出した。墳丘のほぼ中央に位置し、おそらく木棺墓と思われる。棺の掘り方の長

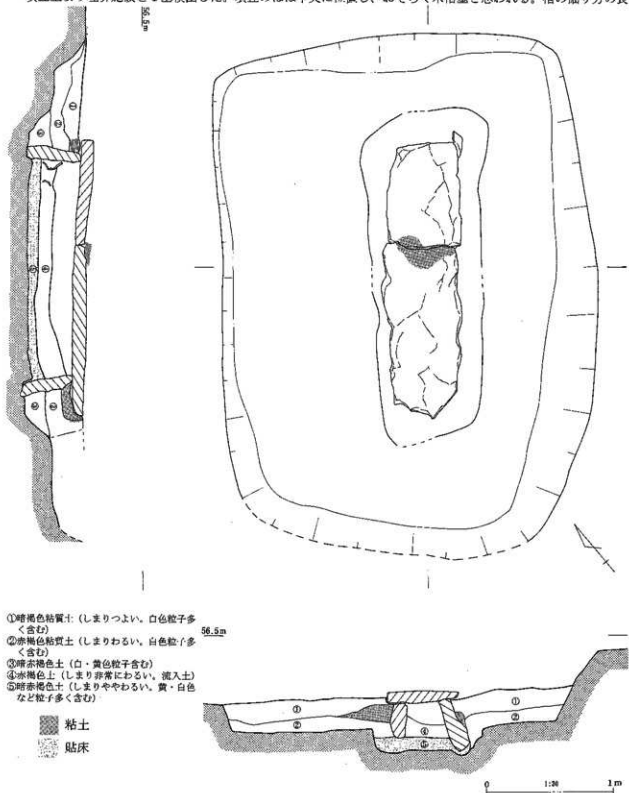


図 67 古市 20 号墳埋葬施設 2 検出状況

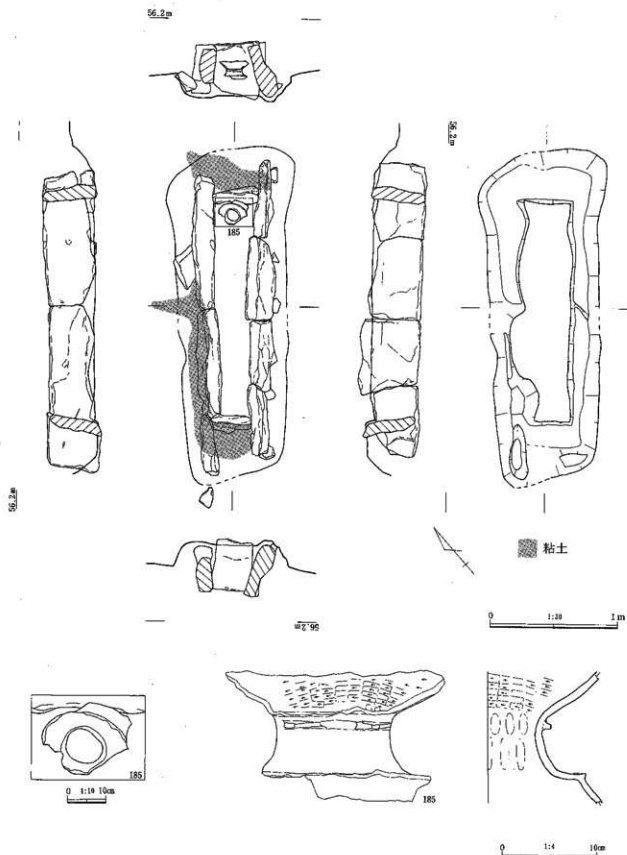


図68 古市20号墳埋葬施設2および出土遺物

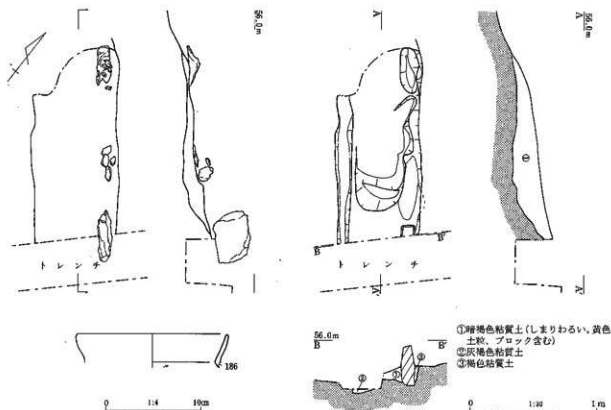


図 69 古市 20 号墳埋葬施設 3 および出土遺物

軸はW 37.0° N 方向に向いており、墳丘の主軸とほぼ直交する。掘り方の長さは 2.4 m、西端幅 0.72 m、東端幅 0.64 m、最大幅 0.74 m、深さ約 0.25 m の隅丸長方形を呈する。

棺の両側で 0.2～0.4 m 大の割石や板石を検出した。特に西側の小口では石を組んで積み上げている。④層上で浮いている石を除いてこれらは、小口石と考えられる。石材は角礫凝灰岩である。床面には貼床は認められない。木棺は床面の状況などから長さ約 1.9 m、幅約 0.3 m の組み合わせ式木棺と推定される。さらに西側の小口石の下から溝状の窪みを検出した。小口石の設置に際してできたものと考えられる。

#### 遺物出土状況および出土遺物 (図 70、図版 33-4)

遺物は周溝内埋土から土師器坏身 (187) を検出した。棺内からは何も検出していない。土師器坏身は内湾しながら立ち上がり、端部は丸みを帯びる。外面はナデ調整で、底部内面で横方向のヘラミガキが見られる。

#### 築造時期

周溝内埋土から検出した土師器坏身は形態的特徴から、青木遺跡編年のⅠ期に比定されるが、周溝内埋土からの出土なので正確な築造時期を示しているとは言い難い。(下江)

#### 古市 22 号墳 (図 71～73、図版 44・45)

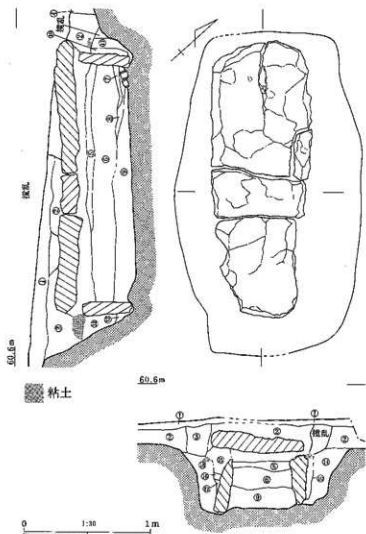
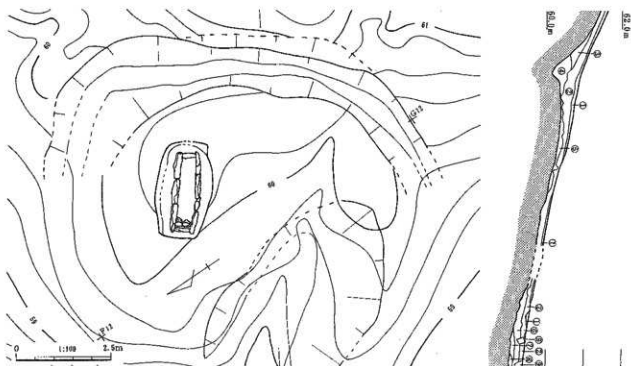
丘陵尾根上に立地し、23 号墳の北西に位置する。墳頂部の標高は約 60.25 m である。

墳丘は、後背部を周溝で区切るだけの単純な構造で、土層断面、等高線図、周溝の形状等から東西 9 m、南北 10.5 m の不整形な円墳と考えられる。確実な盛土は土層断面でも確認できなかったが、墳丘上面が削平されたために失われた可能性がある。それを裏付けるかのように墳丘西部において溝状の掘り込みを検出した。しかし、この掘り込みがどの段階で掘り込まれたかは明らかでない。

周溝は幅 1.2～2.15 m、深さ約 0.4 m を測る。周溝北側でやや屈曲するようにも見えるが、墳丘南東部を弧状







- ①表土  
 ②赤褐色土 (しまりなし、粘性あり。砂利をわずかに含む)  
 ③赤褐色土 (しまりなし、粘性あり。砂利を含む)  
 ④赤褐色土 (しまり、粘性あり。小さい白色粒子・茶色土層  
 じる。河溝埋土)  
 ⑤明茶褐色土 (しまり、粘性あり)  
 ⑥茶褐色土 (しまりあり、粘性なし。少角礫が多く含まれる。  
 砂質)  
 ⑦暗茶褐色土 (しまりあり、粘性なし。砂利多く含まれる。  
 砂質)  
 ⑧赤褐色土 (しまり、粘性あり。白色粒子を含まない)  
 ⑨壊乱

墓石検出状況図

- ①茶褐色土 (粘性、しまりなし)  
 ②赤褐色土 (粘性、しまりあり。白色粒子含む)  
 ③赤褐色土 (粘性、しまりあり。やや茶色味を帯びる)  
 ④明茶褐色土 (粘性、しまりあり。黄色みを帯びる)  
 ⑤茶褐色土 (粘性、しまりなし)  
 ⑥赤褐色土 (粘性、しまりなし)  
 ⑦赤褐色土 (粘性、しまりあり)  
 ⑧赤褐色土 (粘性、しまりあり。⑦層より粘性が強い)  
 ⑨赤褐色土 (粘性、しまりあり)  
 ⑩茶褐色土 (粘性なし、しまりあり)  
 ⑪赤褐色土 (粘性なし、しまりあり。2mm大の白色粒子含  
 む)  
 ⑫赤褐色土 (粘性なし、しまりあり。2mm大の白色粒子含  
 む。ブロック状の黄褐色土を含む)  
 ⑬茶褐色土 (粘性、しまりあり)  
 ⑭赤褐色土 (粘性、しまりあり。白色粒子多く含む)  
 ⑮赤褐色土 (粘性、しまりあり。白色粒子を含む)  
 ⑯赤褐色土 (粘性、しまりあり。赤味を帯びる)  
 ⑰赤褐色土 (粘性、しまりあり)  
 ⑱赤褐色土 (粘性ほとんどなし。しまりあり。白色粒子を含む)

図 71 古市 22 号墳および埋葬施設 1 検出状況

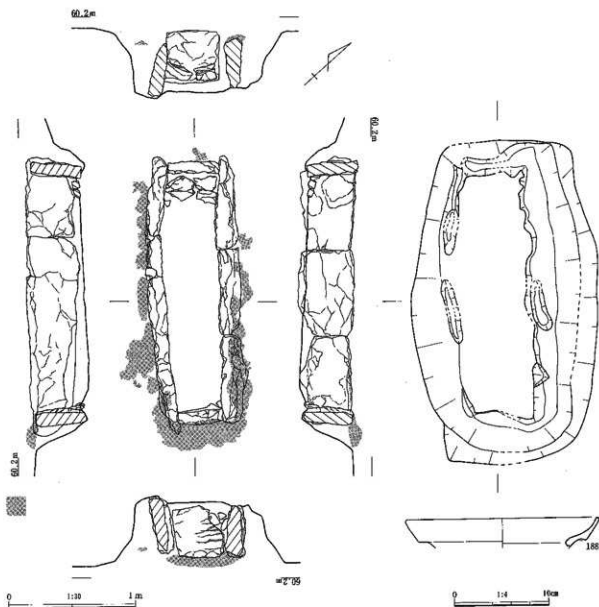


図72 古市22号墳埋葬施設1および出土遺物

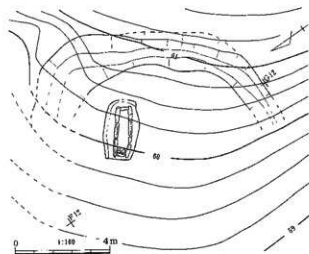


図73 古市22号墳調査前地形測量

蓋石は縦長の板石2枚、横長の板石1枚、さらに小さな縦長の板石1枚を用いているが、この小さな蓋石はもと、接している縦長の蓋石の一部が割れたものと考えられる。検出時の長さは2.2m、幅0.5～0.8mであった。また、蓋石と小口石、側石との間に隙間を塞ぐための粘土、さらにはその粘土中から0.1～0.2m大の割石が検出された。これらは東側の小口から両側石一面にかけて検出され、西側の小口では部分的にみられたのみであった。床面は、地山を削って形成しており、約5cmほど南東側が低く、貼床等は認められない。西側の小口付近から枕石と考えられる0.2m大の板石4枚が、床面直上で検出された。板石4枚をV字形に組み合わせること

によって枕としている。なお、石棺や充填用の石、枕に用いられた石は全て角礫凝灰岩である。

棺の掘り方は長さ2.6 m、西端幅1.0 m、東端幅1.05 m、最大幅1.46 m、深さ約0.4 mの隅丸長方形を呈する。小口石や側石の部分では、さらに溝状に低くなっている箇所があるが、掘り込みではなく石の重みによるものと考えられる。

#### 遺物出土状況および出土遺物 (図72)

周溝内埋土から弥生土層の壘(188)を検出している。棺内からは何も遺物は検出していない。壘は二重口縁で、凹縁は認められない。口縁立ち上がりの下段部分はあまり突出しておらず、外側へ直線的に立ち上がる。

#### 築造時期

周溝内埋土から検出した壘は形態的特徴から青木遺跡編年のⅢ～Ⅳ期にかけての資料と考えられ、出土状況からも22号墳の築造時期を示す資料とは言い難い。よって、22号墳の築造時期は不明である。(下江)

#### 古市23号墳 (図74・75、図版45)

調査地における丘陵尾根上の東端に位置する。墳頂部の標高は古墳群中最も高く、約63.50 mである。

墳丘は、後背部を周溝で区切り、埋葬施設を構築した後、盛土を施す構造である。土層断面、等高線図、周溝の形状等から東西8 m、南北11 mの不整形な円墳と考えられる。盛土(①層)は土層断面でわずかに認められるが、墳丘上面が削平されたためであろうか、全面にはない。

周溝は幅0.75～1.1 m、深さ約0.4 mを測る。墳丘南東側を弧状にめぐり、両端部の距離は約11.0 mである。また、周溝から判断される墳丘の主軸は、尾根筋に沿っている。

#### 埋葬施設1 (図75、図版45-3・4)

墳丘上より埋葬施設を1基検出した。墳丘の中心ではなく、墳頂部西側のやや下がった位置で検出している。

墓壇の長軸はW 32.0° Nを向き、墳丘の主軸と若干ずれている。検出面で長さ2.33 m、東端幅0.45 m、西端幅0.5 m、最大幅0.57 mの平面形は隅丸長方形を呈する。深さは0.2～0.3 mで断面はU字形である。底面の高さは東側のほうが約0.1 m高い。また、検出面で墓壇中央から0.2 m大の割石を検出した。①層に含まれ、標石の可能性はある。

墓壇内埋土は幾つかの土層に分けられるが、底面付近の⑬層は粘性が大変強く、色調も他の土層と大きく異なることから、棺の設置等に関連する土層と思われる。形状等から、設置された棺は割竹形の木棺と推測される。

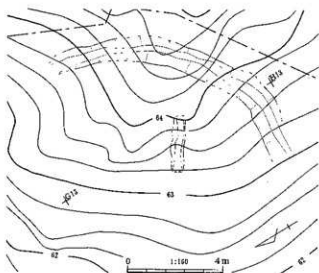


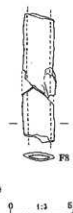
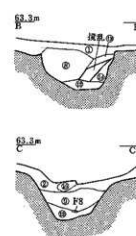
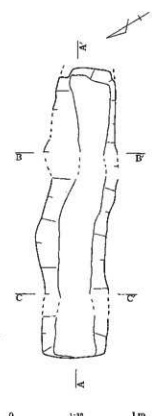
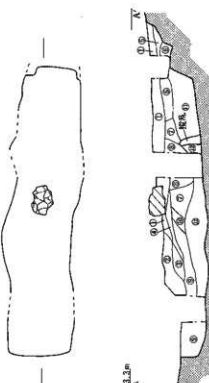
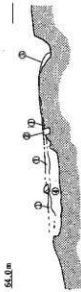
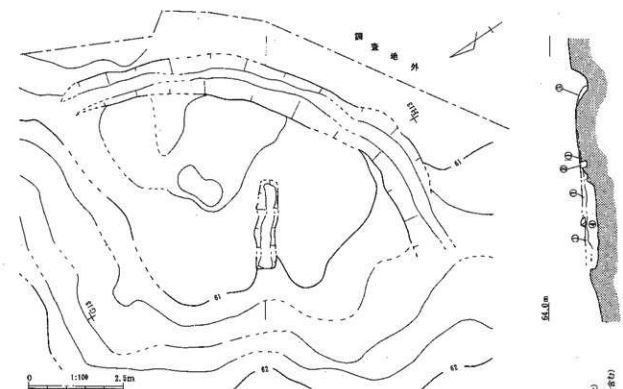
図74 古市23号墳調査前地形測量

#### 遺物出土状況および出土遺物 (図75、図版45-5)

墓壇西端付近(C-C'ライン)から鉄剣の破片(F8)を検出している。C-C'ライン土層断面の⑨層と⑬層の間に突き刺さるような形で検出しており、ほぼ原位置と思われる。この他にも墳丘上面や周辺から土器片が出土しているが、細片のため詳細はわからない。

#### 築造時期

年代を示し得るような資料は検出できなかったが、そ



① 黒褐色土 (しまり非常に強い、白色層多く含む)  
 ② 赤褐色土 (しまり強い、白色層少ない)  
 ③ 暗褐色土 (しまりやや強い、黄・白色層含む)  
 ④ 暗褐色土 (しまり強く、粘性あり、白・褐色層含む)  
 ⑤ 暗褐色土 (しまり強く、白色層多く含む)  
 ⑥ 赤褐色土 (しまり強く、黄はほとんど含まない)  
 ⑦ 暗褐色土 (しまり、粘粒ともに強く、黄をほとんど含まず)  
 ⑧ 暗褐色土 (しまりやや強く、白・褐色層含む)  
 ⑨ 暗褐色土 (しまり強い、白・黄色層含む)

⑩ 暗褐色土 (しまりやや強く、粘性あり、白・黄・褐色層含む)  
 ⑪ 暗褐色土 (⑦より色調暗い)  
 ⑫ 暗褐色土 (しまり強く、粘性も強い、白・黄・褐色層多く含む)  
 ⑬ 暗褐色土 (しまり弱く、粘性あり、黄ほとんどなし)  
 ⑭ 暗褐色土 (⑤より明るい色調)  
 ⑮ 暗褐色土 (②よりしまり弱い)

- ① 黒褐色土 (しまり非常に強い、白色層多く含む)
- ② 赤褐色土 (しまり強い、白色層少ない)
- ③ 暗褐色土 (しまりやや強い、黄・白色層含む)
- ④ 暗褐色土 (しまり強く、粘性あり、白・褐色層含む)
- ⑤ 暗褐色土 (しまり強く、白色層多く含む)
- ⑥ 赤褐色土 (しまり強く、黄はほとんど含まない)
- ⑦ 暗褐色土 (しまり、粘粒ともに強く、黄をほとんど含まず)
- ⑧ 暗褐色土 (しまりやや強く、白・褐色層含む)
- ⑨ 暗褐色土 (しまり強い、白・黄色層含む)

- ⑩ 暗褐色土 (しまりやや強く、粘性あり、白・黄・褐色層含む)
- ⑪ 暗褐色土 (⑦より色調暗い)
- ⑫ 暗褐色土 (しまり強く、粘性も強い、白・黄・褐色層多く含む)
- ⑬ 暗褐色土 (しまり弱く、粘性あり、黄ほとんどなし)
- ⑭ 暗褐色土 (⑤より明るい色調)
- ⑮ 暗褐色土 (②よりしまり弱い)

図75 古市23号墳填土、埋葬施設1検出状況および出土遺物



图 76 古市古墳群完掘状況 (1)



図77 古市古墳群完掘状況 (2)

の位置から古墳群の中でも最古段階の可能性がある。

(下江)

(註)

1. 米子市教育委員会編 1994『米子市埋蔵文化財地図』米子市教育委員会
2. 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

表6 古市古墳群

番号	遺跡名	墳形	直径(全長)	高さ (後円部直径)	備考
②	古市1号墳	円墳			
	古市2号墳	円墳			
	古市3号墳	円墳			
⑫	古市4号墳	円墳			
⑩	古市5号墳	円墳			
⑨	古市6号墳	円墳	10	1	
⑨	古市7号墳	円墳	7	0.8	
⑧	古市8号墳	前方後円墳	30	2.5(14)	石棺材露出
⑦	古市9号墳	円墳			
⑥	古市10号墳	円墳	13	2	
⑤	古市11号墳	円墳			
③	古市12号墳	円墳	15	1	
④	古市13号墳	円墳	20	2.5	横穴式石室天井石露出
①	古市横穴墓				

米子市教育委員会編 1994『米子市埋蔵文化財地図』をもとに作成。  
番号は第1章図1に対応する。

表7 玉製品観察表

遺物 番号	棒圓	図版	地区遺構	器種	材質	色	最大長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ(g)	備考
J1	54	カラ 1 5-2	17号墳埋葬施設1	玉	ガラス	濃水色	0.5	0.6	0.6	0.207	
J2	54		17号墳埋葬施設1	玉	ガラス	濃水色	0.5	0.55	0.6	0.213	
J3	54		17号墳埋葬施設1	玉	ガラス	濃水色	0.6	0.55	0.55	0.184	
J4	54		17号墳埋葬施設1	玉	ガラス	濃水色	0.5	0.55	0.5	0.187	ふらいで検出
J5	54		17号墳埋葬施設1	玉	ガラス	濃水色	0.45	0.55	0.55	0.184	ふらいで検出
J6	54		17号墳埋葬施設1	玉	ガラス	濃水色	0.45	0.55	0.5	0.177	ふらいで検出
J7	54		17号墳埋葬施設1	玉	ガラス	濃水色	0.45	0.5	0.55	0.130	ふらいで検出
J8	54		17号墳埋葬施設1	玉	ガラス	濃水色	0.55	0.6	0.45	0.151	
J9	54		17号墳埋葬施設1	玉	ガラス	濃水色	0.4	0.55	0.5	0.131	ふらいで検出
J10	54		17号墳埋葬施設1	玉	ガラス	濃水色	0.45	0.55	0.5	0.124	
J11	54		17号墳埋葬施設1	玉	ガラス	濃水色	0.4	0.5	0.5	0.117	
J12	54		17号墳埋葬施設1	玉	ガラス	濃水色くすんだ色合い	0.35	0.5	0.4	0.095	ふらいで検出
J13	54		17号墳埋葬施設1	玉	ガラス	濃水色透明感あり	0.45	0.4	0.35	0.106	ふらいで検出
J14	54		17号墳埋葬施設1	玉	ガラス	濃水色	0.4	0.45	0.45	0.095	ふらいで検出
J15	54		17号墳埋葬施設1	玉	碧玉	にぶい緑灰色	0.15	0.4	0.4	0.037	
J16	54		17号墳埋葬施設1	玉	青瑪瑙	緑灰色	0.15	0.45	0.45	0.095	
J17	54		F3・F層	碧玉	碧玉	緑灰色	1.3	0.7	0.7	0.894	

表8 第5章 土器観察表

遺物番号	持回	地区遺構	種類	器種	口径	器高	特徴	胎土 焼成	色調	備考
160	43	14号墳	弥生土器	甕	*14.8	△5.0	口縁部6条凹線、内面頸部下ケズリ。内外面赤彩。頸部穿孔。	やや粗	褐色	
161	43	14号墳	弥生土器	高坏	*15.4	△2.9	脚部外面6条の凹線。内面ケズリ後ナデ。	やや粗	淡黄褐色	
162	43	14号墳	弥生土器	甕	*14.0	△4.2	口縁ナデ。外面無文。	やや粗	淡褐色	
163	43	14号墳	弥生土器	甕	*13.2	△3.1	口縁ナデ。外面無文。頸部外面にハケム。内面にケズリ。	やや粗	暗黄褐色	
164	46	15号墳	土師器	高坏	12.9	10.9	口縁内溝。頸部内外ナデ。脚との接合部タテハケ後ナデ。胴部内面シボリ後ナデ。外唇タテナデ。坪部外面および脚端部に黒斑。外面赤彩。	密良好	橙褐色	
165	46	15号墳	土師器	高坏	13.5	11.4	頸部は164に同じ。坪部内面にもハケム痕。脚部外面褐色。遊滅のためか赤彩見られず。	密良好	橙褐色	
166	46	15号墳	土師器	高坏	13.5	11.7	頸部は164に同じ。脚部器壁がやや厚め。外面赤彩。	密良好	橙褐色	
167	46	15号墳	土師器	高坏	14.0	12.2	頸部は164に同じ。口縁内面は頸部をまわって唇部にやや凹凸がある。坪部外面および脚端部に黒斑。外面赤彩。	密良好	橙褐色	
168	46	15号墳	土師器	高坏	14.0	11.0	頸部は同じ。坪・脚部の接合部は唇部に褐色痕がみえる。外面赤彩。	密良好	橙褐色	
169	46	15号墳	土師器	高坏	14.0	11.5	頸部同じ。坪部内外面に僅かにハケム痕。坪部ややいびつ。脚部がすぼり外れした。外面赤彩。	密良好	橙褐色	
170	46	15号墳	土師器	高坏	13.5	10.9	頸部同じ。脚端部内面は折り返したように段状を呈す。外面赤彩。	密良好	橙褐色	
171	46	15号墳	土師器	壺	8.4	15.1	体部は横内球状を呈し、直立する口縁をもつ。頸部はやや外反。胴部および口縁内面ナデ。胴部内面はハケム。内外面赤彩を施す。	密良好	橙褐色	
172	46	15号墳	須恵器	壺	12.6	5.4	内外面回転ナデ。つまみが付く。	密良好	暗灰色	
173	46	15号墳	須恵器	はそう	10.4	10.6	内外面回転ナデ。外面に波状文が3ヶ所通る。	密良好	暗灰色	
174	46	15号墳	須恵器	壺	12.6	5.3	内外面回転ナデ。上部ケズリ。	密良好	暗灰色	
175	46	15号墳	須恵器	坏	10.9	5.5	内外面回転ナデ。底部ケズリ。	密良好	暗灰色	
176	49	16号墳	土師器	高坏	16.7	12.5	体部腹面し、唇部は突帯状になる。全体的に腐蝕。坪部ヨコナデ。脚部外面ナデ。内面下縁はハケム。	やや粗	橙褐色	
177	49	16号墳	弥生土器	甕	*16.8	△3.8	口縁内外ナデ。頸部内面ケズリ。外面口縁一部にスス付着。	やや粗	黄灰色	
178	49	16号墳	弥生土器	壺	*15.4	△3.0	縁やかに外反し、口縁端部はやや厚気味。外面ナデ。内面はミガキ。	やや粗	褐色	
179	49	16号墳	弥生土器	甕	*17.6	△4.0	口縁外面に凹線を施し、後上半ナデ消し。内面はミガキ。	やや粗	淡黄褐色	
180	49	16号墳	土師器	甕	*16.4	*27.1	体部は球状。口縁は直線的に外反。口縁内面斜方向。内面ヨコハケ後ナデ。体部外面上半はハゲ後ナデ。下半はあまりハゲずナデか。内面はケズリ。外面体部中位以下スス多く付着。	やや粗	淡黄褐色	良好
181	49	16号墳	土師器	甕	*16.5	25.1	体部は直線状を呈し、口縁はほぼ直線的の外反。口縁へ頸部外面ナデ。内面ヨコハケ後ナデ。頸部以下ケズリ。外面はハゲ。体部外面スス付着。	やや粗	淡黄灰色	良好
182	54	17号墳	弥生土器	底部	—	△2.6	外面へラミガキ。底部近くはヨコナデ。内面ケズリ。外面黒色化。	粗	淡黄褐色	
183	56	16号墳	弥生土器	甕	*16.6	△4.4	全体に腐蝕し、頸部不明。口縁外面に致急の凹線。	粗	褐色	
184	56	16号墳	土師器	小型壺	—	△5.5	体部球状を呈し、頸部で屈曲。外面ナデ。最大径下側に爪痕か?内面はけずり。外面底部に黒斑。	やや粗	外)褐色 内)橙褐色	
185	68	20号墳 埋葬施設 2	土師器	壺	—	△14.1	頸部は直線状を呈し、口縁部も2/3を欠く。体部中位以下欠損。頸部下は半分ほど打ち欠く。頸部に突帯通る。口縁ナデ。体部内面ケズリ。	粗	淡褐色	
186	69	20号墳 埋葬施設 3	土師器	甕	*15.7	△3.6	全体に腐蝕し、頸部不明。口縁内外面ナデか。内面頸部以下ケズリ。	粗	淡黄褐色	
187	70	21号墳	土師器	坏	*12.2	5.1	体部丸帯をもち、口縁部は内溝する。口縁内外面ナデ。底部内面へラミガキ。外面は未頸部。底部外面に黒斑。	粗	橙褐色	良好
188	72	22号墳	土師器	甕	*20.0	△3.0	全体腐蝕。唇表面も大部分割離。	粗	暗褐色	数



## 第6章 奈良時代後期～平安時代初頭の調査

### 第1節 概要 (図78)

この時期の主な遺構は谷1区にほぼ限定され、IVおよびVI層下面において検出した(図10)。遺構数は少ないが、斜面上方を削り平坦面をつくりだすテラス状遺構が主体である。IV層下面で検出したものは標高40mあたりに集中し、それより上方には展開しない。このテラス面には多くのピットがあったが、明確に建物などを構成するような規則的な配列は確認できなかった。また同層中から須恵器・土師器の土器類、石製品のほか、製鉄関連遺物がみられた。しかし鉄滓などの製鉄関連遺物と鉄製品は合わせて150点ほどしかなく、また生産に係るような遺構、痕跡もなかった。そのため調査地内において鉄生産が行われた可能性は低いと考えられる。周辺では、調査地北側約2.5kmはなれたところに、奈良時代の鉄生産遺構・遺物が検出されている陰田遺跡群があり、その関連性も考えていく必要がある。

なおIV層上層であるIII層中からも当該期の遺物が出土した。下面で20基ほどのピットを検出した。また尾根2区上にも同期の遺物包含層(V層)があるが、数基のピットを下面にて検出し、少量の遺物が出土したにすぎない。層位的にV層はIV層に連続するものと考えられる。(中森)

### 第2節 VI層下面検出の遺構と遺物

谷1区のF3～5グリッドを中心に検出した。VI層はIV層の下にあり、0.1～0.3mの厚さで地形に沿って堆積している。谷部上方はF6グリッド西側まで広がっており、それより上はテラス10などIV層下面のテラス群により削平されたと考えられる。

遺構はF5グリッドを中心に約30基のピットが集中するが、これらの中で明確に建物構造を想定しうるような配列は見出せなかった。しかしある程度直線的に並ぶという傾向は窺える。このピット群西側には並行する溝群、さらに西にテラス9がつけられる。しかしこの地域にはピットがまったくない。

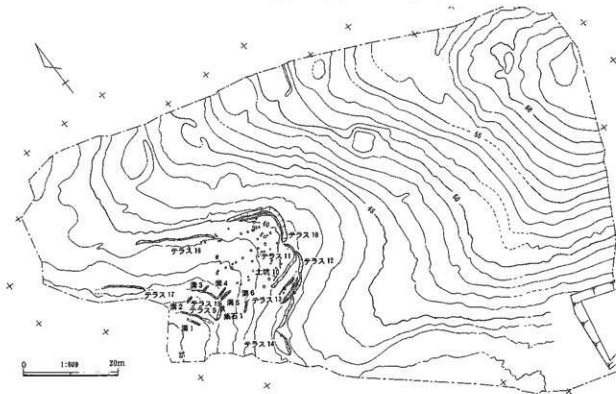


図78 奈良時代後期～平安時代初頭遺構分布

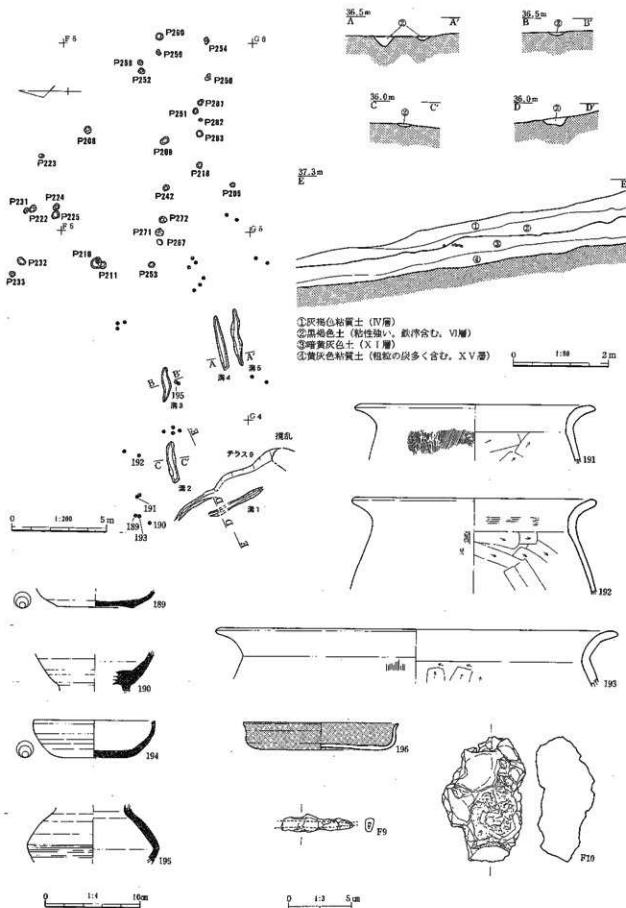


図79 VI層下面遺構群および出土遺物

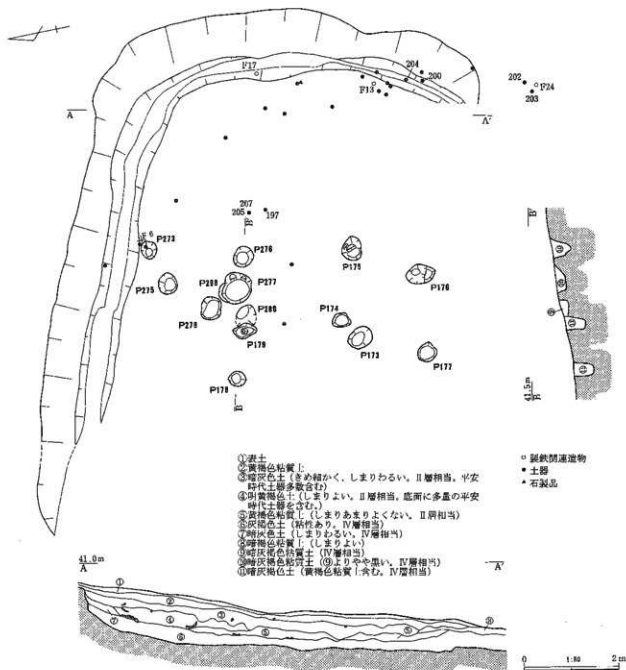


図80 テラス10

遺物はピット群よりも溝、テラス地域に集中する。189・194は須志器杯身、190は高台の付く須志器杯で底部器壁が厚い。191～193は土師器甕、196は赤色塗彩された土師器杯である。またわずかに鉄製品(F9)、鉄滓(F10)が出土している。(中森)

テラス9・溝1 (図79)

VI層下面、F・G3グリッドにおいて検出した。標高36mほどのところにつくられる、幅約7mのテラスである。その南側は後世の溝により擾乱されている。またテラス壁と並行する溝1は長さ約3.3mを測り、幅0.7m、深さ0.18mほどであった。(中森)

溝2～6 (図79)

F3～4グリッドに位置する、谷と並行してつくられる溝である。溝4・5は直線的で近接して並行するもので、前者が長さ1.4m、深さ0.2m、後者は長さ1.5m、深さ0.1mほど、幅はどちらも約0.2mを測る。溝3は溝4より1.5mほど北に位置する。若干S字状に屈曲し、長さ0.9m、幅0.15m、深さ0.05mを測る。1m

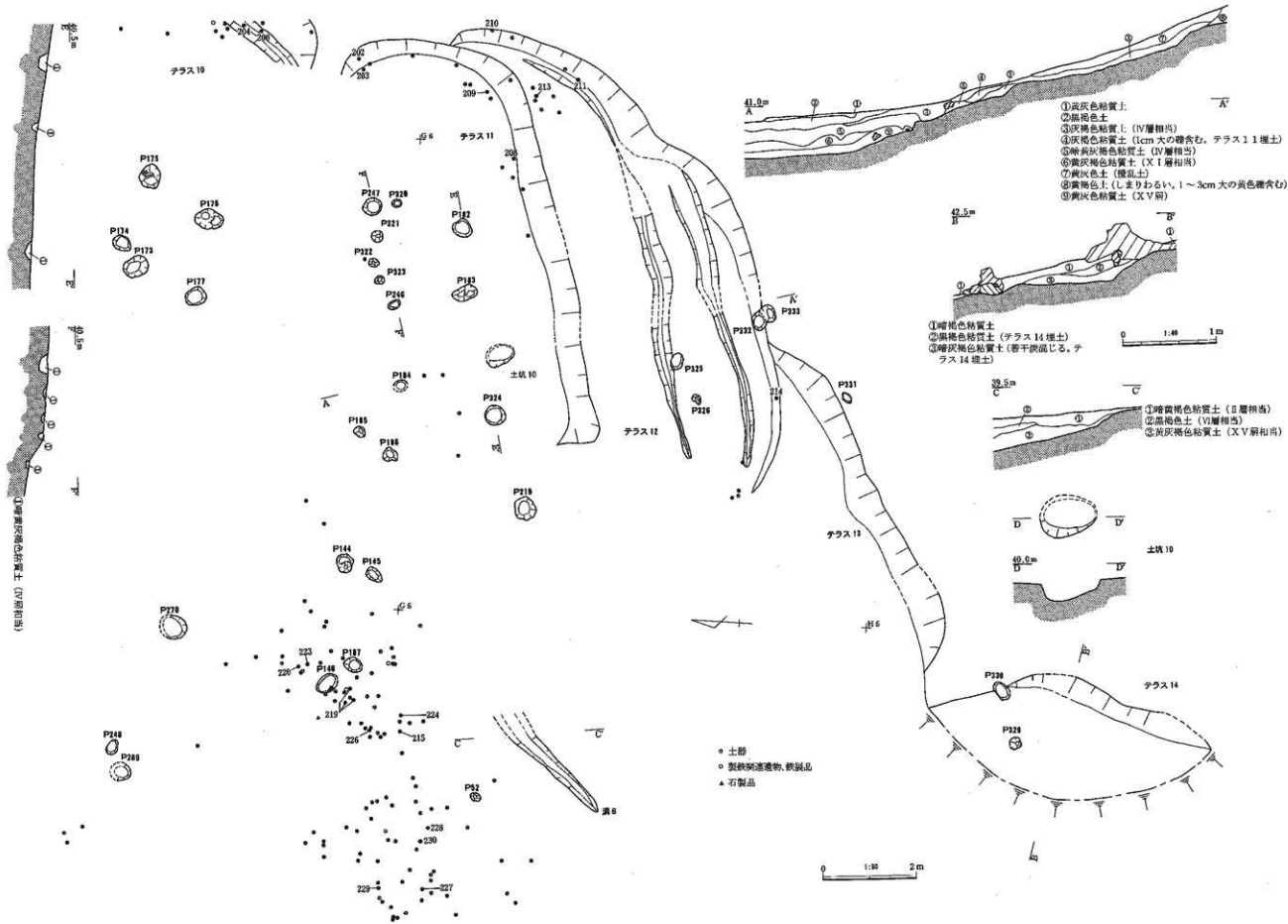


図 81 テラス 10～14、土坑 10

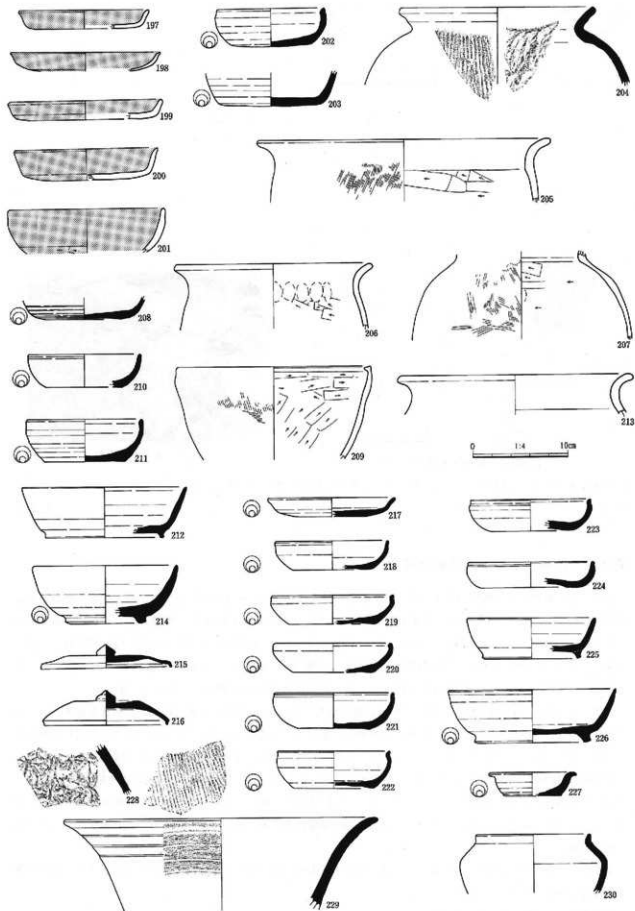


図82 テラス10～14およびIV層出土遺物(1)

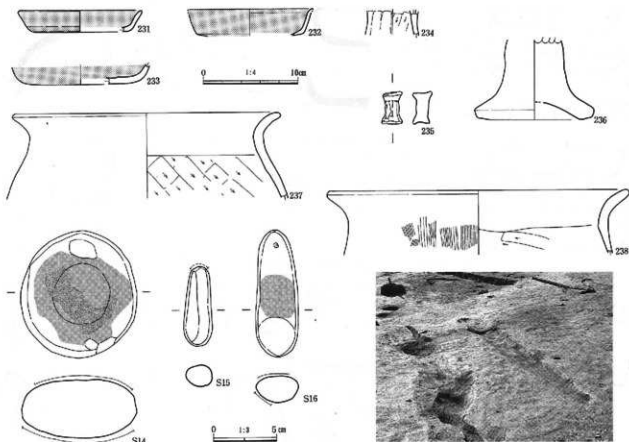


図83 IV層出土遺物(2)

Fig.7 溝4・5 完掘(南東から)

ほど西に溝2があり、おそらくここに続くものと考えられる。溝2は長さ1.1m、幅0.2m、深さ0.05mほどであった。(中森)

### 第3節 IV層下面検出の遺構と遺物

IV層下面の遺構群は本時期の主体である。検出した遺構はテラスが8基あったほかは、溝・土坑・集石とも1基ずつしかない。テラスは谷1区の南北両面をカットしてつくられる。北側はテラス10およびそれに西接するテラス16があるが、同一面に拡がっている。それに対し、南側はテラス11から13へかけて3段の階段状を呈す。さらにテラス13の西、尾根2区の先端部にテラス14が位置する。またテラス11の西側に1段下がってテラス15があり、ほぼ同一レベルにそれから北へ続きそうなテラス17が尾根1区側につくられている。

テラス10・11の平坦面は広く、奥行き8m、幅が最大で16mほどを測る、東辺の狭い台形状を呈する。この面でピットを30基ほど検出したが、明確に建物構造の痕跡を示すような配列は見出せなかった。ただし直線的に並ぶものは数列検出している。またピットの大きさはテラス10側が長径0.4～0.6mほどであるのに対し、テラス11側は長径0.2～0.4mほどと小さい。なおテラス10・11とテラス12～14は層位的にみて前後関係にある。すなわち前者埋土上面に後者がのり、テラス11上では土坑10が掘り込まれている。しかし断面では部分的に確認できたものの(図81A-A')、平面的にはこれらの関係は不明瞭であった。そのためこれら遺構群をここでは一括して扱う。

遺物はテラス10・11の広い平坦面上にもあるが、そこより1段下がったテラス15、および両テラスの間に位置する溝6北側周辺に集中していた。

#### テラス10(図80、図版48-2・49)

平安時代の土器溜下層に位置し、谷1区における当該期の遺構中もっとも奥まったところにある。斜面東およ

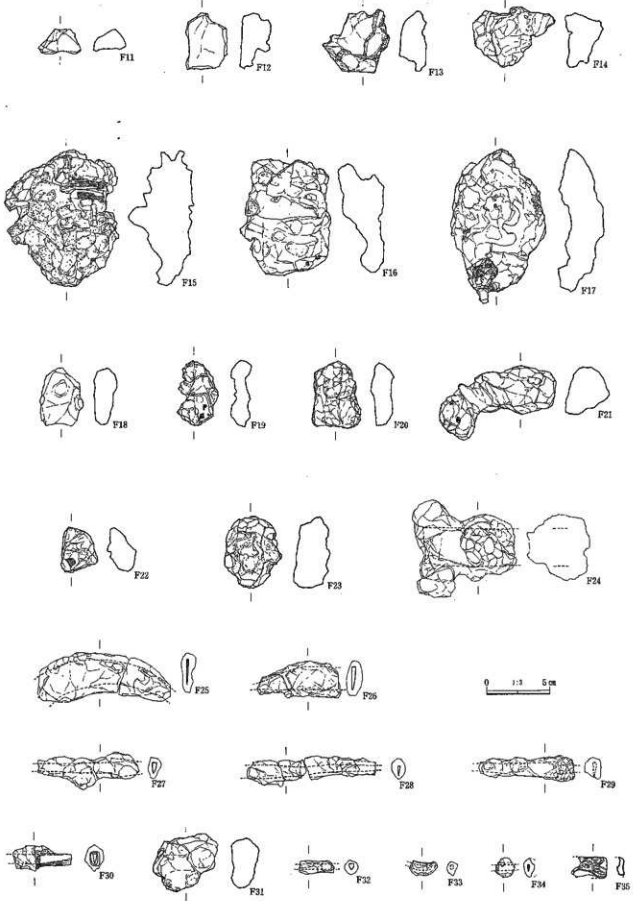


図84 IV層出土製鉄関連遺物・鉄製品

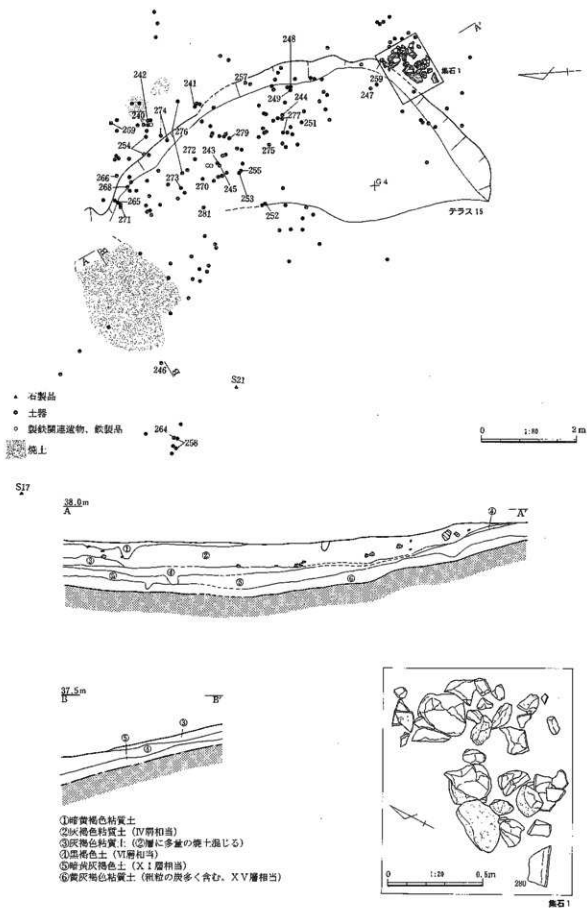


図85 テラス15、築石1



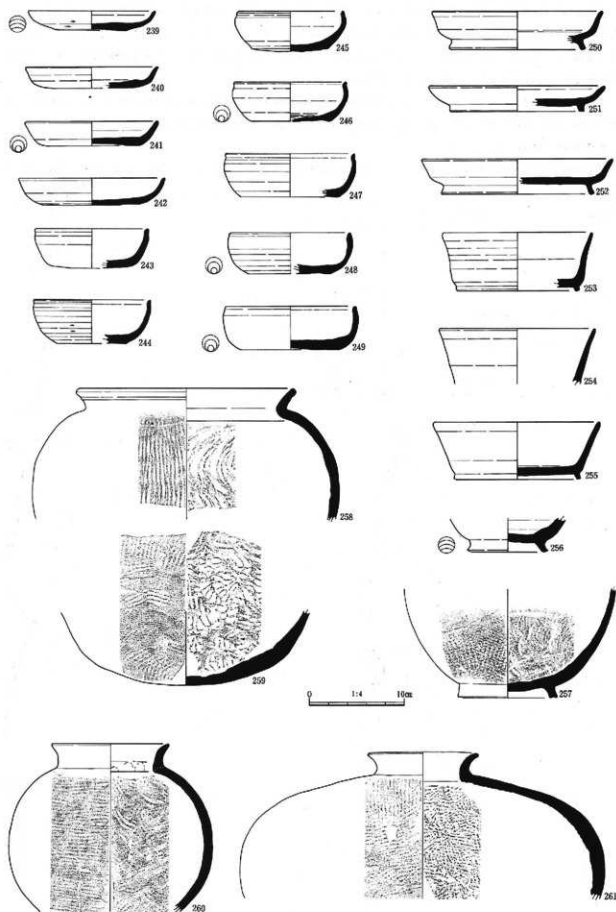


図 86 テラス 15 出土遺物 (1)

び北側をカットしつくり、逆L字状を呈する。壁面立ち上がり部分には同壁溝が巡り、北壁の高さは約0.8mであった。平坦面中央部には、東壁にほぼ並行するようにピット群がある。長径0.4～0.6m、深さ0.3～0.6mほどを測る。これらピット群はテラスの中央に位置し、そのピットの規模も大きい大型建造物の柱穴の可能性はあるが、それを復元しうる配列は見出せない。

遺物は東壁面付近から主に出土している。197～201は赤色塗彩の土師器。204は須恵器甕である。205・206は土師器甕。207は弥生時代後期の甕である。また製練滓（F13）、椀形鍛冶滓（F17）が出土した。（中森）  
テラス11（図81、図版47-2）

谷1区南および東側斜面をカットしてつくり、南壁面に並行するようにピット群が2列あるが、南列のピット

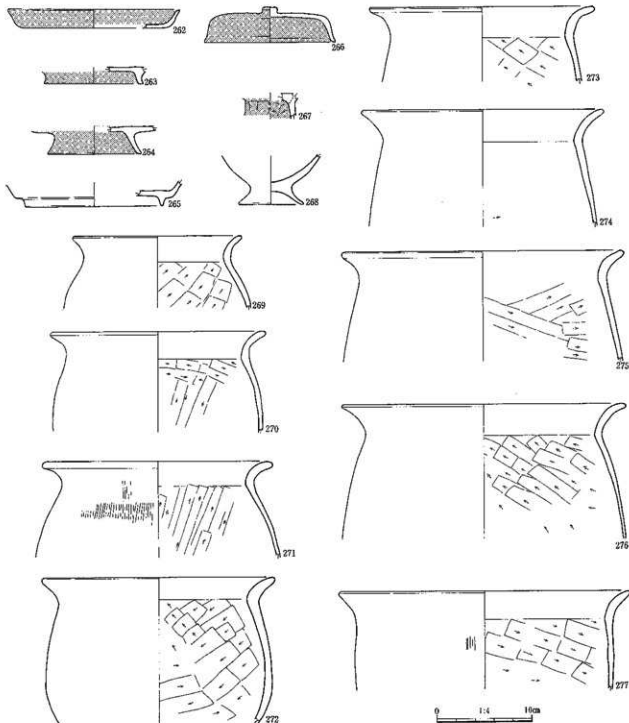
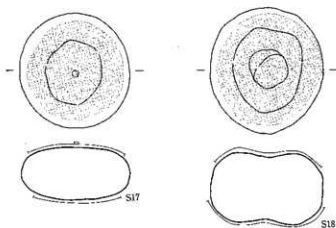
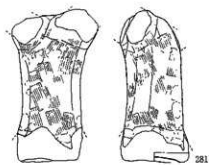
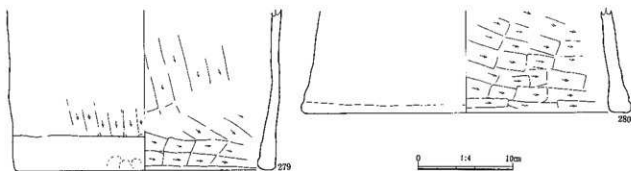
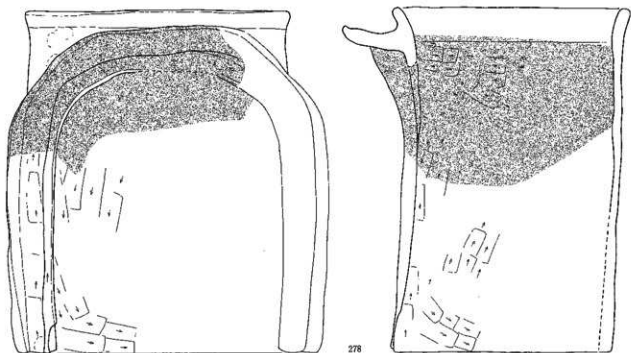


図87 テラス15出土遺物（2）



0 1:4 5m

図88 テラス15および集石1出土遺物

トは長径0.4～0.5mほど、深さ0.2～0.3mを測る。それに対し北列は径0.2～0.3mほど、深さ0.1～0.15mほどと小型のものが多く、遺物はテラス10同様東壁付近にみられる。202・203・208は須恵器杯、209は土師器の鉢か、F 24は含鉄鉄滓である。

さらにテラス15へかけての平坦面から遺物が出土している(図82～84)。須恵器は217～230で、217は皿、218～224は杯。225・226は高台の付くものである。227は小型の皿、229は甕、230は壺。231～233は赤色塗彩土師器皿・杯、234は脚部面取の高杯。236は支脚、237・238は甕である。砥石(S 15・S 16)・磨石(S 14)も出土している。また製鉄関連の遺物として製鉄滓(F 11・F 12・F 15)、鍛冶滓(F 14・F 16・F 18～F 23)があったほか、鏝(F 25・F 26)や刀子(F 27～F 30)および不明鉄製品(F 31～F 34)、黒鉛化木炭(F 35)が出土した。(中森)

#### 土坑10(図81)

テラス11の南列付近にあり、長径約0.6m、深さ0.2mを測る。東側はトレンチにより切られるが楕円形を呈

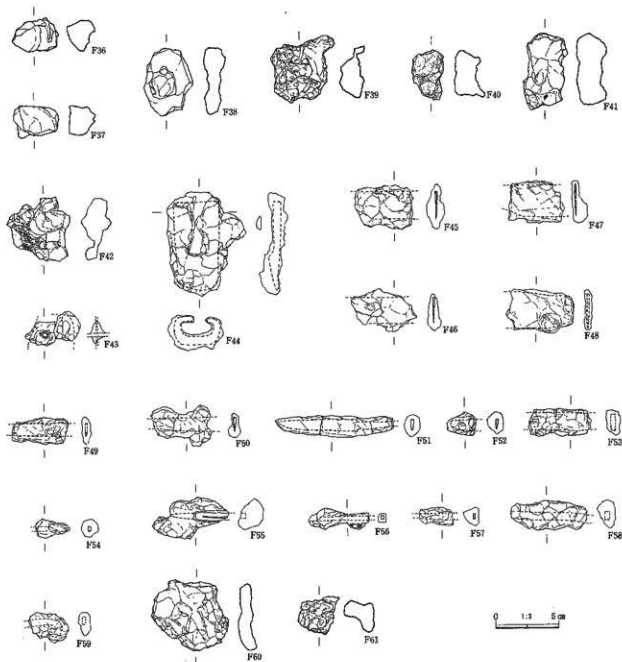


図89 テラス15出土鉄関連遺物

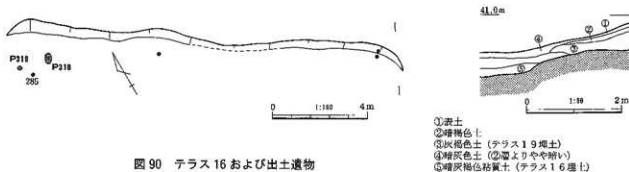


図90 テラス16および出土遺物

していたと考えられる。テラス11埋土の⑤層上面から掘り込まれている。

(中森)

## テラス12 (図81、図版47-2)

テラス11の1段上に位置する。層的にはテラス11の埋土⑤層上に堆積する③層を埋土とすることから(A-A'), 同テラスより後出のものである。南側斜面をカットしてつくられるが、中央部東西方向に溝があり、さらに南にもう1条あることから、2基のテラスであろう。しかし埋土が同じで切り合い関係がみられなかったため、同一遺構として扱った。西側が緩やかなカーブを描くことからそのあたりが端部と考え、長さ約11.4mを測るものと思われる。

遺物は東壁面周辺に分布する。210・211は須恵器杯、212は高台付のものである。213は土師器壺。(中森)

## テラス13 (図81、図版47-2)

テラス12の西側で、1段上にある。長さは約7.8mで、南側斜面をカットする。明確な平坦面の範囲はわからなかった。溝やピットも検出していない。(中森)

## テラス14 (図81)

尾根2区先端部に位置し、西を向く。床面はテラス13と同一面である。長さは約6.0mを測る。ピットは2基あったのみである。(中森)

## 溝6 (図81)

テラス11と15の間に単独で位置し、北東から南西方向を向く直線的な溝である。約2.4mの長さを検出し、幅0.4m、深さ0.1mほどを測る。(中森)

## テラス15 (図85～89、図版46-2・50・51)

谷部下方のG4杭周辺に位置し、弥生時代後期の遺物包含層であるXI層を掘り込んでつくられるテラスである。ほぼ等高線のカーブに沿って斜面を削るが、壁面は非常に緩やかな傾斜である。南北の長さ約8.0m、奥行は3.6mほどを測る。遺物は床面および埋土からまとまって出土し、ヴァリエーションも豊富である。図80には須恵器を掲げた。239～242は皿、243～249は杯である。底部糸切りあるいはその後ナデ消すものがある。250～252は高台付皿。口縁端部がまっすぐなものとやや外反するものがみられる。253～255は高台付杯で底径が大きく、体部が直線的なものである。256・257は高台付壺か。258・259は壺、260・261は横瓶である。259は内面にいわゆる車輪状タキ痕を残す。須恵器の皿・杯類に比べると土師器のそれは圧倒的に少ない。262は皿、263～265は高台付皿ないし杯、266はつまみがつく蓋である。267は脚部面取りの高杯、265をのぞき赤色塗彩を施すが、265も磨滅したため確認できないだけであろう。268は低脚杯か。269～277は甕である。いずれも頸部から直線的に外反する口縁部をもつが、体部はやや丸みをもつものと直線的なもの2タイプがある。278・279は甕、281は支脚である。278は底内外面に煤が付着し、黒斑化している。また土鏝が3点(282～284)まとまって出土した。磨石が2点(S17・S18)あったほか、製鉄関連遺物も出土している。製錬滓(F36・F37)、鍛冶滓(F38～F41)、含鉄鉄滓(F42)に加え、鉄斧(F44)、鎌(F45～F48)、刀子(F49～F52)、不明鉄製品(F43・F52～F59)などの製品がある。さらにF60は炉壁、F61は炉壁溶解物であった。鍛冶滓などよりも斧・鎌などの農具類や、刀子のような日常的に使われる製品が目立つ。(中森)

集石 1 (図 85)

テラス 15 壁面の屈曲部にある。壁面上面に位置し、拳から人頭大の礫で構成される。掘り方はない。礫に混じって礫片 (280) が出土した。 (中森)

テラス 16 (図 90)

テラス 10 に西接するものである。長さは約 16.0 m を測るが、上面は平安時代のテラス 19 に切られ、全体の規模は不明瞭である。遺物は埴 (285) が出土している。内外面がミガカれる。古墳時代のものか。 (中森)

テラス 17 (図 91、図版 46-1)

尾根 1 区の南側斜面につくられ、中世後期のテラス 29 に切られている。南側はそれ以降の削平を受けており、規模は長さ約 9.2 m であることしかわからない。壁の高さは 0.8 m ほどが残存する。立ち上がりに周壁溝があり、遺物はこの溝付近から出土した。286～288 は須恵器である。286 の皿は口縁部に煤が付着するもので、灯明皿と考えられる。287 は皿、288 は壺あるいは横瓶である。289・290 は赤色塗彩の土師器皿、291 は高台のつくもの。292 は支脚で、内面に刺突が密に施される。293 は甕。やや口縁が曲線的なものである。 (中森)

Ⅲ層出土遺物 (図 92)

あまり広範囲かつ厚く堆積する層ではないが、その割には遺物が多い。294～298 は須恵器杯、299 は甕である。300 は壺、301 は短頸壺で底部は静止糸切り。302 は杯であるが、土師器と見間違えるほど軟質なものである。303～307 は土師器で、303 は支脚、304～307 は甕である。308・309 はおそらく同一個体になると思われる甕。復元高は 55cm ほどになろうか。さらに柄形鍛冶滓 (F 62～F 64)、鏝状鉄製品 (F 65) が出土した。 (中森)

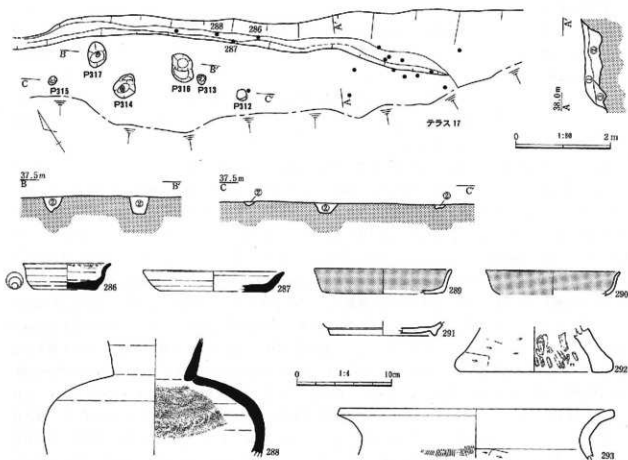


図 91 テラス 17 および出土遺物

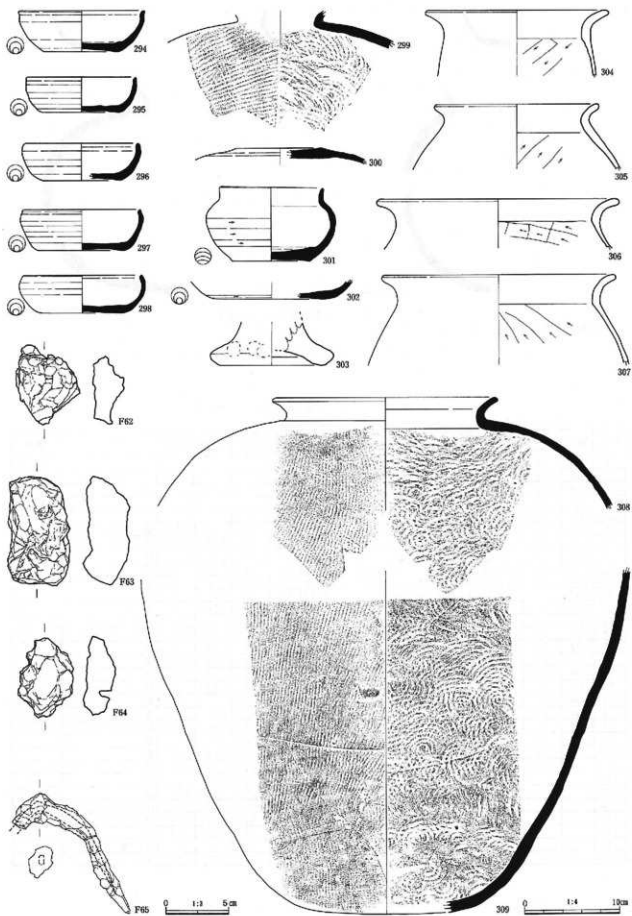


図92 III層出土遺物

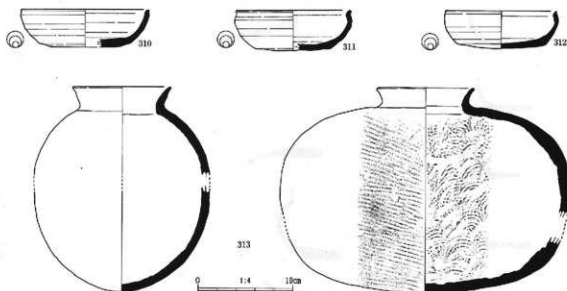


図93 V層およびその他の層出土遺物

その他の層出土遺物 (図93)

310～312は須恵器杯、313は横瓶。311はⅡa層、312・313はV層出土である。(中森)

表9 奈良時代後期～平安時代初頭ピット一覧

PNo	地区	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	埋土	備考	P.N o	地区	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	埋土	備考
10	G6	23	20	11	IV		117						欠番
12	G6	27	20	9	IV		118						欠番
13	G6	26	23	18	IV		119						欠番
14	G7	22	-	6	IV		120						欠番
15	G7	27	23	19	IV		121						欠番
16	G7	21	-	5	IV		139	F4	49	42	26	III	
17	G7	29	24	15	IV		140	G4	28	24	8	IV	
18	G6	53	40	20	IV		144	F4	38	36	10	IV	
19	G7	42	30	16	IV		145	F5	36	25	12	IV	
20	G7	32	32	10	IV		146	F4	51	38	16	IV	
21	G7	39	28	13	IV		147	F5	27	27	15	VI	
22	G7	35	27	10	IV		148	F5	24	21	19	III	
23	G7	30	26	19	IV		149	F4	40	35	38	III	
24	G7	24	24	28	IV		150	F4	25	21	7	III	
25	G7	23	20	13	IV		151	F4	53	47	17	III	
26	G7	18	18	16	IV		152	E4	29	26	23	III	
52	G4	17	18	6	IV		153	F4	44	39	17	III	
53	G4	36	30	23	IV		154	F4	34	33	24	III	
54	G4	26	21	31	IV		155	F5	20	19	28	III	
55	G4	20	20	43	IV		156	F5	42	34	26	III	
56	G4	31	29	21	IV		157	F5	31	26	13	III	
57	G4	35	27	12	IV		158	F5	38	30	10	III	
73	F5	24	20	8	黄褐色土	IV相当	159	F5	28	25	9	III	
85	C3	64	41	23	VI		160	F5	37	35	26	IV	
110							161	F3	35	34	10	IV	
111							162	F3	30	28	31	IV	
112							163	F3	28	23	15	IV	
113							164	F3	40	33	24	IV	
114							165	F3	37	33	13	IV	
115							166	E5	58	55	15	T15-3層	
116							167	F4	60	42	17	IV	焼土含む



P.No	地区	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	埋土	備考	P.No	地区	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	埋土	備考
168	F4	55	40	16	IV	焼土含む	252	F5	36	32	36	VI	
169	F4	48	40	33	Ⅲ		253	F5	40	33	15	VI	
170	F4	39	30	15	Ⅲ	黄褐色泥	254	F6	26	26	20	VI	
171	F4	40	40	11	IV	灰化物混	255	F3	32	27	17	VI	
172	F5	25	26	11	IV		256	E4	52	46	35	VI	黒色土、灰、焼土混
173	F5	53	43	41	IV		257	F4	28	-	23	VI	
174	F5	31	38	12	IV		258	F5	28	23	12	VI	
175	F5	55	43	43	IV		259	F5	29	29	17	VI	
176	F5	58	43	29	IV	黄褐色粘質土を含む	260	F6	42	39	14	VI	
177	F5	43	39	21	IV	*	261	F5	32	32	21	VI	
178	F5	37	35	32	IV	黄褐色粘質土を含む	262	F4	31	-	18	VI	
179	F5	48	31	42	IV	黄褐色粘質土を含む	266	F4	32	27	20	VI	黒褐色土
180	E5	43	39	29	IV	黄褐色粘質土を含む	268	F4	36	-	34	IV	暗褐色粘質土
181	F4	61	41	62	Ⅲ	黄褐色泥	269	F4	38	-	24	IV	
182	G5	41	39	23	IV	石	270	F4	50	-	48	IV	
183	G5	53	32	29	IV	石	271	F5	48	-	40	IV	黒褐色土、黄色土混
184	F5	29	27	15	IV	YT24ベルト	272	F5	35	-	19	VI	黒褐色土
185	F5	27	22	12	IV		273	F5	50	41	49	IV	
186	F5	29	23	13	IV		274	E5	38	33	6	IV	
187	F4	42	32	38	IV		275	F5	43	40	43	IV	
188	G3	38	32	15	IV		276	F5	72	42	45	IV	IVよりやや黒い
189	G3	33	27	20	IV		277	F5	70	58	32	IV	IVよりやや黒い
190	G3	29	24	33	IV		278	F6	30	23	17	IV	
191	G3	31	22	22	IV		279	F5	51	41	10	IV	
192	E4	20	-	26	VI		280	F5	46	-	18	IV	
203	F4	25	18	4	焼土		281	F5	32	30	8	VI	
204	F3	37	30	15	IV		282	F5	21	18	14	VI	
205	F5	28	23	16	VI	暗灰色土、暗褐色土	283	F5	34	30	10	VI	
208	E5	34	-	40	VI		289	F4	44	-	18	VI	
209	F5	43	37	11	VI	褐色粘質土暗灰色土混	290						欠番
210	F4	58	40	15	VI		302	I6	20	18	18	V	
211	F4	39	34	15	VI		303	I6	28	26	20	V	
212	F3	53	44	18	IV		304	I6	38	30	28	V	
213	E4	44	-	23	VI		305	J6	48	45	24	V	
214	E4	55	50	28	VI	しまりわるい	306	J7	42	35	24	V	
215	E4	26	-	10	VI		308	J10	39	37	32	IV	灰少混
216	E4	44	42	12	VI								
217	E4	38	34	21	VI								
218	F5	31	28	9	VI		312	E3	24	23	11	IV	暗褐色粘質土
219	F5	50	48	40	VI		313	E3	23	21	6	IV	
220	E5	22	-	34	VI	T10ベルト中	314	E2	56	48	12	IV	
221	E4				VI	欠番	315	E2	22	20	8	IV	
222	E5	39	35	10	VI		316	E3	64	42	33	IV	やや赤味を帯びる
223	E5	23	22	9	VI		317	E2	56	42	28	IV	
224	E5	33	30	10	VI		318	E3	47	32	10	焼土	焼土混
225	E5	45	42	8	VI		319	E3	17	16	4	IV	焼土混
226	E5	28	27	14	VI		320	F6	23	22	11	IV	
228	F5	45	38	18	VI		321	F6	26	24	14	IV	
229	F5	40	28	25	VI		322	F6	28	20	10	IV	
230	F5	30	22	15	VI		323	F6	25	21	10	IV	
231	E5	25	13	7	VI		324	F6	47	42	16	IV	
232	E4	51	40	12	VI		325	G5	36	33	45	IV	暗褐色土(黄色土混)
233	E4	31	30	9	VI		326	G5	28	19	19	IV	暗褐色土(黄色土混)
234	G4	33	29	33	VI	灰混	327	G3	32	32	8	IV	
236	F4	37	35	13	VI		328	G4	36	27	25	IV	
246	F5	25	22	7	IV		329	H4	29	27	11	IV	
247	F4	42	40	13	IV		330	H4	46	30	10	IV	
248	F4	35	15	17	IV		331	H5	31	21	19	IV	
249	F5	34	26	-	VI		332	G5	40	35	12	IV	
250	F5	38	30	30	VI		333	G5	35	33	15	IV	
251	F5	34	32	31	VI								



平安時代			中世		表振品		
窯壁 製鐵所	製鐵滓 炉内滓	樹形鐵渣滓 (中)	含鉄(中)	樹形鐵渣滓 含鉄渣滓	鐵製品	樹形鐵塊 含鉄L(●)	鐵製品

図95 製鉄関連遺物構成図(2)

表10 鉄滓・鉄製品観察表

本観察表は穴澤義功氏の指導のもと、中森が作成した。  
 ここには本報告資料についても観察結果を出している。「遺物番号」が報告書掲載資料№に対応する。

No.	遺物番号	探窟	地区 探窟・遺跡	器種	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	紐着 度	メタル 度	重量 (g)
1	F1	18	E5、墓穴 住居跡2	鉄鍔	先端側面部の一部が欠落。後者は新しい欠け、基部は平坦気味。	2.4	5.1	0.5	4	△	12.2
2	F2	18	E5、墓穴 住居跡2	鉄滓	楕圓形舟形、上下並とも平坦。先端部は弧状の丸味をもつ。舟中央、室定厚の先端で積層品か。	6.7	4.4	2.3	8	●(○)	124
3	F3	18	E5、墓穴 住居跡2	鉄滓?	一見鉄滓片様。確實に鉄とは断定できず。	2.9	1.2	1.1	5	△	2.6
4	F4	18	E5、墓穴 住居跡2	鉄製品	左側部が立ち突く。錆化激しい。線片?	3.2	3.1	1.2	2	△	15.4
5	F5	38	F5、X I 層	鉄滓	左側部欠落。鉄酸化物が層状に厚い。刀子若しくは小刀類の刃部遺物あり。 形状の不明確。底部は極めて鋭。表面全体に黄褐色の酸化物。鉄とすべし刀子類または積層品など。	3.7	1.7	0.6	1	なし	8
6	F6	38	F5、X I 層	不明	一見鉄滓またはオニイテ。基部が僅かに隆起。大半は酸化土状。鉄の可能性をもつ。	5.2	2.9	1.5	2	なし	244
8	F8	75	G12.23号墳 埋葬施設1	鉄剣	先端、基部とも欠落。細身の鉄剣。錆は広め。二辺の線部は鋭い欠け。	10.2	2.7	0.7	4	△	32.2
9	F7	80	D5.19号墳 埋葬施設1	鉄鍔	やや大形の鍔形。中子部は僅かに鈍化し、より欠落。	2.8	10.8	0.7	3	△	25.6
10	F11	84	E4、IV層	鍔形鉄滓 (流動滓)	上面流動状。下面には伊勢粉をかきこむ。積層は緩密でやや風化。	2.0	3.4	1.6	2	なし	25
11	F38	89	F3.テラス15	鍔形鉄滓 (流動滓)	小単位の流動滓が重層。表面はやや紫紅色。断面から下面には伊勢粉を塗きかきこむ。	2.7	3.7	2.2	1	なし	23
12	F37	89	F3.テラス15	鍔形鉄滓(伊外流出滓)	一面鋭形。上面の一部は紫紅色。表面から下面の半分は積層。錆はやや紫黒色。	2.6	3.8	2.1	2	なし	33.8
13	F12	84	F5、IV層	鍔形鉄滓(伊外流出滓)	上面はやや平坦な流動状。色錆はやや紫紅色。厚はやや紫黒色が大きく。基部がキラキラ。下面は伊勢粉の圧痕。	4.4	3.3	2.5	3	なし	59
14	F13	84	F8.テラス10	鍔形鉄滓(伊外流出滓)	上面はやや平坦な流動状。一部に肥した欠孔。表面はやや紫黒色。下面は少と伊勢粉を多量にかきこむ。	5.1	5.3	2.1	2	なし	71.5
15	F10	78	G4、VI層	鍔形鉄滓(伊外流出滓)	断面の流動滓が重層。やや欠孔が目立つ。下面には伊勢土が多量に塗布。流出液中で形成と推察。	9.9	6.6	4.6	2	なし	338
18	F3	IV層		鍔形鉄滓 (流動滓)	薄皮状の流動滓表皮破片。表面は紫紅色。	1.3	3.1	0.7	1	なし	8
17	J6.18-1層			鍔形鉄滓 (流動滓)	きれいな流動滓の小片。内部に伊勢粉。	2.2	1.7	1.7	1	なし	10
18	F62	92	F4、IV層	鍔形鉄滓	鍔形鉄滓の先端破片。上面は浅い弧状。下面は鍔形鉄滓。本末はやや厚身の早稲な鍔形鉄滓か。	6.7	5.1	2.5	2	なし	80.5
19	F14	84	F5、IV層	鍔形鉄滓	平とよりの裏の鍔形鉄滓の鍔形破片。上面は木皮痕を獲す形状。下面は流動状の滓の塗布と木皮痕。上面の一部に河口遺物層。	4.8	8.5	3.0	2	なし	99.5
20	F15	84	F5、IV層	鍔形鉄滓(伊内浮々)	一見鍔形鉄滓の伊内浮層。木皮痕が大きく。鍔形鉄滓としてはやや異質。鍔形鉄滓の伊内浮層の可能性も稀。	10.9	8.1	5.2	3	なし	358
21	F63	92	G4、II層	鍔形鉄滓	しかしら、鍔形鉄滓の中核破片。基部がやや水で下層は左右に伸びる形状。	8.7	5.0	3.7	5	なし	242
22	F18	84	G4、IV層	鍔形鉄滓	小型の鍔形鉄滓が作業中につき動かされた可能性大。大きき三層からなる。表面全体に酸化土状。	8.2	7.2	3.6	5	なし	262
23	F17	84	F8.テラス10	鍔形鉄滓	半円形気味の鍔形鉄滓。上下並ともザリム状の表面。左側部には流動状の滓がかかると。この部分のみ紫黒色。	12.2	7.5	3.6	2	なし	334
24	F38	89	F3.テラス15	鍔形鉄滓	鍔形鉄滓の先端破片。表面はやや紫黒色。基部がキラキラ。下面は伊勢粉の圧痕。	5.3	3.9	1.7	5	なし	40.4
25	F18	84	F4、IV層	鍔形鉄滓	全体に酸化土物に覆われる。手前側部は鈍厚の可能性大。	4.8	3.5	1.8	2	なし	29.2
26	F64	92	G4、II層	鍔形鉄滓	上下並ともゆるやかな弧状をした裏側の鍔形鉄滓。鍔形の7割方が埋没。内部に木皮痕を獲す。形成不十分か。	10.2	4.4	2.1	3	なし	68
27	F3	IV層		鍔形鉄滓	二片片。内部は紫黒色が目立つ。下面に肌色の鍔形鉄滓の伊内浮。	5.0	4.1	2.5	3	なし	75.5
28	F3	IV層		鍔形鉄滓	中核破片。基部がやや発達し、部分的に寛重り。	4.8	3.1	2.2	3	なし	29.6
29	F3	VI層		鍔形鉄滓	中型の鍔形鉄滓の破片か。コブ状の突出部をもつ。水洗不良。	7.3	5.2	4.8	6	なし	136
30	F3	黒褐色土		鍔形鉄滓	扁平小型の鍔形鉄滓。上面は紫紅色。	2.2	2.7	2.1	6	なし	21
31	F3.T31-1層			鍔形鉄滓	下面もきれいな面を有す。	4.5	2.9	1.4	4	なし	32.8
32	F3	IV層		鍔形鉄滓	錆化土砂に埋もれた鍔形鉄滓? 破片。水洗不良。	3.5	4.8	2.5	5	なし	44.2
33	F3	IV層		鍔形鉄滓	扁平小型の鍔形鉄滓。№31にやや似る。下面は平坦。	4.0	3.4	1.7	4	なし	32.2
34	欠落										
35	F3	IV層		鍔形鉄滓	鍔形鉄滓の中核破片。上下側並とも不規則で木皮痕が目立つ。下面には鍔形鉄滓の伊内土敷布。	5.0	3.1	2.8	4	なし	70
36	F4	IV層		鍔形鉄滓	鍔形鉄滓の基部破片。やや粗土質で厚み多し。	3.6	2.8	2.2	2	なし	24.8
37	F4	IV層		鍔形鉄滓	扁平に延びる鍔形鉄滓。下面は粉状土上面は不規則なへこみ。やや水で下層。	7.9	4.0	1.8	2	なし	60
38	F4	IV層		鍔形鉄滓	中型の鍔形鉄滓の先端破片。厚みも多少しっかりしている。	7.5	6.2	4.0	4	なし	168
39	F4	IV層		鍔形鉄滓	小径の鍔形鉄滓。付着土砂が厚く。下面には伊内土多量。底部不明。	3.8	3.8	2.6	3	なし	36.8
40	F4	IV層		鍔形鉄滓	中核破片。側面三角と下面は緩密。鉄色やや紫。	3.3	3.7	2.3	3	なし	34.4
41	F4	IV層		鍔形鉄滓	扁平な鍔形鉄滓破片。上面はゆるやかな弧状。下面は粉状土。	3.5	2.8	2.0	3	なし	25.2
42	F4	IV層		鍔形鉄滓	さわめて扁平な鍔形鉄滓の基部破片。上下並とも木皮痕あり。	4.4	3.1	1.5	3	なし	20.2

鉄滓・鉄製品観察表

No.	遺物番号	種別	地区 層位・遺構	器種	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	磁質 度	メタル 度	重量 (g)
43			F4,IV層	碗形鋳造滓	形状の不規則な碗形滓片。上下面ともほとんど碗形形態をもたない。不規則な突出部をもつ。	5.7	5.2	2.1	3	なし	71.5
44	欠番										
45			F4,IV層	碗形鋳造滓	小型ながらきれいな形状をもつ。下面は碗形で厚さ土と約等しい。やや半円形の形態。	7.6	4.5	2.6	1	なし	94
46			F4,IV層	碗形鋳造滓	3片が接合。上面は波動状、下面は縁色で突出。二片は縁部浮腫。	3.6	5.6	4.2	5	なし	112
47			F4,IV層	碗形鋳造滓	小径りの碗形鋳造滓。後面の一部が欠ける。水洗不良。	5.1	4.3	2.3	4	なし	51
48			F3,VI層	碗形鋳造滓	やや比重の高い現状の滓。磁質は弱い。中型の碗形鋳造滓の割断面片か。	4.7	3.6	3.0	3	なし	67.5
49	欠番										
50			F4,IV層	碗形鋳造滓	碗形鋳造滓の破片。やや密度が低い。	3.6	4.0	2.2	4	なし	27.2
51			F4,IV層	碗形鋳造滓	小型の碗形鋳造滓。内面片断は磁質。	4.3	3.9	1.7	2	なし	18
52			F5,II層	碗形鋳造滓	塊状の碗形滓片。底面に伊勢土層覆。	4.5	3.0	2.2	4	なし	28.8
53			F5,II層	碗形鋳造滓	比重の高い酸化土砂に覆われた碗形鋳造滓。割断二面は磁質。	5.9	5.9	3.5	4	なし	132
54			G2,灰褐色粘質土	碗形鋳造滓	小型で長手の碗形鋳造滓。磁質は赤褐色。厚さ小径りに約等しい。	5.6	3.6	2.4	4	なし	69
55			G3,IV層	碗形鋳造滓	碗形鋳造滓の割断面と破片。上面は波状。下面は本底色が濃い。	6.7	3.4	3.1	2	なし	95
56			G4,IV層	碗形鋳造滓	酸化土砂に覆われた碗形鋳造滓の中核の破片。滓の密度は高い。	5.9	4.5	2.3	4	なし	68
57			G4,III層	碗形鋳造滓	碗形鋳造滓の厚縁破片。厚みもち、下面の一部は磁質になる。部分的に伊土。	4.6	3.9	2.6	5	なし	88.5
58	F19	84	F4,IV層	鋳造滓	不定形の碗形滓片。内面が割断に木炭色が濃しい。上手側磁質に伊土の伊土。	5.6	3.1	1.6	3	なし	37
59	F39	89	F4,テラス15(2層)	鋳造滓	鋳造滓の伊勢表面に接して形成された鋳造滓。内部に多量の炭や本底色を帯びた磁質が混入している。	4.1	5.0	1.9	2	なし	42.4
60	F40	89	G4,テラス15(粘土層)	鋳造滓	密着な気孔の多い粘土質の鋳造滓。上面は平場で一部に凹凸と凹凸の塊がある。	3.9	2.6	2.4	2	なし	16.4
61			F5,II層	鋳造滓	縁色で覆った。縁部平直。	2.3	1.8	2.0	2	なし	10.8
62			F5,II層	鋳造滓	小型の碗形鋳造滓の割断破片か。割断はやや碗形。	4.3	2.3	1.8	3	なし	14.4
63			F5,II層	鋳造滓	土砂に覆われ縁部に僅かに浮腫がある。	2.3	1.6	0.8	2	なし	4.8
64			F4,IV層	鋳造滓	碗形鋳造滓の割断破片の可能性あり。上面中央以外に全体が酸化土砂に覆われる。	2.6	3.1	1.8	3	なし	14.2
65			F3,IV層	鋳造滓	縁色で覆われた。縁部平直。	2.1	1.8	1.1	3	なし	5.8
66	E-F5,22-1層		鋳造滓	1cm次の木炭灰が目立つ流動気味な滓。上面は紫褐色。	2.2	2.4	1.4	2	なし	11	
67			F4,IV層	鋳造滓	小径の滓。表面は土砂で水洗不良。	2.6	3.2	1.8	2	なし	11.4
68	F20	84	G4,IV層	碗形鋳造滓(含鉄酸化)	一見含鉄の含鉄の滓。下面が大きく欠落し、上手に僅かに碗形形の側面が残る。磁質は磁質で放射線が生ずる。	5.3	3.8	1.8	9	△	55
69	F21	84	G4,IV層	碗形鋳造滓(含鉄酸化)	かきとけいこされた。裏面の含鉄の滓。表面は付着土砂。僅かに碗形の形状を認む。磁質は酸化土砂のため不明。	5.9	9.2	3.4	6	△	156
70	F41	89	F3,テラス15	碗形鋳造滓(含鉄酸化)	やや扁平。表面は土砂。一部は気孔の落ち縁化。磁質は強い。下面はやや凹凸あり。	6.1	3.5	2.3	7	△	57
71			E5,テラス19	碗形鋳造滓(含鉄酸化)	やや不規則な形状をもつ。部分的に厚縁や放射線がのぞく。厚縁より土層が露出。	4.3	5.2	3.1	4	△	66
72			F3,IV層	碗形鋳造滓(含鉄酸化)	酸化土砂に覆われた塊状の資料。滓の密度は高い。	4.7	4.5	3.8	5	△	91
73			F3,IV層	碗形鋳造滓(含鉄酸化)	扁平で小型の鋳造滓の上面破片。水洗不良。	4.6	3.3	2.1	6	△	35
74			F3,IV層	碗形鋳造滓(含鉄酸化)	含鉄の碗形鋳造滓の中核部破片。放射線が放射線。僅かに厚縁がのぞく。	4.9	3.8	3.0	5	△	59
75			F3,IV層	碗形鋳造滓(含鉄酸化)	土砂に覆われた滓片。水洗不良。詳細不明。	3.8	2.5	2.0	2	△	27
76			F4,T6-2層	碗形鋳造滓(含鉄酸化)	厚縁や割断れが目立つ塊状の資料。磁質には縁化物が残る。	4.5	3.7	2.6	5	△	55
77			F4,IV層	碗形鋳造滓(含鉄酸化)	小径わりには比重の高い含鉄の滓。放射線が放射線。	3.3	3.7	3.2	4	△	43.4
78			F4,IV層	碗形鋳造滓(含鉄酸化)	中型の碗形鋳造滓の割断破片。放射線や縁部れがやや目立つ。	4.7	4.2	3.5	6	△	85
79			F4,IV層	碗形鋳造滓(含鉄酸化)	二片が接合。小径りの碗形滓。磁質は全体が鉄酸化物。	3.5	4.4	2.8	5	△	64
80			F4,IV層	碗形鋳造滓(含鉄酸化)	含鉄の滓片。表面は酸化土砂。	4.2	2.7	1.8	5	△	23
81			F4,IV層	碗形鋳造滓(含鉄酸化)	厚みをもった含鉄の碗形滓片。表面は土砂が強い。	4.8	4.9	3.3	7	△	81
82			F5,II層	碗形鋳造滓(含鉄酸化)	含鉄の滓片。二片が接合。表面は鉄酸化物。	3.4	2.4	1.8	5	△	10.8
83			F5,II層	碗形鋳造滓(含鉄酸化)	放射線が目立つ含鉄資料。表面は分厚い酸化土砂。全体にゴツゴツする。	5.2	4.2	3.0	4	△	79.5
84			F5,T6-3層	碗形鋳造滓(含鉄酸化)	やや前者と似た資料。放射線はごく僅か。	5.4	4.2	2.4	6	△	75.5
85			G3,IV層	碗形鋳造滓(含鉄酸化)	比較的しっかりした含鉄の碗形鋳造滓。形状は不規則。縁部は小径面。	6.5	5.3	2.5	9	△	11.4
86			G3,IV層	碗形鋳造滓(含鉄酸化)	不定形の含鉄の滓。表面は酸化土砂。厚縁。縁部は酸化土砂。磁質は強い。	4.3	4.4	2.5	5	△	46.4
87-1	F22	84	F4,IV層	碗形鋳造滓(縁化)	上手が磁質。下面はきれいな碗形。水洗不良。	3.6	3.0	2.4	6	△	28.4
87-2	F23	84	F4,IV層	碗形鋳造滓(縁化)	ややゴツゴツした含鉄の滓。左側は縁部。上面中央に内部の磁質物がのぞく。	5.0	4.5	3.0	6	△	92.5
88	F42	89	F4,テラス15	含鉄滓	放射線と縁部が目立つ資料。二片に割れるが本来は一層体。一部に縁部をもち表面は磁質。構成が不明。	5.1	5.0	2.3	5	L(●)	56.5
89	F24	84	F3,テラス11	含鉄滓	不定形の含鉄の滓。比重が重く一部に縁部と放射線が放射線。本底は含鉄の碗形鋳造滓か。	7.7	8.2	4.9	8	L(●)	328

鉄滓・鉄製品観察表

No.	遺物番号	押印	地区 層位・遺構	器種	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	磁片 層	メタル 層	重量 (g)
90			F3,T31-1層	片鉄滓滓 (疑心)	鉄屑れが目立つ小さな薄片。	1.8	2.4	0.5	4	△	4.3
91			G6	片鉄滓滓 (疑心)	一見鉄屑を思わせる古鉄の滓。 断面に黒褐色の腐食。	2.2	3.7	1.7	4	△	8.1
92	F43	89	F3,テラス15	鉄製品 (釘かし?)	薄く鉄板を鍛造型に加工し、その中央部を細い丸状の柄にかかっている。一層の構造体か。	2.7	4.3	1.0	4	△	11.4
93	F44	89	F4,テラス15	鉄滓	やや鉄色の強い粉状のもの。表面は左右からの折り加工。右側先端は塊状。放射割れが深く入り始めている。	8.1	6.3	2.0	5	●(L)	136
94	F65	92	F4,Ⅲ層	鉄器(疑心)	ややひしげた足部が傾き気味の紐。足部片側は欠落。下面に土師器片露着。	9.5	9.3	1.9	2	△	40.2
95	F45	89	F3,テラス15	鐵	左右両端部が欠ける。切先部は古い割れ。基部は新しい痕跡。鉄部は層状の酸化。片刃?	3.5	4.7	1.5	6	△	22.8
96	F46	89	F3,テラス15	鐵	左右の両端部が欠ける。右側部は新しい割れ。左側部は古い割れ。資料は腐食し、断面に片状に割れる。32は腐食する可能性がある。	5.2	2.9	1.1	3	△	25.2
97	F47	89	F3,テラス15	鐵	線刃部中央付近の破片。右石は新しい痕跡。片刃部。	3.3	4.4	1.2	4	△	18.4
98	F48	89	F4,テラス15	鐵?	鉄基部の破片。折り返し部は不明確。切先部は欠落。金部に酸化土砂が広く付着状態がわかりにくい。	3.5	5.4	0.6	3	△	24.4
99	F25	84	F4,Ⅳ層	鐵	刀先の短い定規。2片に割れるがほぼ直形。左側は僅かな折り返し。	4.0	10.5	1.2	4	△	45.4
100	F26	84	F5,Ⅳ層	鐵?	断面に黒褐色の酸化土砂。切先部破片。両端部は欠落。全体に酸化土砂に覆る。	2.9	6.8	1.3	7	△	44.2
101	F49	89	F3,テラス15	刀子?	両端部欠落。刀平と推定されるが、竹筒等酸化土砂のため断面はよく見えず。表面は層状の酸化土砂に覆る。	2.2	4.6	0.8	3	△	8.9
102	F50	89	F3,テラス15	刀子?	こぶ状の鉄屑れと酸化土砂に覆われる。断面部に腐食。刀子と推定される。41と推定される。	2.9	4.7	1.0	5	△	22.2
103	F27	84	F4,Ⅳ層	刀子	3片に割れる柄部から刀部にかけての破片。両端部は欠落。鉄部が良く、刃割は腐食。	2.6	8.0	1.1	3	△	37.4
104	F51	89	F4,テラス15 欠落	刀子	小型の刀子。柄部側の端部が欠落。2片が接合。刃部は短く腐食。	1.7	9.2	1.2	5	△	21.1
105	F28	84	F4,Ⅳ層	刀子(特殊)	4片に割れる。柄部から刀部にかけての破片。43にやや近い形状。酸化土砂がコブ状に露着。	1.9	10.2	1.1	3	△	43.8
106	F29	84	F4,Ⅳ層	刀子	短長の刀子。両端部が欠ける。遺存するものは左側と右側部。上部にコブ状の酸化土砂。	2.1	7.5	1.3	2	△	8.9
107	F52	89	F4,テラス15	刀子	刀子切先部の小破片。裏面はやや薄い酸化土砂。	1.8	2.2	1.2	2	△	4.6
108	F30	84	F5,Ⅳ層	刀子(短形)	木部に刺さったまま遺存する刀子柄部。両端部が欠けている。木部の厚みは約3mm。全長は層状では不明。	2.0	4.6	1.5	3	△	8.4
109	F9	79	F5,Ⅲ層?	刀子?	柄部端部約1cmほどが折れ曲がる。両端部欠落。刃部が不明確。	1.5	5.8	0.8	2	△	8.6
110	F31	84	F6,テラス12	鉄器 (形状不明)	刀部以外の可能性もややあり。分厚い酸化土砂に覆われた塊状不明品。左側部に僅かに線跡がのぞく。	4.6	5.1	2.3	8	△	67
111	F53	89	F4,テラス15	鉄製品 (形状不明 炭素品?)	長方形の塊状の小破片。表面は凹凸が激しく、表面に放射割れがみられる。鉄部としては鉄製の可能性あり。	2.2	5.0	1.2	5	●(L)	27.6
112	F54	89	F3,テラス15	鉄器 (形状不明)	刀子柄状の鉄器片。表面には厚い酸化土砂。右側部が僅かに塊状。	1.5	2.7	1.4	2	△	4.5
113	F32	84	F4,Ⅳ層	鉄器 (形状不明)	断面方形の棒状鉄器片。釘の可能性あり。	1.2	2.8	1.1	2	△	3.9
114	F55	89	F4,テラス15	鉄器 (形状不明)	分厚いコブ状の酸化土砂に覆われた鉄器片。右側部に鉄部はよく見えず。断面は小丸りの丸形。	3.3	6.0	1.9	3	△	39.8
115	F56	89	G3,テラス15	鉄器 (形状不明)	酸化土砂のため不明。断面はたがが。	1.7	4.8	0.6	3	△	8.8
116	F57	89	G3,テラス15	鉄器 (形状不明)	断面長方形の棒状鉄製品。右側部は腐食。左側部は不明。	1.5	2.7	1.2	2	△	4.9
117	F58	89	F3,テラス15	鉄器 (不明、酸化)	大きく凹凸に反り違った不明鉄製品。表面の酸化土砂が厚く、折り曲げ、刀子切先部か。	2.3	6.0	1.4	6	△	26.4
118	F59	89	F3,テラス15	鉄器 (湯壺状)	酸化土砂に覆われた鉄器。先端部は湯壺状に内側に向かい膨らみ、まげられている。	2.1	3.3	1.0	5	△	10.4
119	F33	84	F4,Ⅳ層	鉄器(不明)	断面方形柱状の鉄器片。やや傾いた曲がる。酸化土砂に覆われ炭素品も不明。	1.1	2.2	0.9	3	△	2.8
120	F34	84	F5,Ⅳ層	鉄器(不明)	横断面がやや長方形の鉄器破片。右側部が大きく欠落。刀子柄の一部か。	1.5	1.5	0.9	3	△	2.6
121			E5,テラス19	鉄製品(細片不明)	酸化のため粉末化。	粉状			3	なし	19.8
122	F60	89	F4,テラス15	伊壁 (御治伊)	御治伊の伊壁表面破片。内面は酸化土砂に部分的に茶色。羽口左側破片か。御治伊跡土は灰色に炭化した僅かに砂質片。	5.6	6.1	1.5	2	なし	44.4
123			F4,Ⅳ層	伊壁 (御治伊)	半溶解の伊壁片。表面には木炭灰点。	3.0	3.4	2.3	2	なし	11.4
124	F61	89	F3,テラス15	伊壁溶解物	御治伊の伊壁溶解物。全体に発泡しガラス質。裏面は伊壁土の圧痕か。	3.0	3.2	2.4	2	なし	13.4
125			F4,Ⅳ層	伊壁溶解物 (炭素系)	ガラス質の伊壁溶解物。一部に黒炭屑が混入。	2.2	1.9	1.7	1	なし	4.5
126	F35	84	F5,Ⅳ層	炭化木炭	内部が炭化した外周部の小黒粉化した黒粉化木炭。広葉樹材か。断面は細くかたまり。炭化系か。	1.7	2.8	5.5	3	なし	2.8
127	F81	116	J7,溝12	伊壁 (御治伊)	一層構造。内面がガラス質に溶解。粘土はスけ入り。石灰質層存在。酸化土砂に覆われ炭素品も不明。	4.0	5.2	4.2	3	なし	75.3
128	F68	114	F5,土師器 (伊内津?)	伊壁 (伊内津?)	きれいな流動状。上半部にて肥した灰孔。下半部は伊壁片表面腐食。断面は酸化土砂に覆われ炭素品も不明。	7.5	7.1	2.9	1	なし	186
129	F83	116	K8,溝14	伊壁 (伊内津?)	酸化土砂。断面から上面は腐食。内側に木炭の炭屑。断面に炭屑が部分的に露着。結晶が発達し光沢もつ。	6.3	7.7	4.2	2	なし	342
130	欠番										

鉄滓・鉄製品観察表

No.	遺物 番号	採出 層位・遺構	地区・遺構	器種	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	磁器 層	メタル 層	重量 (g)
131	F06	9B	F4,テラス19	模形鋳造滓	まとまの鋭い模形鋳造滓の半欠品。上面や流動状。 下面は本品で凹凸や違い、割れは不規則。 2片接合。小型扁平な模形滓。 下面は粉屑層。	7.6	6.2	2.7	5	なし	136
132			F4, II層	模形鋳造滓	扁平な半面形をもつ模形滓。 割れは自然欠陥層。	5.2	3.8	1.8	3	なし	37
133			F4, II層	模形鋳造滓	扁平な半面形をもつ模形滓。 割れは自然欠陥層。	8.1	3.7	2.0	4	なし	52
134			F5,土器層 (2層)	模形鋳造滓	やや厚く、下部は流状の鋳造滓。全体に粘土質。 裏面には淡い赤褐色の塗布土。	8.4	5.8	3.0	4	なし	134
135	欠書										
136	F09	114	F5,土器層 (3層)	模形鋳造滓 (含鉄酸化)	表面にコブ状の融化物を突出。内部は不規則な 気孔が目立つ。割れに融化物。本来は流状。 赤錆の目立つ平面的な鋳造滓の滓。部分的に放射割れ。 欠陥は2cm以上ある。水洗不良。	7.1	6.8	4.5	6	H(O)	188
137	F07	101	F8,土坑14	含鉄鉄滓	高橋の鋳造滓に置かれた含鉄 の滓。内部には気孔が多く密度低い。 本来は模形鋳造滓か。	4.6	5.7	2.5	5	△	19.1
138	F70	114	E5,土器層 (3層)	含鉄鉄滓 (酸化)	下面に大きな割れ欠けが残る。裏面が各所から 割れ放射割れも発生している。鉄製品の可能性 もややかも。	2.2	3.7	1.4	4	△	15.2
139	F71	114	F5,土器層 (2層)	含鉄鉄滓 (酸化)	ごく一般的な形状の刀子。両端部が欠ける。背が ややややく。右側に僅かに割れを挟む。上面は割れ。 刀子またはカキ状の鉄製品。両端部 欠陥。横断面が楕円気味。体部は 直線状。表面にコブ状の融化物。土砂。	1.5	6.6	0.8	3	△	13.4
140	F72	114	F5,土器層 (3層)	刀子(特殊)	横断面がほぼ方形の鉄製品破片。 全体に赤錆に覆われ、融化物も 少量。融化物に置かれた鉄滓。刃部は丸味をもつ鋳造滓。 割れは直線状の折り返しをもち、中央部に隙隙。割れに直線 状の放射割れ強い。	5.7	7.8	4.1	8	H(O)	162
141	F73	114	F5,土器層 (3層)	刀子(特殊)	横断面がほぼ方形の鉄製品破片。 全体に赤錆に覆われ、融化物も 少量。融化物に置かれた鉄滓。刃部は丸味をもつ鋳造滓。 割れは直線状の折り返しをもち、中央部に隙隙。割れに直線 状の放射割れ強い。	1.9	8.4	0.9	2	△	26.2
142	F74	114	F5,土器層 (2層)	鉄器(工具?)	横断面がほぼ方形の鉄製品破片。 全体に赤錆に覆われ、融化物も 少量。融化物に置かれた鉄滓。刃部は丸味をもつ鋳造滓。 割れは直線状の折り返しをもち、中央部に隙隙。割れに直線 状の放射割れ強い。	1.6	3.7	0.8	3	△	9.1
143	F75	114	F5,土器層 (2層)	鉄滓	横断面がほぼ方形の鉄製品破片。 全体に赤錆に覆われ、融化物も 少量。融化物に置かれた鉄滓。刃部は丸味をもつ鋳造滓。 割れは直線状の折り返しをもち、中央部に隙隙。割れに直線 状の放射割れ強い。	5.7	7.8	4.1	8	H(O)	162
144	F76	114	F6,土器層 (3層)	鉄	やや幅広いの鉄製の鉄製品。小片に割れるが接合か。 端と下れは丸味に覆われ、融化物も 少量。融化物に置かれた鉄滓。刃部は丸味をもつ鋳造滓。 割れは直線状の折り返しをもち、中央部に隙隙。割れに直線 状の放射割れ強い。	3.9	9.2	0.9	3	△	28.2
145	F77	114	F6,土器層 (3層)	刀子	刀子の可能性がある。鉄滓が欠落。表面に厚い融化物。土砂。 断面から刃部にかけての部位。	1.8	4.5	0.4	3	△	10.8
146	F78	114	G4, II層	鉄滓 (形状不明)	不明な鉄製品。右側部は破面。横断面が楕円気味。 左側はコブ状の融化物。土砂のため不明。	1.7	4.5	0.8	2	△	10.8
147	F79	114	G4, II層	鉄器(三角形 不明)	扁平な三角形をした鋳造滓の刃先をもつ鉄製品。全体に流状に 反応し、上層は流状の融化物に反応。基部は流状に融化物となる。 刃の両端部。断面、両端部とも欠落。	6.8	3.3	1.8	3	△	27.6
148	F80	114	G6.22-1層	釘	下層に鉄製品。断面、両端部とも欠落。	3.3	1.2	1.1	3	△	3.4
149	F82	110	J9,テラス21 (2カ)	鉄製品 (2カ)	厚板の層状に成形された鉄製品。一種の器具か。 左側部は全面破面。右側部は鋭い方向に伸びる自然面。 小断面の扁平な鉄製品。2片に割れ。先端面は3と なる可能性大。基部から3.1cmの位置に1mm次の 目立つ。表面にコブ状の融化物が少量。 2片に割れるが同一面状。左側部は鋭い 刃の両端部。断面、両端部とも欠落。	3.8	3.1	0.9	3	△	14
150-1	F84	131	O4,黒石7周 辺	刀子(特殊)	扁平な三角形をした鋳造滓の刃先をもつ鉄製品。全体に流状に 反応し、上層は流状の融化物に反応。基部は流状に融化物となる。 刃の両端部。断面、両端部とも欠落。	2.8	13.7	0.8	4	△	32.2
150-2	F83	129	B3,テラス25	刀子(特殊)	扁平な三角形をした鋳造滓の刃先をもつ鉄製品。全体に流状に 反応し、上層は流状の融化物に反応。基部は流状に融化物となる。 刃の両端部。断面、両端部とも欠落。	8.1	1.9	0.3	3	△	7.9
150-3	F84	119	E6,テラス24	釘	釘の足部小破片。断面は直線状。 ややややく。右側部は欠陥。 足端部が僅かに突出。	4.8	1.2	0.8	2	△	3.4
151	F85	119	E6,テラス24	鉄器 (形状不明)	鋭い鋳造滓釘。頭はやや斜め。足端部 は直線に伸びる。表面に融化物。 ゆるやかな半円の曲がる釘体部。頭と 足端部欠陥。断面方形。	3.2	1.4	1.2	4	△	3.4
152	F86	129	B3,土坑17	鉄器 (形状不明)	ゆるやかな半円の曲がる釘体部。頭と 足端部欠陥。断面方形。	2.8	1.2	0.8	2	△	1.9
153	F87	129	C2, I層	釘	頭部が斜めにのびる釘の上半部。足部は欠陥。 上面には大きな自然欠陥層。	3.2	1.1	1.1	3	△	3.1
154	F88	129	C2,P.79	釘	釘の足部小破片。断面は直線状。 ゆるやかな半円の曲がる釘体部。頭と 足端部欠陥。断面方形。	2.5	0.75	0.7	3	△	1.8
155	F89	129	D2, I層	釘	釘の足部小破片。断面方形。 「I」字状に曲がる。	1.1	1.9	0.4	2	△	0.9
156	F97	137	L8,池伏遺構 ③層	鉄製品(鋳 造品円盤 状不明品) 鉄製品	放射割れと黒錆の強い板状の鉄製品。 上下にコブ状の融化物が突出。 融化物の可能性大。厚みはやや不安定。	3.9	4.7	2.3	4	△	34.2
157	F96	137	L8,池伏遺構 ③層	融化物 (形状不明)	融化物のため酸化した遺物。詳細不明。				3	なし	16.8
158	F92	129	B3,テラス25	模形滓 (流動滓)	きれいな流動状の模形滓。下面には粉屑層が覆われ。 厚は約0.8cm。8世紀後半の同様の原料と類似。	2.8	2.7	1.4	1	なし	17
159			E3,表土	模形鋳造滓	典型的な模形鋳造滓の半積層破片。やや二段層形 気味。下面はきれいな流状で、断面は直線。 しごかれた模形鋳造滓の断面破片。内部に縦横な 気孔。裏面は流状。僅かに赤錆土面。	9.3	6.4	3.9	3	なし	278
160	F95	134	C5,表土	模形鋳造滓	典型的な模形鋳造滓の半積層破片。やや二段層形 気味。下面はきれいな流状で、断面は直線。 しごかれた模形鋳造滓の断面破片。内部に縦横な 気孔。裏面は流状。僅かに赤錆土面。	7.2	6.2	3.3	4	なし	196
161	F98	138	F4,表層	模形鋳造滓	典型的な模形鋳造滓の半積層破片。やや二段層形 気味。下面はきれいな流状で、断面は直線。 しごかれた模形鋳造滓の断面破片。内部に縦横な 気孔。裏面は流状。僅かに赤錆土面。	2.7	3.7	2.4	4	なし	32.8
162	F99	138	F4	模形鋳造滓 (含鉄酸化)	両手の模形鋳造滓。2片接合。上面 不規則な流状。下部は流状で、断面は直線。 しごかれた模形鋳造滓の断面破片。内部に縦横な 気孔。裏面は流状。僅かに赤錆土面。	9.7	5.4	3.1	6	△	156
163	F100	138	E3	模造滓	両手の模形鋳造滓。2片接合。上面 不規則な流状。下部は流状で、断面は直線。 しごかれた模形鋳造滓の断面破片。内部に縦横な 気孔。裏面は流状。僅かに赤錆土面。	2.7	2.3	1.4	4	なし	13.6
164			F9	模造滓	ごく小さな鋳造滓。水洗不良。	1.7	1.9	1.0	4	なし	3.1
165	F101	138	F3	模形鉄塊	3片に割れるが接合。酸化が強く中核部は鋼が 目立つ。外周部は融化物。凹凸があるが、本来は 鋳造品。水洗不良。	7.7	6.3	3.6	5	特 (☆)	134
166	F90	129	O3	釘	やや鋭いついで釘。頭部と足端部は欠陥。頭部に向かい 流状で断面方形気味。足端に直線状。 鉄製品の融化物土砂または表面積。 裏面は大半が融化物土砂。	4.8	2.0	0.9	3	△	7.7
167	F81	129	D3	刀子	鉄製品の融化物土砂または表面積。 裏面は大半が融化物土砂。	2.0	3.2	0.5	4	△	4.3

鉄沖・鉄製品観察表

No.	遺物番号	博覧	地区 層位・遺跡	器種	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	磁器 厚	メタル 厚	重量 (g)
108	F102	138	F4	鉄器(棒状不明?)	断面方形の棒身の鉄製品。上端部は棒状、下端部は方柱状。表面には木皮由来の繊維痕が見立つ。	4.5	1.3	0.8	3	△	3.8
109	F103	138	F4	鉄	棒の基部断片。先端部には欠屑。基部の痕ははっきりしている。表面に少ない酸化皮と、きざしの痕。	3.3	6.5	1.0	3	△	23.4
170	F104	138	G3	鉄鏃	平直な三角棒状した基部の鉄製品。2片が接合。刃部をもつもの不明。キリコ様。	3.2	6.3	1.0	4	△	24

表 11 第6章 土器観察表

1. 量量について、復元値は\*、残存値は△で示した。単位はcmである

遺物番号	博覧	地区 遺構	種別	器種	口径	器高	特徴	胎土 焼成	色調	備考
189	79	テラス9	須恵器	杯	—	△ 1.85	底部回転糸切り。体部から上欠損。	密 良好	暗灰色	
190	79	テラス9	須恵器	高台付杯	—	△4.0	体部回転ナデ。底部器壁厚い。	密 良好	青灰色	
191	79	テラス9	土師器	壺	*25.6	△6.0	口縁部ナデ。口縁縁やかに外反。器壁厚い。頭部以下外面タテハケ。内面ケズリ。全体的に磨滅。	やや粗 やや軟	淡褐色	
192	79	テラス9	土師器	壺	*26.0	△ 10.1	口縁部ナデ。頭部以下外面タテハケ。内面ヨコハケ以下ケズリ。全体的に磨滅。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	
193	79	テラス9	土師器	壺	*41.4	△5.9	口縁部ナデ。頭部以下外面粗いタテハケ。内面ケズリ。頭部外面に明確な隆線。全体的に磨滅。	やや粗 やや軟	淡黄褐色	
194	79	VI層	須恵器	杯	*12.6	4.9	底部回転糸切り。全体磨滅。非常に復元不良で軟質。	軟 やや粗	淡黄褐色	
195	79	VI層	須恵器	壺	—	△6.2	回転ナデ。底部算盤玉状に中位に明確な隆線がある。	密 良好	青灰色	
196	79	VI層	須恵器	壺	*16.2	2.9	回転ナデ。底部へら切り後ナデ。全面に赤色塗彩。	密 良好	褐色	
197	82	テラス10	土師器	壺	*13.8	2.0	体部ナデ。底部はへらケズリ。内外面とも赤色塗彩後ミガキか。外面一帯に黒斑あり。	やや粗 やや軟	淡褐色	
198	82	テラス10	土師器	壺	*16.0	△2.0	内外面赤色塗彩。磨滅し調整は不明。	やや粗 やや軟	淡褐色	
199	82	テラス10	土師器	壺	*16.1	2.0	口縁部ナデ。底部へら切り後ナデ。内外赤色塗彩。	やや粗 やや軟	淡褐色	
200	82	テラス10	土師器	杯	*15.1	3.3	内外面赤色塗彩。磨滅し調整は不明。	やや粗 やや軟	淡褐色	
201	82	テラス10	土師器	杯	*16.4	△ 4.65	内面ナデ。外面上半はナデ、下半ケズリ。器壁厚い。内外赤色塗彩。	密 良好	暗灰色	
202	82	テラス11	須恵器	杯	*11.2	4.0	底部回転糸切り後ナデ。外面体部わずかに磨滅面つるつる感がある。	密 良好	灰色	
203	82	テラス11	須恵器	杯	—	△3.6	全体磨滅。底部回転糸切り後ナデか。粘土粒状のもの付着。	密 良好	淡灰色	
204	82	テラス10	須恵器	壺	*20.2	△8.1	口縁回転ナデ。体部外面平行。内面同心円タタキ。	密 良好	灰色	
205	82	テラス10	土師器	壺	*31.0	△6.6	口縁部ヨコナデ。外面頭部以下タテ方向ハケメ。内面はケズリ。	やや粗 やや軟	淡褐色	
206	82	テラス10	土師器	壺	*20.6	△6.9	口縁ナデ。外面磨滅し調整不明。内面はケズリ後、底部は指オサエ。	粗 やや軟	淡黄褐色	
207	82	テラス10	須恵器	壺	—	△9.2	外面タテハケ。頭部中位はヨコハケ。内面ケズリ。	密 良好	淡黄褐色	
208	82	テラス11	須恵器	杯	—	△2.3	底部回転糸切り。体部隆線は細い沈線状。	密 良好	淡青灰色	
209	82	テラス11	土師器	鉢	*20.4	△9.8	全体に磨滅。外面ハケメ。内面ケズリ。口縁端部内側に尖帯状のものが通る。	やや粗 やや軟	黄褐色	
210	82	テラス12	須恵器	杯	*11.8	3.5	底部回転糸切り。磨滅面つるつるではないがナデの隆線はみえない。体部外周下位および内面下半淡	密 やや軟	暗灰色	
211	82	テラス12	須恵器	杯	*12.0	4.5	底部回転糸切り。体部下半は若干暗褐色を呈し、焼成がまい。	密 やや軟	暗褐色	
212	82	テラス12	須恵器	高台付杯	*17.4	5.4	底部回転へら切り後ナデ。高台は器壁薄く、端部外側に突出。	密 良好	青灰色	
213	82	テラス12	土師器	壺	*24.2	△4.2	口縁ナデ。外面頭部下にスス付着。	粗 軟	黄褐色	
214	82	テラス13	須恵器	高台付杯	*15.1	6.1	底部回転糸切り後ナデか。全体に器壁厚い。	密 良好	灰色	
215	82	VI層	須恵器	蓋	*13.8	△ 2.45	宝珠つまみをもつ。上面はやや窪み。器壁厚い。胎土・焼成度く他のものと異なる感じを受ける。	密 良好	暗灰色	
216	82	VI層	須恵器	蓋	*13.0	3.7	回転ナデ。宝珠つまみがつく。	密 良好	暗灰褐色	



遺物番号	編年	地区	種別	器種	口径	器高	特徴	胎土 検定	色調	備考
217	82	VI層	須恵器	皿	*13.4	2.0	底部回転へう切りか。全面磨減し調整不明瞭。	やや粗 良好	暗灰色	
218	82	VI層	須恵器	杯	*11.8	3.1	底部回転糸切り後ナデか。堆成やややく、外面上半淡褐色を呈す以外は暗褐色。	密 良好	暗褐色	
219	82	VI層	須恵器	杯	*13.6	3.1	底部回転糸切り。底部縁部間に2ヶ所指頭圧痕。体部外面つるつる。上半分黒斑。	密 良好	青灰色	
220	82	VI層	須恵器	杯	*12.2	3.1	口縁部内側から体部外面にかけて裏面つるつる。体部上位でやや屈曲し、口縁は直立する。屈曲部からは暗灰褐色。底部回転糸切り。部分的にナデ胎土非常によい。口縁部から外面底部まで裏面非常につるつる。全体的に滑らかさがあるが、内面はややあまい。内底面もつるつる。底部回転糸切り後ナデ。外面体部上半淡褐色を呈す。	密 良好	灰色	
221	82	VI層	須恵器	杯	12.5	3.8	底部回転糸切り。体部外面および底部内面つるつる。外面体部下半暗褐色。	密 良好	灰色	
222	82	VI層	須恵器	杯	*12.3	4.0	底部回転糸切りか。体部最大径部分を境に口縁は青灰色。下は灰褐色を呈し。下半部は器蓋裏面より底部回転糸切りか。かなり窪み底になる。外面つるつる。	密 良好	灰褐色	
223	82	VI層	須恵器	杯	*12.6	3.4	底部回転糸切り。体部最大径部分を境に口縁は青灰色。下は灰褐色を呈し。下半部は器蓋裏面より底部回転糸切りか。かなり窪み底になる。外面つるつる。	密 良好	灰褐色	
224	82	VI層	須恵器	杯	*13.2	2.7	底部回転へう切り後ナデ。	やや粗 良好	暗灰色	
225	82	VI層	須恵器	高台付杯	*13.4	4.3	底部回転糸切り後ナデ。ただし胴壁粗く、付着物が多い。体部は表面滑らか。とくに高台端部は滑らかであるがこれは磨減によるものか。	密 良好	灰色	
226	82	VI層	須恵器	高台付杯	*17.6	5.7	底部回転糸切り。底部中央は器蓋裏面に近いス付片。	密 良好	暗灰色	
227	82	VI層	須恵器	皿	8.8	2.5	外面平行タタキ。内面車輪状タタキ。	密 良好	淡灰色	
228	82	VI層	須恵器	盃	—	△5.1	外面平行タタキ。内面車輪状タタキ。	密 良好	淡灰色	
229	82	VI層	須恵器	盃	*32.6	△9.7	回転ナデ。口縁部に4本の沈線帯をもち、その間に磨減状文。	密 良好	黄灰色	
230	82	VI層	須恵器	短頸壺	*11.8	△6.2	回転ナデ。口縁短直立。	密 良好	灰色	
231	83	VI層	土師器	皿	*12.8	2.3	全体磨減し調整不明。内面および口縁外面に黒斑。内外ともに赤色塗彩。	やや粗 やや軟 やや軟	淡褐色	
232	83	VI層	土師器	皿	*13.0	△2.8	外面甚だしく磨減。内外面ナデ。内外赤色塗彩。	やや粗 やや軟 やや軟	淡褐色	
233	83	VI層	土師器	杯	—	△2.1	全体に磨減。体部回転ナデ。底部へう切り後ナデ。内外ともに赤色塗彩。底部器蓋厚い。須恵器に近い全体磨減。胴部内面、内底はケズリか。内外赤色塗彩。杯部は割離。	密 良好	淡褐色	
234	83	VI層	土師器	高杯	—	△2.6	全体に磨減。体部回転ナデ。底部へう切り後ナデ。内外ともに赤色塗彩。胴部内面、内底はケズリか。内外赤色塗彩。杯部は割離。	密 良好	淡褐色	
235	83	VI層	土師器	ミア チュア 支脚	2.1	3.4	体部はわずかに面取りを意図しているか。上下面とも窪む。	密 良好	褐色	
236	83	VI層	土師器	支脚	—	△8.5	外面磨減し調整不明。底面は窪み、ナデおよび指頭圧痕が一帯に残る。	粗 やや軟	暗褐色	
237	83	VI層	土師器	盃	*27.8	△9.0	全体磨減。口縁ナデ。胴部は内面以下ケズリ。	粗 軟	灰褐色	
238	83	VI層	土師器	盃	*31.2	△6.8	口縁部ナデ。外面胴部以下タテハケ。内面ケズリ。	密 良好	暗褐色	
239	86	テラス15	須恵器	皿	*13.4	2.1	底部静止糸切り後ナデ。体部外面、底面内部つるつる。	密 良好	青灰色	
240	86	テラス15	須恵器	皿	*14.0	2.3	底部回転へう切り。	密 良好	暗紫褐色	
241	86	テラス15	須恵器	皿	*13.8	2.6	底部回転糸切り。体部外面および底部内面つるつる。	密 良好	灰色	
242	86	テラス15	須恵器	皿	*15.4	2.9	底部回転糸切り後ナデ。体部外面および底部内面つるつる。	密 良好	赤みがかる 暗褐色	
243	86	テラス15	須恵器	杯	11.8	4.2	回転へう切り後ナデ。外面つるつる。	密 良好	暗灰色	
244	86	テラス15	須恵器	杯	*12.2	4.6	底部回転糸切り。外面はつるつるしない。	密 良好	青灰色	
245	86	テラス15	須恵器	杯	*11.0	4.3	底部回転糸切り。丸底状を呈す。体部外面つるつる。回転ナデの接線が消される。	密 良好	淡青灰色	胎土分析 資料66
246	86	テラス15	須恵器	杯	*11.8	4.2	底部回転糸切り後指オサエ。	密 良好	暗灰色	
247	86	テラス15	須恵器	杯	*13.6	4.6	回転ナデ。全体に磨減。	密 良好	灰褐色	
248	86	テラス15	須恵器	杯	*12.6	4.3	底部回転糸切り。体部外面つるつる。	密 良好	淡灰色	
249	86	テラス15	須恵器	杯	*13.6	4.6	底部回転糸切り。全体磨減。焼成あまい。	密 良好	黄灰色	
250	86	テラス15	須恵器	高台付皿	*18.0	4.1	回転ナデ。口縁部やや外反。	密 良好	黄灰色	
251	86	テラス15	須恵器	高台付皿	*18.4	2.7	底部回転へう切り。	密 良好	暗青灰色	

遺物番号	排図	地区遺構	種別	器種	口径	器高	特徴	胎土 焼成	色調	備考
252	86	テラス15	須恵器	高台付皿	φ20.2	3.7	底部回転ヘラ切り。	密 良好	灰色	
253	86	テラス15	須恵器	高台付杯	φ15.8	6.2	凹縁ナデ。外面体部下位は暗褐色を呈す。	密 良好	暗青灰色	
254	86	テラス15	須恵器	高台付杯	φ16.4	△5.9	凹縁ナデ。	密 良好	外:暗灰色 内:灰色	
255	86	テラス15	須恵器	高台付杯	φ17.6	6.1	底部ヘラ切り後ナデ。	密 良好	暗灰褐色	
256	86	テラス15	須恵器	高台付	—	△3.7	底部停止系切り後ナデ。高台端面に1本の浅い沈線。	密 良好	青灰色	
257	86	テラス15	須恵器	高台付	—	△11.7	外面体部下位格子目タタキ、中位はタタキ後回転ナデ。内面底部同心円タタキ。体部回転ナデ。	密 良好	灰色	
258	86	テラス15	須恵器	壺	φ22.6	△13.9	口縁ナデ、外面平行タタキ、内面同心円タタキ。	密 良好	灰色	
259	86	テラス15	須恵器	壺	—	△7.9	外面ナデ、体部は平行タタキ。内面は車輪状タタキ。	密 良好	淡灰色	
260	86	テラス15	須恵器	横瓶	φ12.2	△17.7	口縁ナデ、頸部内面に指頭圧痕。外面平行タタキ、内面は同心円タタキ後ナデか。指頭圧痕部分。	密 良好	暗灰色	胎土分析資料71
261	86	テラス15	須恵器	横瓶	φ11.4	△15.5	口縁ナデ、外面格子目タタキ、内面は車輪状タタキ。	密 良好	暗灰褐色	胎土分析資料70
262	87	テラス15	土師器	皿	φ18.0	2.0	全体に磨滅。外面底部黒斑。内外面とも赤色塗彩。	密 やや粗	淡黄褐色	
263	87	テラス15	土師器	高台付皿	—	△1.8	全体に磨滅。底部ヘラ切り後ナデか。内外面とも赤色塗彩。	密 やや粗	褐色	胎土分析資料72
264	87	テラス15	土師器	高台付皿	—	△3.0	全体に磨滅。高台高い。内外面とも赤色塗彩。	密 やや粗	淡褐色	胎土分析資料73
265	87	テラス15	土師器	高台付皿	—	△2.6	全体に磨滅しており、詳細不明瞭。	密 やや粗	淡褐色	
266	87	テラス15	土師器	蓋	φ13.4	3.7	全体磨滅。つまみはボタン状。内外面とも赤色塗彩。	密 やや粗	淡褐色	
267	87	テラス15	土師器	高杯	—	△2.7	全体磨滅。脚部面取り。内面はケズリか。内外赤色塗彩。	密 やや粗	淡褐色	
268	87	テラス15	土師器	低脚杯	—	△5.3	内外ともナデ。外面は表面滑らかであり、あるいは磨かれるか。詳細不明。	密 やや粗	橙褐色	
269	87	テラス15	土師器	壺	φ17.6	△7.6	二次焼成により赤変し、全体磨滅。口縁ナデ、内面頸部以下ケズリ。	粗 やや粗	淡褐色	
270	87	テラス15	土師器	壺	φ22.2	△10.7	全体に磨滅。口縁頸部は二次焼成により赤変か。口縁ナデ、内面ケズリ。	密 やや粗	淡黄褐色	
271	87	テラス15	土師器	壺	φ23.2	△10.1	外面タテハケ後、口縁部ヨコナデ。内面はケズリ、外面にスス付着。	密 やや粗	淡褐色	胎土分析資料67
272	87	テラス15	土師器	壺	φ24.2	△15.4	全体に磨滅。内面頸部以下ケズリ。底部近くに黒斑。	密 やや粗	褐色	
273	87	テラス15	土師器	壺	φ23.2	△7.9	全体に磨滅し磨滅不明。口縁ナデ、内面以下ケズリ。二次焼成により外周体部および口縁部赤変。	密 やや粗	淡黄褐色	
274	87	テラス15	土師器	壺	φ25.4	△12.3	全体に磨滅し磨滅不明。外面スス多量に付着。	粗 やや粗	褐色	
275	87	テラス15	土師器	壺	φ29.2	△11.6	口縁ナデ、外面頸部以下は磨滅し不明。内面はケズリ。	密 やや粗	黄褐色	
276	87	テラス15	土師器	壺	φ29.4	△14.3	磨滅不明瞭。口縁ナデ、体部内面ケズリ。磨滅薄い。外面に黒斑。二次焼成のため変色。	密 やや粗	橙褐色	
277	87	テラス15	土師器	壺	φ30.6	△10.4	全体に磨滅。口縁ナデ。体部外面の一部にハケメのこる。内面はケズリ。外面の金剛にススが付着する。	密 やや粗	黄褐色	
278	88	テラス15	土師器	壺	27.1	36.4	内面は横方向ケズリ。外面はナデか。底部分から内面の同じ高さにスス、黒斑が顕著にみられる。	密 やや粗	橙褐色	
279	88	テラス15	土師器	壺	—	△17.0	内面ケズリ。外面はかなり磨滅。ケズリ、指頭圧痕。外面黒斑。	粗 やや粗	暗橙褐色	
280	88	テラス15	土師器	壺	—	△10.8	全体に磨滅し磨滅不明。内面ケズリ。	粗 やや粗	暗橙褐色	
281	88	テラス15	土師器	支脚	—	△16.2	体部ハケメ。支柱は3つとも欠損。全体磨滅。	密 やや粗	淡黄褐色	
282	88	テラス15	土師器	土罐	1.2	3.6	やや胴部中位が膨らむ。穴径は0.4cm。	密 やや粗	淡黄灰色	
283	88	テラス15	土師器	土罐	1.2	4.1	ほぼ直線的な胴部。穴径は0.4cm。	密 やや粗	淡黄灰色	
284	88	テラス15	土師器	土罐	1.1	4.1	ほぼ直線的な胴部。穴径は0.45cm。	密 やや粗	淡黄灰色	
285	90	テラス16	須恵器	杯	φ14.0	△5.6	内外面ミガキ。両面とも部分的に黒斑がある。	密 やや粗	褐色	
286	91	テラス17	須恵器	灯明具	9.1	2.8	底部回転系切り。口縁部内面にスス付着。	密 良好	灰色	
287	91	テラス17	須恵器	皿	φ14.8	2.1	底部回転ヘラ切り。磨滅厚く、胎土は粗。	密 良好	青灰色	
288	91	テラス17	須恵器	壺	φ12.3	△23.4	全体の磨滅気味。頸部に自然孔。内面頸・胴部環状状になり、接合痕が明確に残る。その下位に同心円タタキがあるが、ナデ消される。	密 良好	淡灰色	

遺物番号	挿図	地区遺構	種別	器種	口径	器高	特徴	胎土 焼成	色調	備考
289	91	テラス17	土師器	皿	*14.4	2.6	口縁ナデ、底部へう切り後ナデ。内外面とも赤色塗影。	やや粗 やや軟	褐色	
290	91	テラス17	土師器	皿	*14.2	△2.5	全体に磨滅しており磨整不明。内外面とも赤色塗影。	やや粗 やや軟	淡橙褐色	胎土分析 資料68
291	91	テラス17	土師器	高台付皿	—	△1.5	低い高台をもつ。底部へう切り後ナデ。やや丸底を呈し、器壁低い。	やや粗 やや軟	橙褐色	
292	91	テラス17	土師器	支脚	—	△4.6	外面軽な仕上げ。内面にはへう状工具による刺突が密にある。	粗 やや軟	淡灰褐色	
293	91	テラス17	土師器	壺	*28.8	△5.2	口縁ナデ。内面ケズリ、外面ハケメ。	やや粗 やや軟	黄褐色	
294	92	Ⅲ層	須恵器	杯	*13.2	4.3	底部回転糸切り。部分的にナデ消しか。外面口縁～体部にかけてつるつる。底部内面も磨かれている。	密 良好	青灰色	
295	92	Ⅲ層	須恵器	杯	*11.4	3.7	底部回転糸切り。外面つるつるでない。	密 良好	暗灰色	
296	92	Ⅲ層	須恵器	杯	*12.0	3.9	底部回転糸切り。体部外面つるつる。	密 良好	灰色	
297	92	Ⅲ層	須恵器	杯	*12.2	4.3	底部回転糸切り後ナデ。体部外面つるつる。	密 良好	暗灰色	
298	92	Ⅲ層	須恵器	杯	*12.5	4.0	底部回転糸切り。部分的にナデ消しか。外面口縁～体部にかけてつるつる。底部内面も磨かれている。	密 良好	淡灰色	
299	92	Ⅲ層	須恵器	壺	—	△3.8	外面平行タタキ、内面同心円タタキ。	密 良好	灰褐色	
300	92	Ⅲ層	須恵器	蓋	—	△1.5	回転ナデ。つまみは剥落か。	密 良好	淡灰色	
301	92	Ⅲ層	須恵器	短頸壺	10.9	7.8	底部静止糸切り。	密 良好	灰色	
302	92	Ⅲ層	須恵器	杯	—	△1.8	底部回転糸切り。焼きのわるいもの。全体に磨滅。	粗 軟	淡褐色	胎土分析 資料69
303	92	Ⅲ層	土師器	支脚	—	△4.6	全体磨滅。外面に指頭圧痕。	粗 軟	褐色	
304	92	Ⅲ層	土師器	壺	*18.6	△6.9	全体磨滅。口縁ナデ、内面ケズリ。体部器壁薄く、頸部～口縁部厚い。	粗 やや軟	褐色	胎土分析 資料64
305	92	Ⅲ層	土師器	壺	*17.0	△6.8	全体磨滅。口縁ナデ、内面ケズリ。	粗 軟	暗褐色	
306	92	Ⅲ層	土師器	壺	*24.8	△5.2	二次焼成により全体磨滅。口縁頸部、外面頸部以下赤紫。口縁ナデ、体部内面ケズリ。口縁外反度やや全体磨滅。口縁ナデ、内面ケズリ。体部外面頸部にハケメあるか。	粗 軟	黄灰色	
307	92	Ⅲ層	土師器	壺	*24.2	△9.5	口縁ナデ。外面平行タタキ、内面同心円タタキ。309と同型作。	粗 軟	明褐色	胎土分析 資料65
308	92	Ⅲ層	須恵器	壺	*23.0	△12.0	口縁ナデ。外面平行タタキ、内面同心円タタキ。	密 良好	灰色	
309	92	Ⅲ層	須恵器	壺	—	△36.8	外面平行タタキ、内面同心円タタキ。	密 良好	灰色	
310	93	D2	須恵器	杯	*13.4	4.0	底部回転糸切り後ナデか。底部厚く、段状になっている。口縁頸部、口縁外面段縁下から底部までつるつる。底部回転糸切り。外面つるつる。底部丸底状を呈す。	密 良好	淡青灰色	
311	93	Ⅱa層	須恵器	杯	*11.8	4.3	底部回転糸切り。外面つるつる。底部丸底状を呈す。	密 良好	淡灰色	
312	93	V層	須恵器	杯	11.7	4.0	底部回転糸切り。外面つるつる。底部丸底状を呈す。	密 良好	淡灰色	
313	93	V層	須恵器	頸瓶	*10.2	△21.7	外面平行タタキ、内面同心円タタキ。	密 良好	淡灰色	

表 12 第6章 石製品観察表

遺物番号	挿図	図版	地区遺構	器種	石材	長さ・高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
S14	83	50	Ⅳ層	磨石	安山岩	10.0	9.1	4.65	595.0	
S15	83	50	Ⅳ層	敲石	安山岩	6.35	2.25	1.9	39.0	
S16	83	50	Ⅳ層	敲石	安山岩	10.0	3.4	2.15	102.0	
S17	88	50	テラス15	磨石	閃緑岩	9.1	8.75	4.2	550.0	
S18	88	50	テラス15	磨石	安山岩	10.0	9.0	5.62	810.0	

## 第7章 平安時代の調査

### 第1節 概要 (図96)

本調査地において、もっとも良好な資料が出土した時代である。

遺構は谷1区とそれに続く尾根1区南側斜面部、および谷2区において検出した。谷1区では標高43.0m前後の平坦面にテラスおよび土坑があり、その範囲はE6・7、F6・7グリッドの中にほとんど収まるほど限られている。そのレベルはそのまま北へ16号墳のほうに向かっていくが、わずかな土器片などが出土しただけで、とくに遺構などはなかった。

谷2区は東側に現代の場が設けられ、また南側が調査地外になっているため限られた範囲の調査であったが、尾根2区南斜面をカットしてつくられるテラス群があり、その上にピットや溝を検出した。さらに調査地東境には暗灰色系粘質土が堆積する池状遺構があり、ここにも互層状の遺物包含層およびそれを掘り込む土坑を検出した。

一方これら谷に挟まれる尾根2区には、非常に幅広い平坦面があるにもかかわらず当該期における活動の痕跡は見出せない。尾根2区上に堆積する奈良時代後期～平安時代初期の堆積層(V層)上面においては、本時期に比定できる堆積層もなく、室町時代の土壌群が掘られているのみであった。またこの尾根の北側斜面にはやはりV層から続くと思われるIV層に覆われたテラス群が存在するが、その上層においても遺物が散見されるだけであった。谷2区の向かい側にある北向き斜面地は調査地外であるためその様相はわからないが、本調査地内の状況からみると、この時期は南向きの場所だけに遺構がつくられているといえよう。

谷1・2区からは多量の土器資料が得られた。これらは堆積層および遺構内の一括資料であり、資料数の少ない山陰地方において今後検討されていくべきものと考えられる。そのため実測するにあたっては以下の点に留意した。

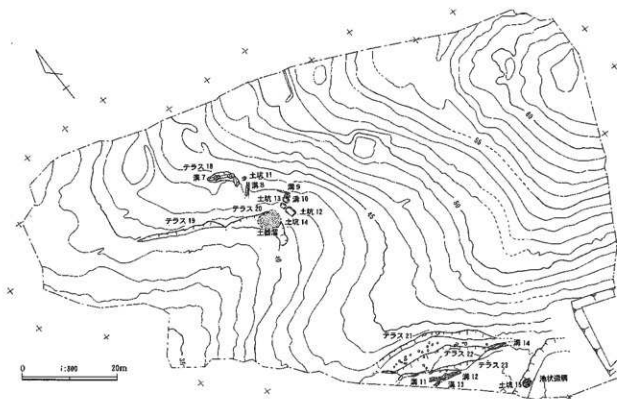


図96 平安時代遺構分布出土遺物

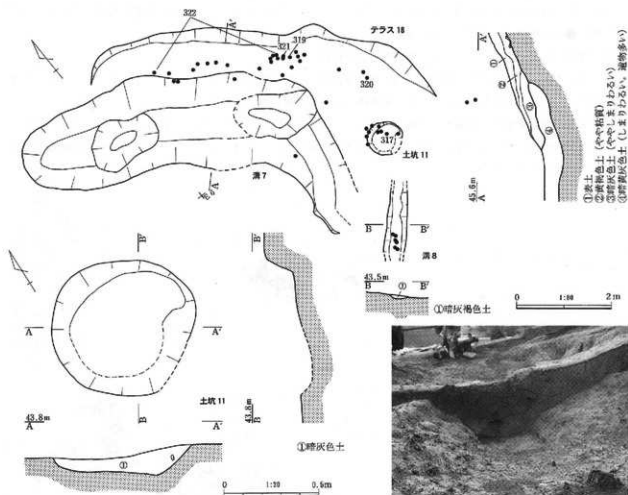


Fig.8 溝7土層断面(東から)

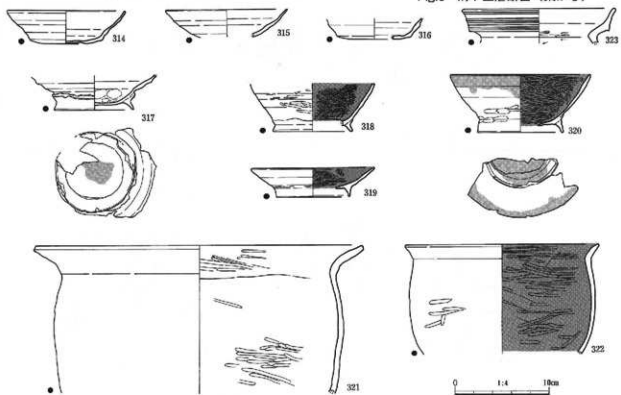


図97 テラス18周辺遺構群およびテラス18出土遺物

- 1) いびつな個体が大半を占めるために、完形であるかどうかを明示した。すなわち遺物番号のみのものは完形、●は反転復元したもの、部分反転したものは外郭にその範囲を示した。
- 2) 黒斑の付いたものについては、極力その範囲を図示した。
- 3) 形状不定形のいわゆる「焼成粘土塊」が多量に出土したため、その主だったものを提示した。しかしその向きについてはわからなかったため、基本的には長径を縦に置いた。
- 4) 米子市教育委員会の試掘が土器溜の一部にかかっており、そこから多くの資料が出土している。当然一括して扱わなければならないため、今回米子市教育委員会のご好意により、それら出土遺物の実測図を合わせて掲載することができた。

(中森)

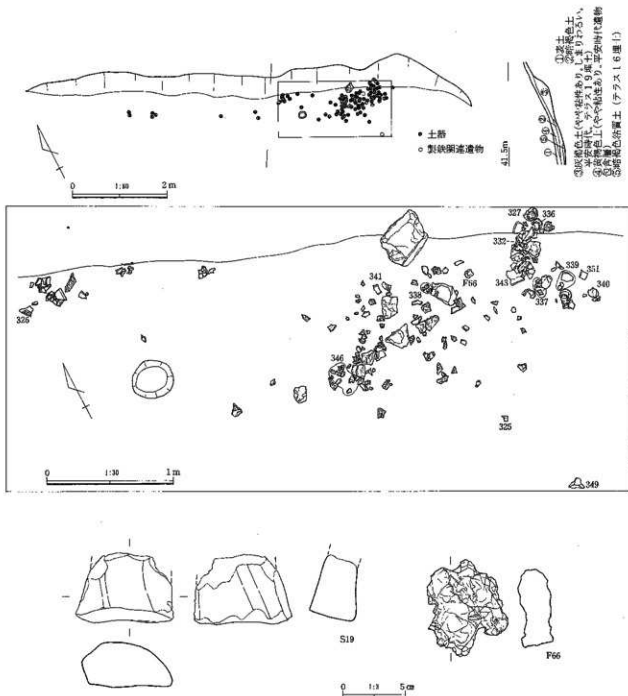


図98 テラス19および出土遺物(1)

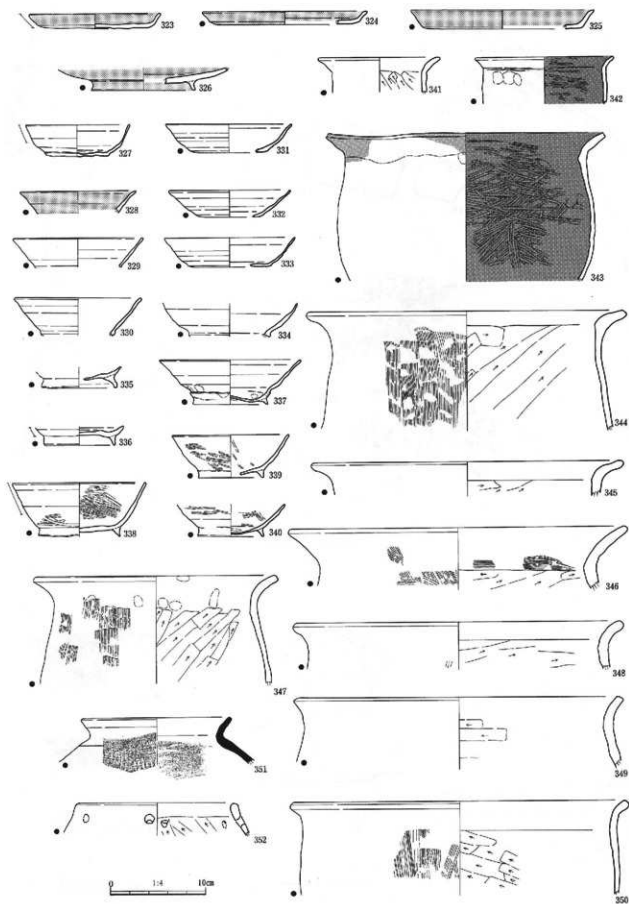


図99 テラス19出土遺物(2)

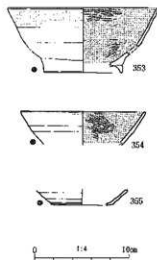
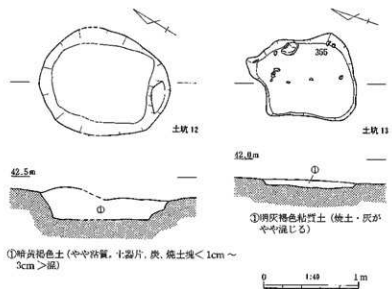
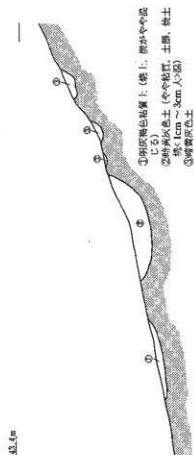
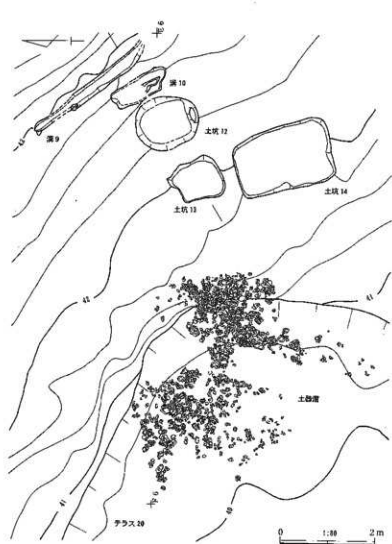


図100 土器溜周辺遺構群および土坑12・13出土遺物



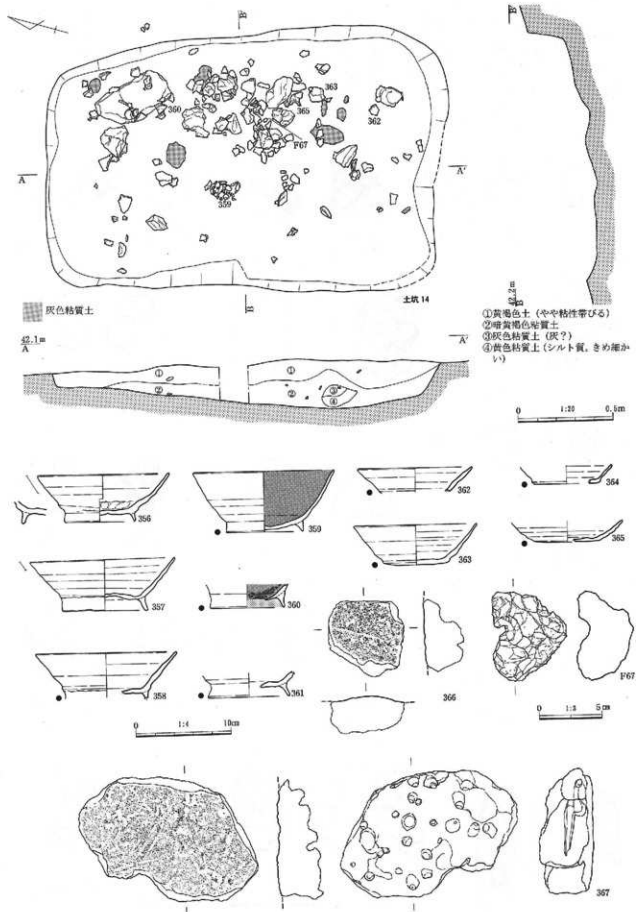


図 101 土坑 14 および出土遺物

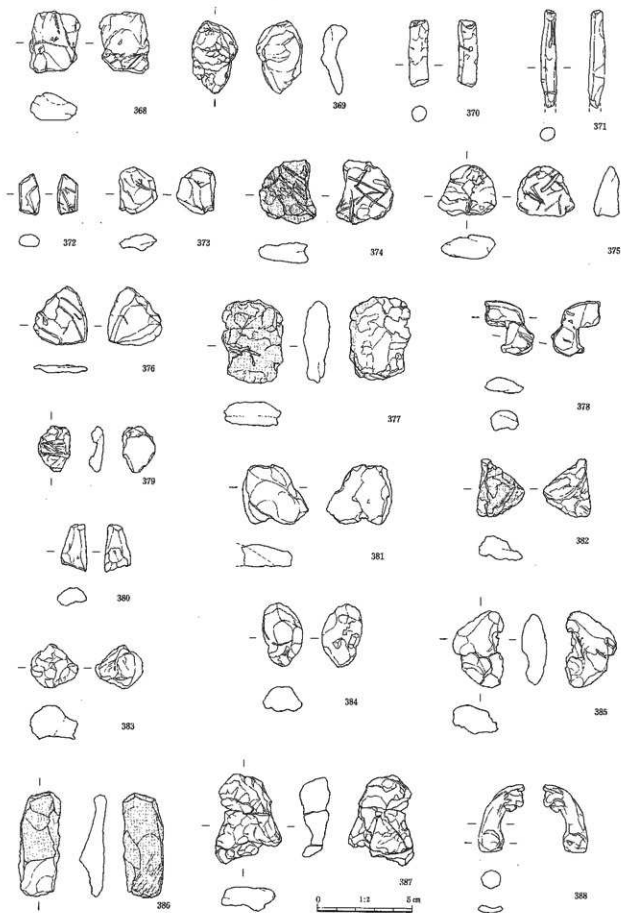


図102 テラス18・19および土坑14ほかに出土焼成粘土塊

## 第2節 谷1区検出の遺構と遺物

尾根1区南側斜面部では弥生時代後期の竪穴住居跡2、および古墳時代中期の古市21号墳によってできた平坦面を利用し、テラス18と土坑11・溝8がつくられる。またここから南東へ10mほどのところに土坑群(土坑12～14)および溝(溝9・10)がある。この遺構群のすぐ西には奈良時代後期～平安時代初頭につくられたテラス10があり、それが埋まりやや緩やかな斜面となっている。そこから多量の土器が出土した(土器溜)。土師器杯・高台付杯、内黒杯・高台付杯・高台付皿、甕(内黒)があり、これらに若干の須恵器が伴う。またこの土器溜中には、径5cm前後を測る焼けた粘土の塊(焼成粘土塊)を多量に含んでいた。

この土器溜から西に続く平坦面上にテラス19は位置する。土器溜からこのテラスにかけては、ほぼ標高40.0mで面が揃っている。

### テラス18、土坑11、溝7・8 (図97・102、図版60)

尾根1区D・E6グリッドにまたがる位置にあり、下層には弥生時代後期の竪穴住居跡2がある。層位的(A-A')にはこの埋土上面に溝7があり、さらにその上にテラス18が存在することになる。そのため溝7とテラス18は明らかに同時期のものではなく、本来分けて記述すべきであるが、溝7から出土した遺物もテラスと同様であったため、ここに含めた。

溝7は東西方向に伸びる幅約2mのもので、東側で南東部へと曲がる。深さは0.1～0.2mと浅い。これはテラスにより削平された可能性も考えられよう。埋土には土師器片がまとまってあったが、小片ばかりであった。

テラス7長さ約7.4mを測り、北東部斜面側は鎌倉時代のテラス24に切られる。平坦面南部には径1.5m、深さ0.3mほどの円形土坑11、さらにその南に長さ1.8m、幅0.4m、深さ0.1mほどの直線的な溝8がある。遺物は壁面下からにまとまって出土している。314～316は杯、317は高台が付く。318・320は内黒の杯、319は内黒皿。321・322は甕で、後者は内黒である。上記の土師器以外にまた弥生時代後期の甕(323)も出土している。竪穴住居跡2に属するものか、あるいは斜面上方にあるテラス1から転落したものであろう。(中森)

### テラス19 (図98・99・102、図版60)

谷1区E4・5グリッドに位置し、土器溜の西側に続くテラスである。長さは約9.4mを測る。東端はF6杭の北西部で収束し、そのやや南東から土器溜のあるテラス20は始まる。南側に平坦面が広く広がるが、範囲を明確にはできない。おそらく斜面側をカットしただけのものであろう。その際に前時代のテラス16を削平したと考えられる。

遺物は全体的にあるものの、壁面近くの中央やや東よりのところにまとまって出土した。土師器が大半を占める。323～325は赤色塗彩された皿、326は高台付杯でやはり赤色塗彩がある。327～334は杯、335～340は高台付杯である。328は内外面とも赤色塗彩。338～340は内面全体および外面の一部をミガクが、黒色処理はされていない。341～350は甕。大型・小型の2種類があり、それぞれ内黒のものも出土した。351は須恵器の甕、352は無頸蓋で、口縁下に穿孔される。破片ではあったが穿孔部を2ヶ所確認できたことから、計4ヶ所にあるものと判断した。弥生時代後期に属する。また焼成粘土塊も出土している(図102-372～374・376～378)。(中森)

### 土坑12・13、溝9・10 (図100、図版62)

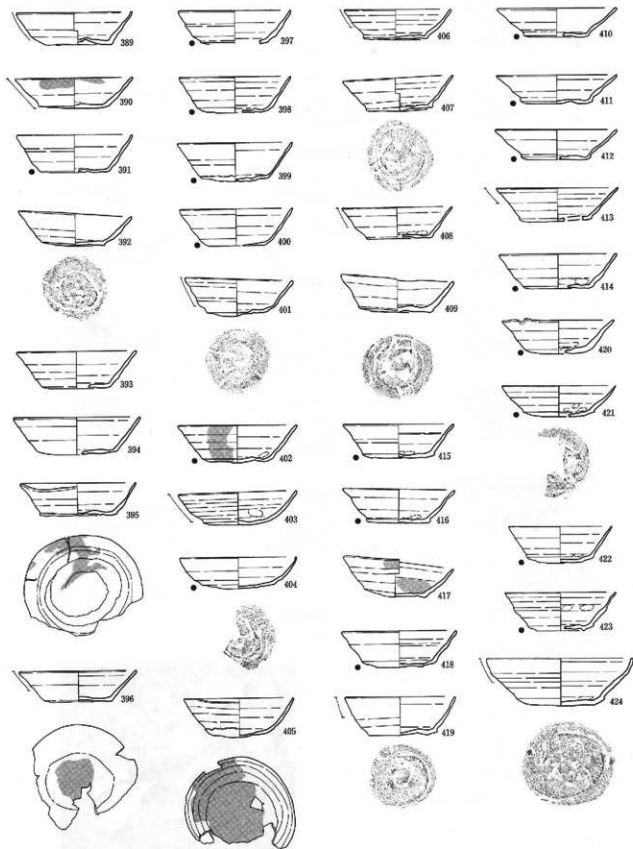
E6杭西側に位置する遺構群である。その位置は土器溜の東上方にもあたる。もっとも北東に位置するのが溝9で、長さ約3.0m、幅は0.3m、深さ0.2mの直線的なものである。西南に隣接し並行する溝10は長さ1.3m、幅0.5mほどであった。これは溝中央部がやや盛り上がり、あるいは2条の溝となる可能性もある。

上記溝の向きに並行、つまり等高線に沿うように土坑群は長軸を合わせる。溝10に西接している土坑12は、長径1.4m、短径1.1mほどの楕円形を呈し、埋土に炭や1～3cm大の焼土塊を含む。その南西にある土坑13は長径1.0m、短径0.8m、深さ0.1mほどで北側が不定な長方形を呈す。やはり埋土中に焼土、炭が混じる。

遺物は両土坑とも少ない。土坑12からは内黒の高台付杯(353)が出土している。内黒杯(354)・杯(355)は土坑13山上。(中森)



图 103 土器溜検出状況



0 1.4 10cm

図 104 土器溜出土遺物 (1)

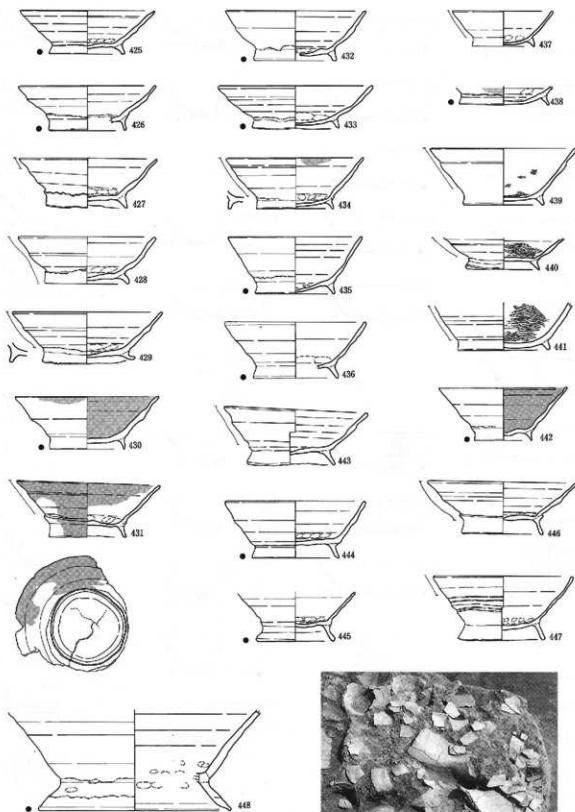


Fig.9 土器出土状況

図105 土器溜出土遺物(2)

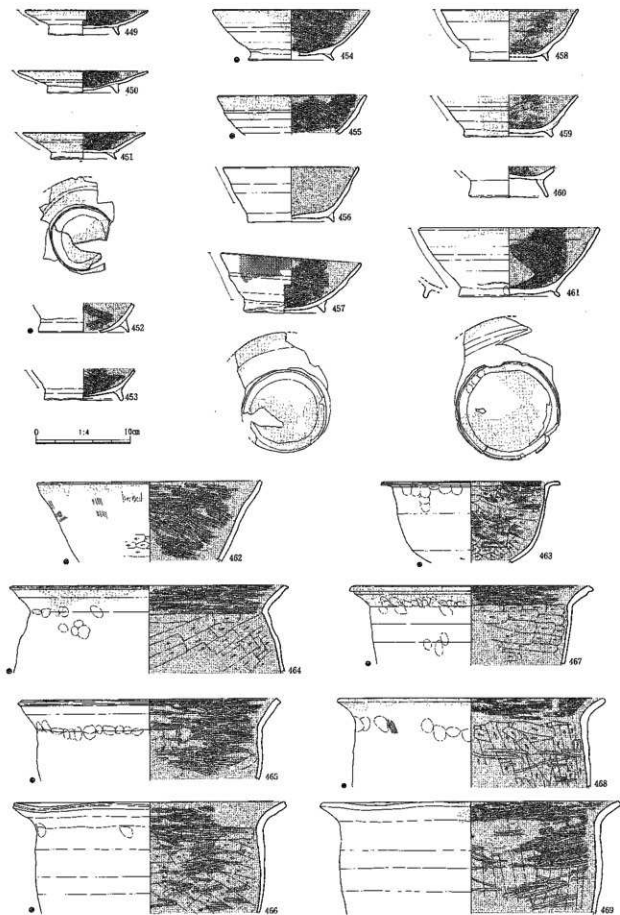


図106 土器溜出土遺物(3)

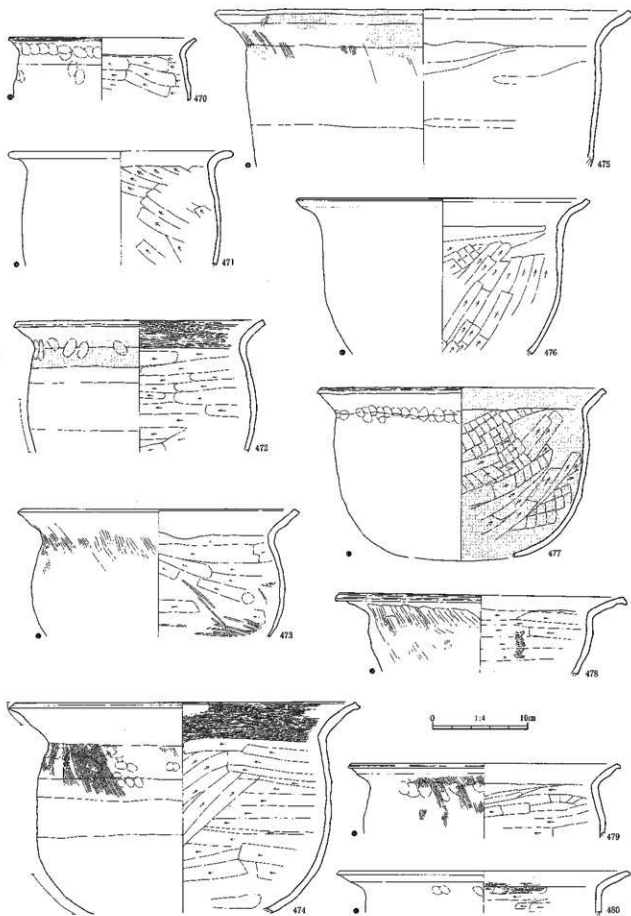


図107 土器溜出土遺物(4)



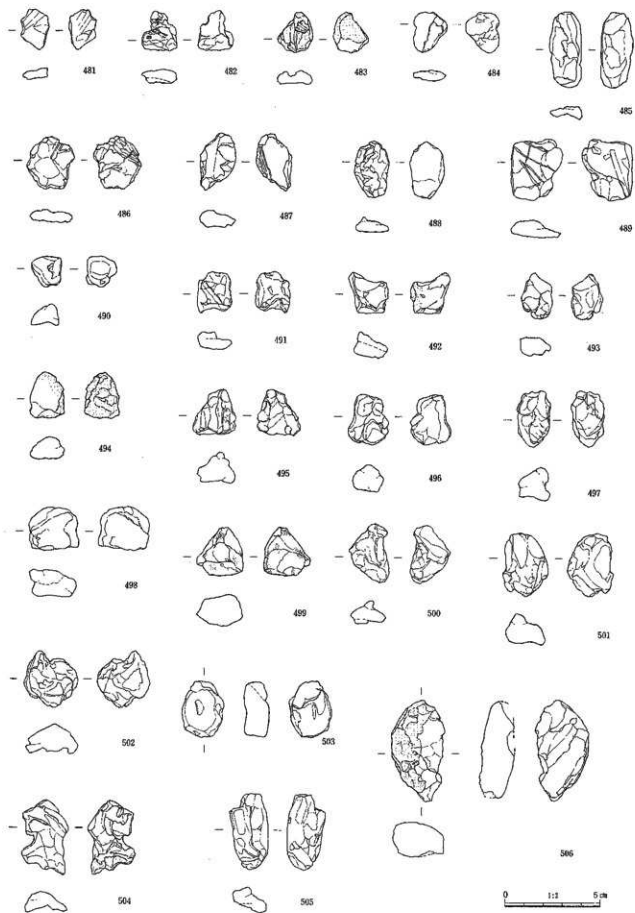


図108 土器溜出土遺物(5)

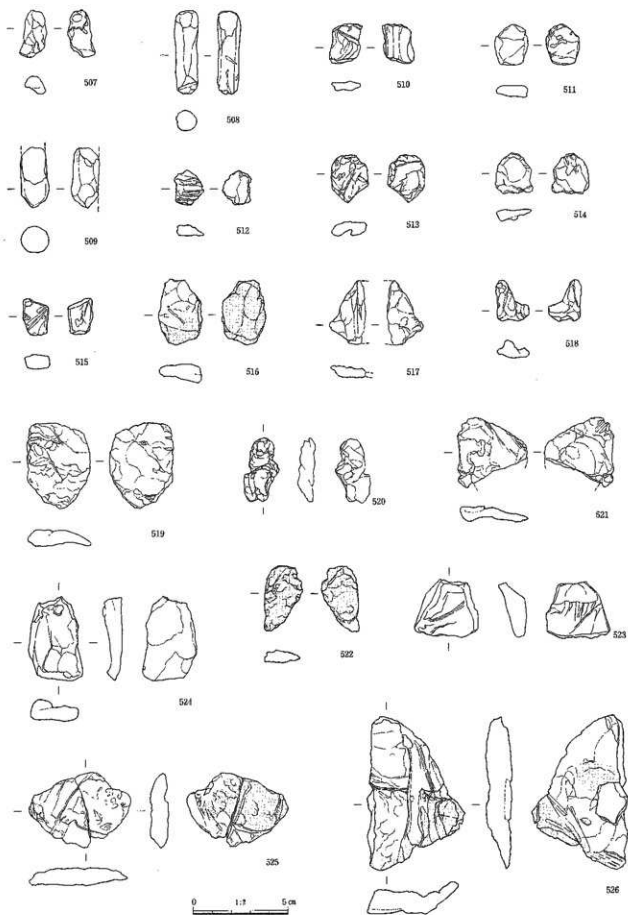


図109 土器瀬出土遺物(6)

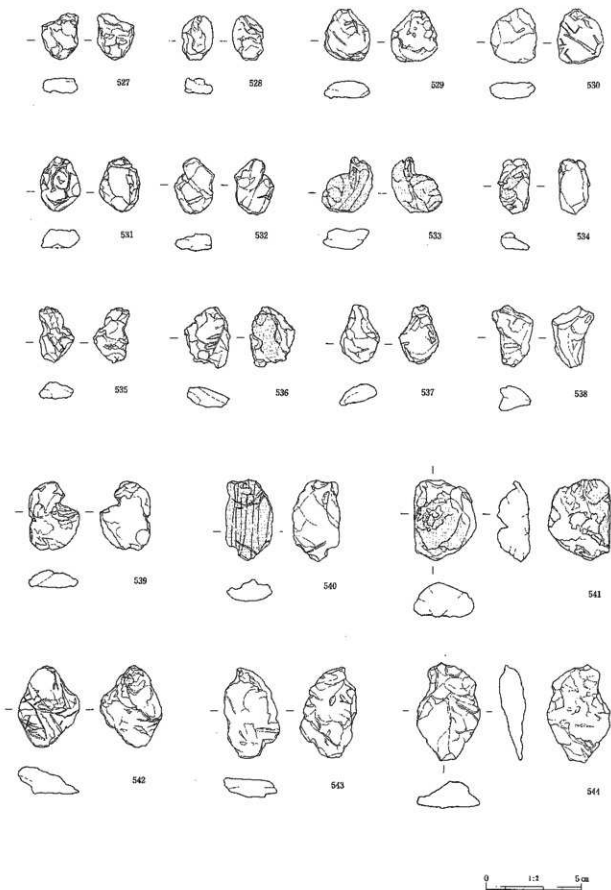


図110 土器溜出土遺物(7)

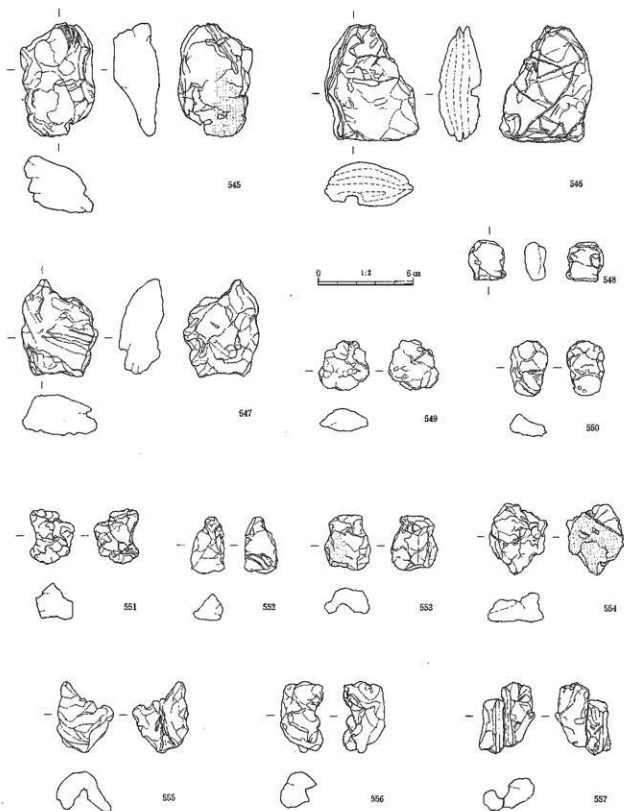


図 111 土器溜出土遺物 (8)

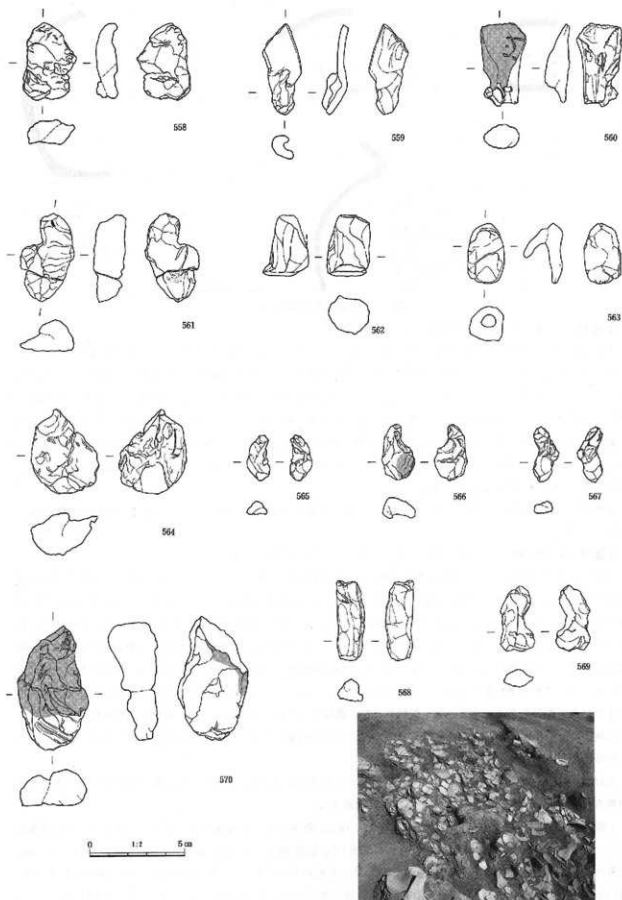


Fig.10 土器出土状況(西から)

図112 土器溜出土遺物(9)

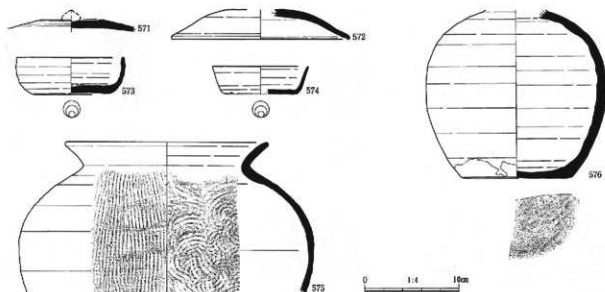


図 113 土器溜出土遺物 (10)

## 土坑 14 (図 101・102、図版 61～63・69)

土坑 13 の南側に接して位置する。長径 2.1 m、短径 1.3 m を測る長方形の土坑である。深さは東側で約 0.2 m であった。先述の土坑よりも規模が大きく、また出土遺物も多い。埋土は大きく上下 2 層に分層でき、炭はわずかに含む。また床面上で、灰のようなシルト質の土を部分的に検出した。さらに面をもつ焼けた粘土の塊 (366～367) を検出したが、これらは壁などの構造物であったと考えられる。そこで後述するように、この西側に広がる土器溜の存在と合わせて、本遺構が土師器焼成遺構である可能性を指摘したい。ただそうした場合、必要条件<sup>(11)</sup>として土坑内に火を受けた痕跡がなければならぬが、明確には検出できなかった。炭化物も出土量は少なく、決して条件を満たしているものではない。

遺物は土師器高台付杯 (356～359・361)、杯 (362～365)、内黒高台付杯 (361) のほか、焼成粘土塊 (379～386) が出土した。(中森)

## 土器溜、テラス 20 (図 103～114、カラー図版 6・7、図版 63～71)

土坑 13・14 の西側にある、緩やかな傾斜地に広がる土器溜りである。斜面上方の土坑群に近いところの方が遺物分布密度は高く、全体の範囲は 5 m × 3.5 m ほどになる。傾斜は前時代のテラス 10 埋土上面にあたり、この段階で平坦面などをつくりだしたかは不明確である。しかし、当時の地形が若干テラス状を呈していたと考えられるため、ここではテラス (テラス 20) として扱っておく。そのためその範囲はほぼテラス 10 に等しい。また土坑群から谷部へかけて堆積する II 層 (図 8) は、わずかに炭化物を含む暗褐色土である。この層は大きく 2 層に分けられるが、上層は遺物量が少なく、下層のほうが多い。しかしこれらは混在するために、その境界を明確にはできていない部分もある。また一部土師器杯が数点重なっていた (図版 65-1) が、遺物の出土状況においてはほとんど規則性は見出せない。ただし壁は、その外面にススが付着したり、二次焼成により赤変し劣化したものがみられるなど明らかに使用痕が看取できた。

なお遺物はすべてを実測した上で、10 m グリッドに沿うように 1 m 小区間を設定し取り上げた。その量は米子市教育委員会のもも合わせ、コンテナに 20 箱を超える。

土師器杯 (図 104、図版 67) は口径が 12.0～14.0 cm、器高 3.0～3.5 cm のものである。底部はヘラ切り後押圧し、凸凹なものが多い (図版 67-2)。高台付杯 (図 105、図版 66-3) は高台の高さが 1 cm 未満のものと、1.5 cm 前後のもの大きく 2 種類がある。また底部が平底と丸底のものがあり、一部には内面をミガク個体も存在する。411 は器壁が厚く内面を密にミガキ、他の個体とは違うタイプである。また高台がつぶれたような個体がいくつかあった (図版 66-2)。

内面を黒色処理しミガキを施す、いわゆる内黒の土師器も多く出土している(図106)。皿、杯(図版66-1)ともすべて高台の付くタイプで、杯は底部丸底のものが主流である。高台も低く、唯一460のみ高い。462は口縁が大きく、直線的に外反するものである。鉢か、甕には大小2タイプがある。また大型のものでは体部が直立するもの(465~469)と丸味をもつもの(464)がある。これらは口縁内面を丁寧にミガキ、体部上半もやや粗くミガキ。土師器甕(図107、図版70)も同様な法量のバリエーションがあるが、口縁部の長さや、頸部の屈曲度合いなどに違いがありそうである。また口縁内面をミガキものもいくつかみられるが、基本的にはナデ仕上げで終わる。

これらのほかに、コンテナにして2箱分の焼成粘土塊が出土した(図108~112、図版68・69-3)。大きさは2~7cmとさまざまであり、厚みのある塊状のものや、扁平なもの、棒状などに分けられるか。また板状粘土を折り返さないしは貼り付け、互層状あるいは塊状にするものがあった。このほか土器片がつくもの(526)、黒斑をもつものや、植物繊維と思われる細い沈線状の痕跡をもつものもみられる。

このほか須恵器がわずかに出土している(図113、図版71-1)。571・572は蓋。571はつまみが剥落した痕跡がある。573・574は杯、575は甕、576は壺である。

また土器に混じり、製鉄関連遺物および鉄製品も若干出土している。F68は製鍊滓、F70は梃形鍛冶滓、F71・F72は含鉄鉄滓である。F72・F73・F77は刀子、F74は工具か。F75は鉄斧、F76は鎌である。F78~F80はⅡ層上層から出土したもの。F80は釘、他の2点は不明である。これらの製鉄関連遺物および鉄製品は、下層の奈良時代後期~平安時代初頭に属する可能性が考えられる。

以上のようにみると、

- ・焼成土坑に伴うとされる多種の粘土塊が出土していること。
- ・高台がつぶれたような不良品を含むこと。
- ・完形に近い杯類に黒斑のあるものが一定量みられること。

など出土遺物の様相は、ある程度土師器焼成に関連する要素を含んでいる。そして遺物の分布傾向が土坑群に近

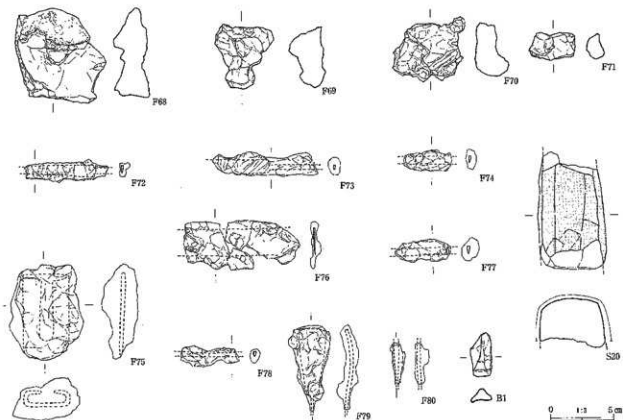


図114 土器溜および周辺出土製鉄関連遺物ほか

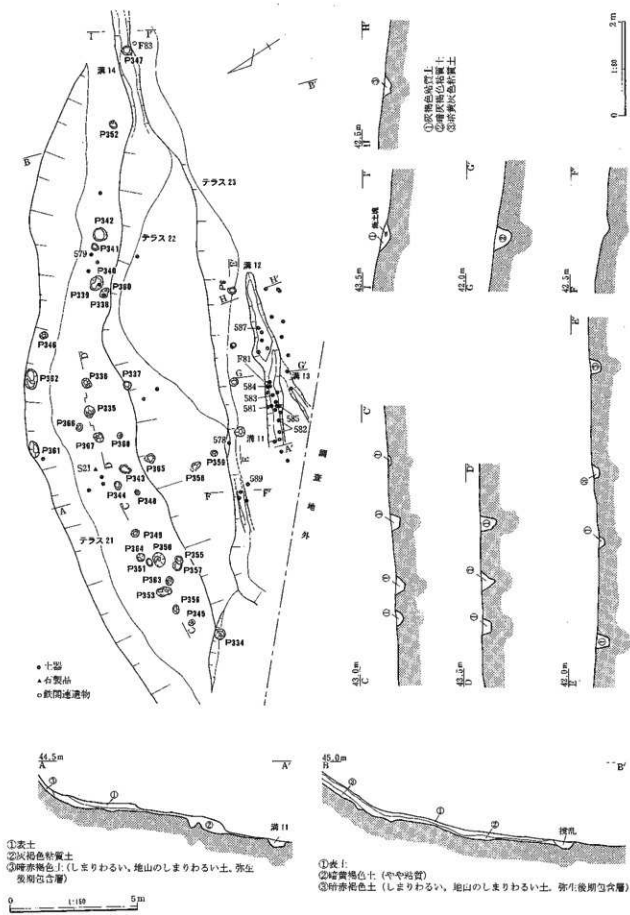


図 115 テラス 21 ~ 23



いところの方が密度が高く、その出土状況に規則性はみられない。このことは上坑群側から廃棄された状況を示すと考えられる。つまり先の土坑 14 を中心に、この場所で土師器が製作された可能性があるのではなからうか。なお甕には二次的な使用痕があり、これらについてはこの場所で作られたものではないと考えられる。しかし胎土分析の結果（第 10 章特論 6）では杯頸と大きな差異はなく、近接した場所のものといえよう。（中森）

### 第3節 谷2区検出の遺構と遺物

谷2区において検出した遺構と遺物は、ほぼ本時期に限られるといってもよい。

階段状に展開するテラス群、およびそれに続く池状遺構などを検出したが、調査地の関係から、範囲は尾根2区に近い北側しか調査していない。しかし谷部は南側へと続いており、そこにも当該期の遺構があると推定される。

テラス 21～23、溝 11～14（図 115・116、図版 72・73-3）

南向きに幅の狭いテラスが3段つくられる。最上段のテラス 21 がもっとも長く、約 26 m を測る。ピットが多く直線的に並ぶものが2列ほどあるが、建物構造を復元できるものはない。南東端に直線的な溝 14 がある。長さは 4 m、幅 0.4 m ほどであった。中段のテラス 22 は明瞭に壁を削りだしたのではなく、緩斜面から下がったところに平坦面がある。しかしピットなどは検出されず、遺物もほとんど出土していない。

最下段のテラス 23 には溝が3条掘り込まれている。これらは切り合い関係にあるが、その前後についてはわからなかった。また溝 12・13 は直線的な位置関係にあり、一連のものと考えられる。

遺物はテラス 21 から 577～580、S 21、F 82、溝 11 から 581～588、F 81、溝 12 から 587、溝 14 からは F 83

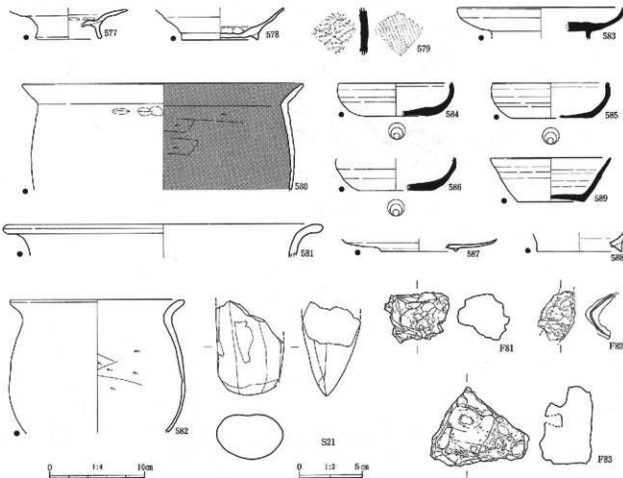


図 116 テラス 21～23 出土遺物

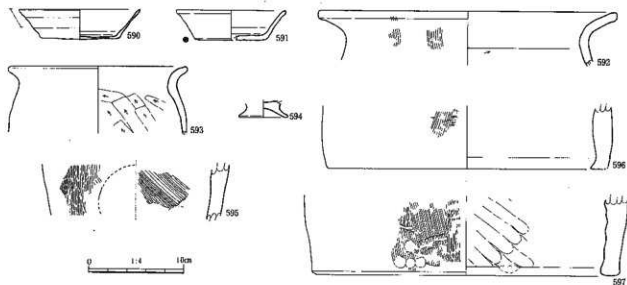
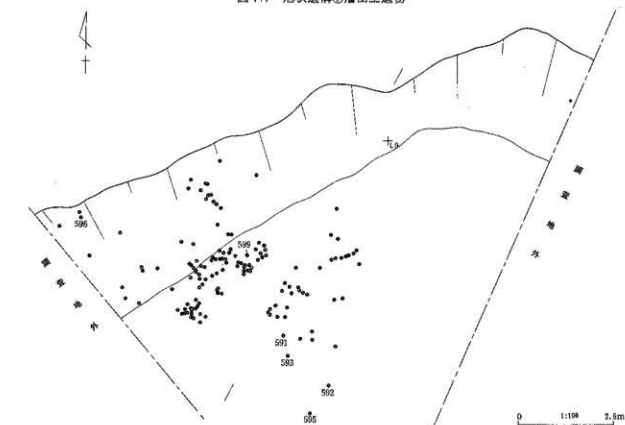
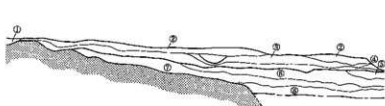


図 117 池状遺構の層出土遺物



44.5m



- ①表土
- ②暗灰褐色粘質土
- ③暗灰褐色粘質土 (①より黒味強い)
- ④暗褐色粘質土
- ⑤黒色粘質土 (黄色粗砂を多量に含む)
- ⑥暗褐色砂質土 (粘性あり。粗砂含む。遺物が多い)
- ⑦暗灰色粘質土 (しまり強い)
- ⑧暗灰褐色砂礫

図 118 池状遺構の層遺物分布および土層断面

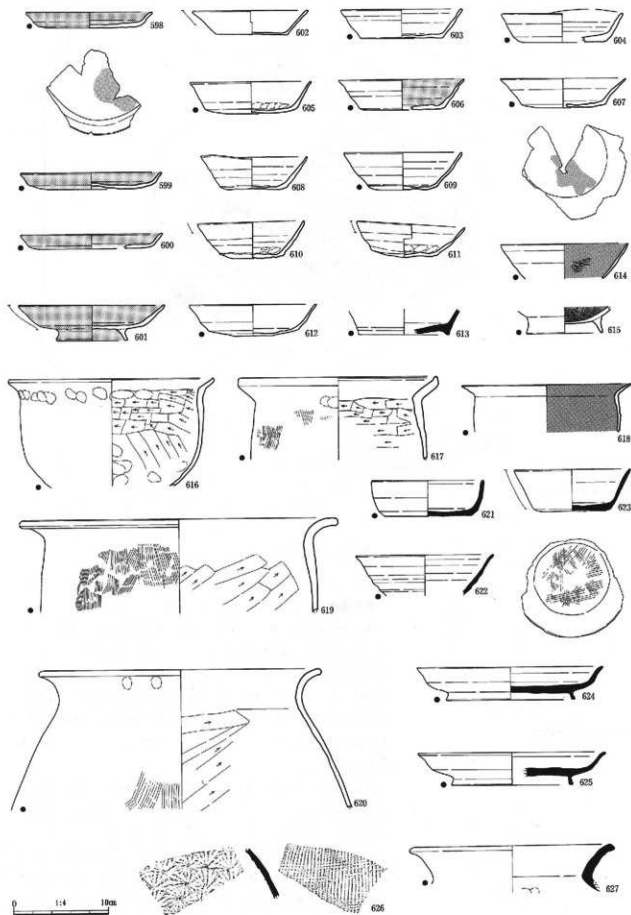


図119 池状遺構⑥層出土遺物



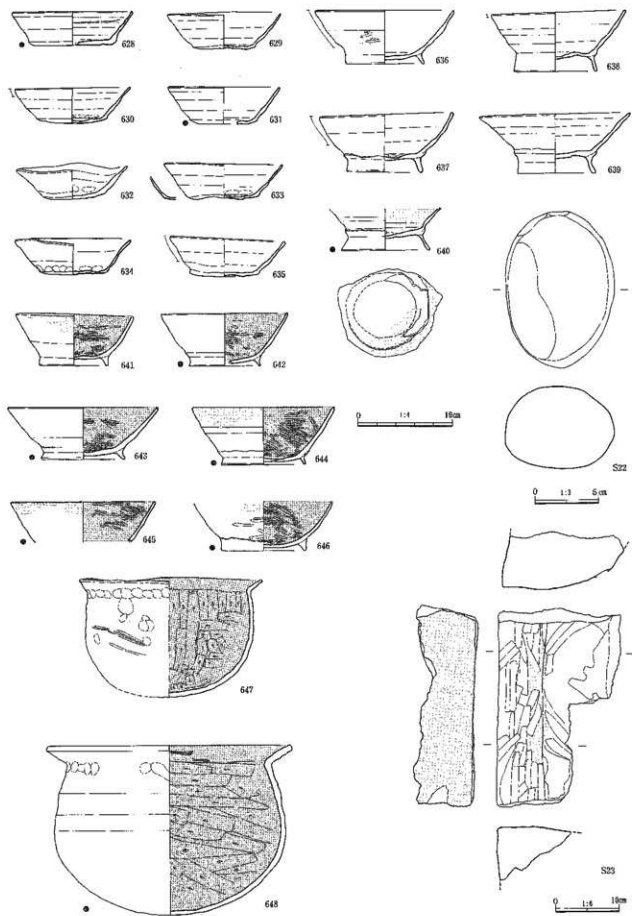


图 121 土坑 15 出土遺物

量も多かつヴァリエーションもあり、先の土器溜とは様相が異なる。

後述する土坑15を覆う④層から、わずかに遺物が出土した(図122)。649は高台の位置が土器の中央に付かない、異形のものであろうか。

出土した土師器は一様に器表面が白色を呈していた。しかし断面は橙褐色であり、おそらく水分を多く含む土質であるためその影響を受け変色した可能性が考えられる。(中森)

**土坑15** (図120・121、図版73-2・74・75)

池状遺構④層を掘り込んでつくられる径約1.8mの円形土坑である。底面は2段に掘られ、北側が浅く、南側が深い。

南側で深さ約0.3mを測る。拳から人頭火以上の礫に混じって、完形の土師器杯や甕が出土した。遺物は南側下

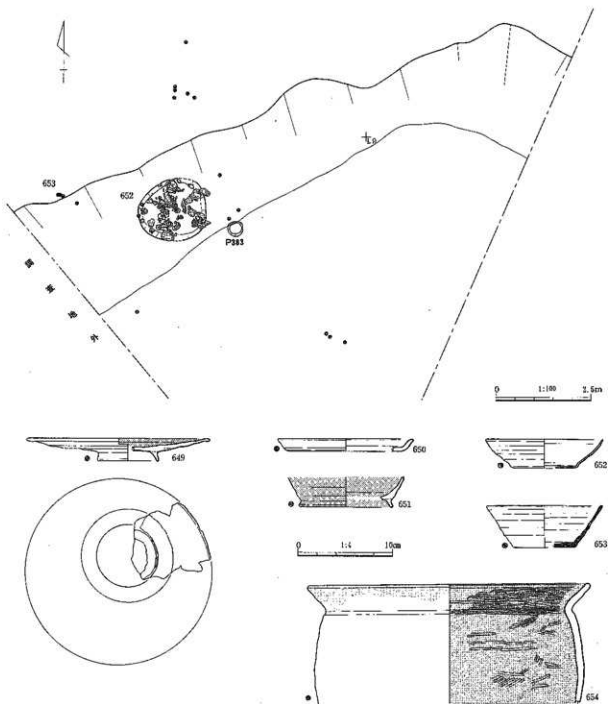


図122 池状遺構④層出土遺物

段に集中する。礫の中には明らかに面取りしたもの（S 23）も含まれるが、その用途は不明である。

土器は杯が主体をなし、壺は少ない。628～635は杯、636～640は高台付杯である。高台は高いものが目立つ。641～646は内黒高台付杯。やや深い碗状のものと同径の大きいものがみられる。壺は体部に丸みをもつものと直立的なものに分かれる。

(中森)

(註)

1. 木立雅朗 1997「土師器焼成坑の定義と型式分類」窯跡研究会編『古代の土師器生産と焼成遺構』真福社

表 13 平安時代ピット一覽

No	地区	長径 (cm)	短径 (cm)	高さ (cm)	埋土	備考	No	地区	長径 (cm)	短径 (cm)	高さ (cm)	埋土	備考
1	F5	39	32	17	II		105	C3	75	55	32	IIa	
2	F5	43	38	21	II		136	D3	36	32	14	IIa	
3	F5	57	44	27	II	黒色土ブロックを含む	141	F4	45	42	12	IIa	暗褐色土含む
4	G4	27	22	21	II	黄色土粒を含む	142	F4	49	45	16	IIa	VT24ベルト
5	F5	28	20	12	II		193	F4	36	-	28	IIa	
6	G6	50	34	13	II		194	F4	20	-	21	IIa	
7	G6	25	22	8	II		195	F3	21	25	20	IIa	土層
8	G6	33	28	22	II		196	F4	28	24	34	IIa	IIaに、炭、焼土混
9	G6	27	15	8	II		197	G4	42	-	40	IIa	
29	F5	35	29	18	II		198	F3	41	32	9	IIa	
30	F5	23	21	23	II		199	F3	33	22	16	IIa	
31	F5	33	32	26	II		200	F3	30	-	13	IIa	
32	F5	35	19	13	II		202	F4	20	20	8	IIa	
33	F5	30	26	13	II		245	F4	34	30	18	IIa	
34	F5	34	32	9	II		334	J6	41	40	17	XVI	
35	F6	31	28	8	II		335	J7	41	40	16	XVI	
36	F6	30	22	10	II	土層	336	J7	37	35	23	XVI	
37	F5	40	31	5	II		337	J7	36	30	14	XVI	
38	F6	31	30	31	II		338	J7	30	26	18	XVI	
39	F6	33	29	12	II		339	J7	35	28	27	XVI	土層359
40	F5	37	35	10	II		340	J6	43	38	24	XVI	
41	F5	49	36	18	II		341	J7	26	26	31	XVI	
42	F4	22	20	12	II		342	J7	54	51	46	XVI	
43	E5	41	28	12	II		343	J6	45	30	12	XVI	
44	F5	39	36	11	II		344	J6	30	28	21	XVI	
45	F5	26	24	11	II		345	J6	28	24	21	XVI	
46	E5	41	39	36	II		346	J6	21	21	29	XVI	
47	F5	24	20	8	II		347	J7	38	35	30	XVI	
48	F5	29	24	12	II		348	J6	21	20	24	XVI	
49	F5	30	17	12	II		349	J6	33	30	9	XVI	
50	G4	20	15	10	IIa		350	J6	59	47	45	XVI	
51	G4	50	50	21	IIa		351	J6	37	25	18	XVI	土層
58	G5	45	45	14	II		352	J7	35	32	40	XVI	
59	G5	22	26	9	II		353	J6	61	42	37	XVI	
60	G5	25	22	7	II		354	J7	27	23	13	XVI	
61	G5	32	31	7	II		355	J6	38	35	26	XVI	
62	F5	35	32	12	II	暗褐色土含む	356	J6	31	25	17	XVI	
63	F5	35	35	14	II		357	J6	40	34	13	XVI	
64	F5	25	25	8	II		358	J8	35	-	30	XVI	
65	F5	31	27	20	II		359	J8	26	22	8	XVI	
66	F5	27	25	21	II		360	J6	28	18	14	XVI	
67	F5	45	36	22	II		361	J7	63	33	15	XVI	
68	F5	20	18	11	II		362	J7	80	48	36	XVI	
69	F5	30	21	20	II		363	J6	21	20	12	XVI	
71	F4	31	28	22	II		364	J8	34	33	10	XVI	
74	F5	41	27	5	II		365	J6	43	42	23	XVI	
75	F6	33	20	10	II		366	J7	29	26	25	XVI	
76	F6	41	40	22	II		367	J6	36	36	17	XVI	
77	F6	37	33	20	II		368	J6	23	23	16	XVI	
83	C3	75	60	32	IIa		369	K7	99	33	32	XVI	
84	C3	73	56	33	IIa		370	K8	35	32	17	XVI	
86	C3	75	30	18	IIa		371	K7	28	25	22	XVI	
88	C3	65	35	10	IIa		372	K7	80	48	5	XVI	
89	C3	70	40	15	IIa		373	K7	31	25	6	XVI	
90	C3	43	42	56	IIa		374	K7	31	-	21	XVI	
91	C3	32	22	12	IIa		375	K7	22	12	13	XVI	
92	D3	60	55	12	IIa		376	K7	23	-	24	XVI	
94	G3	30	26	14	IIa		377	E4	38	-	12	黄褐色土	
95	G3	47	27	31	IIa		378	D6	41	30	17	灰褐色土	
96	C2	33	33	69	IIa		379	D6	45	35	22	灰褐色土	
97	C2	65	53	23	IIa		380	D6	37	28	22	灰褐色土	
98	C2	43	33	63	IIa		381	D6	45	40	18	灰褐色土	
99	C3	72	52	23	IIa		382	D6	31	-	12	灰褐色土	
104	G3	39	32	10	IIa		383	K8	43	40	15	暗褐色粘土	

表 14 第7章土器観察表

遺物 番号	検 出	地区遺構	種別	器種	口径	器高	特徴	粘土 硬度	色調	備考
314	97	テラス18	土師 器	杯	*12.5	3.6	体部回転ナデ。内面は丁寧なナデ。底部へラ切り後押圧。立ち上がり部は凸状にはりだし、体部は丸状に屈曲する。	密 良	橙褐色	
315	97	テラス18	土師 器	杯	*12.8	△2.9	体部回転ナデ。口縁部は器壁が薄くなる。	密 良	橙褐色	
316	97	テラス18	土師 器	杯	—	△2.3	体部回転ナデ。外面はとくに丁寧なナデ。あるいは部分的にミガキか。底部回転へラケズリ後ナデ。底部が凸状に出るもの。底部から立ちあがった部分には強いナデにより器壁薄い。	密 良	橙褐色	
317	97	テラス18	土師 器	高台付 杯	—	△3.7	体部回転ナデ。底面ナデ。内面に指摺り痕みられる。高台接合部で、段状になる。底部裏面に黒斑。高台は薄く、ハ状に体部回転ナデ後、へラミガキ。高台接合部は凸状に盛り上がる。内面黒色処理後非常に丁寧なミガキ。底部裏面も黒色	密 良	橙褐色	
318	97	テラス18	内黒	高台付 杯	—	△5.1	底部から直線的に外反。体部回転ナデ。内面は黒色処理が不十分で、黒斑状になっている。密なミガキ。口縁外面にも黒色部むれる。底部裏面にも黒斑。	密 良	外面：橙褐色	
319	97	テラス18	内黒	高台付 杯	*13.2	3.1	体部回転ナデ。内面黒色処理後丁寧なミガキ。口縁外面にも黒色部むれる。底部裏面にも黒斑。	密 良	外面：橙褐色	
320	97	テラス18	内黒	高台付 杯	*14.3	6.1	口縁内面ヨコナデ後ミガキ。体部にも部分的にミガキか。口縁部面取り。外面口縁部ヨコナデ。体部は部分的にナデ。全体に黒色化	密 良	外面：橙褐色	
321	97	テラス18	土師 器	壺	*17.6	△5.8	内面黒色処理後ナデ。ミガキ。部分的に黒色化しないところあり。外面頭部から上ナデ。体部タナデ。一部ミガキ。外面口縁に黒斑。体部には部分的にスス付着。	粗 やや軟	内面：黄褐色	
322	97	テラス18	内黒	壺	*20.7	△17.7	口縁ナデ。内面頸部ミガキ。以下ケズリ。外面ナデ。ススが付着。	やや粗 やや軟	外面：淡褐色	
322a	97	テラス18	弥生 土器	壺	*16.0	△3.8	口縁ナデ。底部へラ切り後ナデ。内外赤色塗彩。底面外面一部に黒斑。	やや硬 やや軟	褐色	
323	99	テラス19	土師 器	皿	13.7	1.7	口縁ナデ。底部へラ切り後ナデ。内外赤色塗彩。底面外面一部に黒斑。	やや硬 やや軟	淡橙褐色	
324	99	テラス19	土師 器	皿	*17.8	1.4	口縁ナデ。底部へラ切り後ナデ。内外赤色塗彩。	やや硬 やや軟	淡橙褐色	
325	99	テラス19	土師 器	皿	*19.4	2.1	口縁ナデ。底部へラ切り後ナデ。内外赤色塗彩。	密 やや軟	淡橙褐色	
326	99	テラス19	土師 器	高台付 皿	—	△2.5	体部ナデ。底部へラ切り後ナデ。内外赤色塗彩。底面外面に黒斑。	密 やや軟	淡黄褐色	
327	99	テラス19	土師 器	杯	*10.8	3.4	体部回転ナデ。底部へラ切り。全体に器壁薄い。	密 やや軟 やや硬 やや軟	橙褐色	
328	99	テラス19	土師 器	杯	*12.0	△2.4	体部回転ナデ。内外赤色塗彩。	密 やや軟 やや硬 やや軟	淡橙褐色	
329	99	テラス19	土師 器	杯	*13.4	△3.1	体部回転ナデ。外面赤色塗彩。	密 やや軟 やや硬 やや軟	橙褐色	
330	99	テラス19	土師 器	杯	*13.6	4.0	体部回転ナデ。	密 やや軟 やや硬 やや軟	褐色	
331	99	テラス19	土師 器	杯	*13.4	△3.0	体部回転ナデ。底部へラ切り。	密 やや軟 やや硬 やや軟	橙褐色	
332	99	テラス19	土師 器	杯	*12.7	2.9	体部回転ナデ。口縁部は強いナデで、器壁非常に薄い。底部へラ切り後押圧。外面に黒斑。	密 良	淡褐色	
333	98	テラス19	土師 器	杯	*13.8	3.2	体部回転ナデ。底部へラ切り後押圧。	密 良	淡橙褐色	
334	99	テラス19	土師 器	杯	—	△3.5	体部回転ナデ。	密 やや軟 やや硬 やや軟	淡黄褐色	
335	99	テラス19	土師 器	高台付 杯	—	△2.2	非常にいびつな高台で、平面形はやや楕円を呈す。底部へラ切り後押圧。高台内側は杯底との接合あまりく、接合面明確	密 やや軟 やや硬 やや軟	橙褐色	
336	99	テラス19	土師 器	高台付 杯	—	△2.1	体部回転ナデ。底部へラ切り後押圧。内外面に黒斑。	密 良	淡橙褐色	
337	99	テラス19	土師 器	高台付 杯	*14.6	4.8	体部回転ナデ。底部へラ切り後押圧。底部とくに器壁薄い。外面黒斑。	密 良	黄褐色	粘土分析 資料№.39
338	99	テラス19	土師 器	高台付 杯	*13.8	5.8	体部回転ナデ後、内面非常に丁寧なミガキ。外面も高台付部分にミガキがみられる。底部へラ切り後ナデ。やや丸底を呈し、器形は黒色土器に類似。	密 良	橙褐色	
339	99	テラス19	土師 器	高台付 杯	*12.4	4.6	体部回転ナデ後、内外面ともミガキ。口縁頭部内側に一部黒斑あり。	密 良	黄褐色	
340	99	テラス19	土師 器	高台付 杯	—	△3.5	体部回転ナデ後、内面丁寧なミガキ。外面にも体部中にミガキがみられる。底部丸底を呈し、黒色土器に器形は共通す	密 良	淡橙褐色	
341	99	テラス19	土師 器	壺	*12.8	△3.7	口縁ナデ。頸部以下内面ケズリ。外面ナデ。頸部内面に明確な指摺り痕み。外面に多量のスス付着	密 良	黄褐色	
342	99	テラス19	内黒	壺	*14.6	△5.0	内面黒色処理後ミガキ。外面粗いナデ。一部黒色化。頸部に強い段状のもの盛り。以下指摺り痕み強いナデ。	密 良	淡褐色	
343	99	テラス19	内黒	壺	*29.0	△15.7	内面黒色処理後ミガキ。外面粗いナデ。一部黒色化。	密 良	淡黄褐色	粘土分析 資料№.42
344	99	テラス19	土師 器	壺	*33.2	△12.7	口縁ナデ。内面頸部以下ケズリ。外面タテハケ。外面に黒斑。スス付着。	密 良	黄褐色	
345	99	テラス19	土師 器	壺	*32.2	△3.7	口縁ナデ。内面頸部以下ケズリ。外面タテハケ。	密 良	黄褐色	
346	99	テラス19	土師 器	壺	*35.2	△6.5	口縁ナデ。内面頸部はハケ後ナデか。以下ケズリ。外面ハケ。外面一部にスス付着。	粗 やや軟 やや硬	赤褐色	粘土分析 資料№.41
347	99	テラス19	土師 器	壺	*25.0	△11.4	口縁ナデ。内面頸部以下ケズリ。外面ナデか。外面頸部にスス付着。	密 良	淡褐色	粘土分析 資料№.40
348	99	テラス19	土師 器	壺	*34.0	△5.0	口縁ナデ。内面頸部以下ケズリ。外面タテハケ。内面にスス付着。	密 良	淡灰褐色	
349	99	テラス19	土師 器	壺	*33.8	△7.6	全体にかなり磨減。体部内面はケズリ後ナデ。外面はナデ。	密 やや軟	淡黄褐色	



遺物番号	博覧会	地区遺構	種別	器種	口径	器高	特徴	胎土構成	色調	備考
350	99	テラス19	土師器	甕	φ35.0	△10.0	口縁ナデ。内面頸部以下ケズリ、外面タテハケ。	密 良 やや軟	淡黄褐色	
351	99	テラス19	須恵器	甕	φ16.2	△3.5	口縁部ナデ。体部外面棒子目タタキ、内面同心円?タタキ。	密 良	暗青灰色	
352	99	テラス19	弥生土器	無蓋蓋	φ15.4	△5.0	口縁部に7、8ヶ所穿孔カ。外面ハケメナデナ。内面口縁ナデ。蓋口部以下ケズリ後ナデカ。外面に黒斑あり。	密 良 やや硬 やや軟	黄褐色	
353	100	土坑12	内黒	高台付杯	φ16.0	6.9	体部回転ナデ。内面黒色処理後丁寧ミガキ。口縁外面にも黒色部あまわむ。	密 良	外面：橙褐色	
354	100	土坑13	内黒	杯	φ13.0	△3.6	体部回転ナデ。内面黒色処理後丁寧ミガキ。口縁外面にも黒色部あまわむ。	密 良 やや硬 やや軟	外面：淡黄褐色	
355	100	土坑13	土師器	杯	—	△1.7	体部回転ナデ。全体に磨減。	密 良 やや軟 やや軟	橙褐色	
356	101	土坑14	土師器	高台付杯	φ13.8	5.1	体部回転ナデ。底部へラ切り後押圧。	密 良	橙褐色	
357	101	土坑14	土師器	高台付杯	φ15.3	5.6	体部回転ナデ。底部へラ切り後押圧。	密 良	橙褐色	
358	101	土坑14	土師器	高台付杯	φ14.8	△5.0	体部回転ナデ。ナデは内面の方が外面より丁寧。底部へラ切り後押圧。底部裏面に積物質圧痕。	密 良 やや硬	橙褐色	
359	101	土坑14	内黒	高台付杯	φ15.0	6.5	体部回転ナデ。内面黒色処理後ミガキカ。全体に磨減しており調整不明瞭。	密 良	外面：橙褐色	
360	101	土坑14	内黒	高台付杯	—	△2.5	体部回転ナデ。内面黒色処理後丁寧ミガキ。底部裏面赤色変形。	密 良	外面：淡黄褐色	胎土分析資料No.37
361	101	土坑14	土師器	高台付杯	—	△2.6	体部回転ナデ。底部へラ切り後押圧。	密 良 やや粗	橙褐色	
362	101	土坑14	土師器	杯	φ12.0	△3.7	全体に磨減。体部回転ナデ。	密 良 やや粗 やや軟	橙褐色	
363	101	土坑14	土師器	杯	φ13.1	4.3	体部回転ナデ。底部へラ切り後ナデ。	密 良 やや粗	橙褐色	
364	101	土坑14	土師器	杯	—	△2.1	体部回転ナデ。底部へラ切り後押圧。	密 良 やや粗 やや軟	橙褐色	
365	101	土坑14	土師器	杯	—	△2.2	体部回転ナデ。底部へラ切り後ナデ。	密 良 やや粗 やや軟	橙褐色	胎土分析資料No.36
369	104	土器層	土師器	杯	φ12.2	3.5	体部回転ナデ。底部へラ切り後ナデ。	密 良	橙褐色	
390	104	土器層	土師器	杯	φ12.6	3.3	体部回転ナデ。底部へラ切り後ナデ。	密 良	橙褐色	試験資料
391	104	土器層	土師器	杯	φ12.1	4.0	体部回転ナデ。底部へラ切り後ナデカ。	密 良	暗褐色	
392	104	土器層	土師器	杯	φ11.5	3.8	体部回転ナデ。底部へラ切り後押圧。	密 良	橙褐色	試験資料
393	104	土器層	土師器	杯	φ12.6	4.0	体部回転ナデ。底部へラ切り後ナデ。	密 良	橙褐色	
394	104	土器層	土師器	杯	φ13.4	4.0	体部回転ナデ。底部へラ切り後押圧。全体にやや磨減。	密 良	淡黄褐色	
395	104	土器層	土師器	杯	12.1	3.6	体部回転ナデ。底部へラ切り後押圧。口縁いびつ。縦にヒビが入る。外面黒斑。	密 良	淡褐色	
396	104	土器層	土師器	杯	φ12.2	3.3	体部回転ナデ。底部へラ切り後押圧。調整難。底部外面に黒斑。	密 良	淡橙褐色	
397	104	土器層	土師器	杯	φ11.8	—	体部回転ナデ。	密 良	淡橙褐色	
398	104	土器層	土師器	杯	φ11.8	3.9	体部回転ナデ。底部へラ切り後押圧。外面一部に黒斑。赤色変形があるカ。全体に磨減。	密 良 やや軟	黄褐色	
399	104	土器層	土師器	杯	φ12.0	4.2	体部回転ナデ。底部へラ切り後押圧。調整難で底部内外面に磨減痕。内外面一部に黒斑。	密 良	淡黄褐色	
400	104	土器層	土師器	杯	φ11.9	4.0	体部回転ナデ。底部へラ切り後押圧。底部器壁薄。外面一部に黒斑。	密 良	淡橙褐色	
401	104	土器層	土師器	杯	φ11.3	4.2	体部回転ナデ。底部へラ切り後押圧。全体にやや磨減。	密 良 やや粗 やや軟	橙褐色	
402	104	土器層	土師器	杯	φ12.5	4.1	体部回転ナデ。底部へラ切り後ナデ。	密 良	淡褐色	試験資料
403	104	土器層	土師器	杯	φ12.3	3.6	体部回転ナデ。底部へラ切り後押圧。	密 良 やや粗 やや軟	淡橙褐色	
404	104	土器層	土師器	杯	φ12.2	3.4	体部回転ナデ。底部へラ切り後押圧。粘土結晶位が残る。内面および外面底面を中心に黒斑。	密 良 やや粗	暗褐色	
405	104	土器層	土師器	杯	φ11.5	4.2	体部回転ナデ。底部へラ切り後押圧。外面に黒斑。	密 良	淡褐色	
406	104	土器層	土師器	杯	φ11.2	3.2	体部回転ナデ。底部へラ切り後押圧。	密 良	橙褐色	
407	104	土器層	土師器	杯	φ11.5	3.8	体部回転ナデ。底部へラ切り後押圧。	密 良	淡橙褐色	
408	104	土器層	土師器	杯	φ11.7	3.4	体部回転ナデ。底部へラ切り後押圧。	密 良	橙褐色	
409	104	土器層	土師器	杯	11.8	3.9	体部回転ナデ。底部へラ切り後押圧。	密 良	橙褐色	試験資料
410	104	土器層	土師器	杯	φ12.2	3.1	体部回転ナデ。底部へラ切り後押圧。全体にやや磨減。	密 良 やや軟	橙褐色	
411	104	土器層	土師器	杯	φ12.8	3.1	体部回転ナデ。底部へラ切り後押圧。	密 良	淡橙褐色	
412	104	土器層	土師器	杯	φ12.6	3.2	体部回転ナデ。底部へラ切り後ナデナ。底部内面および口縁外面に黒斑。全体に磨減痕。	密 良 やや粗	淡橙褐色	胎土分析資料No.14
413	104	土器層	土師器	杯	φ12.9	3.6	体部回転ナデ。底部へラ切り後押圧。	密 良	橙褐色	

遺物 番号	種別	地区遺構	種別	器種	口径	器高	特徴	胎土 構成	色調	備考
414	104	土器窯	土師 器	杯	φ12.2	3.7	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。全体にやや磨滅。	密 やや軟 密	淡褐色	
415	104	土器窯	土師 器	杯	φ11.6	3.6	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。外面一部に黒斑か。	密 密	暗褐色	
416	104	土器窯	土師 器	杯	φ11.8	3.7	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。底面比較的平滑。	やや粗 やや軟 密	淡褐色	
417	104	土器窯	土師 器	杯	11.7	4.4	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。底部丸底状を呈す。内外に一般黒斑。	密 密	橙褐色	
418	104	土器窯	土師 器	杯	φ12.0	3.9	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。底面磨滅。内外面一部に黒斑か。	密 密 密	暗褐色	
419	104	土器窯	土師 器	杯	φ11.6	4.1	体部回転ナデ。底部へう切り後ナデ。押圧。接合痕残る。	密 密 密	橙褐色	
420	104	土器窯	土師 器	杯	φ11.8	3.6	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。口縁部いびつで、一部刻み状の窪みがある。	密 密 密	淡褐色	試掘資料
421	104	土器窯	土師 器	杯	φ11.9	3.3	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。	やや粗 やや軟 密	淡褐色	
422	104	土器窯	土師 器	杯	φ10.8	4.0	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。内外黒斑。	密 密	淡褐色	
423	104	土器窯	土師 器	杯	φ11.6	4.1	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。接合面が残り、調整痕。全体にやや磨滅。	やや粗 密	淡褐色	
424	104	土器窯	土師 器	杯	φ15.3	5.1	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。大型のもの。	密 密	橙褐色	胎土分析 資料№15
425	105	土器窯	土師 器	高台付 杯	φ14.2	4.6	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。	密 密	淡黄褐色	
426	105	土器窯	土師 器	高台付 杯	φ14.4	4.8	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。高台一つぶつれ、外面磨滅。	密 密	橙褐色	
427	105	土器窯	土師 器	高台付 杯	φ14.5	5.3	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。	密 密	橙褐色	
428	105	土器窯	土師 器	高台付 杯	φ14.2	5.1	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。全体に磨滅。	密 密	橙褐色	
429	105	土器窯	土師 器	高台付 杯	φ15.8	5.5	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。高台いびつに成形。	密 密	橙褐色	胎土分析 資料№24
430	105	土器窯	土師 器	高台付 杯	φ15.0	5.6	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。	密 密	橙褐色	試掘資料
431	105	土器窯	土師 器	高台付 杯	φ15.0	6.1	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。内外面に磨滅のように黒斑。	密 密	淡褐色	
432	105	土器窯	土師 器	高台付 杯	φ14.4	5.3	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。内外面とも黒化。スズ状に黒光りする部分もある。全体にやや磨滅。	密 密	淡橙褐色	
433	105	土器窯	土師 器	高台付 杯	φ16.0	4.8	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧か。底部や丸底。高台形状いびつ。部分的につぶれる。杯底の磨滅は浅い。	密 密	橙褐色	
434	105	土器窯	土師 器	高台付 杯	φ14.2	5.4	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧か。底部や丸底。高台形状いびつ。頸部丸みまもつ部分と尖る部分あり。	密 密	淡橙褐色	
435	105	土器窯	土師 器	高台付 杯	φ14.2	6.1	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧か。底部丸底。	密 密	淡橙褐色	
436	105	土器窯	土師 器	高台付 杯	φ14.7	6.0	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧か。底部丸底。高台形状いびつ。部分的につぶれる。	密 密	淡褐色	
437	105	土器窯	土師 器	高台付 杯	φ10.2	3.8	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧か。内面底部ミガキか。器表面つるつるしている。底部丸底。	密 密	橙褐色	
438	105	土器窯	土師 器	高台付 杯	—	△2.0	体部回転ナデ。底部へう切り後ナデ。底部丸底。全体に磨滅。二次焼成を受けたものか。器表面にクレーター状の割れが目立つ。	密 やや軟 密	淡褐色	
439	105	土器窯	土師 器	高台付 杯	φ15.2	6.0	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧か。内面ミガキ。底部丸底。	密 密	橙褐色	試掘資料
440	105	土器窯	土師 器	高台付 杯	—	△3.4	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。内面体部および外面高台接合面粗いミガキ。	密 密	橙褐色	
441	105	土器窯	土師 器	高台付 杯	—	△5.1	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧か。底部丸底。内面は黒化か。後ミガキ。器壁非常に薄い。	密 密	淡褐色	
442	105	土器窯	土師 器	高台付 杯	φ13.4	5.6	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。内面黒斑。	密 密	橙褐色	試掘資料
443	105	土器窯	土師 器	高台付 杯	φ14.9	6.4	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。高台ややいびつ。やや磨滅。部分的にミガキがあるか。	密 密	橙褐色	
444	105	土器窯	土師 器	高台付 杯	φ14.6	6.1	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。高台ややいびつ。	やや粗 やや軟 密	橙褐色	
445	105	土器窯	土師 器	高台付 杯	—	△5.2	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。高台は高くいびつ。頸部丸みまもつ。	密 密	橙褐色	
446	105	土器窯	土師 器	高台付 杯	φ15.4	5.6	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。底部外面に黒斑。	密 密	淡橙褐色	試掘資料
447	105	土器窯	土師 器	高台付 杯	14.5	6.9	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。高台ややいびつ。	密 密	橙褐色	胎土分析 資料№23
448	105	土器窯	土師 器	高台付 杯	—	△10.7	体部回転ナデ。鼓形器台のような大きさ。	密 密	淡橙褐色	
449	106	土器窯	内黒 高台付 皿	—	φ12.8	2.6	体部回転ナデ。内面丁寧なミガキ。口縁外面に黒色処理がまわる。	密 密	外面：橙褐色	
450	106	土器窯	内黒 高台付 皿	—	φ13.5	2.3	体部回転ナデ。内面丁寧なミガキ。口縁外面に黒色処理がまわる。	密 密	外面：橙褐色	試掘資料
451	106	土器窯	内黒 高台付 皿	—	φ12.9	2.9	体部回転ナデ。内面丁寧なミガキ。口縁外面に黒色処理がまわる。	密 密	外面：橙褐色	
452	108	土器窯	内黒 高台付 皿	—	φ13.1	—	体部回転ナデ。内面丁寧なミガキ。底部は丸底で、底面は高台磨滅にほぼ同レベルになる。	密 密	外面：橙褐色	
453	106	土器窯	内黒 高台付 皿	—	φ13.4	—	体部回転ナデ。内面丁寧なミガキ。底部へう切り後丁寧なナデ。底部裏面は黒色。	密 密	外面：橙褐色	胎土分析 資料№27

遺物番号	排筒	地区遺構	種類	器種	口径	器高	特徴	胎土 焼成	色調	備考
454	106	土器溜	内黒	高台付杯	*16.4	5.4	体部回転ナデ、内面丁寧なミガキ。口縁外面に黒色処理が まわる。	密良 密良	外面：橙褐色	胎土分析 資料No.28
455	106	土器溜	内黒	高台付杯	*15.6	△4.2	体部回転ナデ、内面丁寧なミガキ。口縁外面に黒色処理が まわる。	密良 密良	外面：橙褐色	
456	106	土器溜	内黒	高台付杯	*14.0	5.8	体部回転ナデ、内面丁寧なミガキ。底部へら切り後丁寧ナデ	密良 密良	外面：橙褐色	試験資料
457	106	土器溜	内黒	高台付杯	*14.7	*5.4	体部回転ナデ、内面丁寧なミガキ。外面底部および口縁外 面に黒色処理がまわる。	密良 密良	外面：橙褐色	胎土分析 資料No.28
458	106	土器溜	内黒	高台付杯	*14.6	5.5	体部回転ナデ、内面丁寧なミガキ。口縁外面に黒色処理が まわる。全体に磨滅。	密良 密良	外面：橙褐色	
459	106	土器溜	内黒	高台付杯	—	△4.5	体部回転ナデ、内面丁寧なミガキ。底部へら切り後丁寧ナデ	密良 密良	外面：橙褐色	試験資料
460	106	土器溜	内黒	高台付杯	—	△3.3	体部回転ナデ、内面丁寧なミガキ。底部へら切り後丁寧ナデ	密良 密良	外面：橙褐色	試験資料
461	106	土器溜	内黒	高台付杯	*18.8	7.4	体部回転ナデ、内面丁寧なミガキ。外面底部および口縁外 面に黒色。大型のもので、つくりは雑。底部外面に黒色。 外面ケズリ後ナデ。口縁下にはタテ方向にハケム残る。内面 丁寧なミガキ。黒色処理は口縁外面にもまわる。	密良 密良	外面：橙褐色	
462	106	土器溜	内黒	鉢	*23.6	△8.5	口縁内面ミガキ。頸部以下ケズリ後粗いミガキ。外面頸部 コビオサエ。以下粗いナデ。口縁外面に黒色処理がまわる。	密良 密良	外面：灰褐色	胎土分析 資料No.32
463	106	土器溜	内黒	甕	*18.0	△8.6	口縁内面ミガキ。頸部以下ケズリ後粗いミガキ。外面頸部 コビオサエ。以下粗いナデ。口縁外面に黒色処理がまわる。	密良 密良	外面：黄褐色	
464	106	土器溜	内黒	甕	*28.8	△9.3	口縁内面ミガキ。頸部以下ケズリ。外面頸部コビオサエ。以 下粗いナデ。口縁外面に黒色処理がまわる。	密良 密良	外面：灰褐色	胎土分析 資料No.32
465	106	土器溜	内黒	甕	*27.0	△8.6	口縁内面ミガキ。頸部以下ケズリ後粗いミガキ。外面粗い ナデ。外面にスス付着。	密良 密良	外面：褐色	
466	106	土器溜	内黒	甕	*28.5	△11.8	口縁内面ミガキ。頸部以下ケズリ後上半部粗いミガキ。外面 頸部コビオサエ。以下粗いナデ。口縁外面に黒色処理がまわる。	密良 密良	外面：黄褐色	胎土分析 資料No.35
467	106	土器溜	内黒	甕	*25.0	△8.4	口縁内面ミガキ。頸部以下ケズリ。外面頸部コビオサエ。以 下粗いナデ。口縁外面に黒色処理がまわる。外面スス付着。	密良 密良	外面：灰褐色	
468	106	土器溜	内黒	甕	*27.6	△9.5	口縁内面一部ミガキ。頸部以下ケズリ。外面頸部コビオサ エ。一部にハケム。口縁外面に黒色処理がまわる。	密良 密良	外面：灰褐色	
469	106	土器溜	内黒	甕	*30.4	△11.9	口縁内面ミガキ。頸部以下ケズリ後丁寧なミガキ。外面粗い ナデ。外面にスス付着。	密良 密良	外面：黄褐色	
470	107	土器溜	土師器	甕	*19.6	△6.7	口縁内面ナデ。頸部以下ケズリ。外面口縁ナデ。頸部コビ オサエ。以下粗いナデ。外面スス付着。	密良 密良	灰褐色	胎土分析 資料No.34
471	107	土器溜	土師器	甕	*22.6	△12.1	全体磨滅。内面頸部以下ケズリ。	密良 密良	暗褐色	胎土分析 資料No.31
472	107	土器溜	土師器	甕	26.1	△14.0	口縁内面ミガキ。頸部以下ケズリ。外面口縁ナデ。頸部コビ オサエ。以下粗いナデ。外面頸部黒色。	密良 密良	褐色	試験資料
473	107	土器溜	土師器	甕	*29.0	△12.8	口縁内面ナデ。内面頸部以下ケズリ。外面頸部コビオサエ。以 下粗いナデ。上位にハケム残る。二次焼成により赤紫。	密良 密良	赤褐色	試験資料
474	107	土器溜	土師器	甕	*26.0	△16.3	口縁内面ミガキ。頸部以下ケズリ。外面口縁ナデ。頸部コビ オサエ。以下粗いナデ。上位にハケム残る。外面スス付着。	密良 密良	褐色	
475	107	土器溜	土師器	甕	*43.2	△16.9	口縁コナナデ。体部外面のみケズリ後粗くナデか。内面ナ デ。口縁外面黒色。	密良 密良	褐色	
476	107	土器溜	土師器	甕	*30.4	△16.5	口縁内面ナデ。頸部以下ケズリ。外面口縁ナデ。頸部コビ オサエ。以下粗いナデ。外面スス付着。	密良 密良	灰褐色	胎土分析 資料No.33
477	107	土器溜	土師器	甕	*29.8	*18.4	口縁コナナデ。内面はミガキか。体部内面のケズリはある程 度粗い状態で磨かれたためか、段状を呈す。外面粗い ナデ。外面にスス付着。	密良 密良	淡灰褐色	
478	107	土器溜	土師器	甕	*30.0	△8.3	口縁内面ナデ。頸部以下ケズリ。一部に爪痕状のものあり。 外面口縁ナデ。頸部以下粗くハケム。	密良 密良	淡褐色	試験資料
479	107	土器溜	土師器	甕	*30.4	△4.4	口縁内面一部ミガキ。頸部以下ケズリ後。部分的にミガキ か。外面頸部コビオサエ。以下ナデ。外面にスス付着。	密良 密良	灰褐色	
480	107	土器溜	土師器	甕	*28.2	△7.9	口縁内面ナデ。頸部以下ケズリ。外面口縁ナデ。頸部コビ オサエ。以下粗いナデか。頸部にタテハケ一残る。外面二次 焼成により赤紫。	密良 密良	灰褐色	
571	113	土器溜	須恵器	甕	—	△1.3	宝珠つまみ剥落。内面つるつる。転用碗か。	密良 密良	青灰色	
572	113	土器溜	須恵器	甕	*18.6	3.1	回転ナデ。頂部はへら切り。全体につるつる。回転ナデの後 積層される。	密良 密良	淡黄灰色	
573	113	土器溜	須恵器	杯	*11.0	4.0	底部回転糸切り後ややナデか。	密良 密良	青灰色	
574	113	土器溜	須恵器	杯	*10.0	3.0	底部回転糸切り。	密良 密良	暗青灰色	
575	113	土器溜	須恵器	甕	*21.1	△15.5	口縁内面はつるつるなナデ仕上げ。体部内面胸心内。外面 平行タタキ。	密良 密良	灰色	
576	113	土器溜	須恵器	甕	—	△17.9	体部回転ナデ。底部へら切り後中央部はナデで磨く。外面 底部近くまで顔灰色染がかかる。	密良 密良	灰色	
577	116	テラス21	高台付杯	土師器	—	△3.2	体部回転ナデ。底部へら切り後押圧。	密良 密良	橙褐色	胎土分析 資料No.58
578	116	テラス21	高台付杯	土師器	—	△3.4	全体に磨滅。体部回転ナデ。底部へら切り後押圧。	密良 密良	橙褐色	
579	116	テラス21	須恵器	甕	—	△4.7	内面車輪状タタキ。外面平行タタキ。	密良 密良	淡灰色	
580	116	テラス21	内黒	甕	*29.4	△11.3	全体に磨滅し調整不明。口縁ナデ。内面頸部以下ケズリ。 外面粗いナデ。外面にスス付着。黒色処理は口縁外面にお ける。	密良 密良	外面： 淡黄褐色	
581	116	溝1	土師器	甕	*34.0	△3.5	全体に磨滅し調整は不明確。外面はコナナデ。	密良 密良	淡黄褐色	
582	116	溝1	土師器	甕	*18.2	△14.1	口縁ナデ。内面体部ケズリ。外面は赤褐色を呈し、二次焼 成を受けたものか。	密良 密良	赤褐色	

遺物番号	採掘地区	地区遺構	種別	器種	口径	器高	特徴	胎土 焼成	色調	備考
583	116	溝12	須恵器	高台付皿	φ17.6	△3.3	全体的に磨滅しており調整不明。	密 良	灰色	胎土分析資料№57
584	116	溝12	須恵器	杯	φ12.0	3.5	底唇回転糸切り。体部外面はつるつる。	密 良	灰色	
585	116	溝12	須恵器	杯	φ12.2	3.8	底唇回転糸切り。	密 良	灰褐色	
586	116	溝12	須恵器	杯	—	△3.4	底唇回転糸切り後ナデ。体部外面は表面滑らか。	密 良	灰色	
587	116	溝12	土師器	高台付皿	—	△1.3	全体に磨滅。調整不明。	密 やや粗 やや粗 やや粗	淡橙褐色	
588	116	溝12	土師器	高台付杯	—	△2.1	全体に磨滅。調整不明。	密 良	淡黄褐色	
589	116	溝11	須恵器	杯	φ12.8	4.7	体部回転ナデ。底部は厚み、回転糸切りであったと考えられる。全体的に磨滅。	密 良	灰白色	
590	118	池伏遺構⑦層	土師器	杯	φ11.6	3.2	体部回転ナデ。底部へら切り後押圧。	密 やや粗	橙褐色	
591	118	池伏遺構⑦層	土師器	杯	φ12.8	3.2	体部回転ナデ。底部へら切り後押圧。ナデ。	密 やや粗	淡褐色	
592	118	池伏遺構⑦層	土師器	盥	φ31.2	△5.7	内面口縁ヨコナデ。頸部以下ケズリ。外面口縁までタチハケが通ずる。ハケメは悪い。口縁はその後ナデ。外面にスス。	密 やや粗	橙褐色	
593	118	池伏遺構⑦層	土師器	盥	φ18.5	△7.2	全体に磨滅し調整不明。口縁部ナデ。内面頸部以下ケズリ。	密 やや粗	淡褐色	
594	118	池伏遺構⑦層	土師器	飯御杯	—	△1.8	全体磨滅。内外コナデ。	密 やや粗 やや粗	淡橙褐色	
595	118	池伏遺構⑦層	須恵器	円筒埴輪	—	△6.3	外面タチハケ。内面は斜方向ハケメ。円形通かし孔もつ。	密 良	外面：橙褐色 内面：褐色	
596	118	池伏遺構⑦層	土師器	円筒埴輪	—	△6.7	全体に磨滅。外面わずかにハケメ残る。	密 やや粗	灰褐色	
597	118	池伏遺構⑦層	土師器	円筒埴輪	—	△8.3	外面細かいタチハケ。内面は斜方向ナデ。	密 やや粗 やや粗	淡橙褐色	
598	119	池伏遺構⑧層	土師器	皿	φ13.2	1.8	体部ナデ。底部へら切り後押圧。ナデ。全体に磨滅。内外赤色塗彩。底部外面に黒斑。	密 やや粗	淡橙褐色	
599	119	池伏遺構⑧層	土師器	皿	φ14.8	1.8	体部ナデ。底部へら切り後押圧。ナデ。全体に磨滅。内外赤色塗彩。	密 やや粗	淡橙褐色	
600	119	池伏遺構⑧層	土師器	皿	φ14.6	1.6	体部ナデ。底部へら切り後ナデか。内外赤色塗彩。	密 やや粗	橙褐色	胎土分析資料№5
601	119	池伏遺構⑧層	土師器	高台付杯	φ15.4	3.8	体部ナデ。底部へら切り後押圧。ナデか。全体に磨滅し調整不明。内外赤色塗彩。	密 やや粗 やや粗	淡褐色	胎土分析資料№3
602	119	池伏遺構⑧層	土師器	杯	φ12.2	2.7	体部回転ナデ。底部へら切り後押圧。ナデ。全体に磨滅。	密 やや粗	淡橙褐色	胎土分析資料№6
603	119	池伏遺構⑧層	土師器	杯	φ12.8	3.1	体部回転ナデ。底部へら切り後押圧。ナデ。	密 やや粗	淡橙褐色	胎土分析資料№3
604	119	池伏遺構⑧層	土師器	杯	φ12.6	3.5	体部回転ナデ。底部へら切り後押圧。ナデ。底部唇部非常に厚し。口縁部はほぼすべて1/4ほどの残存ながら、波状を呈す。	密 やや粗 やや粗	淡橙褐色	
605	119	池伏遺構⑧層	土師器	杯	φ12.8	3.4	体部回転ナデ。底部へら切り後押圧。ナデ。全体に磨滅。	密 良	橙褐色	胎土分析資料№2
606	119	池伏遺構⑧層	土師器	杯	φ13.2	3.3	体部回転ナデ。底部へら切り後押圧。ナデ。底部内面に赤色塗彩残る。	密 やや粗 やや粗	淡橙褐色	
607	119	池伏遺構⑧層	土師器	杯	φ13.2	3.1	体部回転ナデ。底部へら切り後押圧。ナデ。内面底部境に赤色塗彩残るが。底部外面に黒斑。	密 やや粗 やや粗	淡橙褐色	
608	119	池伏遺構⑧層	土師器	杯	φ11.2	3.7	体部回転ナデ。底部へら切り後押圧。全体にかなり磨滅。	密 良	淡褐色	
609	119	池伏遺構⑧層	土師器	杯	φ12.5	4.0	体部回転ナデ。底部へら切り後押圧。	密 良	橙褐色	
610	119	池伏遺構⑧層	土師器	杯	φ11.2	4.1	体部回転ナデ。底部へら切り後押圧。	密 やや粗	橙褐色	胎土分析資料№1
611	119	池伏遺構⑧層	土師器	杯	φ11.3	4.1	体部回転ナデ。底部へら切り後押圧。全体にかなり磨滅。	密 やや粗	淡褐色	
612	119	池伏遺構⑧層	土師器	杯	φ13.4	3.4	体部回転ナデ。底部へら切り後押圧。全体に磨滅。	密 やや粗 やや粗	淡褐色	
613	119	池伏遺構⑧層	須恵器	高台付杯	—	△2.7	全体磨滅し調整不明。	密 良	灰白色	胎土分析資料№13
614	119	池伏遺構⑧層	内風	高台付杯	φ13.4	△3.7	体部回転ナデ。内面丁寧なミガキ。口縁外面に黒色処理がまわる。全体に磨滅し調整不明。	密 良	外面：橙褐色	
615	119	池伏遺構⑧層	内風	高台付杯	—	△2.9	内面ミガキ。底部へら切り後ナデ。	密 良	外面：橙褐色	
616	119	池伏遺構⑧層	土師器	盥	φ21.4	△11.4	口縁部ナデ。内面頸部以下ケズリ。外面頸部ユビオサエ。以下掘いナデ。外面にスス付着。	密 やや粗	暗褐色	
617	119	池伏遺構⑧層	土師器	盥	φ20.8	△8.7	口縁部ナデ。内面頸部以下ケズリ。外面ハケメ。	密 やや粗	暗灰色	胎土分析資料№7
618	119	池伏遺構⑧層	内風	盥	φ16.0	△5.1	全体磨滅し調整不明。頸部外面まで黒色処理および。	密 やや粗	外面：淡褐色	
619	118	池伏遺構⑧層	土師器	盥	φ33.6	△10.0	口縁部ナデ。内面頸部以下ケズリ。外面ハケメ。外面にスス付着。	密 やや粗	淡灰褐色	胎土分析資料№8
620	119	池伏遺構⑧層	土師器	盥	φ29.2	△14.7	口縁部ナデ。内面頸部以下ケズリ。外面ハケメ後ナデか。	密 やや粗	淡灰褐色	胎土分析資料№9
621	119	池伏遺構⑧層	須恵器	杯	φ11.8	3.8	底部回転糸切りか。全体に磨滅し調整不明確。	密 良	淡灰色	
622	118	池伏遺構⑧層	須恵器	杯	φ14.5	△4.3	体部回転ナデ。	密 良	淡灰色	胎土分析資料№11

遺物 番号	採 取 地 区	遺 構 種 別	器 種	口 径	高 さ	特 徴	胎土 構成	色 調	備 考
623	119	池状遺構 ④(覆)	須恵 器 杯	*12.3	4.5	全体磨滅し調整不明瞭。底部磨耗厚く、外面に8条一単位のハゲムが放射状に整えられる。	密 土 質 土 質 土 質	淡灰色	
624	119	池状遺構 ④(覆)	須恵 器 高台付 杯	*19.6	3.5	全体磨滅し調整不明。	やや粗 土 質 土 質	淡灰色	胎土分析 資料№.12
625	119	池状遺構 ④(覆)	須恵 器 高台付 杯	*19.6	3.5	全体磨滅し調整不明。	やや粗 土 質 土 質	淡灰色	胎土分析 資料№.10
626	119	池状遺構 ④(覆)	須恵 器 壺	—	△5.3	外面格子目、内面車輪状タタキ。	密 土 質 土 質	淡灰色	
627	119	池状遺構 ④(覆)	須恵 器 壺	*20.8	△5.0	口縁コナナ。内面磨削ユビオサエ。	密 土 質 土 質	淡灰色	
628	121	土坑15	土師 器 杯	*12.7	3.6	体部回転ナデ。底部へう切り後ナデ。内外面ともナデの接線は不明瞭。内面に鎌倉痕あり。	やや粗 土 質 土 質	橙褐色	胎土分析 資料№.45
629	121	土坑15	土師 器 杯	11.9	4.0	体部回転ナデ。調整は磨滅により不明瞭。底部へう切り後押圧。磨盤素面に濃い。	やや粗 土 質 土 質	橙褐色	
630	121	土坑15	土師 器 杯	*12.1	4.0	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。全体に磨滅。ややいびつなつくり。口縁一部に黒斑。	密 土 質 土 質	橙褐色	
631	121	土坑15	土師 器 杯	*11.7	4.0	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。全体に磨滅。	密 土 質 土 質	橙褐色	
632	121	土坑15	土師 器 杯	11.5	3.8	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。全体に磨滅。全体にいびつなつくりで口縁は波状を呈する。	やや粗 土 質 土 質	黄褐色	
633	121	土坑15	土師 器 杯	12.4	3.9	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。全体に磨滅。磨盤薄い。ややいびつなつくり。	密 土 質 土 質	橙褐色	
634	121	土坑15	土師 器 杯	12.1	3.9	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。体部境界は密なユビオサエ。つばははかりしている。	密 土 質 土 質	橙褐色	
635	121	土坑15	土師 器 杯	*12.0	*4.3	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。内外面ともナデの接線は不明瞭。内面に付着物多量。ススか。口縁外面に黒斑。	やや粗 土 質 土 質	橙褐色	胎土分析 資料№.44
636	121	土坑15	土師 器 高台付 杯	*14.5	5.7	体部回転ナデ。磨滅して不明瞭ながらミガキがあるか。底部へう切り後押圧。ナデ。	密 土 質 土 質	橙褐色	
637	121	土坑15	土師 器 高台付 杯	*14.0	5.9	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。内面に黒斑あるか。全体的に磨滅。	やや粗 土 質 土 質	橙褐色	胎土分析 資料№.48
638	121	土坑15	土師 器 高台付 杯	*14.1	6.5	体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。かなりいびつ。磨盤薄い。全体的に磨滅。	やや粗 土 質 土 質	橙褐色	
639	121	土坑15	土師 器 高台付 杯	15.9	8.4	体部回転ナデ。かなり丁寧。底部へう切り後押圧。後ナデ。	密 土 質 土 質	橙褐色	
640	121	土坑15	土師 器 高台付 杯	—	△4.4	体部回転ナデ。底部内外面に黒斑。高台割縁部分にも黒斑状のものあり。	やや粗 土 質 土 質	橙褐色	
641	121	土坑15	内黒 高台付 杯	12.2	5.6	体部回転ナデ。内面丁寧なミガキ。底部は押圧痕残る。口縁外面に黒色処理がわかる。	密 土 質 土 質	外面：橙褐色	
642	121	土坑15	内黒 高台付 杯	*13.3	5.6	体部回転ナデ。内面丁寧なミガキ。底部へう切り後ナデ。口縁外面に黒色処理がわかる。全体に磨滅。	密 土 質 土 質	外面：橙褐色	
643	121	土坑15	内黒 高台付 杯	*15.6	5.6	体部回転ナデ。内面丁寧なミガキ。底部へう切り後ナデ。口縁外面に黒色処理がわかる。全体に磨滅。	密 土 質 土 質	外面：橙褐色	胎土分析 資料№.49
644	121	土坑15	内黒 高台付 杯	*15.0	6.2	体部回転ナデ。内面丁寧なミガキ。底部へう切り後ナデ。口縁外面に黒色処理がわかる。全体に磨滅。	密 土 質 土 質	外面：橙褐色	胎土分析 資料№.47
645	121	土坑15	内黒 高台付 杯	*15.2	△4.3	体部回転ナデ。内面丁寧なミガキ。底部へう切り後ナデ。口縁外面に黒色処理がわかる。全体に磨滅。	密 土 質 土 質	外面：橙褐色	胎土分析 資料№.46
646	121	土坑15	内黒 高台付 杯	—	△5.3	体部回転ナデ。内面丁寧なミガキ。底部へう切り後ナデ。口縁外面に黒色処理がわかる。全体に磨滅。	密 土 質 土 質	外面：橙褐色	
647	121	土坑15	内黒 壺	19.0	12.8	口縁磨削コナナ後。内面はミガキか。体部内面ケズリ。外面磨削ユビオサエ。体部は粗いナデ。	粗 土 質 土 質	外面：灰白色	胎土分析 資料№.50
648	121	土坑15	内黒 壺	*25.5	18.1	口縁磨削コナナ後。内面ミガキ。体部内面ケズリ。外面磨削ユビオサエ。体部は粗いナデ。外面にスス。	粗 土 質 土 質	外面：灰白色	胎土分析 資料№.51
649	122	池状遺構 ④(⑤)層	土師 器 高台付 杯	*19.0	2.4	全体に磨滅。体部回転ナデ。口縁に対し、高台の位置がずれている。内面赤色塗彩。	やや粗 土 質 土 質	橙褐色	
650	122	池状遺構 ④(覆)	土師 器 壺	*14.0	1.4	体部回転ナデ。内外面赤色塗彩であったか。	密 土 質 土 質	淡橙褐色	
651	122	池状遺構 ④(覆)	土師 器 高台付 杯	—	△3.2	体部回転ナデ。内外面とも赤色塗彩。	密 土 質 土 質	淡橙褐色	
652	122	池状遺構 ④(覆)	土師 器 杯	*12.3	3.1	全体に磨滅甚だしい。器型も非常に薄い。体部回転ナデ。底部へう切り後押圧。	やや粗 土 質 土 質	淡橙褐色	胎土分析 資料№.52
653	122	池状遺構 ④(覆)	須恵 器 杯	*12.2	4.5	底部回転糸切り。磨滅気味だが、硬質のもの。	密 土 質 土 質	淡灰色	
654	122	池状遺構 ④(覆)	内黒 壺	*29.4	△12.9	口縁磨削コナナ。内面黒色処理後ミガキ。頭部以下ケズリ後一部ミガキ。体部外面粗いナデ。口縁外面に黒色化および。	粗 土 質 土 質	淡褐色	胎土分析 資料№.53

表 15 平安時代焼成粘土塊観察表

遺物番号	堆積地区	特徴	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	備考
368	102 テラス18	上面は厚さ0.6cmほどの棒状塊を貼り付け、下面はシボリ状、黒斑あるいは焼成不良による黄灰色。	3.2	2.5	1.5	10.2	
369	102 テラス18	上面上側折り返しにより突出、下面は指頭圧により、大きく窪む。	3.7	2.4	1.0	7.1	
370	102 テラス18	円柱状、下部は欠損か、上端部一部折り返し。	3.5	1.0	0.8	3.4	
371	102 テラス18	棒状、下縁部欠損、上縁部はやや窪くなる。	5.2	0.8	0.7	3.1	
372	102 テラス19	横断面楕円を呈す棒状、やや湾曲する。	2.1	1.1	0.7	1.7	
373	102 テラス19	右側から折り返し、上面は断面弧状。	2.5	2.0	0.9	3.5	
374	102 テラス19	上面および下面左側端部黒斑、下側膨らんでおり、折り返しによるものか、上下面縦溝。	3.4	2.9	1.1	8.5	
375	102 テラス18	下側は碗蓋状、上面は楕圓状。	2.7	3.0	1.3	8.4	
376	102 テラス19	ギターのピック状を呈す、薄い三角形、下面は指頭圧によりやや凹む。	3.1	2.9	0.4	3.0	
377	102 テラス19	上面および下面左側端部黒斑、厚さ5~6mmの薄板状を上側で折り返し、上下各端部は未露露。	4.4	3.2	1.3	16.8	
378	102 テラス19	下半部を側半分をちぎり、右側へ折り曲げたよう、右側部は赤彩か。	2.6	2.1	1.1	4.3	
379	102 土坑14	上面上端折り返し、中央部は横方向に窪み、楕圓状の痕跡。	2.5	1.7	0.8	2.0	
380	102 土坑14	棒状、下部が極広い。	2.5	1.4	0.8	2.7	
381	102 土坑14	左側縦溝、0.5~0.8cmほどの薄板状を折り返す。	3.2	△3.4	1.2	8.8	
382	102 土坑14	上面黒斑、左側部は破面か、右側は段状で毀状。	3.1	2.4	1.2	5.4	
383	102 土坑14	塊状、下面中央は窪む。	2.3	2.5	1.6	6.8	
384	102 土坑14	玉子状の塊、下面はやや平坦で凹凸がある。	3.3	2.1	1.4	9.0	
385	102 土坑14	左側は折り返し、平円状空洞ができる、右側下面は指頭圧痕状、大型。	4.0	2.4	1.2	5.4	
386	102 土坑14	内外面黒斑、下面は平坦で下部はシボリ状の痕跡、上面三角形に突出。	5.5	2.1	1.5	11.4	
387	102 D5-I 黒土層	土塊などの筒状、下縁部は受け皿状に丸く窪む、上端部はひきぎったままのよう。	4.1	1.3	0.9	4.4	
388	102 C5-I 黒土層	3片に割れる、下部は横方向に窪む、下面下半部は剥離か。	4.6	3.5	1.6	18.0	
481	108 土器溜	下面は楕圓か。	2.0	1.5	0.5	1.3	
482	108 土器溜	下半部は折り返す、上面は細い穴状のもの数単位みられる、爪痕か。	2.1	1.9	0.8	2.0	
483	108 土器溜	上面右に径0.9cmほどの粘土片接着、上面は縦溝痕か、内外黒斑。	2.1	1.9	0.7	2.0	
484	108 土器溜	上面右側折り返し、下面は凹凸。	2.2	1.8	0.6	4.4	
485	108 土器溜	上面右側折り返し、上下面とも中央部窪む。	4.0	1.7	0.7	4.9	
486	108 土器溜	薄板状、上下面縦溝。	2.8	2.4	0.7	4.3	
487	108 土器溜	上面は上から左側面にかけいびつ、下面は黒斑あるいは焼成不良による黄灰色。	3.1	1.9	0.9	3.7	
488	108 土器溜	上面左側から折り返し、縦に裂状になる、下面は平坦。	3.0	1.8	0.8	3.5	
489	108 土器溜	厚さ0.4~0.5cmの板状のものを折り返し、右側でつなぐ、中央上側は膨らむ、上面に細い縦溝状の痕跡。	3.2	2.7	1.0	8.1	
490	108 土器溜	三角おにぎり状の塊、下面は丸く窪む。	1.7	1.6	1.1	2.3	
491	108 土器溜	左側から折り返し段状になる、下面は表面滑らか。	2.0	1.9	1.0	2.6	
492	108 土器溜	厚さ0.5~0.6cmの板状のものを折り返し上側でつなぐ、一部に黒斑、あるいは焼成不良によって黄灰色になったか。	2.2	2.0	1.3	3.8	
493	108 土器溜	上面左下は窪む。	2.4	1.7	1.0	3.0	
494	108 土器溜	上面は表面滑らか、下面は破面のようにカタカタ、下面全体黒斑で上面にもまわる。	2.4	1.9	1.2	3.8	
495	108 土器溜	三角おにぎり状の塊、上下縁部は小さく折り返ししか。	2.4	2.3	1.5	5.7	
496	108 土器溜	上面は粘土貼り付けで山状になる。	2.6	2.2	1.4	6.0	
497	108 土器溜	塊状、上下から2枚接着か。	3.0	1.8	1.8	7.0	
498	108 土器溜	厚さ0.7cmほどの2枚が接着。	2.3	2.6	1.5	7.2	
499	108 土器溜	三角おにぎり状の塊、表面細かく多孔質。	2.6	2.4	1.7	6.7	
500	108 土器溜	下面上側から折り返し、上面右側指頭圧により中央部凸状に盛り上がる。	3.1	1.9	1.2	4.2	
501	108 土器溜	塊状、下面は窪む。	3.3	2.4	1.6	10.0	
502	108 土器溜	上面から折り返し、一翼クルミ表皮状の内外面。	2.6	2.8	1.5	6.5	
503	108 土器溜	平面楕円形で厚みは一定、上部は長さ2cm、厚さ0.9cmほどの塊を接着させる。	3.0	2.2	1.3	8.0	
504	108 土器溜	下面両端から折り返し、上面丸みをもち滑らか、下面は凹凸、下面下半黒斑。	3.7	3.3	0.9	7.2	
505	108 土器溜	棒状、上側左側および下面右側から折り返し。	4.0	2.0	1.1	7.2	
506	108 土器溜	上面黒斑、上下2枚接着か。	5.2	2.8	2.0	21.4	
507	108 土器溜	下部は若干凹下状に反る、上面上側は折り返して段状になる。	2.5	1.3	0.9	2.1	
508	109 土器溜	棒状、下面上縁部欠損。	4.5	1.3	1.1	6.2	

遺物 番号	挿 図	地区遺構	特徴	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	備考
509	109	土器溝	棒状、上下端部一部欠損。下面に黒斑。	3.2	1.5	1.4	6.0	
510	109	土器溝	小型の薄板状。	2.1	1.6	0.5	1.8	
511	109	土器溝	0.1~0.2cmの石英粒が目立つ。	2.2	1.7	0.7	2.1	
512	109	土器溝	上面艶状。下面は平坦。全体に暗灰色。	1.9	1.5	0.6	1.3	
513	109	土器溝	下面やや折り返し。斜方向に溝ができる。	2.5	2.0	0.8	2.9	
514	109	土器溝	上下面指頭圧による窪み。下面上側から棒状のものを折り返し。	2.2	2.0	0.6	2.4	
515	109	土器溝	やや厚みのある小型のもの。	2.0	1.4	0.8	2.1	
516	109	土器溝	1~3mmほどの石英粒など多く含み粘土質。内外面黒斑。下面やや窪む。	3.4	2.3	0.9	6.7	
517	109	土器溝	右側破面。直角三角形状を呈す。	3.4	△1.9	0.6	2.5	
518	109	土器溝	L字状を呈す筒体。右側先端部は上へ折り返し。	2.2	1.8	0.9	1.6	
519	109	土器溝	上面を艶折り返し。下面面溝からやや窪む。	4.5	3.4	0.9	11.8	
520	109	土器溝	2片を上下に接着。下半部は左右2片接着か。	3.4	1.7	0.9	0.8	
521	109	土器溝	三角形状を呈す薄板だが、下部は欠損。左側は折り返し。下面は中央から左側へかけ	△3.6	3.6	0.8	7.4	
522	109	土器溝	ほぼ全面黒斑か。上面植物質繊維痕。	3.3	2.0	0.7	3.8	
523	109	土器溝	平面台形。上面はやや反り。下面は中位で凹面。溝方向に艶状になる。上部は窪む。	3.0	3.4	1.2	9.3	
524	109	土器溝	左側部折り返し。下端部もやや折り返しするように上方をむく。	4.4	2.7	1.1	11.0	
525	109	土器溝	一見分銅形土製品の下半部状。下面黒斑顕著。	4.0	5.3	1.0	14.4	
526	109	土器溝	大型で丸匙状を呈す。右側突出部は上側をむく。下面に土師器片含まれる。上下面とも繊維痕顕著。	8.2	4.8	1.3	37.0	
527	110	土器溝	上面繊維痕。薄板状粘土を貼り付けか。	2.5	1.9	0.8	3.3	
528	110	土器溝	上面より棒状のものを折り返し。	2.3	1.5	0.8	2.7	
529	110	土器溝	上下2枚接着。下端部は下面から折り返し。ないしは棒状を接着。	2.7	2.4	0.9	4.8	
530	110	土器溝	下面繊維痕が目立つ。	2.9	2.4	0.9	5.8	
531	110	土器溝	上面繊維痕か。下面中央欠損。	2.9	2.1	1.0	5.2	
532	110	土器溝	上面上側から折り返しか。	3.0	2.0	0.8	4.5	
533	110	土器溝	巻貝状。全面黒斑より黒色化。	3.0	2.4	1.0	5.4	
534	110	土器溝	上面中央部別個体を接着。上面黒斑。下面はやや窪む。	3.0	1.7	0.9	4.0	
535	110	土器溝	いびつな棒状。下部は上面から折り返しか。全体的に暗灰色。	2.8	1.9	0.9	3.4	
536	110	土器溝	2枚の薄板状を接着。上面に繊維痕。下面黒斑。	3.2	2.4	1.1	5.5	
537	110	土器溝	上面から包むように薄板をかぶせ接着。下面は指頭圧により窪む。	3.1	2.0	1.0	4.9	
538	110	土器溝	上面丸みをもつ。下面はほぼ平面。上下2片を接着か。	3.2	2.1	1.3	5.7	
539	110	土器溝	ほぼ中央にある斜方向のびれ部は、上下2個体の接着によるもの。下面は平坦。	3.6	2.7	0.9	7.7	
540	110	土器溝	上面縦方向に2条の溝。中央部凸状に盛り上がる。黒斑。下面表面は滑らかで、丸みをも	4.3	2.5	1.2	9.8	
541	110	土器溝	上面中央から下面にかけ黒斑。下面は平坦。上面膨らみをもち厚みがある。	4.3	3.3	1.9	19.8	
542	110	土器溝	下面は下側部から折り返し。さらにねじれるようにした後、上側でつまみあげ。繊維痕状の細線が多く縦横にある。	4.3	3.2	1.4	12.4	
543	110	土器溝	板状。上面はナデで平滑。下面は未調整。	4.8	2.8	1.0	12.4	
544	110	土器溝	ギョーザ状に上方につまみあげられる。下面は比較的平坦。	5.2	3.3	1.3	15.0	
545	111	土器溝	薄板状のものを2~3枚重ねて接着したものか。下面に黒斑。	6.0	3.8	2.6	48.6	
546	111	土器溝	1枚の薄板を2~3重に折り返すものが2枚上下に接着される。	6.2	4.7	2.3	58.0	
547	111	土器溝	上面は比較的滑らかだが、右側から下面にかけて凹凸はけしい。	5.0	4.1	2.2	38.6	
548	111	土器溝	上面滑らかで丸みをもつ。下側から折り返し。	2.1	1.9	1.0	4.2	
549	111	土器溝	上から覆いかぶせるように粘土片を接着か。	2.6	2.7	1.2	5.6	
550	111	土器溝	上面右側が窪む。	2.9	2.0	1.0	4.8	
551	111	土器溝	表面全体的に凹凸のある形状。	2.8	2.2	1.9	8.3	
552	111	土器溝	右側は破面。上面左側指頭圧による窪み。	3.0	△1.8	1.4	5.0	
553	111	土器溝	上面黒斑。下面は中央部部に窪む。	2.9	2.4	1.2	6.9	
554	111	土器溝	上面いびつ。上部は粘土片を押し付けるように接着し運んだか。下面黒斑。	3.7	3.0	1.6	10.0	
555	111	土器溝	上面艶状。半分に折り返される。	3.5	3.0	1.7	12.2	
556	111	土器溝	上面コブ状に粘土片貼り付け。二次焼成により赤変か。下面左側部は内側に折り返され	3.8	2.2	1.8	10.2	
557	111	土器溝	中央部部に棒状。上部右側折り返し。下面には繊維痕。	3.3	2.8	1.4	9.6	
558	112	土器溝	上側上半部は別個体貼り付け。下半部は脚状に二段に分けたものをあぐらをかきように接	4.0	2.6	1.3	9.7	

遺物 番号	種 別	地区遺構	特徴	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	備考
559	112	土器溜	上半は薄板状、中位で上方に屈曲し、左側を折り返し空間ができる。	4.8	1.5	1.1	4.8	
560	112	土器溜	上部幅広く刃先状。下部は柄状に丸みをもつ。下部右側は折り曲げ、柄状部分シボリ。端部近く炭化物が粘土内にある。上面顔着な黒斑。	4.4	2.4	1.3	9.2	
561	112	土器溜	上面右側から折り返し、上部側に粉炭痕。下面は平坦。全体的に暗褐色を呈す。黒斑が、	4.5	2.9	1.7	14.8	
562	112	土器溜	下端部はつま先状につまみ出す。下面上半欠損。	△3.2	2.2	2.2	15.0	
563	112	土器溜	薄板を巻き上半部で捲き、中央に空洞をつくる。下面は指頭状により窪む。	3.2	2.0	2.0	7.6	
564	112	土器溜	分厚い粘土を折り曲げ、上部は翼状におさめる。下面縦線痕多い。	4.5	3.6	2.3	20.8	
565	112	土器溜	下面に径0.5cmほどの粘土片捲き。若干ねじったような形状を呈す。	2.4	1.2	0.7	1.7	
566	112	土器溜	上面下半部上から折り返し、厚みをもつ。上半部は細くなり右側から強く指頭状で大きな円形窪み。窪み内に横方向にある沈線は爪痕か。	3.0	1.8	1.1	4.0	
567	112	土器溜	細棒状に左右両側から折り曲げ、「く」字状を呈す。内外面黒斑状に暗灰色を呈す。	3.0	1.1	0.7	1.5	
568	112	土器溜	板状のものを巻き込み棒状にする。右側部はつまみ翼状になる。	4.3	1.4	1.1	6.8	
569	112	土器溜	棒状の中央が窪む。ややねじったようなもの。	3.5	1.8	1.0	4.2	
570	112	土器溜	棒状の境を2箇所着させたもの。上面大半黒斑。	6.2	3.7	2.0	38.8	

表 16 平安時代被熱粘土塊観察表

遺物 番号	種 別	地区遺構	特徴	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	備考
568	101	土坑14	表面は平坦で、植物質繊維痕目立つ。内側クレーター状に穴があく。	△13.0	△17.1	△4.6	#####	
567	101	土坑14	表面ほぼ平坦。焼じけした感し。	△8.1	△8.0	△4.3	220.0	

表 17 第7章 石製品観察表

## 遺物観察表

1. 重量について、復元値は\*、残存値は△で示した。単位はcmである

## 古市宮ノ谷山遺跡

遺物番号	種別	図版	地区遺構	器種	石材	長さ・高さ (cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
S19	98	77	テラス19	磁石	細粒花崗岩	5.35	7.6	3.65	195.0	
S20	114	77	土器溜および厨辺	磁石	細粒花崗岩	9.2	5.3	3.7	234.0	
S21	116	6	テラス21~23	磨製石斧	安山岩	7.1	5.35	3.6	170	
S22	121	77	土坑15	磨石	安山岩	12.5	8.6	6.7	875.0	
S23	121	77	土坑15	未製品	流紋岩	19.7	31.5	9.9	6500	



## 第8章 鎌倉時代～室町時代の調査

### 第1節 概要 (図123)

この時期のものは大きく2時期に分けられる。ひとつは13世紀後半～14世紀前半に比定できる遺構群であり、これは尾根1区の土坑16、テラス24が相当する。もう一群は尾根1区先端部にあるテラス、集石、土坑ならびに尾根2区の上墳群である。これら遺構に伴う遺物は非常に少ないが、尾根1区1層から出土した土師器および集石群に伴う五輪塔の型式学的検討から、15世紀後半～16世紀に比定するものと考えられる。また表土などからも当該期の貿易陶磁器、国産陶器が出土しており、これら遺構群と関連するものと思われる。(中森)

### 第2節 検出した遺構と遺物

#### 土坑16 (図124～126、図版80・81、カラー図版8)

D4グリッドに位置する。長径1.15m、短径0.65m、深さ0.25mほどを測り、北側が尖り気味の形状である。土坑内中央やや南よりから、完形品を主体とする土師器杯の集積を検出した。この中央部には南北方向に若干隙間がみられ、東西に2分することができる。西群のほうが土器量は多く、密度は高い。口縁を下側に伏せた状態の個体と上側に向けたものどちらもみられたのに対し、東群は口縁を上に向けたものが多い。しかし両群ともきちんと積み重ねたような状況ではなかった。またどちらも底面より5cmほど浮いている。この検出状況からは箱などに納め置かれたとは考えにくく、東西2群に分け、袋などに入れられていた可能性もあろう。まったく欠損していない完形資料も含まれており、単なる廃棄行為とは考えにくい。

出土した土器のうち完形および完形に近い58点を図示したが、残存率50%以下のものも多くあり、全体としては100個体近くあったと推定できる。いずれの杯も口径12cm前後、底径5cm前後、器高4.5cm前後と均一で、底面は静止糸切りである。底面に板目の残るものもある。また710～712は口縁部を波状に打ち欠いたもので、711・712の波状部分にはススが付着している。平口縁のものにはススが付いたものはないことから、灯明皿とし

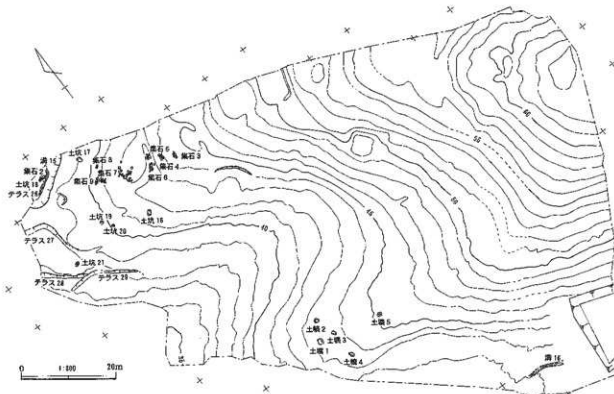


図123 鎌倉時代～室町時代遺構分布

て利用するために意図的に波状に打ち欠いたものであろう。杯の形態から八幡福年の中世Ⅲ期（13世紀代）に比定できよう。（中森）

テラス 24（図 127、図版 79）

E 6 グリッドに位置し、平安時代のテラス 18 埋土を切ってつくられる。東西幅は 4.8 m ほどで、床面北側中央部に長径 0.35 m、短径 0.3 m、深さ 0.1 m の楕円形土坑を検出した。その中からちょうど収まるように瓦質の播鉢（714）があり、それは底部が打ち欠かれていた。その底部部分に土師器杯（713）が置かれ、さらにその上におそらく 1 個体になる鉄製品（刀子、F 84・F 85）があった。こうした状況がどのような性格をもつものかは不明である。713 は土坑 16 出土の杯と同じものであり、同時期の遺構であると判断した。（中森）

テラス 25・土坑 18・集石 2・溝 15（図 128・129、図版 83）

尾根 1 区の先端部で北西を向くテラスおよび、それに伴う土坑・集石を検出した。テラス壁面の立ち上がり部分には溝 15 が巡り、床面中央やや東よりに集石 2 がある。1.2 m ほどの範囲に拳から人頭大の角礫凝灰岩があ

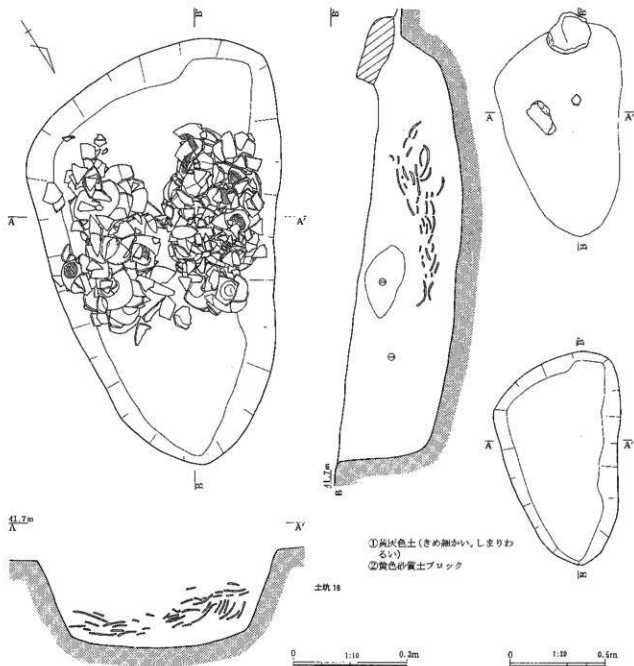


図 124 土坑 16

り、そのやや西側に土坑 18 が位置する。これは径約 0.8 m の円形土坑で、深さは 0.3 m ほどであった。集石 2 との関係は不明瞭であった。集石内から白磁Ⅹ類皿 (716) が出土した<sup>(註 11)</sup>。また土坑内から釘 (F 86)、テラス床面上から土師器Ⅲ (717)、鉄製鎌・斧 (F 92・F 93) が出土しており、この土師器Ⅲからこれら遺構は 15～16 世紀のものと考えられる。

(中森)

## テラス 26 (図 128・129)

弥生時代後期の竪穴住居跡 8 の北側に位置する。南北 6 m、東西 4 m ほどで、L 字状に地山をカットしてつくられている。床面から土師器Ⅲ (719) が出土した。15～16 世紀代であろう。

(中森)

## テラス 27・土坑 21 (図 128・129)

テラス 27 は尾根 1 区先縮部で検出した西側を向くものであり、南西部にはテラス 28・29 が位置する。南北幅

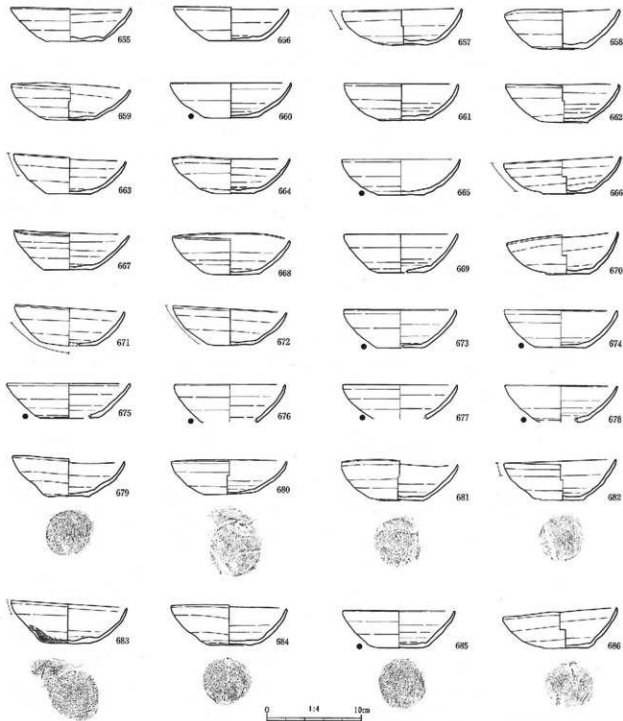


図 125 土坑 16 出土遺物 (1)

14 m、東西7 mほどを検出し、西側は調査地境に接する。床面南側に土坑 21 がある。長径 1.05 m、短径 0.6 m ほどの楕円形土坑で、西側は2段に掘られ、そこに人頭大の礫が3個あった。いずれも埋土②層上面において検出したが、土坑上面にあったものが落ち込んだ可能性もあろう。あるいは墓か。(中森)

テラス 28・29 (図 128・129、図版 83-5)

尾根 1 区先端部南向き斜面に位置する。等高線に沿って東西方向に2基あり、テラス 29 はテラス 28 より1段下がる。テラス 29 の南側下層には奈良時代後期～平安時代初頭のテラス 17 があり、弥生時代中期包含層 (③層) を削っている。同テラスから瓦質羽釜 (715) が出土している。16 世紀代か。(中森)

土坑 17 (図 128)

C 2 グリッドに位置する、長径 1.2 m、短径 0.55 m の隅丸長方形を呈した土坑である。深さは 0.5 m ほどあり、上面から 0.35～0.4 m の厚さで1層相当の黄褐色土が堆積する。遺物は出土していない。(中森)

土坑 19 (図 128)

D 3 グリッドにあり、弥生時代後期のテラス 8 を掘り込む。西側はトレンチにより掘られているが楕円形を呈す土坑と思われる。長径 0.8 m、短径 0.3 m ほどを検出している。埋土は1層相当である。(中森)

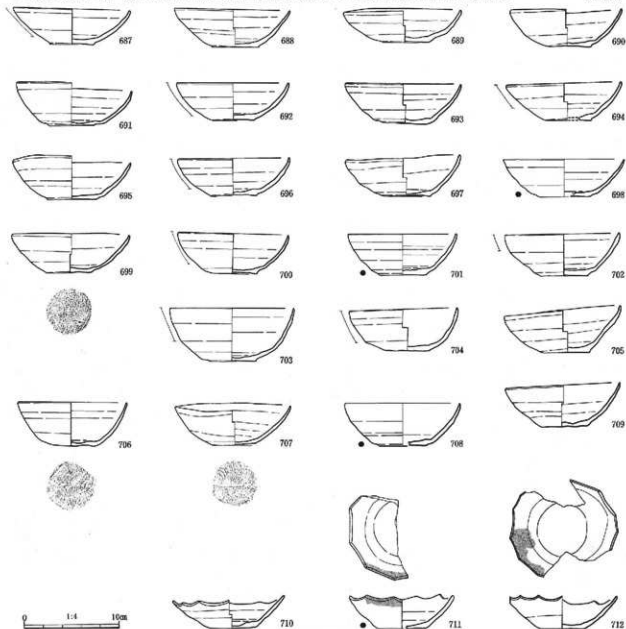


図 126 土坑 16 出土遺物 (2)

## 土坑 20 (図 128)

土坑 19 の南約 3.5 m に位置する。長径 0.7 m、短径 0.55 m ほどの楕円形土坑で、深さは約 0.25 m を測る。埋土は 1 層、遺物は出土していない。(中森)

## 尾根 1 区の集石群 (図 130)

古市 15・16 号墳上面および墳端部で安山岩製の五輪塔を伴う集石を 7 基検出した。そのうち 15 号墳墳頂部の集石 7 は下層から成人女性の火葬骨が出土したことから、墓としての性格をもつ可能性が考えられる。またその他の集石も同様のものと位置付けられよう。五輪塔の型式から 15～16 世紀代のものと考えられる。なお五輪塔以外の礫は角礫凝灰岩が大半を占める。16・17 号墳の埋葬施設が攪乱され、15 号墳埋葬施設が確認できなかったことなどは、これら集石墓の造営に関連すると思われる。(中森)

## 集石 3 (図 134)

16 号墳埋葬施設の西側で検出した。拳大の礫が長さ 1.1 m、幅 0.6 m ほどの範囲に集中する。礫は角礫凝灰岩で、おそらく古墳の埋葬施設石棺材を抜き取り、砕いたものと思われる。五輪塔は伴っていない。なお 16 号墳周溝上層から小型の火輪 (S 40、図版 84-4) と思われるもののほか、鉄滓 (F 95) が出土している。(中森)

## 集石 4 (図 134)

16 号墳西側墳裾で検出した。拳から人頭大の礫が長さ 1.2 m、幅 0.6 m ほどの範囲に集中する。傾斜面にある

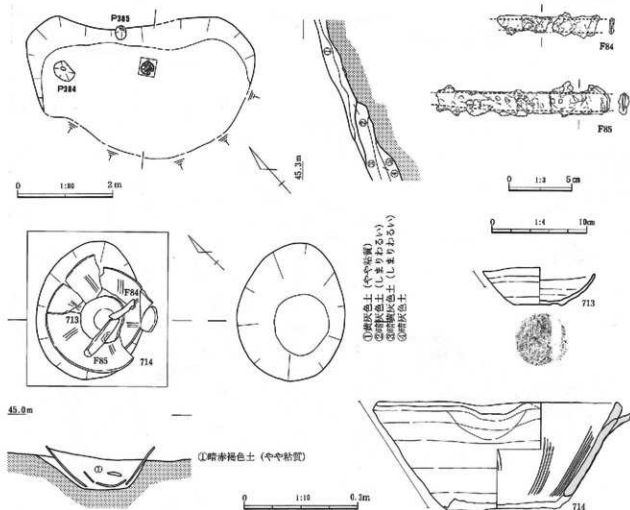


図 127 テラス 24 および出土遺物

が明確な掘り方は確認できなかった。遺物は出土していない。

(中森)

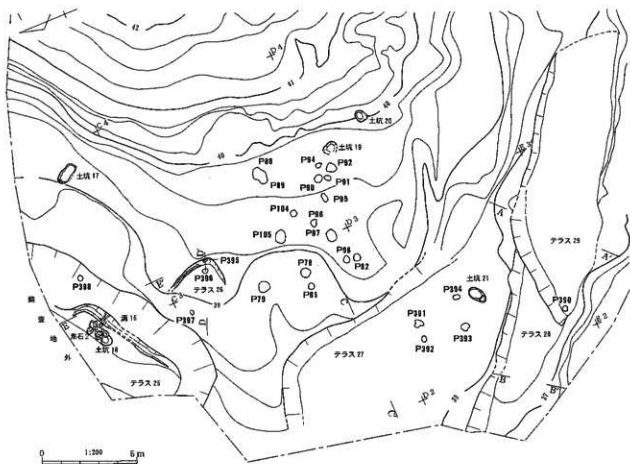
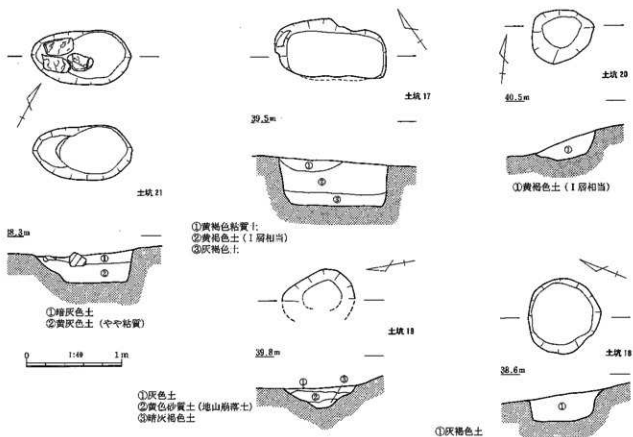
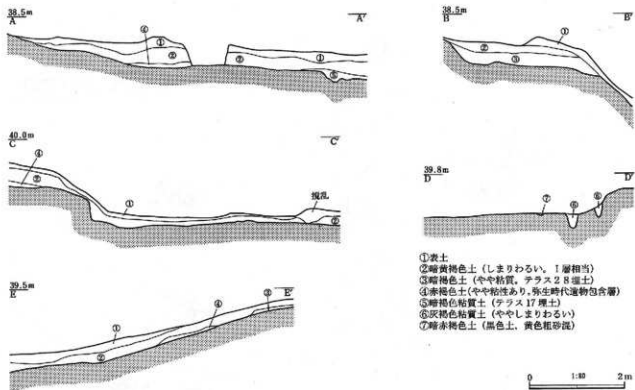


図128 尾根1区先端部遺構群



- ①表土
- ②暗黄褐色土 (しまりわるい, 1層相当)
- ③暗褐色土 (やや粘質, テラス2, 8連土)
- ④赤褐色土 (やや粘質あり, 弥生時代遺物包含層)
- ⑤暗褐色粘質土 (テラス17埋土)
- ⑥灰褐色粘質土 (ややしまりわるい)
- ⑦暗赤褐色土 (黒色土, 黄色粗砂混)

0 1:40 2m

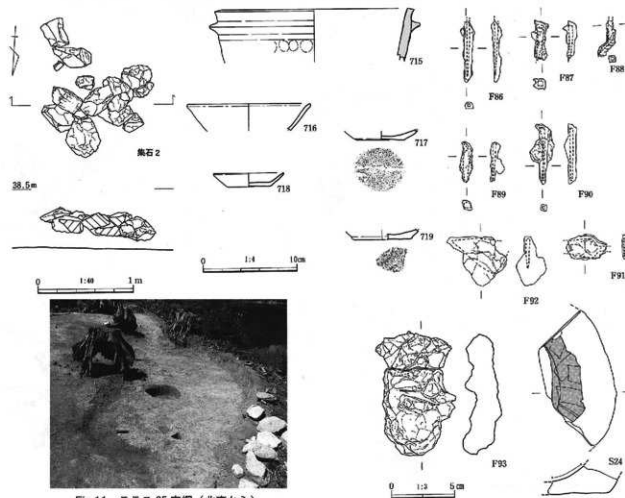


Fig.11 テラス25 完掘 (北東から)

図129 尾根1区先端部土層断面および出土遺物

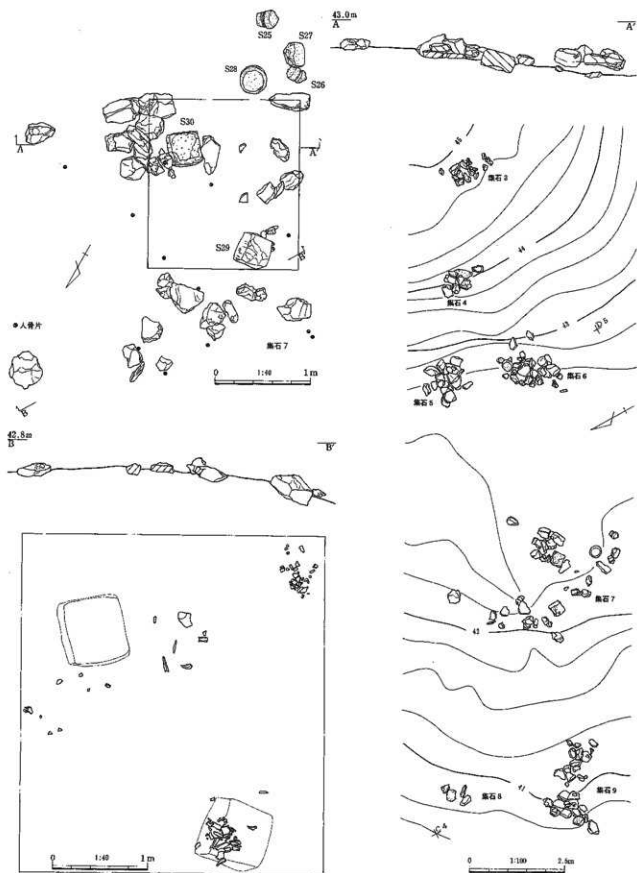


図 130 集石群検出状況および集石 7



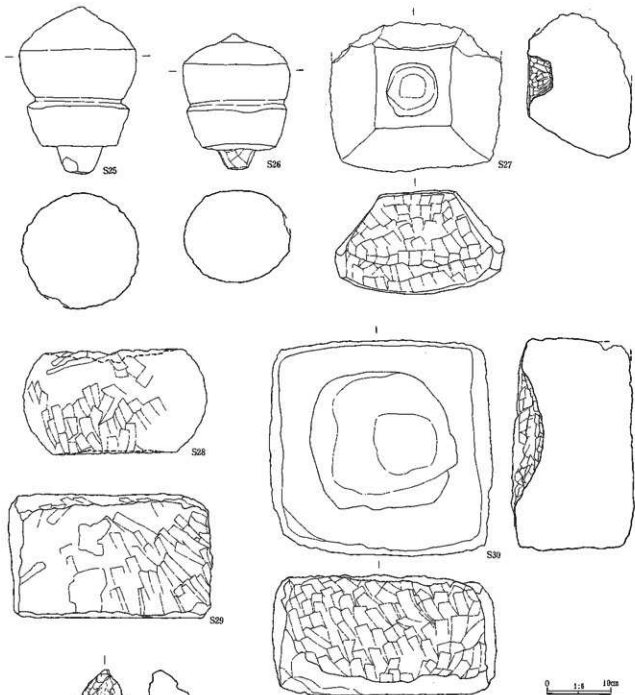


図 131 集石 7 出土遺物

**集石 5** (図 132・133)

15号墳周溝埋土上、1層上面に位置する。長さ1.4m、幅1.0mほどの範囲に礫は集中し、それら礫中に火輪と地輪(S 33・S 35)を含む。集石の中心部は礫を2、3段積む。なおこの下層から砥石(S 41、図版 87-2)が出土している。(中森)

**集石 6** (図 132・133)

集石 5の南に隣接する。長さ1.8m、幅1.0mほどの範囲にあり、空風輪と水輪(S 32・S 36)を集石北西端に接して検出した。やはり集石の中心から両側は礫を2、3段積んでいる。(中森)

**集石 7** (図 130・131、図版 82)

15号墳丘上に検出した集石である。他の集石と異なり4.0×3.0mほどの広い範囲に礫および五輪塔が散在

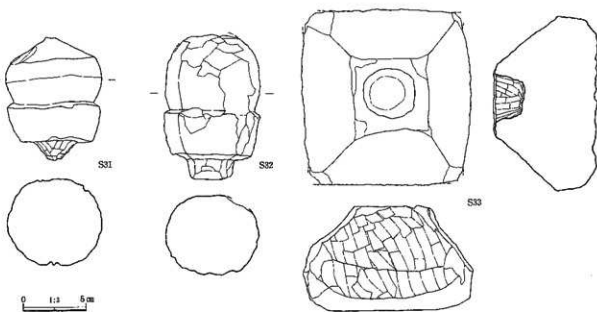
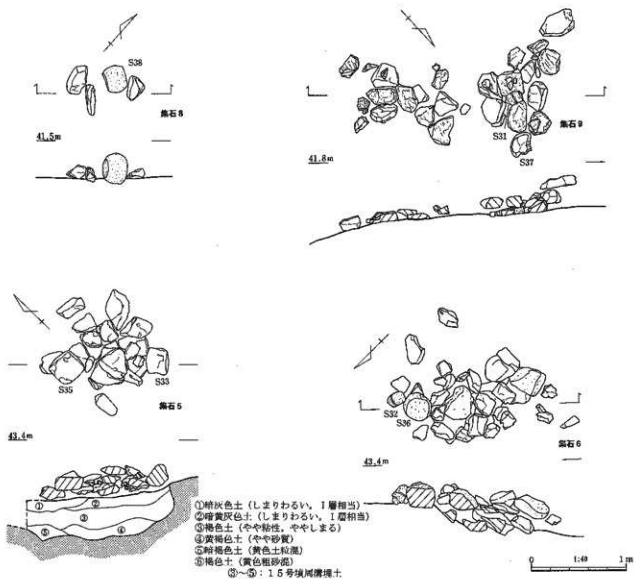


図132 集石5・6・8・9および出土遺物(1)

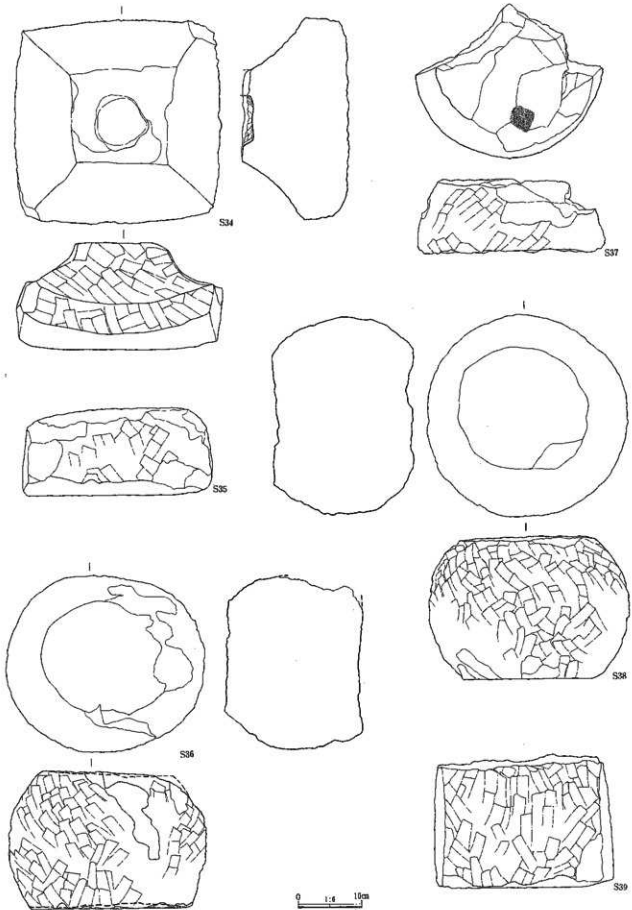


図133 集石群出土遺物(2)

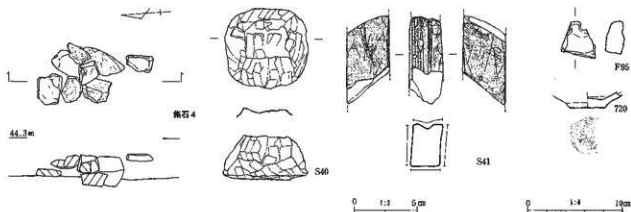


図134 集石3、4および1層出土遺物(1)

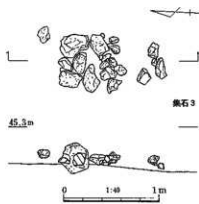


図135 谷1区出土遺物(1)

する。北側には巨大な木の根があり、その南側を取り囲むような状態であった。地輪(S30)の東に礫が密集する部分があり、そこからもう1点の地輪(S29)西側にかけて集石下から人骨がまばらに出土した。人骨は火葬骨で成人女性のものであり、また大きく3群にまよって分布するが、その量からみて1体であろうと推測される(第10章特論9)。周辺に焼けた痕跡や炭化物、灰などがいないため、おそらく別の場所で茶毘に付され、この場所に散骨されたものと考えられる。

五輪塔は地輪2基に対し空風輪は2基あるが(S25・S26)、火輪(S27)、水輪(S28)は1基ずつしかない。このほか鉄滓が1点(F94)出土しているが、遺構との関連は不明である。(中森)

**集石8** (図132・133)

15号墳の西側墳端部付近に位置する。長さ0.85m、幅0.5mほどの範囲にわずかに4点の礫で構成される。そのうち水輪(S38)が1点、横位の状態で出土した。(中森)

**集石9** (図132・133)

集石8の南側に位置する。長さ2.5m、幅1.5mほどの範囲に分布しており、中央部には礫のない部分がある。西群には空風輪(S31)とほぼ半分ほど欠損する水輪(S37)があるが、東群には五輪を含まない。

遺構外谷1区から水輪(S42)、尾根1区先端部から地輪(S43)が出土した。(中森)

**尾根2区の土壌群**

尾根2区の先端部付近に5基の土坑を検出した。いずれも埋土が暗褐色系でしまりのわるい土であることから、同一時期のものと考えられる。土坑形状、規模はさまざまであるが、埋土上層に人頭大礫を含むものがあり、そのうち土壌2からは火輪が出土した。そこで先の礫は基壇上面の標石である可能性を考え、これら土坑を墓であるとした。また時期を示すものは火輪以外にない、それが先述の集石群に伴うものと同型式であることから、15～16世紀のもの判断した。(中森)

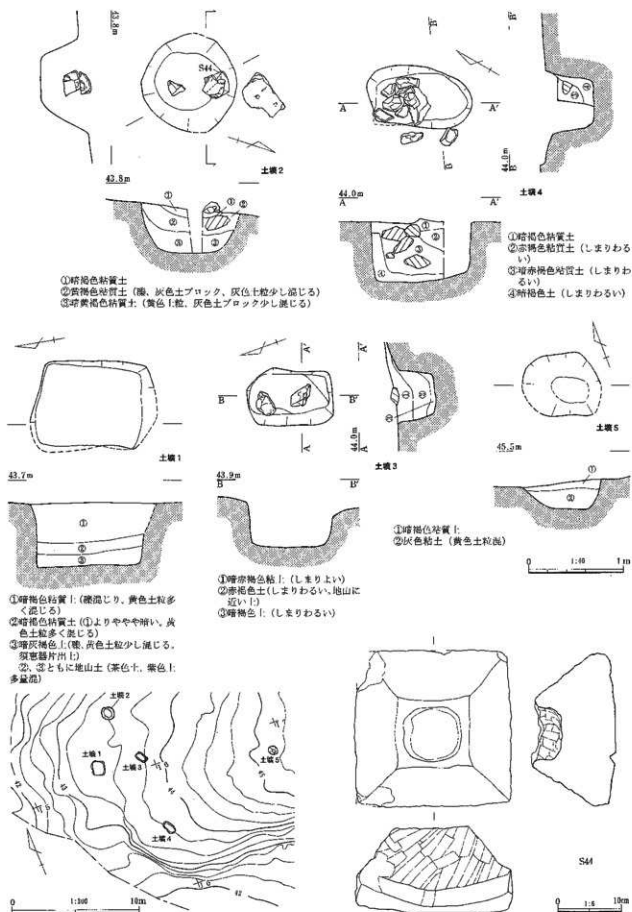


図136 尾根2区土坑群および出土遺物

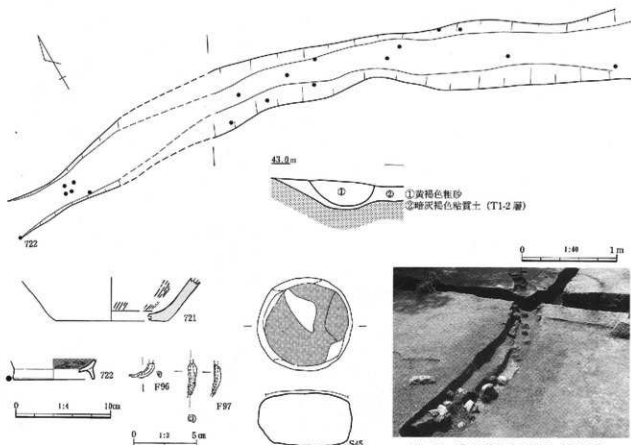


Fig.12 溝16遺物出土状況(東から)

図137 溝16および出土遺物

**土壌1** (図136)

H5グリッド南側にあり、長径1.3m、短径0.95mほどを測る隅丸長方形の土壌である。他の土壌に比べ規模は大きく、深さも約0.7mと深い。最下層から古代の須恵器坏片が出土している。(中森)

**土壌2** (図136、図版85-1～3)

土壌1の北側に位置する、径約1mの円形を呈する土壌である。深さは約0.5mで、埋土上層には人頭大の礫があり、その直下で火輪(S44)が出土した。(中森)

**土壌3** (図136)

土壌1の東に位置する、長径0.9m、短径0.55m、深さ0.45mほどを測る隅丸長方形の土壌である。上面から人頭大礫を検出した。(中森)

**土壌4** (図136、図版84-4・85-4・5)

土壌3から5mほど南に位置する。長径1.1m、短径0.65mほどの楕円形を呈し、深さは約0.65mあった。埋土最下層の④層は壁面から底面にかけてL字状に堆積し、その内側にある③層内で拳から人頭大の礫を検出した。この③層と④層の境目が木棺の痕跡を示すものかもしれない。(中森)

**土壌5** (図136)

先の4基から10m近く東に離れて位置する。長径0.85m、短径0.65m、深さ0.3mほどを測る楕円形土壌である。上層はしまりのわるい暗褐色粘質土であるが下層は灰色粘土であり、時期が異なる可能性をもつ。(中森)

**溝16** (図137)

谷2区、池状遺構③層(図118)を掘り込んでいる溝。東から西へ向けて流れるやや弧状のものである。東側は調査地外へと続き、西側は後世の削平を受けている。検出した長さはほぼ7mで、幅0.7m、深さは0.25mほど

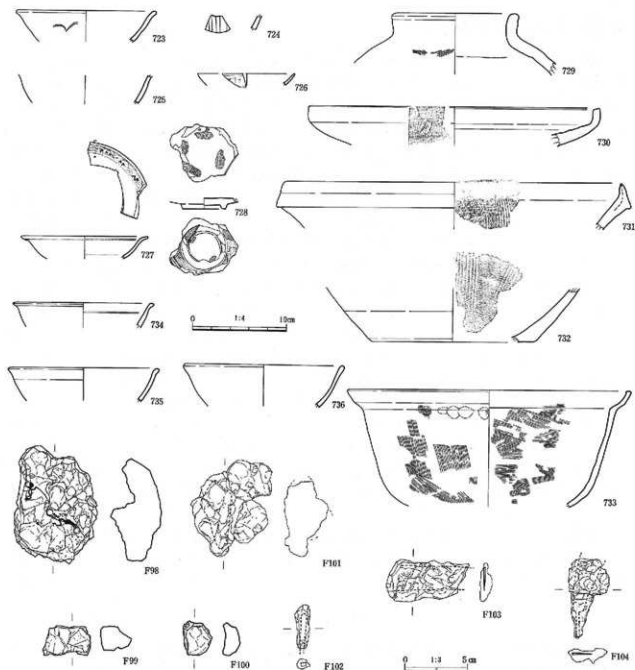


図138 遺構外出土遺物

を測る。池状遺構③層から瓦質擂鉢(721)が出土していることから、13～14世紀以降のものだと判断した。同層から鉄釘(F96・F97)も出土している。溝埋土からは内黒の高台付杯(722)が出土している。下層のものが混入したのであろう。S45は磨石で、埋土上層で見つかった。(中森)

## 遺構外出土の遺物 (図138、図版84-3)

遺構外からわずかに貿易陶磁器、国産陶器が出土している。723～725は青磁。723は上田C類、724はB類、725はD類に相当する(註2)。726は青花皿C群(註3)。727は漳州窯系皿、728は朝鮮産陶磁器皿の底部片である。高台の大半が割れ、体部も打ち欠かれたようになっており、いわゆる円盤状土製品であろうか。729～732は備前産陶器である。733は土師器鉢。弥生時代後期の竪穴住居跡5上層から出土した。734～736は本調査地の北西部に近い古市コガノ木遺跡出土遺物である。その報告書に未掲載だったため今回実測し掲載した。734は白磁区類皿、735・736は青磁D類である。(中森)

## 第3節 出土した五輪塔について

今回尾根1区を中心に18点の五輪塔を検出した。その大半は集石などに伴うものであったが、五輪塔以外にこれら遺構の時期を判断する材料に乏しかった。しかし鳥取県西部地域をみると、13世紀末～14世紀代に比定しうる積石基壇の目下古墳群SS01<sup>(4)</sup>、15世紀中頃の土壇と考えられる会見町金山堂ノ脇遺跡SX01<sup>(5)</sup>、16世紀代の土葬墓および火葬墓が検出された西伯町福成早里遺跡<sup>(6)</sup>など時期のわかる遺構に伴って五輪塔が出土している。ここではそれらのうち特に形態的な変化がわかりやすい空風輪および火輪について検討してみる<sup>(7)</sup>。

まずそれぞれの法量についてみてみる。もっとも古い目下古墳群SS01では空風輪が9点出土しており、高さ15.0～40.0cmと幅があるが、22.5～31.5cmあたりに集中するか。幅は17.5～23.5cmの間に収まる。金山堂ノ脇遺跡SX01には高さ22.7cm、幅16.2cmと小型の1点しかなく、傾向はつかめない。福成早里遺跡では5点のうち4点が高さ20.5～24.5cm、幅15.0～17.5cmの範囲に集中する。本調査地出土の空風輪も同様にとみると4点のうち3点が高さ19.5～23.5cm、幅15.5～17.5cmの範囲にあり、この分布傾向は福成早里遺跡に類似する。

火輪は目下で8点ある。高さ20.0～25.5cmに7点が集中し、幅は30.0～46.0cmで35.0cmを超えるものが5点ある。金田では5点出七しており、やや法量にばらつきがあるが高さ15.0cm前後、幅30.0cm前後に集中しそうである。福成は5点で、高さ13.0～14.0cm、幅22.0～30.0cmの範囲に集中している。こうしてみると14世紀代に高さ20cm、幅35cmを超える大型のものが、16世紀代には小型化している様子が窺えそうである。幅をもちながらもやや小型のものが多い傾向の金田の事例は、15世紀の半ばというこれらの過渡的な時期といえようか。なお古市の火輪は4点あり、高さ14.0～17.0cm、幅25.0～33.0cmに収まり、これも福成と類似したあり方である。この結果は出土層位などの成果とも矛盾しない。金田堂ノ脇遺跡の例もあることからやや遡らせて考えておくと、本調査地の五輪塔は15世紀後半～16世紀代という時期が当てられよう。

また石材については安山岩系ものが圧倒的に多く、連続と使用されている。おそらく大山西麓が産地と推定されるが、その石切場跡などは明らかになっていない。一方鳥根県安来市では凝灰岩が使われており、その流通域についても今後検討していかなければならない。

今回五輪塔によっても、この地域においてある程度時期判定ができることを提示した。まだ良好な出土資料が少なく大まかなものでしかないが、そうした資料を蓄積していく一方、型式学的検討を行っていくなどまだまだ残された課題は多い。

(中森)

(註)

- (1) 横田賢次郎・森田 勉 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として」『九州歴史資料館研究論集』4
- (2) 上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2
- (3) 小野正敏 1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2
- (4) 小原貞樹ほか編 1992『目下古墳群発掘調査報告書』米子市教育委員会
- (5) 西川 徹、高尾浩司編 1998『御内谷遺跡群』鳥取県教育文化財団
- (6) 北浦弘人ほか編 1998『福成早里遺跡』鳥取県教育文化財団
- (7) 本節の内容は石造物研究会第2回研究会において発表したものの一節である。

中森 祥 2001「出土した五輪塔、宝篋印塔—鳥取県西部を中心に—」石造物研究会編『来待石を中心とした日本海文化』





表 20 第8章土器観察表

遺物番号	地区	地区遺標	種別	器種	口径	器高	特徴	出土状況	色調	備考
655	125	土坑16	土師器	杯	12.9	3.6	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	淡橙褐色	
656	125	土坑16	土師器	杯	12.1	3.6	体部回転ナデ。底部静止糸切り。全体にやや磨減。	密良	黄褐色	
657	125	土坑16	土師器	杯	*12.5	3.9	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	淡黄褐色	
658	125	土坑16	土師器	杯	12.2	4.2	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	淡橙褐色	
659	125	土坑16	土師器	杯	12.5	4.0	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	淡黄褐色	
660	125	土坑16	土師器	杯	*12.7	3.7	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	橙褐色	
661	125	土坑16	土師器	杯	12.0	3.9	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	黄褐色	
662	125	土坑16	土師器	杯	11.9	4.2	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	淡橙褐色	
663	125	土坑16	土師器	杯	*11.8	4.2	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	淡黄褐色	
664	125	土坑16	土師器	杯	12.4	3.9	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	淡橙褐色	
665	125	土坑16	土師器	杯	*12.4	3.8	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	淡橙褐色	
668	125	土坑16	土師器	杯	*12.4	4.0	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	淡橙褐色	
667	125	土坑16	土師器	杯	12.1	4.2	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	橙褐色	
668	125	土坑16	土師器	杯	12.4	4.4	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	橙褐色	
669	125	土坑16	土師器	杯	*12.0	4.1	体部回転ナデ。底部静止糸切り。全体に磨減。	密良	淡黄褐色	
670	125	土坑16	土師器	杯	11.8	4.5	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	黄褐色	
671	125	土坑16	土師器	杯	11.5	4.3	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	橙褐色	
672	125	土坑16	土師器	杯	*12.0	4.3	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	淡黄褐色	
673	125	土坑16	土師器	杯	*11.8	4.1	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	淡橙褐色	
674	125	土坑16	土師器	杯	*11.8	4.0	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	淡橙褐色	
675	125	土坑16	土師器	杯	*13.0	3.7	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	淡橙褐色	
676	125	土坑16	土師器	杯	*11.8	△4.0	体部回転ナデ。	密良	淡黄褐色	
677	125	土坑16	土師器	杯	*12.0	△3.8	体部回転ナデ。	密良	淡黄褐色	
678	125	土坑16	土師器	杯	*11.8	3.9	体部回転ナデ。底部静止糸切り。全体に磨減。	やや硬 やや軟	淡橙褐色	
679	125	土坑16	土師器	杯	11.8	4.3	体部回転ナデ。底部静止糸切り。底面いびつで早稲形円状。	密良	内:淡黄褐色 外:淡橙褐色	
680	125	土坑16	土師器	杯	12.2	3.7	体部回転ナデ。底部静止糸切り。底面に板目圧痕。体部下半に糸切りの圧痕がある。底部磨擦面あり。	密良	淡橙褐色	
681	125	土坑16	土師器	杯	12.2	4.3	体部回転ナデ。底部静止糸切り。底面裏に幅1.1cmの板目。	密良	淡黄褐色	
682	125	土坑16	土師器	杯	11.7	4.5	体部回転ナデ。底部静止糸切り。底面に沈線状の圧痕。	密良	橙褐色	
683	125	土坑16	土師器	杯	*12.3	△4.5	体部回転ナデ。底部静止糸切り。体部下位にまで糸切りの痕跡と認められる。	密良	黄褐色	
684	125	土坑16	土師器	杯	12.2	4.3	体部回転ナデ。底部静止糸切り。底面に1条沈線状のものがある。	密良	淡橙褐色	
685	125	土坑16	土師器	杯	*11.8	4.0	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	黄褐色	
686	125	土坑16	土師器	杯	12.0	4.4	体部回転ナデ。底部静止糸切り。底面に粘土粒付着。板目圧痕。	密良	橙褐色	
687	126	土坑16	土師器	杯	*12.3	3.9	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	淡橙褐色	
688	126	土坑16	土師器	杯	12.2	4.2	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	橙褐色	
689	126	土坑16	土師器	杯	12.2	3.8	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	淡黄褐色	
690	126	土坑16	土師器	杯	11.7	4.2	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	淡黄褐色	
691	126	土坑16	土師器	杯	12.2	4.6	体部回転ナデ。底部静止糸切り。口径高さいびつ。	密良	黄褐色	
692	126	土坑16	土師器	杯	*11.8	4.0	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	淡黄褐色	
693	126	土坑16	土師器	杯	12.2	4.4	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	淡橙褐色	

遺物 番号	推定 地区遺構	種類	器種	口径	器高	特徴	胎土 構成	色調	備考
694	126	土坑16	土師器 杯	*12.0	4.2	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	内:淡黄褐色 外:淡橙褐色	
695	126	土坑16	土師器 杯	12.4	4.6	体部回転ナデ。底部静止糸切り。器形ややびつで平面形は楕円形を呈す。	密良	淡橙褐色	
696	126	土坑16	土師器 杯	*11.8	4.0	体部回転ナデ。底部静止糸切り。全体に磨滅。	密良	淡黄褐色	
697	126	土坑16	土師器 杯	11.9	4.5	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	淡橙褐色	
698	126	土坑16	土師器 杯	*12.7	4.0	体部回転ナデ。底部静止糸切り。口縁から体部器壁薄い。	密良	淡橙褐色	
699	126	土坑16	土師器 杯	12.3	4.3	体部回転ナデ。底部静止糸切り。底面に板目。	密良	淡橙褐色	
700	126	土坑16	土師器 杯	*11.8	4.3	体部回転ナデ。底部静止糸切り。磨滅している。	密良	淡黄褐色	
701	126	土坑16	土師器 杯	*11.4	4.4	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	淡橙褐色	
702	126	土坑16	土師器 杯	*12.0	4.7	体部回転ナデ。底部静止糸切り。口縁部器壁やや厚い。	密良	淡黄褐色	
703	126	土坑16	土師器 杯	*13.0	5.7	体部回転ナデ。底部静止糸切り。全体に磨滅。	密良	淡黄褐色	
704	126	土坑16	土師器 杯	*11.4	4.9	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	淡黄褐色	
705	126	土坑16	土師器 杯	12.3	5.0	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	黄褐色	
706	126	土坑16	土師器 杯	11.4	4.8	体部回転ナデ。底部静止糸切り。底面に幅2.4cmほどの板目片痕。	密良	淡黄褐色	
707	126	土坑16	土師器 杯	12.2	4.5	体部回転ナデ。底部静止糸切り。口縁高さいびつ。	密良	淡黄褐色	
708	126	土坑16	土師器 杯	*12.2	3.6	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	淡橙褐色	
709	126	土坑16	土師器 杯	12.0	4.8	体部回転ナデ。底部静止糸切り。	密良	黄褐色	
710	126	土坑16	土師器 灯明皿	11.8	3.7	体部回転ナデ。底部静止糸切り。口縁部を波状にカット。やや磨滅気味。	密良	暗褐色	胎土分析 資料No.59
711	126	土坑16	土師器 灯明皿	*10.7	3.6	体部回転ナデ。底部静止糸切り。口縁部は波状にカットする。一部にス付着。	密良	黄褐色	
712	126	土坑16	土師器 灯明皿	11.6	3.6	体部回転ナデ。底部静止糸切り。口縁波状に打ち欠き。その口縁端部にス付着。	密良	黄褐色	
713	127	テラス24	土師器 杯	11.8	4.0	体部回転ナデ。底部静止糸切り。底面に幅1cmほどの板目片痕あり。その環んだ面にも糸切り痕残る。やや磨滅。	密良	黄褐色	
714	127	テラス24	瓦質 楕鉢	25.2	11.6	志部を打ち欠く。内面に5条一単位のオロシ目が8単位。片口の反対側口縁部に墨取。	密 やや軟	灰白色	
715	129	テラス29	瓦質 羽釜	*20.0	△5.6	口縁端部墨取り。外面はやや外側に出る。突帯下ユビオサエ。	密 やや軟	灰白色	
717	129	テラス29	土師器 皿	—	△1.2	底部回転糸切り。	密 やや粗 やや軟	橙褐色	
718	129	E2-我土	土師器 灯明皿	*7.4	1.5	底部回転糸切り。口縁端部にス付着。	密 やや粗 やや軟	淡褐色	
719	129	テラス26	土師器 皿	—	△1.1	底部回転糸切り。全体磨滅し調整不明。	密 やや粗 やや軟	淡黄褐色	
720	134	C6-1層	土師器 皿	—	△1.7	底部回転糸切り。	密 やや粗 やや軟	橙褐色	
721	137	池状遺構 空溝	瓦質 楕鉢	—	△4.8	6条一単位のオロシ目が2単位残る。	密 やや軟	灰白色	
722	137	溝16	内黒 高台付 鉢	—	△2.2	体部回転ナデ。内面丁寧なミガキ。全体に磨滅。	密良	外面:橙褐色	
733	138	F8-駆穴位 周部4発土	土師器 鍋	*29.9	△12.4	口縁部ナデ。体部は外面タテハケ。内面はヨコハケ。外面腹側に指原片痕。外面全体にス付着。	密 やや粗 やや軟	淡橙褐色	

表 21 第8章陶磁器観察表

遺物番号	挿図	地区遺構	種別	器種	口径	器高	特徴	胎土	製作地	製作年代	備考
716	129	兼石2	白磁	皿	*13.0	△2.9	森田D類。釉は淡灰色を帯びる。	灰白色	中国系	11C~12C初め	
723	138	谷2区表土	青磁	碗	*14.4	△3.4	外面は連弁文か。上田C類。	灰色	龍泉窯系	15世紀代	
724	138	F5	青磁	碗	-	△1.5	片切り彫りの連弁文。釉は淡青緑色を呈し方う入質。光沢もか。内外面わずかに貫入。上田B類。	灰色	龍泉窯系	15世紀代	
725	138	H5	青磁	碗	-	△3.0	釉は淡緑灰色を呈し、内外にわずかに貫入。上田D類。	灰色	龍泉窯系	15世紀代	
726	138	谷2区表土	青花	皿	*10.2	△1.3	小野分類C群。	白色	中国系	16世紀代	
727	138	H4	青花	皿	*13.5	△2.4	口縁内面四方押文。貫入多い。	白色	漳州窯系	16世紀代	
728	138	G3	陶器	皿	-	△1.2	胎土がマーブル状。見込みに砂目痕。高台にも殊る。高台部もかなり打ち欠かれている。内盤状土製品か。	灰色	朝鮮系	16世紀代	
729	138	G4	陶器	壺	*12.4	△6.5	口縁ほぼ直立し、外面に淡い沈様が運る。外面頸部下に波状文。	褐色	備前系	15世紀代	
730	138	谷2区表土	陶器	壺	*30.5	△4.2	口縁が直立するもの。	褐色	備前系	16世紀代	
731	138	16・表土	陶器	漆鉢	*35.4	△7.0	口縁端部尖り、下端はやや垂下。外面は無文。オロシ目の各単位間の幅広い。	褐色	備前系	15世紀代	
732	138	E5・表土	陶器	漆鉢	-	△5.7	8+αのオロシ目。かなり内面は磨減。	褐色	備前系	15世紀代	
734	138	FKG2区L41	白磁	碗	*14.4	△2.7	森田V-2類。	白色	中国系	11c中~12c初	
735	138	FKG2区L41	青磁	碗	*15.4	△3.6	上田D類。	灰色	龍泉窯系	15世紀代	
736	138	FKG2区L41	青磁	碗	*16.6	△4.5	上田D類。	灰色	龍泉窯系	15世紀代	

表 22 第8章石製品観察表

石器		1. 法量について、復元値は*、残存値は△で示した。単位はcmである									
遺物番号	挿図	図版	地区遺構	器種	石材	長さ・高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	
S24	129	77	表土	不明	流紋岩質凝灰岩	10.1	5.6	2.15	110		
S41	134	87	兼石4下	砥石	安山岩	6.7	2.7	3.4	81.5		
S45	137	77	溝16	磨石	安山岩	7.55	7.35	4.2	336.0		

## 五輪塔

遺物番号	挿図	図版	遺構名	部位	石材	幅(cm)	高(cm)	重量(kg)	備考
S25	131	84	兼石7	空風輪	安山岩	18.9	27.2	7.6	
S26	131	84	兼石7	空風輪	安山岩	17.15	22	6.5	
S27	131	84	兼石7	火輪	安山岩	27.5	16.4	12.8	
S28	131		兼石7	水輪	安山岩	29.5	16.6	15.3	
S29	131		兼石7	地輪	砂岩	33	20	37.3	
S30	131		兼石7	地輪	安山岩	35.9	19.4	39.6	
S31	132	84	兼石9	空風輪	安山岩	15.25	19.9	4.1	
S32	132	84	兼石6	空風輪	安山岩	15.35	23.5	5.2	
S33	132	84	兼石5	火輪	安山岩	28.4	16.7	13.1	
S34	133	84	B2グリッドI層	火輪	安山岩	33	17	21.7	
S35	133		兼石5	地輪	安山岩	30.6	13.95	18.8	
S36	133		兼石6	水輪	安山岩	32	22.3	24.7	
S37	133		兼石9	水輪	砂岩	*30.0	11.8	*7.9	
S38	133		兼石8	水輪	安山岩	32.5	23	32.6	
S39	133		B2グリッドI層	地輪	安山岩	30.6	21.35	31	
S40	134	84	C6グリッドI層	火輪	安山岩	6.65	3.5	1.46	
S42	135		G3グリッド	水輪	安山岩	22	13.9	7.3	
S43	135		H2グリッド表土	地輪	安山岩	25	14.7	12.9	
S44	136	84	土塙2	火輪	安山岩	25.2	13.85	6.8	

## 第9章 時期不明の遺構

### 第1節 概要 (図139)

時期不明の遺構のうち、溝17を除くすべての土坑は最終遺構面で検出している。土坑36以外の土坑は尾根1区に集中し、その大半が古墳盛土下の地山面から掘り込まれている。同一面では弥生時代後期の遺構も検出しているが、それらとは明らかに埋土が異なり、また遺物も出土しなかったため本章に括弧してまとめた。

これら遺構は切り合い、および層位的な関係から古墳時代以前と以後の大きく2時期に分けられる。明らかに前者に属するものとして、15号墳盛土下から検出した土坑群(土坑22~26)、19号墳埋葬施設1に切られる土坑29、20号墳盛土下の土坑30、22号墳盛土・流出土下面検出の土坑33がある。また層位的にはわからないが、これらと埋土が似るものとして、土坑31・32・34・35があり、同様の時期と判断した。

後者のものには、15号墳西側にある溝17がある。これは表土下から掘り込まれる直線的な溝である。この他17号墳埋葬施設1を切る土坑27、同層溝埋土を掘り込む土坑28がある。とくに土坑28は中世後期遺物包含層である1層上面から掘り込まれており、それ以降のものとする事ができる。

尾根2区の先端部に1基単独で土坑36は位置する。奈良時代後半~平安時代初期の遺物包含層であるV層下面で検出している。(中森)

### 第2節 検出した遺構

#### 古市15号墳下層の遺構群 (図140)

15号墳盛土を除去後、地山面で5基の土坑を検出した。いずれも灰色系のしまった土を埋土とするもので、これら土坑群の西側(14号墳周辺)において検出した弥生時代中・後期の遺構群とは埋土を異にする。またこうした灰色系のしまった土が堆積するところも他になく、遺物もまったく伴わないことから時期を判定できなかった。(中森)

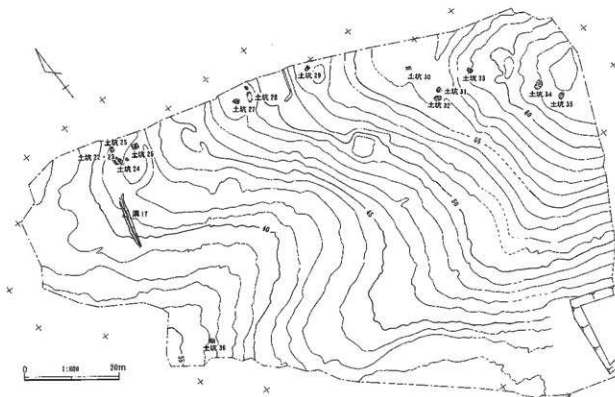


図139 遺構外出土遺物

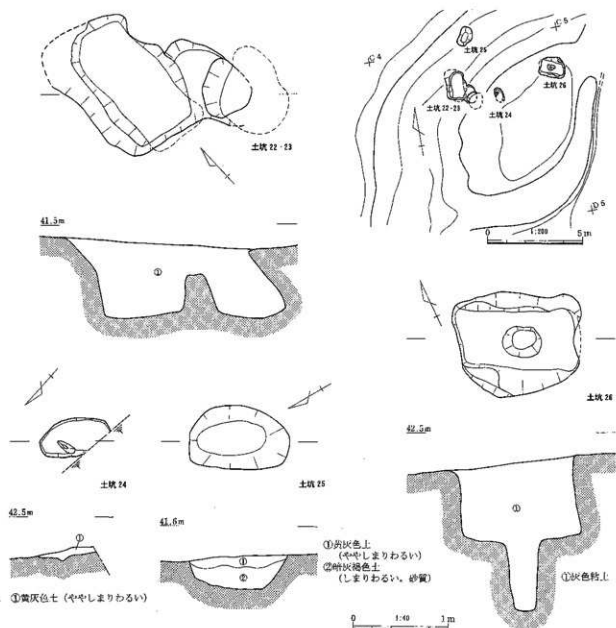


図140 15号墳下層土坑群

土坑22・23 (図140、図版86-3)

D4グリッドにあり、2基の土坑が連続している。西側の土坑22は長軸がほぼ南北を向く。長径1.5m、短径1.1mほどの長方形を呈し、南側底面はフラスコ状で上場よりも外側にする。深さは約0.85mであった。また土坑23は断面袋状を呈する土坑で、上場は長径0.6m、短径0.5mほどの不整形である。底面は長径0.9m、短径0.7mほどを測り、深さは約0.75mである。土坑22・23の底面はほぼ標高40.5mで揃う。

土坑22・23との間がわずかに平坦で回廊状になっており、ここにもうひとつ土坑があった可能性も考えられる。しかしこれらは同一埋土であり、切り合い関係は認められなかった。(中森)

土坑24 (図140)

D4グリッドに位置し、長軸を南北方向に採る土坑である。南西部分はトレンチで切られてしまっているが、長径0.75m、短径0.4mほどの楕円形を呈する。深さは約0.1mと浅い。また土坑底面西側に長径0.2mほど、深さ0.05mの楕円形窪みがある。(中森)

土坑25 (図140)

C4グリッドにある長径1.05m、短径0.7m、深さ0.35mほどを測る楕円形の土坑である。埋土は2層に分

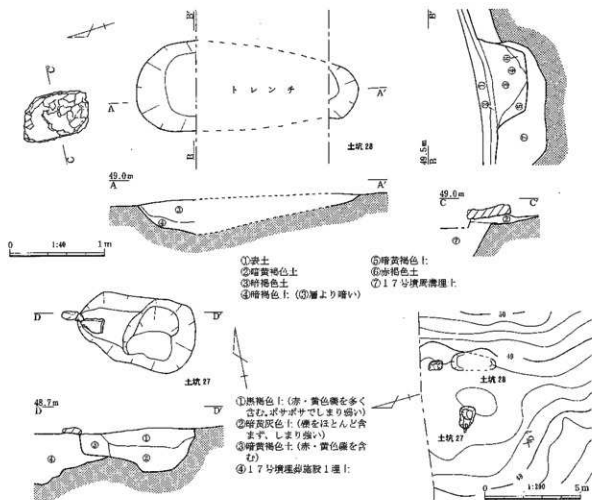


図 141 17号墳上層土坑群

層で、上層がしまりのよい灰色系の土であった。(中森)

#### 土坑 26 (図 140)

D4グリッドの北東部に位置する。長径1.2m、短径1.1mほどのほぼ隅丸長方形を呈する土坑である。底面までの深さは約0.85mで、その中央部に長径0.4m、短径0.3m、深さ0.75mほどのピットが掘られる。埋土はピット内も含め分層できず、同一であった。(中森)

#### 溝 17 (図 139)

15号墳の南西部に位置する、長さ11.5m、幅1.5mほどの直線的な溝である。深さは約0.3mで、表土直下で検出、中世後期包含層であるI層を掘り込む(図11)。遺物は出土しておらず、中世後期以降としか判断できなかった。(中森)

#### 古市17号墳上層の遺構群 (図 141)

2基の上坑を検出した。どちらも切り合い関係から、古墳築造後のものであることは明らかである。とくに土坑28は中世後期遺物包含層である1層をも掘り込んでおり、それ以降のものと考えられる。しかしこれら2基の埋土は異なり、その関係については判然としない。(中森)

#### 土坑 27 (図 141)

埋葬施設1東側を掘り込んでつくられる。長径1.25m、短径0.75mほどを測り、東側は2段に掘られている。その深さは約0.5mであった。土坑西側壁上には、埋葬施設の石棺材をわずかに含む。埋葬施設1は攪乱を受け、石棺材も抜かれていたことから、その攪乱と関連する可能性も考えられる。(中森)





## 土坑 28 (図 141)

周溝埋上、およびI層を掘り込む土坑である。長軸は南北方向を向くが、その中央部は米子市教育委員会の試掘によりなくなっていた。検出できた長径は2.35 m、短径0.95 mほどを測る。底面は北側が深く南へ行くほど浅く傾斜していたと考えられ、深いところは約0.35 mであった。なお土坑北側約0.5 mのところ、長径0.7 m、短径0.45 m、厚さ0.1 mほどの板状石があった。層位的には土坑を覆う②層上面で検出しており、直接関連するものかどうかはわからない。石質は角礫凝灰岩であり、その形状から埋葬施設の小棺材であった可能性が考えられる。(中森)

## 古市 20・22・23号墳周辺遺構群 (図 142、図 86-5)

20号墳周辺と22・23号墳周辺にそれぞれ3基ずつの土坑を検出した。土坑30が20号墳盛土下、土坑33を22号墳盛土流出土下、土坑35は23号墳周溝下で検出しており、少なくともこの3基は古墳築造以前のもと考えられる。また土坑32は弥生時代後期遺物包含層に覆われている。これら土坑の埋土は灰色ないし黄色系のしまった土で、いずれも類似する。そのためほぼ同時期のものと判断した。なおその形態は平面隅丸長方形ないしは楕円形を呈し、土坑35を除きいずれも底面にピットをもつ。(中森)

## 土坑 30 (図 142)

20号墳周溝西側に位置し、その盛土下層において検出した。南側半分はトレンチにより上層を削平されその規模は不明確であるが、長径1.05 m、短径は0.7~0.8 mほどになるとと思われる。底面までの深さは0.5 mで、さらにそこから径0.2~0.25 m、深さ0.2 mほどのピットが掘り込まれる。遺構壁面および底面で厚さ5 cmほどの黄褐色砂質土を検出したが、あたかも貼ったかのように全面に広がっていた。またこれを切ってピット埋土は堆積していた。その性格については判然としない。(中森)

## 土坑 31 (図 142)

20号墳周溝南東部にあるマウンド状高まりの東裾部に位置する。西には20号墳埋葬施設3があり、南西にはほぼ平行して土坑32がある。南東部分は削平されもとの形状をとどめないが、残存径で短径は0.9 m、深さ0.45 mほどを測る。長径は1.2 mほどであったか。底面に長径0.45 m、短径0.4 mほどの隅丸方形を呈したピットが深さ約0.2 m掘られる。他の土坑に比べこのピットは平面規模が大きい。

土坑30同様壁面に黄灰色砂質土があったが10cm前後と厚く、また底面ピットを覆って堆積していた。(中森)

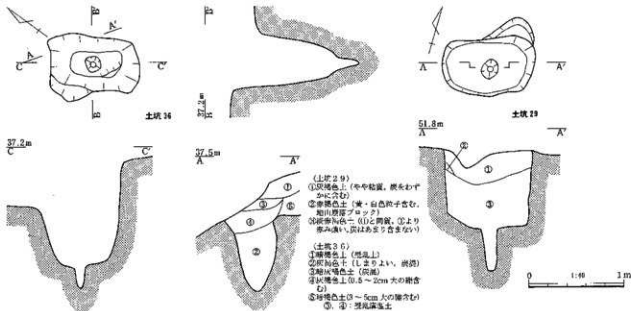


図 143 土坑 29・36

土坑 32 (図 142)

土坑 31 の南西に位置し、長軸はほぼ平行する。長径 1.35 m、短径 1.0 m ほどの隅丸長方形を呈し、底面までの深さは約 0.5 m であった。底面ほぼ中央に径 0.2 m、深さ 0.2 m ほどの円形ピットがある。最上層は弥生後期遺物包含層に相当すると考えられ、それ以前の所産と考えられよう。(中森)

土坑 33 (図 142、図版 86-2)

22 号墳北西部に位置する土坑で、その盛土流出土下面で検出した。長軸はほぼ南北方向で、長さ 1.1 m、短径は 0.85 m ほどを測る。底面までの深さは約 0.4 m で、深さ 0.2 m、径 0.25 m ほどの隅丸長方形を呈したピットがある。土坑 30 同様壁面などに黄白色土が 5～10 cm ほどの厚さで堆積する。(中森)

土坑 34 (図 142)

22 号墳と 23 号墳の間に位置する。長径 2.0 m、短径 1.2 m、深さ 1.05 m ほどを測る大型の土坑である。底面には径約 0.25 m の浅い円形ピットがある。埋土は 0.3 m 前後の粘質土が 3 層、ほぼ水平に堆積している。(中森)

土坑 35 (図 142)

23 号墳周溝下で検出した。長径 1.3 m、短径 1.0 m ほどの楕円形を呈した土坑で、深さは約 0.3 m を測る。東側から黄褐色粘質土が一度に流れ込んだような堆積状況を示す。底面にピットはない。(中森)

土坑 29 (図 143、図 86-4)

19 号墳埋葬施設 1 に切られる土坑である。長径 1.0 m、短径 0.6 m ほどの隅丸長方形を呈し、底面までの深さは約 0.8 m であった。底面中央に径 0.2 m、深さ 0.45 m ほどのピットが掘られる。時期は古墳以前であること以外わからない。(中森)

土坑 36 (図 143)

尾根 2 区先端部、G3 グリッドの最終遺構面で検出した。長径 0.9 m、短径 0.55 m ほどの隅丸長方形の土坑である。底面までの深さは約 1.0 m で、中央部に径 0.15 m、深さ 0.25 m の円形ピットが掘られる。上面を攪乱されており時期は不明であるが、遺構埋土は周辺の堆積土と異なり 15 号墳下層遺構群と類似することから、おそらく弥生時代後期以前のものではないかと考えられる。(中森)